

一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

—印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・炭焼台所在塚・和田谷津塚—

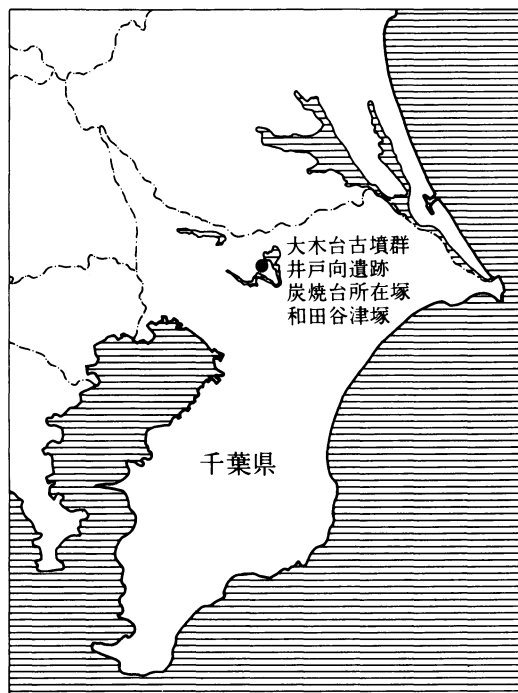
平成8年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

いんぼむらおおきだい 井戸向 すみやきだいしよざい わだやつ
印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・炭焼台所在塚・和田谷津塚



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第277集として、千葉県土木部の国道464号線建設事業に伴って実施した印旛郡印旛村大木台古墳群、井戸向遺跡、炭焼台所在塚、和田谷津塚の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、多くの埴輪が出土するなど、この地域の古墳時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また、教育資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター
理 事 長 中 村 好 成

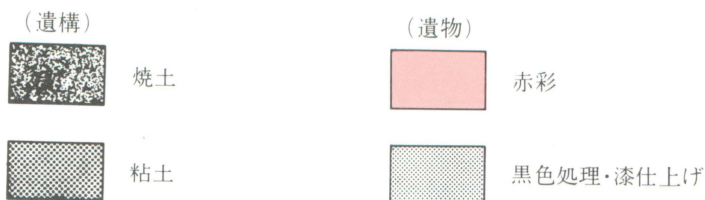
凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による国道464号建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

井戸向遺跡	千葉県印旛郡印旛村瀬戸井戸向956-1ほか	(遺跡コード325-001)
大木台1号墳	印旛郡印旛村瀬戸大木谷津746	(遺跡コード325-001)
大木台2号墳	印旛郡印旛村瀬戸大木谷津746	(遺跡コード325-002)
大木台3号墳	印旛郡印旛村瀬戸大木谷津746	(遺跡コード325-003)
炭焼台所在塚	印旛郡印旛村瀬戸大木谷津728	(遺跡コード325-002)
和田谷津塚	印旛郡印旛村瀬戸和田谷津225-3ほか	(遺跡コード325-001)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、技師 糸原清が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県印旛土木事務所、印旛村教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図	国土地理院発行	1/25,000「小林」「佐倉」(NI-54-19-14-1、2)
第2図	印旛村役場発行	1/2,500「印旛村都市計画図11」
第3図	参謀本部陸軍部測量局	1/20,000第一軍管地方迅速図「中川村」

(大日本測量(株)資料調査部複製)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 遺構・土器実測図使用のスクリーントーンの利用例は、次のとおりである。



本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	遺跡の位置と歴史的環境	4
第3節	層序	7
第2章	大木台古墳群	9
第1節	調査区の概要	9
第2節	古墳時代	9
第3節	古墳時代以外の出土遺物	116
第3章	井戸向遺跡	118
第1節	調査区の概要	118
第2節	先土器時代	118
第3節	縄文時代	135
第4節	歴史時代	151
第4章	炭焼台所在塚	155
第1節	発掘前の状況	155
第2節	遺構	155
第3節	遺物	158
第5章	和田谷津塚	160
第1節	発掘前の状況	160
第2節	遺構	160
第3節	遺物	163
第6章	まとめ	165
第1節	大木台古墳群	165
第2節	井戸向遺跡	183
第3節	炭焼台所在塚	184
第4節	和田谷津塚	185
報告書抄録	報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1章 はじめに	
第1図 遺跡位置図(1)……………	2
第2図 周辺地形図……………	5
第3図 遺跡位置図(2)……………	6
第2章 大木台古墳群	
第4図 周辺地形図……………	10
第5図 発掘前墳丘測量図……………	11
第6図 1号墳・2号墳墳丘平面図……………	13
第7図 1号墳・2号墳土層断面図……………	15
第8図 1号墳遺物出土位置図……………	17
第9図 1号墳・2号墳土器……………	18
第10図 2号墳埋葬施設……………	20
第11図 2号墳埋葬施設鉄製品(1)……………	21
第12図 2号墳埋葬施設鉄製品(2)……………	22
第13図 2号墳墳丘裾部埴輪列(1)……………	24
第14図 2号墳墳丘裾部埴輪列断面図(1)25	
第15図 2号墳墳丘裾部埴輪列(2)……………	26
第16図 2号墳墳丘裾部埴輪列第2段透穴穿 孔方向グラフ……………	26
第17図 2号墳墳丘裾部埴輪列断面図(2) ……………	27
第18図 2号墳埴輪出土位置全体図……………	29
第19図 2号墳墳頂部埴輪出土位置図……………	30
第20図 2号墳南側墳丘裾部埴輪出土位置図 ……………	31
第21図 2号墳東側墳丘裾部埴輪出土位置図 ……………	32
第22図 2号墳北側墳丘裾部埴輪出土位置図 (1)……………	33
第23図 2号墳北側墳丘裾部埴輪出土位置図 (2)……………	35
第24図 2号墳西側墳丘裾部埴輪出土位置図 ……………	37
第25図 2号墳埴輪(ハケI)出土位置全体 図……………	39
第26図 2号墳埴輪(ハケII)出土位置全体 図……………	40
第27図 2号墳埴輪(ハケIII・ハケIV)出土 位置全体図……………	41
第28図 円筒埴輪・人物埴輪の底径……………	42
第29図 円筒埴輪の突帯間隔……………	42
第30図 2号墳円筒埴輪(1)……………	43
第31図 2号墳円筒埴輪(2)……………	45
第32図 2号墳円筒埴輪(3)……………	46
第33図 2号墳円筒埴輪(4)……………	47
第34図 2号墳円筒埴輪(5)……………	48
第35図 2号墳円筒埴輪(6)……………	49
第36図 2号墳円筒埴輪(7)……………	50
第37図 2号墳円筒埴輪(8)……………	51
第38図 2号墳円筒埴輪(9)……………	52
第39図 2号墳円筒埴輪(10)……………	53
第40図 2号墳円筒埴輪(11)……………	54
第41図 2号墳円筒埴輪(12)……………	55
第42図 2号墳円筒埴輪(13)……………	56
第43図 2号墳円筒埴輪(14)……………	57
第44図 2号墳円筒埴輪(15)……………	58
第45図 2号墳円筒埴輪(16)……………	59
第46図 2号墳円筒埴輪(17)……………	60
第47図 2号墳円筒埴輪(18)……………	61
第48図 2号墳円筒埴輪(19)……………	62
第49図 2号墳埴輪ハケ拓影(1)……………	63
第50図 2号墳埴輪ハケ拓影(2)……………	64

第51図	2号墳埴輪ハケ拓影(3)……………65
第52図	2号墳形象埴輪(1)……………68
第53図	2号墳形象埴輪(2)……………70
第54図	2号墳形象埴輪(3)……………72
第55図	2号墳形象埴輪(4)……………74
第56図	2号墳形象埴輪(5)……………76
第57図	2号墳形象埴輪(6)……………78
第58図	2号墳形象埴輪(7)……………80
第59図	2号墳形象埴輪(8)……………81
第60図	2号墳形象埴輪(9)……………82
第61図	2号墳形象埴輪(10)……………84
第62図	2号墳形象埴輪(11)……………88
第63図	2号墳形象埴輪(12)……………89
第64図	2号墳形象埴輪(13)……………90
第65図	2号墳形象埴輪(14)……………91
第66図	2号墳形象埴輪(15)……………92
第67図	2号墳形象埴輪(16)……………93
第68図	2号墳形象埴輪(17)……………94
第69図	2号墳形象埴輪(18)……………95
第70図	古墳時代以外の出土遺物 ……117

第3章 井戸向遺跡

第71図	遺構配置図(1)……………119
第72図	遺構配置図(2)……………120
第73図	遺構配置図(3)……………121
第74図	遺構配置図(4)……………122
第75図	第1ブロック器種別遺物分布図 124
第76図	第1ブロック母岩別遺物分布図 125
第77図	第1ブロック石器(1)……………126
第78図	第1ブロック石器(2)……………127
第79図	第1ブロック石器(3)……………128
第80図	第1ブロック石器(4)……………129
第81図	第2ブロック器種別遺物分布図 131
第82図	第2ブロック母岩別遺物分布図 131

第83図	第2ブロック石器……………132
第84図	第3ブロック遺物分布図……………134
第85図	第3ブロック石器……………134
第86図	グリッド出土石器……………134
第87図	炉穴(1)……………136
第88図	炉穴(2)……………138
第89図	縄文土器(1)……………140
第90図	陥穴・土坑(1)……………142
第91図	陥穴・土坑(2)……………144
第92図	炉穴(3)……………146
第93図	炉穴(4)・陥穴(3)……………147
第94図	縄文土器(2)……………149
第95図	縄文時代石器……………150
第96図	001A、082……………152
第97図	歴史時代出土遺物……………153

第4章 炭焼台所在塚

第98図	発掘前墳丘測量図……………156
第99図	炭焼台所在塚と土墳墓群……………157
第100図	出土遺物……………158

第5章 和田谷津塚

第101図	発掘前墳丘測量図……………161
第102図	遺構全体図……………162
第103図	出土遺物……………163

第6章 まとめ

第104図	大木台2号墳埴輪(基部)出土位置 全体図……………166
第105図	大木台2号墳朝顔形円筒埴輪出土 位置全体図……………167
第106図	大木台2号墳埴輪列復原図……………168
第107図	大木台2号墳形象埴輪列樹立模式 図……………170
第108図	ハケメの本数……………173
第109図	円筒埴輪の透孔の規模……………174

第110図 円筒埴輪の底径と1段高……………174	第112図 「下総型埴輪」分類図……………181
第111図 大木台2号墳埴輪分類図……………179	

表 目 次

大木台古墳群		炭焼台所在塚	
第1表 1号墳・2号墳土器観察表……………19		第8表 銭貨計測表……………159	
第2表 2号墳鉄鏃計測表……………23		第9表 キセル計測表……………159	
第3表 円筒埴輪観察表(1)～(16) 98～113		和田谷津塚	
第4表 形象埴輪観察表(1)～(2) 114・115		第10表 銭貨計測表……………164	
第5表 銭貨計測表……………116		まとめ	
井戸向遺跡		第11表 埴輪分類表……………175	
第6表 第1ブロック石器観察表……………130		第12表 人物埴輪分類表……………177	
第7表 第2ブロック石器観察表……………133			

図 版 目 次

大木台1号墳		図版12 第1ブロック、第2ブロック	
図版1 調査前風景、周溝		図版13 003～009、011	
図版2 周溝、全景、土層断面		図版14 012～018	
大木台2号墳		図版15 026、028、032～034、 019～021	
図版3 調査前・調査風景、埴輪出土状況		図版16 022～025、027、029、 030A・B	
図版4 墳丘裾部埴輪列、東側周溝、全景		図版17 029、031 046～052	
図版5 東側墳丘裾部埴輪列		図版18 053～056、068、072A・ B、073A・B、075	
図版6 人物埴輪出土状況		図版19 001A、屋敷跡、057B・C、06 4	
図版7 北側墳丘裾部埴輪列		図版20 屋敷跡、土墳墓群、044	
図版8 円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪出土 状況、西側墳丘裾部埴輪列、西側周 溝		炭焼台所在塚	
図版9 墳頂部埴輪列、埋葬施設		図版21 全景、土層断面、青面金剛像・二十 三夜塔	
図版10 全景、土層断面、遠景			
井戸向遺跡			
図版11 調査前・調査・調査後風景			

和田谷津塚

図版22 調査前風景、全景、土層断面

大木台1号墳・大木台2号墳

図版23 土師器、鉄製品

大木台2号墳

図版24 円筒埴輪

図版25 円筒埴輪

図版26 円筒埴輪

図版27 円筒埴輪

図版28 円筒埴輪

図版29 形象埴輪

図版30 形象埴輪

図版31 形象埴輪

図版32 形象埴輪

図版33 形象埴輪

図版34 形象埴輪

図版35 形象埴輪

図版36 形象埴輪、大木台古墳群縄文土器

図版37 円筒埴輪

井戸向遺跡

図版38 第1ブロック石器

図版39 第1ブロック石器

図版40 第2・3ブロック石器、単独出土石器、縄文土器

図版41 縄文土器

図版42 縄文時代石器、歴史時代出土遺物、057出土遺物

炭焼台所在塚・和田谷津塚

図版43 出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、当地域の道路網の整備を目的として、主要地方道佐倉印西線（公共）事業及び主要地方道佐倉印西線（県単）事業を計画した。事業地区の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関が協議した結果、記録保存の措置を講じることとなり、平成3年10月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。なお、平成5年度には主要地方道佐倉印西線が国道464号に昇格し、事業名についても一般国道464号県単道路改良事業に変更された。

発掘調査は平成3年10月から平成5年12月まで行った。井戸向遺跡の対象面積15,660㎡のうち、3年度は事業地区の東端の3,660㎡について上層確認調査366㎡、下層確認調査146㎡、上層本調査3,000㎡、下層本調査200㎡を実施した。4年度は、3年度に発掘した地区の西側隣接部分と事業地区の西端の合わせて9,300㎡について、上層確認調査930㎡、下層確認調査372㎡、上層本調査350㎡について実施した。5年度は、4年度に発掘した2地区の間の残された範囲と、3年度の調査地区の北側に隣接した現道部分の合わせて2,700㎡について上層確認調査260㎡、下層確認調査104㎡、上層本調査580㎡を実施した。（第2図）

大木台古墳群については平成4年度に円墳2基の調査を行い、5年度に円墳と隣接する盛土状の高まりを大木台3号墳として調査した。炭焼台所在塚については平成4年度に塚1基の調査を実施した。和田谷津塚については平成5年度に塚1基の調査を実施した。

発掘調査の担当者と実施期間は、以下のとおりである。

平成3年度 調査部長天野努、部長補佐佐久間豊、班長上野純司、主任技師郷堀英司

主要地方道佐倉印西線（公共）事業 井戸向遺跡 平成3年10月1日～平成4年1月31日

平成4年度 調査部長天野努、部長補佐佐久間豊、班長田坂浩、技師落合章、糸原清

主要地方道佐倉印西線（県単）事業 大木台2号墳、炭焼台所在塚、

平成4年4月1日～5月30日

主要地方道佐倉印西線（公共）事業 大木台1号墳、井戸向遺跡

平成4年6月1日～8月31日、同年12月1日～平成5年2月26日

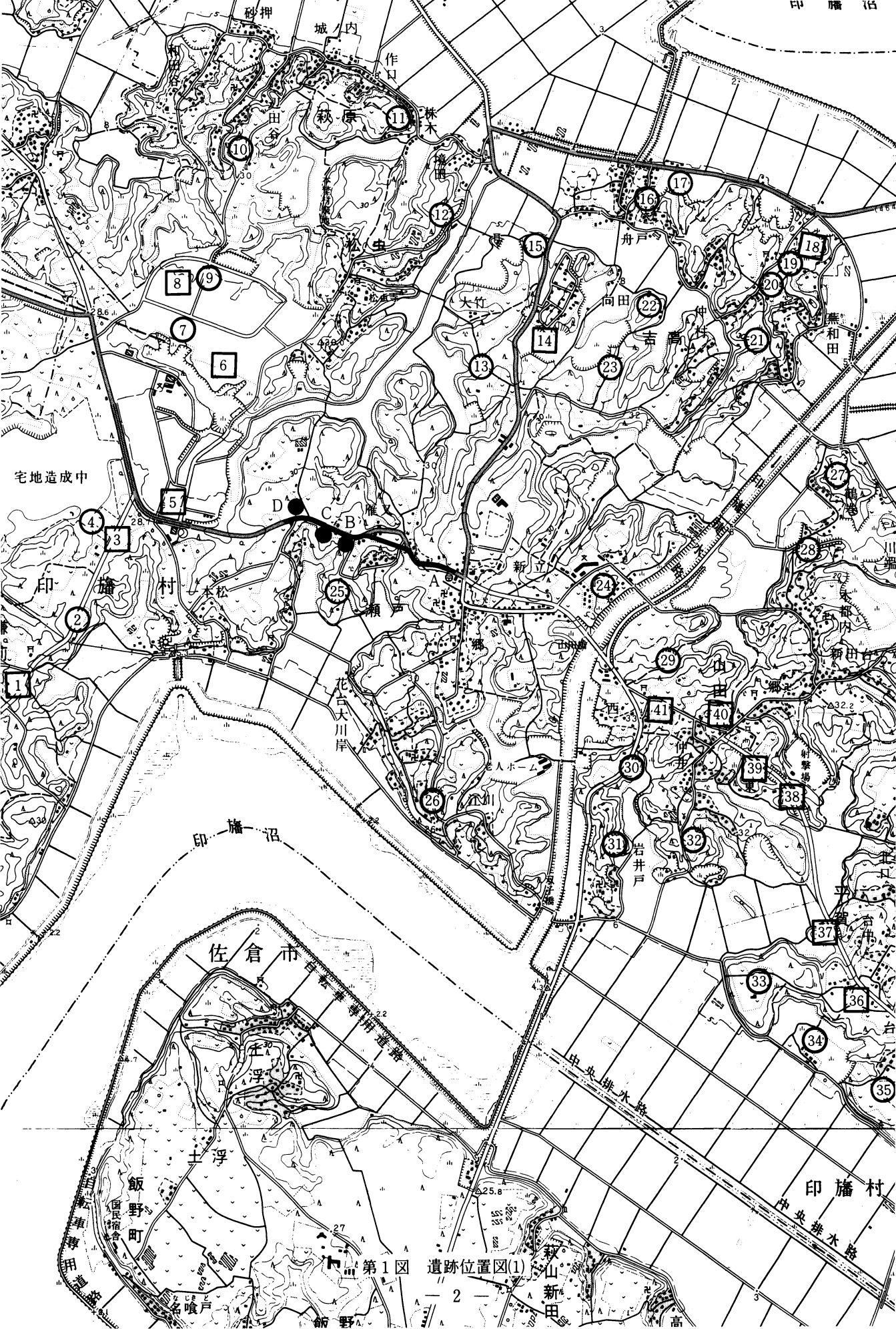
平成5年度 調査研究部長高木博彦、印西調査事務所長田坂浩、技師糸原清

一般国道464号県単道路改良事業 井戸向遺跡、和田谷津塚、大木台3号墳

平成5年10月1日～12月24日

整理作業の担当者と実施期間は、以下のとおりである。

平成5年度 調査研究部長高木博彦、印西調査事務所長田坂浩、技師糸原清



第1図 遺跡位置図(1)

平成5年4月1日～10月31日、平成6年1月1日～3月31日

平成6年度 調査研究部長西山太郎、印西調査事務所長谷匂、技師糸原清

平成6年7月1日～12月31日

平成7年度 調査研究部長西山太郎、印西調査事務所長谷匂、技師糸原清

平成7年6月1日～7月31日

井戸向遺跡として今回調査した範囲は東西約3.5kmにわたっている。この範囲は、『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－』¹⁾においては炭焼台遺跡・堀尻台遺跡・房田遺跡・井戸向遺跡とに分けられている。しかし、今回の調査では、遺跡の境界を明瞭に区切ることが困難であったため、また調査が複数年にわたり混乱も予想されたため、井戸向遺跡として一括して取り扱った。発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、40m×40mの方眼の大グリッドを南北9区画、東西23区画設定し、北から南へA・B・C・・・、西から東へ1・2・3・・・とし、A1、A2と呼称した。さらに、大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し、北から南へ00・10・20・・・、西から東へ00・01・02・・・とした。したがって、各々の小グリッドはA1-50、G20-99のようになる。

上層の確認調査は調査区に沿って、幅2mのトレンチを10%の割合で設定した。上層の本調査は、遺構を検出したトレンチを重機により拡張し実施した。下層の確認調査は2m×2mグリッドを4%設定し、遺物を検出したグリッドを拡張し本調査を実施した。遺物の取り上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層や先土器時代の遺物についてはグリッド内の通し番号で行った。

大木台古墳群と和田谷津塚の発掘区の設定については、井戸向遺跡で設定したグリッドを使用した。遺物の取上げについても、埋葬施設や埴輪列などの遺構に伴う遺物を除き、グリッド内の通し番号で実施した。

炭焼台所在塚については、小規模な塚であったため、塚の通し番号で遺物を取上げた。

周辺遺跡地名一覧（第1図）

A井戸向遺跡 B和田谷津塚 C大木台古墳群 D炭焼台所在塚

1 滝尻遺跡 2 鎌苧炭焼古墳群 3 老作遺跡 4 鎌苧卯坪古墳 5 瀬戸遠蓮遺跡 6 松虫丑むぐり遺跡 7 梵天塚遺跡 8 萩原柳谷遺跡 9 萩原出戸遺跡 10 萩原辺田谷津古墳群 11 萩原株木古墳群 12 萩原鴻ノ巣古墳群 13 堀尻古墳 14 吉高大谷遺跡 15 吉高浅間古墳 16 吉高舟戸横穴群 17 吉高山王古墳 18 吉高家老地遺跡 19 吉高家老地古墳群 20 吉高羽黒古墳群 21 三角山古墳群 22 吉高向田古墳群 23 古木戸3号墳 24 瀬戸エゴ作古墳群 25 瀬戸和田谷津古墳群 26 瀬戸松ノ木作古墳群 27 山田鶴巻古墳 28 山田上鶴巻古墳群 29 山田稻荷前古墳群 30 山田蒸古墳群 31 山田谷々津古墳 32 山田治郎松古墳 33 平賀勸堂古墳群 34 山ノ下古墳群 35 古井戸原古墳群 36 平賀惣行遺跡 37 井ノ崎台遺跡 38 光明寺遺跡 39 山田虎ノ作遺跡 40 打手第二遺跡 41 山田諏訪遺跡

第2節 遺跡の位置と歴史的環境 (第1図)

調査地は、印旛沼の北沼と南沼に挟まれた標高約30mの東西に細長い半島状の台地にある。井戸向遺跡は、印旛村瀬戸字井戸向・房田・和田谷津・大木谷津・岩井作・炭焼台にまたがり、南と北から複数の谷が入り、細長い台地が枝状に出る背骨状の部分に立地している。

大木台古墳群は、印旛村瀬戸字大木谷津に所在し、南側から入る谷に面した台地端部に立地する。

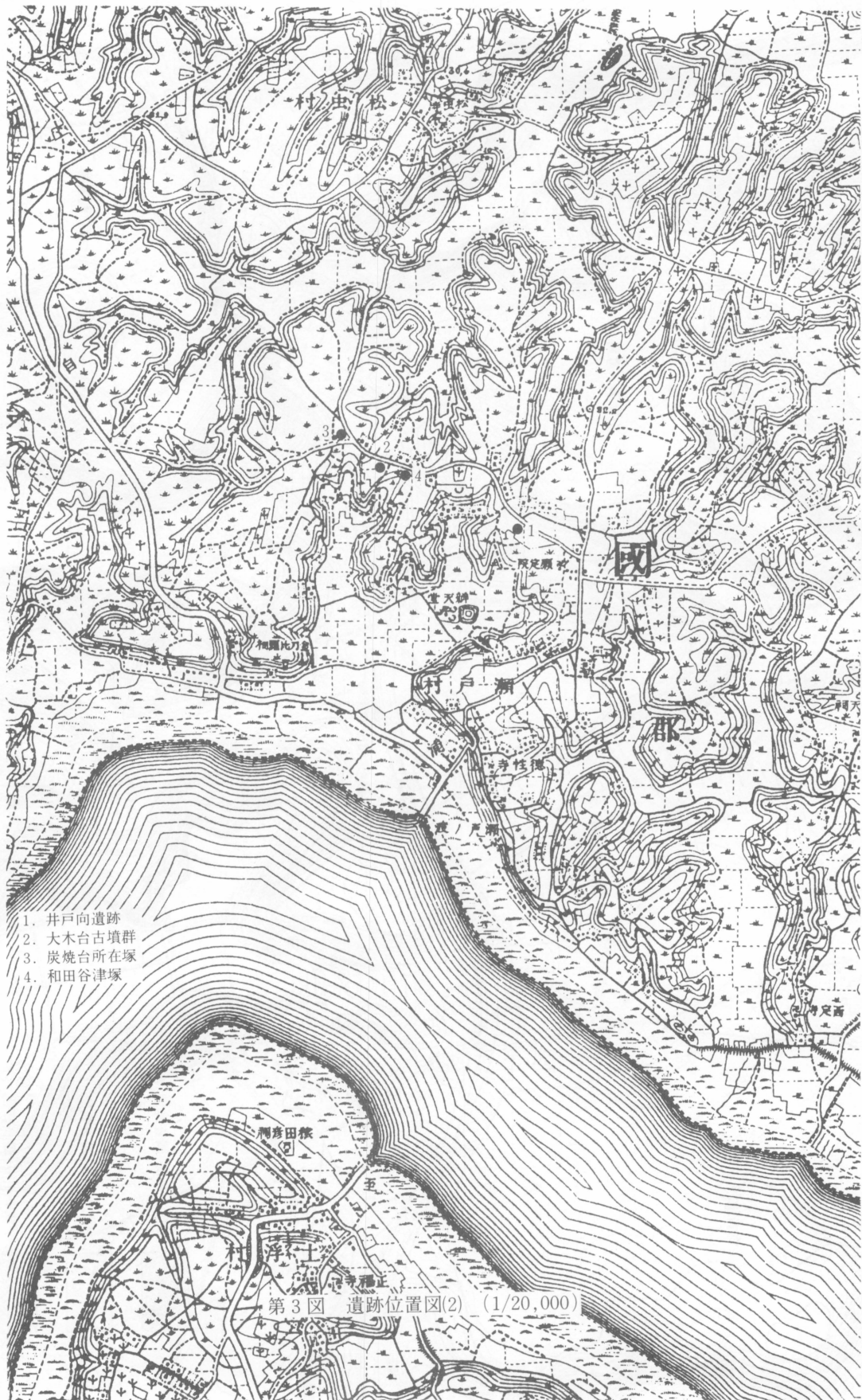
炭焼台所在塚は、印旛村瀬戸字大木谷津に所在し、南側から入る谷頭に立地する。また、現国道・松虫へ抜ける道・印旛沼へ下りる道の辻に位置する。

和田谷津塚は、印旛村瀬戸字和田谷津に所在し、南側から入る谷頭に立地する。また、現国道から和田谷津や房田などの台地下の集落へ下りる道の辻に位置する。和田谷津塚は調査の結果、近世の方形塚と判明したが、炭焼台所在塚と共に、複数の道が集まる辻に位置している。国道を中心とした道路網が整備される以前においては、集落と集落とを繋ぐ道や印旛沼へ下りる道が複数集まる地点として、これらの辻は現在以上に重要な役割を果たしていた。印旛沼に橋が架けられる以前においては、瀬戸地区には七つの河岸があり、渡舟で印旛沼の対岸と行き来をしていた²⁾。印旛沼へ下りる道は、河岸へ向かう道でもあつた。(第3図)

調査地周辺には、印旛沼や印旛沼から入り込んだ小支谷に面した端部を中心に、多くの遺跡が所在している。調査地に近接するものを挙げると、先土器時代の遺跡としては瀬戸遠蓮遺跡が知られている。尖頭器や搔器などが出土しており、縄文時代草創期の隆起線文土器も出土している。縄文時代の遺跡としては、条痕文系土器を伴う炉穴群が発見された吉高家老地遺跡や、加曽利E3期の竪穴住居跡が発見された松虫丑むぐり遺跡などがある。このほかにも発掘調査は行われていないが、早期の条痕文系土器が出土する遺跡や加曽利E3期・終末期以降の中後期の土器が出土する遺跡が多数分布している³⁾。弥生時代の遺跡としては吉高大谷遺跡、吉高家老地遺跡、山田諏訪遺跡、滝尻遺跡などがあり、後期の小規模な集落が点在して発見されている。

古墳時代の遺跡としては、吉高家老地遺跡から前期の竪穴住居跡が1軒、光明寺遺跡や打手第二遺跡からは後期の集落が発見されており、吉高山王古墳や吉高浅間古墳、鎌苅炭焼古墳群などの古墳の調査も行われている。印旛村における古墳の分布は吉高地区や山田地区、平賀地区など村内の東側や、吉田地区や岩戸地区などの村内の西南側に集中しており、前方後円墳を含む中小規模の古墳が多数分布している。それに対して両地区に挟まれた瀬戸地区や鎌苅地区、師戸地区の古墳分布は比較的希薄で、小規模な古墳群が散在する程度である⁴⁾。なお、古井戸原2号墳(油作II号墳)と吉高山王古墳からは「下総型埴輪」が出土しており、調査地に近接する堀尻古墳や鎌苅⁵⁾、江川⁶⁾からも、人物埴輪などが表面採集されている。印旛村内においては埴輪の出土地が比較的多く知られている。





- 1. 井戸向遺跡
- 2. 大木台古墳群
- 3. 炭焼台所在塚
- 4. 和田谷津塚

第3図 遺跡位置図(2) (1/20,000)

奈良・平安時代の遺跡としては、吉高家老地遺跡や山田虎ノ作遺跡、打手第二遺跡、山田諏訪遺跡において集落が調査されている。なお、本遺跡群が位置する瀬戸地区においても奈良・平安時代の土器が出土する遺跡が多く分布している⁷⁾。印旛村内においては、吉高地区・瀬戸地区・山田地区・平賀地区で奈良・平安時代の遺跡分布が濃く、これら4地区を中心として周辺地区を含めた地域が『和名類聚抄』に見られる古代印旛郡の吉高郷に比定されている⁸⁾。なお、山田字浅間山⁹⁾からは瓦塔が、瀬戸字鈴耕地¹⁰⁾からは海獣葡萄鏡の出土が知られている。

中近世の遺跡としては、打手第二遺跡から大量の板碑が出土し、台地整形区画と土壇墓群、堂跡と考えられる掘立柱建物跡も検出されている。また萩原出戸遺跡内塚群、松虫の梵天塚、光明寺1号塚・2号塚など多くの塚も調査されている。

第3節 層序

井戸向遺跡の調査範囲は東西3.5kmにわたっているが、高低差は約2mで、土層の堆積状況はほぼ一様である。下総台地における典型的な堆積状況である。地表から立川ローム層上面まで約0.5m、立川ローム層上面から最下面まで約1.5m前後である。各層の特徴を以下に記す。

II層：暗褐色土層。遺物包含層。大木台1号墳・2号墳、炭焼台所在塚、和田谷津塚の盛土下では、IIa層：黒色土層、新期テフラ層、そしてIIb層：橙褐色土層、ローム漸移層が良好に堆積していた。

III層：黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層である。

IV・V層：黄褐色ローム土。III層の軟質化により層厚は薄く、IV層とV層の識別は困難で、同一の区分で把握することにした。

VI層：明黄褐色ローム土。この層全体にATが含まれる。

VII層：黄褐色土層。ATがやや拡散している。第2黒色帯上部に対応するものである。

IXa層：暗褐色土層。前後の層に比べ暗い色調。赤色スコリアを含む。

IXb層：暗褐色土層。前後の層に比べ明るい色調。

IXc層：暗褐色土層。立川ローム層中で最も暗い色調。

X層：黄褐色土層。立川ローム層最下層である。

注1 財団法人 千葉県文化財センター 1985『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－』

2 川端豊彦ほか 1970『印旛沼・手賀沼周辺の民俗』千葉県教育委員会

3 三浦和信ほか 1980『印旛村の古代文化』印旛村教育委員会

4 千葉県教育庁文化課 1990『千葉県所在古墳群詳細分布調査報告書』

5 成田山靈光館 1957『北総の原始古代』

6 滝口宏ほか 1961『印旛手賀』早稲田大学考古学研究室

- 7 3と同じ
- 8 進藤泰浩ほか 1994『印旛村山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター
- 9 安藤鴻基 1979「房総の瓦塔」『木下庵寺跡第二次調査概報』千葉県教育委員会
- 10 千葉県立房総風土記の丘 1980『企画展 房総の古鏡』

第2章 大木台古墳群

第1節 調査区の概要（第4図）

大木台古墳群の調査区は、井戸向遺跡の調査区に接して位置している。大木台古墳群は円墳2基によって構成された小規模古墳群である。なお、道路建設範囲内に小さな盛土が認められ、大木台3号墳として発掘調査を行ったが、地ぶくれと判明した。大木台古墳群の調査前の状況は墓地であり、1号墳・2号墳ともに墓に囲まれていた。

2号墳では墳頂部から埋葬施設が、墳丘裾部などから埴輪列が検出された。大量に出土した埴輪の中には円筒埴輪とともに、人物埴輪と馬形埴輪が含まれている。また、2号墳の墳丘盛土下の旧表土層から縄文土器が、大木台古墳群全体から墓地に伴う近世遺物が出土した。

第2節 古墳時代

1 大木台1号墳

(1) 発掘前の古墳の状況（第5図、図版1）

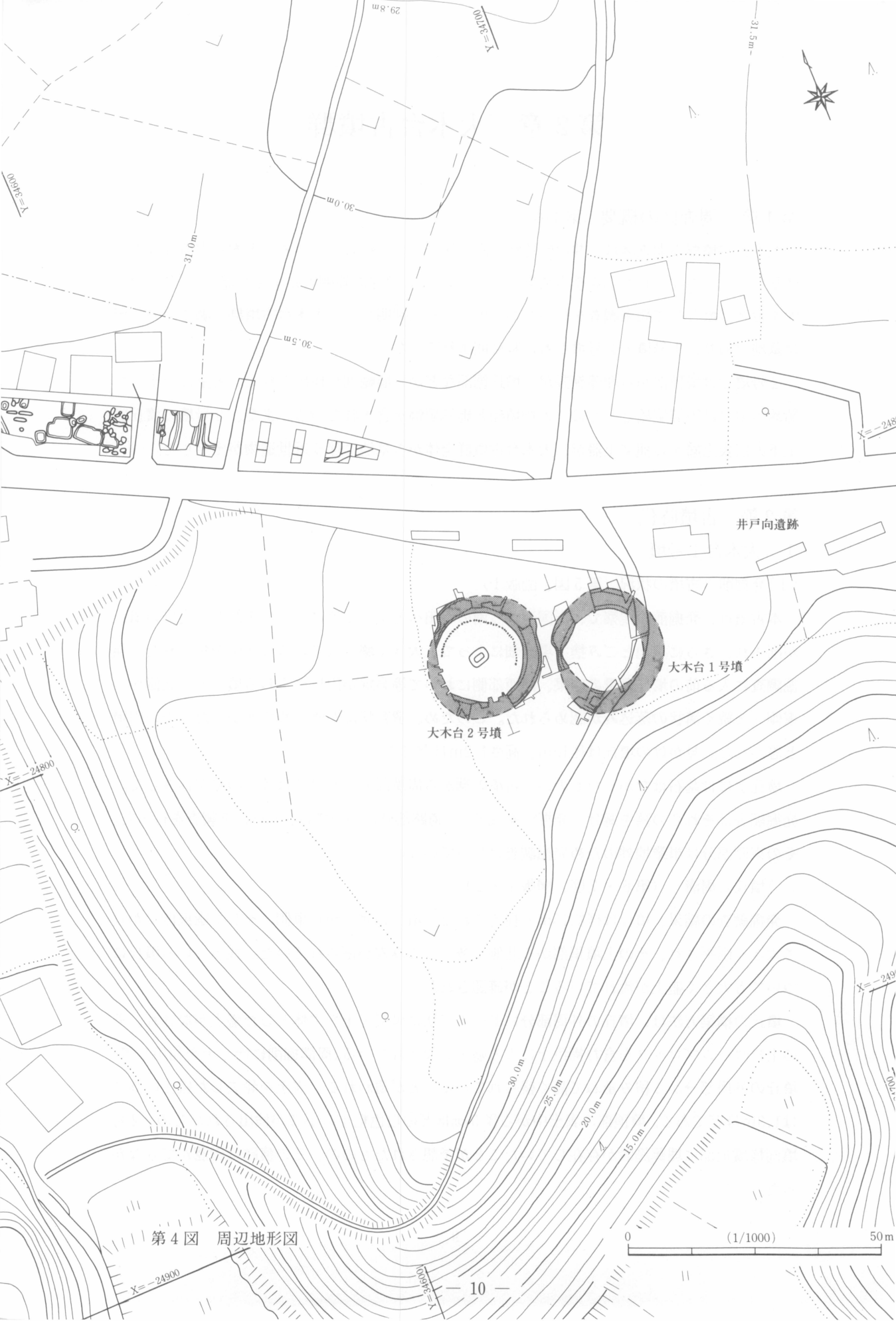
本古墳は、発掘前の観察で、現国道から南の水田へと下りる道によって東側から南側の墳丘が削られ、さらに墓地とごみ捨て場、畑によって、大きく壊されていることが予想された。発掘調査に入る前の墳丘測量の結果、南西部側において等高線が円形にまわる墳丘と、北側から東側へと続く溝状の落込みが認められた。このため、遺存状況がきわめて悪かったものの円墳と思われた。見かけの墳丘は径16m、高さ1.2mほどである。

墳丘上には墓石はなかったものの、古墳の裾から周溝部分にかけては多くの墓が存在した。発掘調査はそれらの墓を避けて発掘区を設定し、道路部分については、トレンチ調査を行った。その東側部分は事業地外のため発掘調査は行っていない。

(2) 墳丘と周溝（第6・7図、図版1・2）

発掘調査の結果、墳丘は径約15mと捉えられた。墳丘の北側から東側、そして南東側にかけて大きく削平され、その上墳頂部から北側に多くのごみ穴が掘られていた。残っている墳丘についても大きく盛土が流れていることが確認された。

墳丘の構築方法は、墳丘の外周部分にドーナツ状に黒褐色土を主体とした盛土がなされ、その上にロームブロックを含む褐色土による盛土がなされている。周溝掘削に伴う土を利用して、墳丘の外周部分から積み重ねて高く盛られていることが窺われる。表土を除去した盛土の高さは1.3mほどである。墳頂部の表土中から径5cmほどの白色粘土の小塊が検出されたため、2号墳同様墳頂部に埋葬施設が存在していたことが予想されたものの、その痕跡は確認ができなかった。



第4図 周辺地形図



第5図 発掘前墳丘測量図

周溝については、道路にかかる東側と南側は部分的な調査ではあったが、墳丘をとりまいて
いることがほぼ確認された。ただし、東側と南側については周溝の内周を確認したにとどまり、
周溝の外周は確認されていない。良好に検出された北側の周溝の規模は、確認面で幅3.5m～4
m、深さ0.5m～0.6mを測る。周溝の外側への立上りの傾斜が極めて緩い特色を有している。
また、西側部分については、後世の攪乱が深くまで及んでいたため、周溝の幅が本来より狭く、
掘り込みも浅く検出された。なお、周溝の外周が急に狭まっている形状は、2号墳の周溝の北
西部分と共通しており、当時の周溝の形状を反映しているものと考えられる。

(3) 出土遺物 (第8・9図、図版23)

墳頂部から墳丘裾部にかけて、土師器の坏、高坏、甗、甕が出土した。周溝内からはほとん
ど出土していない。また、盛土中からも遺物は出土していない。図示できたものは11点である。
このほかには、少量の土師器の坏や高坏の破片が出土している。

1～3は須恵器の坏身の模倣と考えられている土師器坏である。丸底に近く、体部があまり
張らない形態である。2は内外面を漆仕上げしており、3は内外面を黒色処理している。なお、
3の内面には大きく放射状にヘラナデを施している。調整の機能を果たしているとは考えられ
ず、記号のようにも見うけられる。4、5は丸底の土師器坏である。内外面を赤彩している。
4は内面をヘラミガキし、5はヨコナデしている。6は口縁が内湾ぎみに立ち上がる土師器坏
で、内外面を赤彩している。9の小型甕は球胴形を呈している。10の甗は逆台形を呈している。
10と11は同一個体と考えられる。12は長脚の高坏の脚部である。

2 大木台2号墳

(1) 発掘前の古墳の状況 (第5図、図版3)

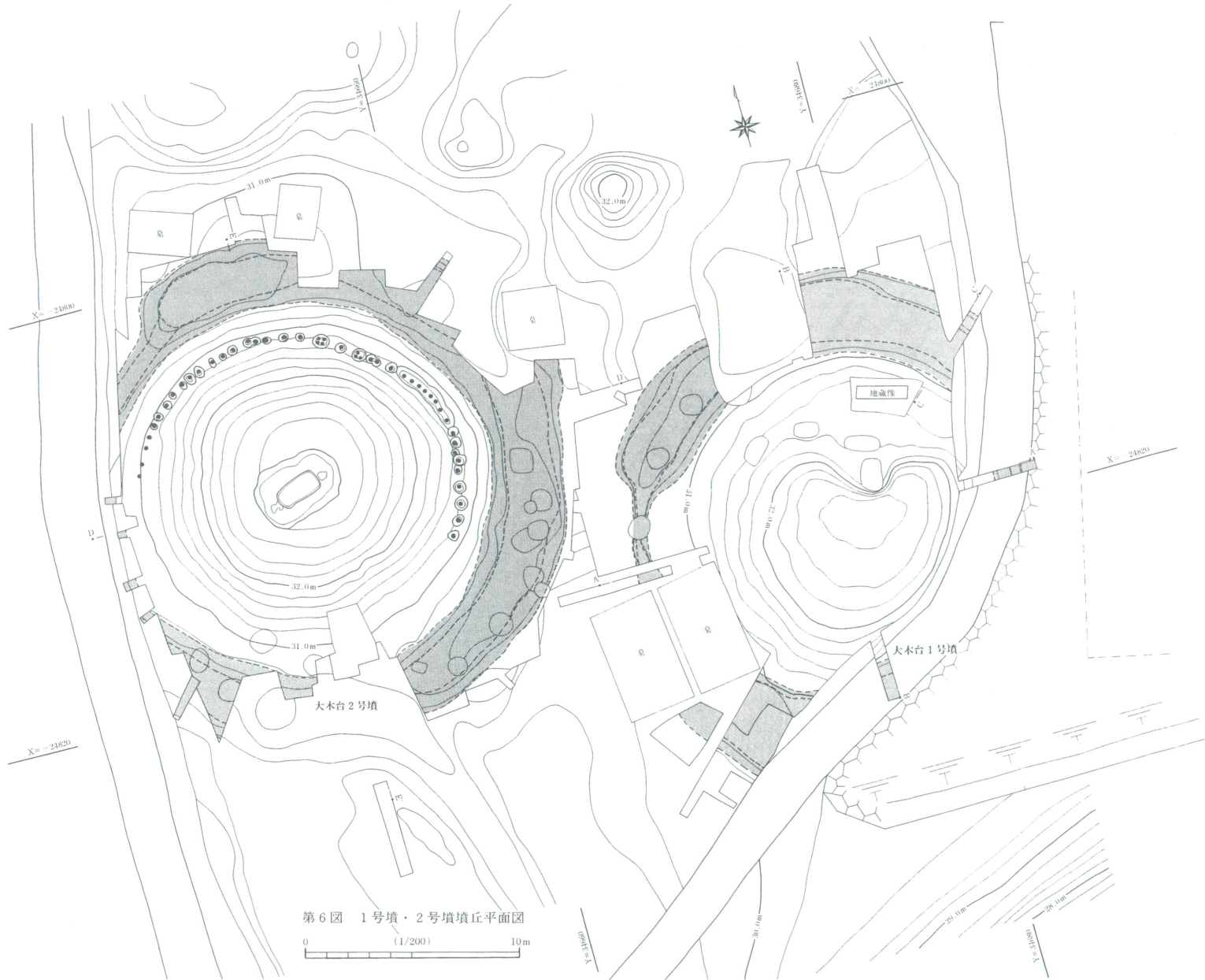
発掘調査に入る前の墳丘測量の結果、比較的遺存状況のよい円墳と思われた。墳丘はほぼ整
った円形を呈し、その周囲には溝状の落込みが認められた。ただし、墳丘に接した西側部分に
ついては、南北に走る地境溝によって周溝状の落込みが途切れており、大きく壊されていると
推測された。みかけの墳丘は径18m、高さ2mほどである。

2号墳は、1号墳同様に墓地の中に位置しており、古墳の裾から周溝部分にかけては多くの
墓が存在していた。発掘調査はそれらの墓を避けて発掘区を設定して行った。なお、地境溝以
西については事業地外であり、発掘調査は行っていない。

(2) 墳丘と周溝 (第6・7図、図版4・10)

発掘調査の結果、墳丘は径約17mの円墳と判明した。西側から南側にかけての墳丘裾部が緩
やかな斜面で検出されたが、盛土が流れている状況は、発掘調査前の墳丘測量図からも読みと
ることができる。

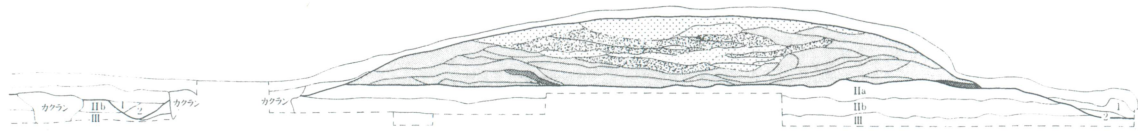
墳丘の構築方法は、1号墳と同様、墳丘の外周部分にドーナツ状に黒褐色土を主体とした盛



第6図 1号墳・2号墳填丘平面図

0 (1/200) 10m

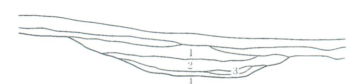
A 33.0m



- 西側周溝覆土
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土、ロームブロック多く含む

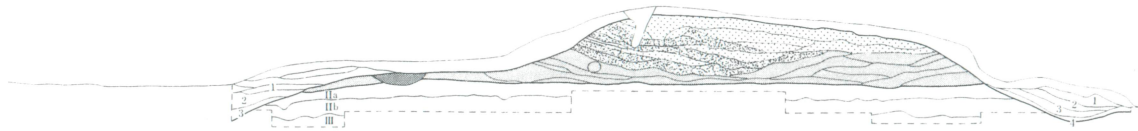
- 東側周溝覆土
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土、ローム砂若土含む

C 32.0m



- 北東側周溝覆土
1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土、ローム砂若土含む
4. 黒褐色土、ローム砂含む

B 33.0m








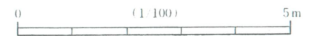
- 北側周溝覆土
1. 暗褐色土、ロームブロック含む
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土

- 南側周溝覆土
1. 暗褐色土、ローム砂若土含む
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土
4. 黒褐色土、ローム砂若土含む

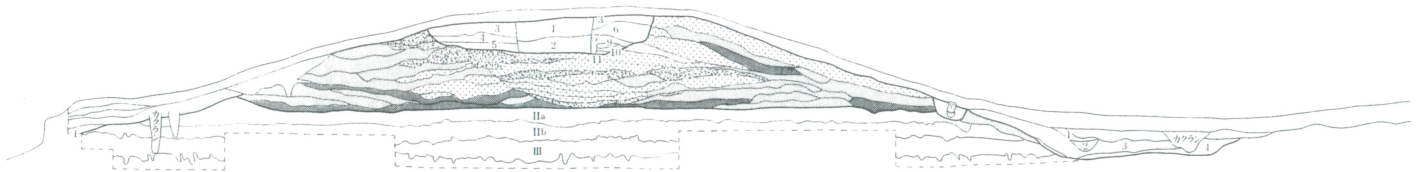
大木台 1 号墳

墳丘上層凡例

-  暗褐色土
-  暗褐色土、ローム砂、ロームブロック含む
-  黒褐色土
-  黒褐色土、ローム砂若土含む
-  黒褐色土、ローム砂含む



D 33.5m

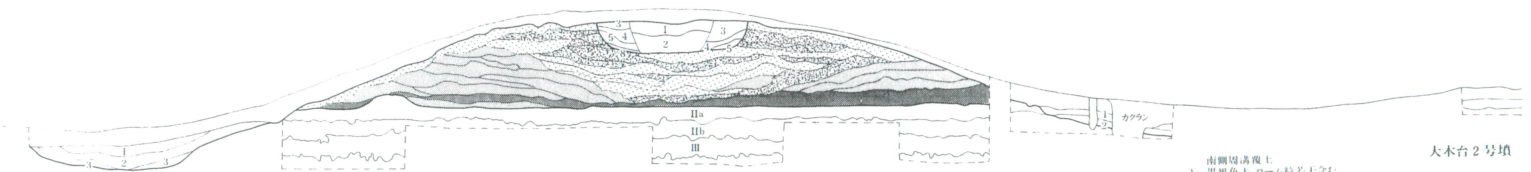


- 西側周溝覆土
1. 黒褐色土、ロームブロック若土含む

- 埋葬施設覆土
1. 暗褐色土、ロームブロック若土含む
2. 黒褐色土、ロームブロック若土含む
3. 褐色土、ロームブロック含む
4. 褐色土、ロームブロック若土含む
5. 褐色土、ロームブロック多く含む
6. 暗褐色土、ロームブロック若土含む
7. 褐色土、ロームブロック、白色粘土ブロック含む
8. 褐色土、ロームブロック、炭化物含む
9. 白色粘土
10. 暗褐色土、ロームブロック若土含む
11. 黒褐色土、ロームブロック若土含む

- 東側周溝覆土
1. 黒褐色土、ローム砂若土含む
2. 暗褐色土、ローム砂若土含む
3. 暗褐色土、ローム砂若土含む
4. 黒褐色土、ローム砂含む

E 33.5m

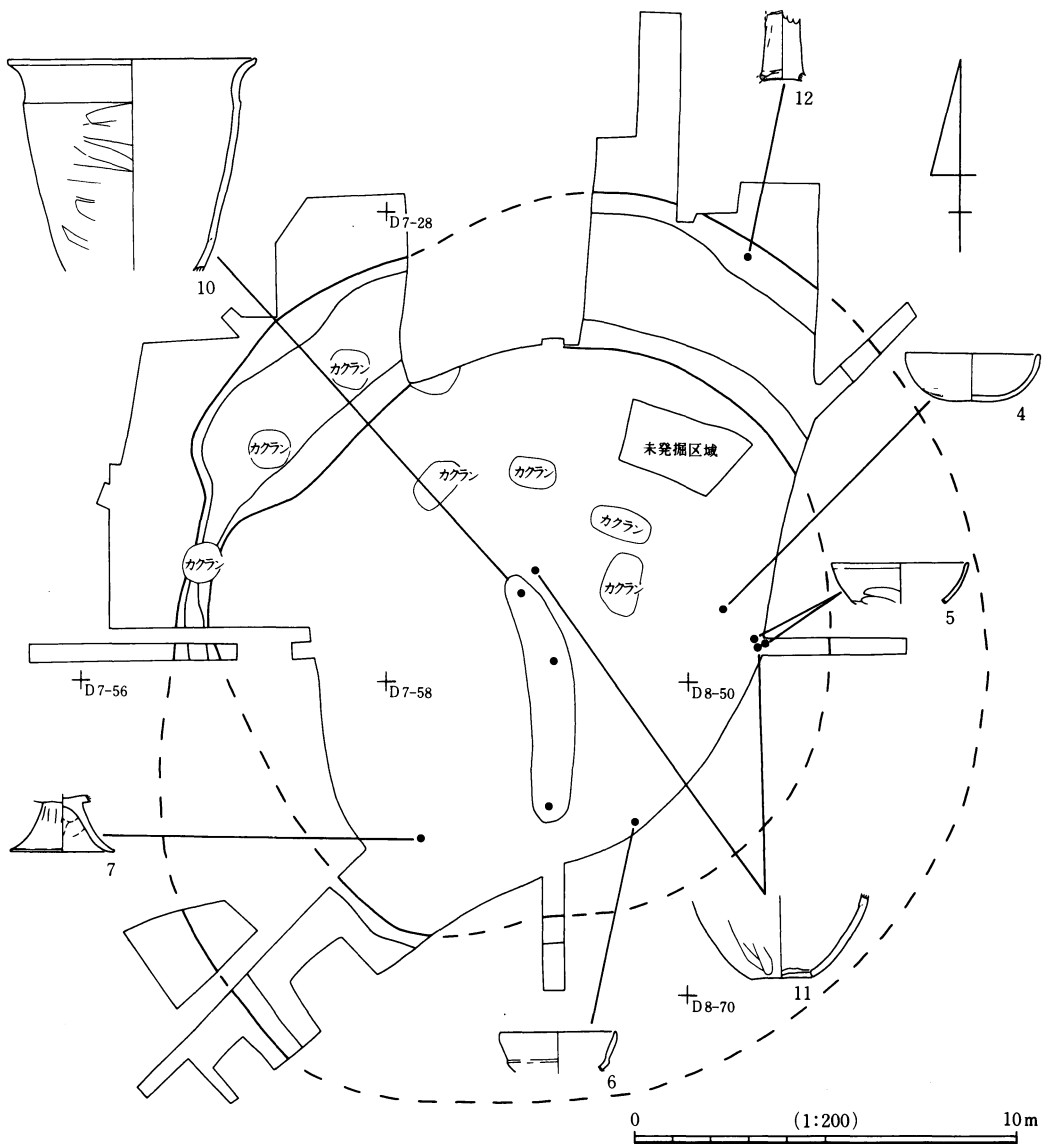


- 北側周溝覆土
1. 黒褐色土、ローム砂若土含む
2. 黒褐色土、ローム砂含む
3. 黒褐色土、ロームブロック若土含む

- 南側周溝覆土
1. 黒褐色土、ローム砂若土含む
2. 黒褐色土、ローム砂含む

大木台 2 号墳

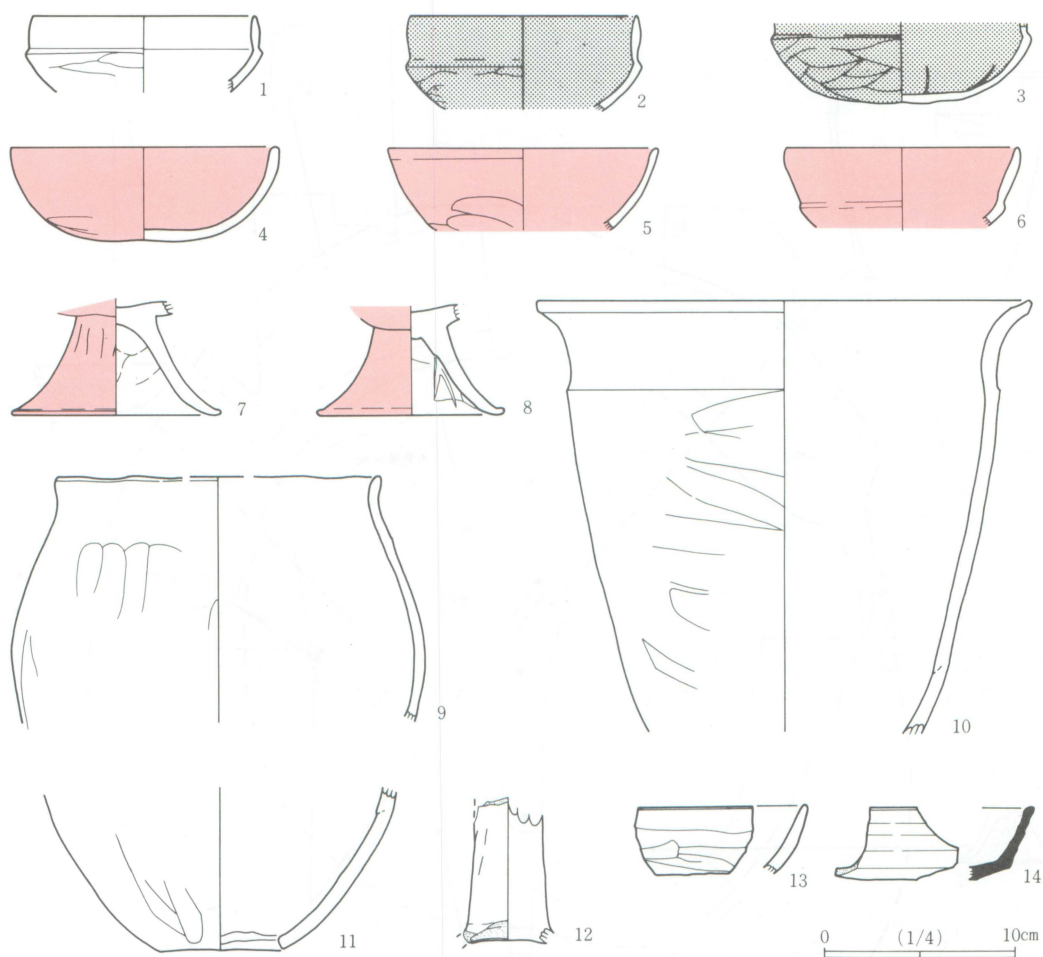
第 7 図 1 号墳、2 号墳土層断面図



第8図 1号墳遺物出土位置図

土がなされ、その上にロームブロックを含む褐色土で盛土されている。旧表土面から表土を除去した墳頂部までの高さは1.6mほどである。なお、墳頂部の遺存状況については、墳頂部で埴輪列が検出されたことから、比較的良好と思われた。

周溝は、西側の地境溝で壊されている範囲を除き、墳丘を巡ることが確認された。ただし、北西部分は周溝の外周が急に狭まり、深さも極端に浅い形状である。地境溝により壊されている周溝の西側部分についても、墳丘から旧表土層への掘込みがトレンチによって確認されたので、少なくとも周溝は途切れることはないと推測される。周溝は北から東、南西にかけて、確



第9図 1号墳・2号墳土器

認面で幅3m～4m、深さ40cm～50cmほどでほぼ一様であるのに対して、北西部では確認面で幅約70cm、深さ約20cmほどの貧弱なものである。旧表土面からの深さは1.0m～1.3mほどである。

周溝の断面形は墳丘内側への立上りが急なのに対して、外側への立上りは緩やかである。発掘調査前に認められた墳丘を巡る周溝状の落ち込みは、確認面で捉えた周溝よりも平面的にさらに外側に広がっており、周溝は本来緩やかな立上りのまま、さらに外側から掘られていたとも推測される。

(3) 埋葬施設 (第10図、図版9)

埋葬施設は墳頂部中央から1基検出された。木棺を直葬したものである。墳丘が盛土された後、墳頂部に4.2m×2.9mほどの土壇が掘られ、その中央に木棺が安置されたものと考えられ

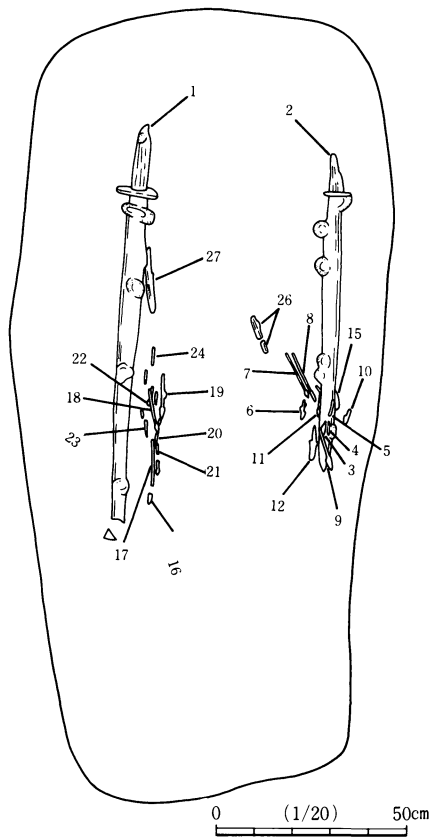
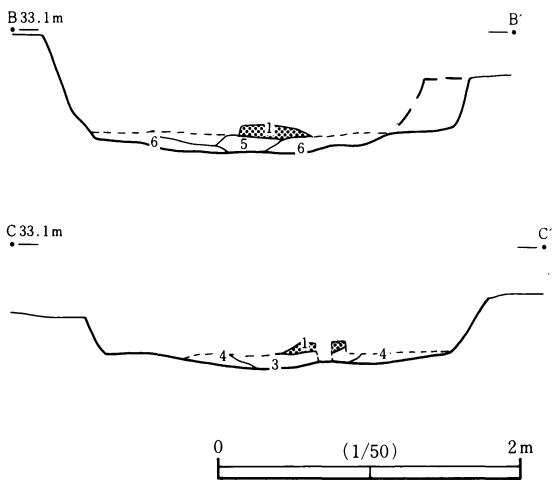
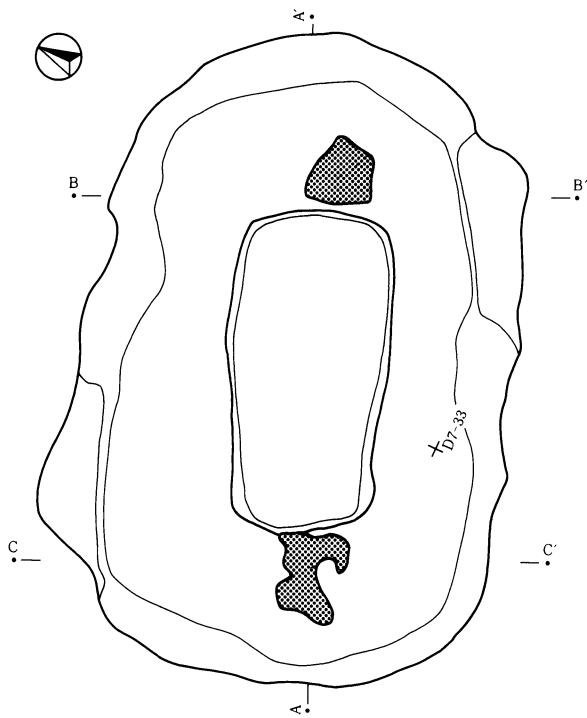
No	器種	口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	土師器 坏	(11.6)	—	4.0+	口縁部1/4	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	褐色	D7-39	
2	土師器 1/4	(12.0)	—	5.0+	口縁部1/4	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	暗褐色	Hサブトレンチ 一括	内外面 漆仕上げ
3	土師器 坏	—	—	4.3+	1/2	内面 ヘラミガキ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	暗褐色	Fサブトレンチ 一括	内外面 黒色処理 内面 放射状にヘラ
4	土師器 坏	14.0	—	4.9	1/4	内外面 ヘラミガキ	砂粒少	良	褐色	D8-40 D7-59	内外面 赤彩
5	土師器 坏	(14.2)	—	4.2+	口縁部1/3	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	褐色	D8-40、50	内外面 赤彩
6	土師器 坏	(12.2)	—	4.1+	口縁部1/4	口縁部・内面 ナデ	砂粒少	良	褐色	D7-59	内外面 赤彩
7	土師器 高坏	—	—	5.9+	脚部4/5	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ後にナデ	砂粒少	良	褐色	D7-68	外面 赤彩
8	土師器 高坏	—	(9.8)	5.7+	脚部3/5	内面 ヘラケズリ 外面 ヘラケズリ後にナデ	砂粒少	良	褐色	D7-49	外面 赤彩
9	土師器 甕	(17.2)	—	13.0+	口縁～胴部 1/4	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	褐色	Fサブトレンチ 一括	
10	土師器 甕	(26.3)	—	22.1+	口縁～胴部 1/4	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	褐色	D7-48、49 59、D8-50	11と同一個体か
11	土師器 甕	—	—	6.4	胴部1/4	外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	褐色	D8-40、50	10と同一個体か
12	土師器 高坏	—	—	—	脚部	外面 ナデ	砂粒多	良	赤褐色	D8-20	
13	土師器 坏	—	—	—	口縁部1/5	口縁部・内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒少	良	暗褐色	D7-42	
14	須恵器 坏	—	—	3.7+	口縁部1/6	ロクロ成形	砂粒少	良	灰褐色	D7-43	

復元：() 遺存高：+ 単位=cm

第1表 1号墳・2号墳土器観察表

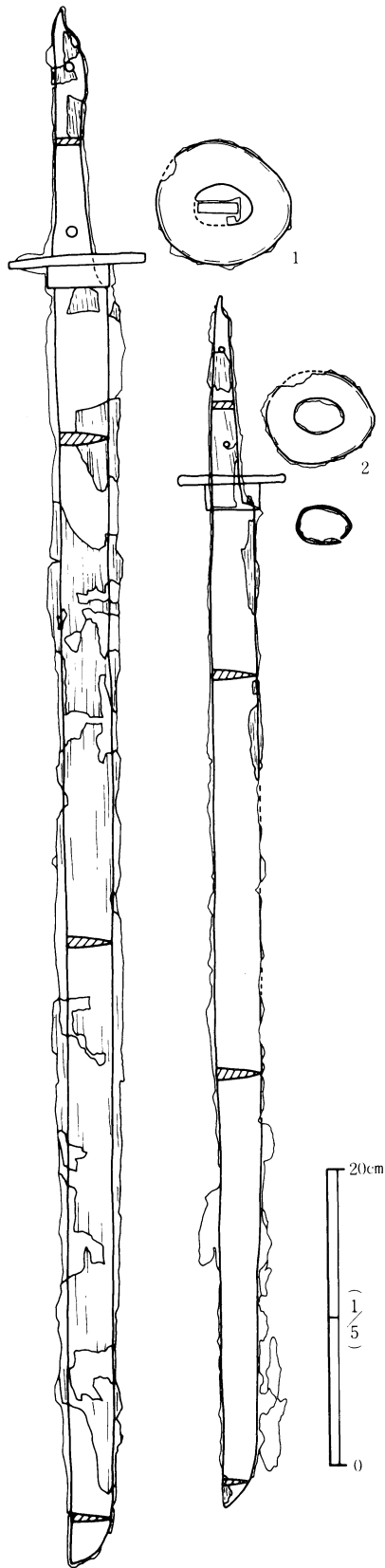
る。土壌の深さは、表土除去後の墳頂面から50cm～60cmほどである。土壌の底面はほぼ平らである。木棺の周囲は裏込めされ、両端部に接して、径40cm～50cm、厚さ10cmほどの粘土塊が検出された。裏込め土は褐色土が主体でロームブロックの混入が多いのに対し、木棺内は黒褐色土が主体でロームブロックの混入が少量である。裏込め土の範囲から木棺の範囲を推定すると、その範囲は約2.0m×約1.0mである。木棺の主軸方向はN-70°-Eである。

木棺内の両側から、切先を西側に向けて1振ずつ直刀が出土した。北側の直刀の刀身部のやや関側から刀子が1本、刀身部の切先側から鉄鏃がまとまって出土した。南側の直刀の切先側からも鉄鏃がまとまって出土した。また、2本の直刀に挟まれた木棺の中央付近からも刀子が1本出土した。直刀同様、刀子も鉄鏃も切先を西側に向けている。北側の直刀付近からまとまって出土した鉄鏃は、7本と考えられる。鏃身部が残るものが4本、突起部が残るものが7本



- 1. 白色粘土 暗褐色土粒を含む
- 2. 白色粘土
- 3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 4. 褐色土 ロームブロックを多く含む
- 5. 暗褐色土 ロームブロックを若干含む、白色粘土粒を若干含む
- 6. 褐色土 ロームブロックを多く含む、白色粘土粒を若干含む

第10図 2号墳埋葬施設



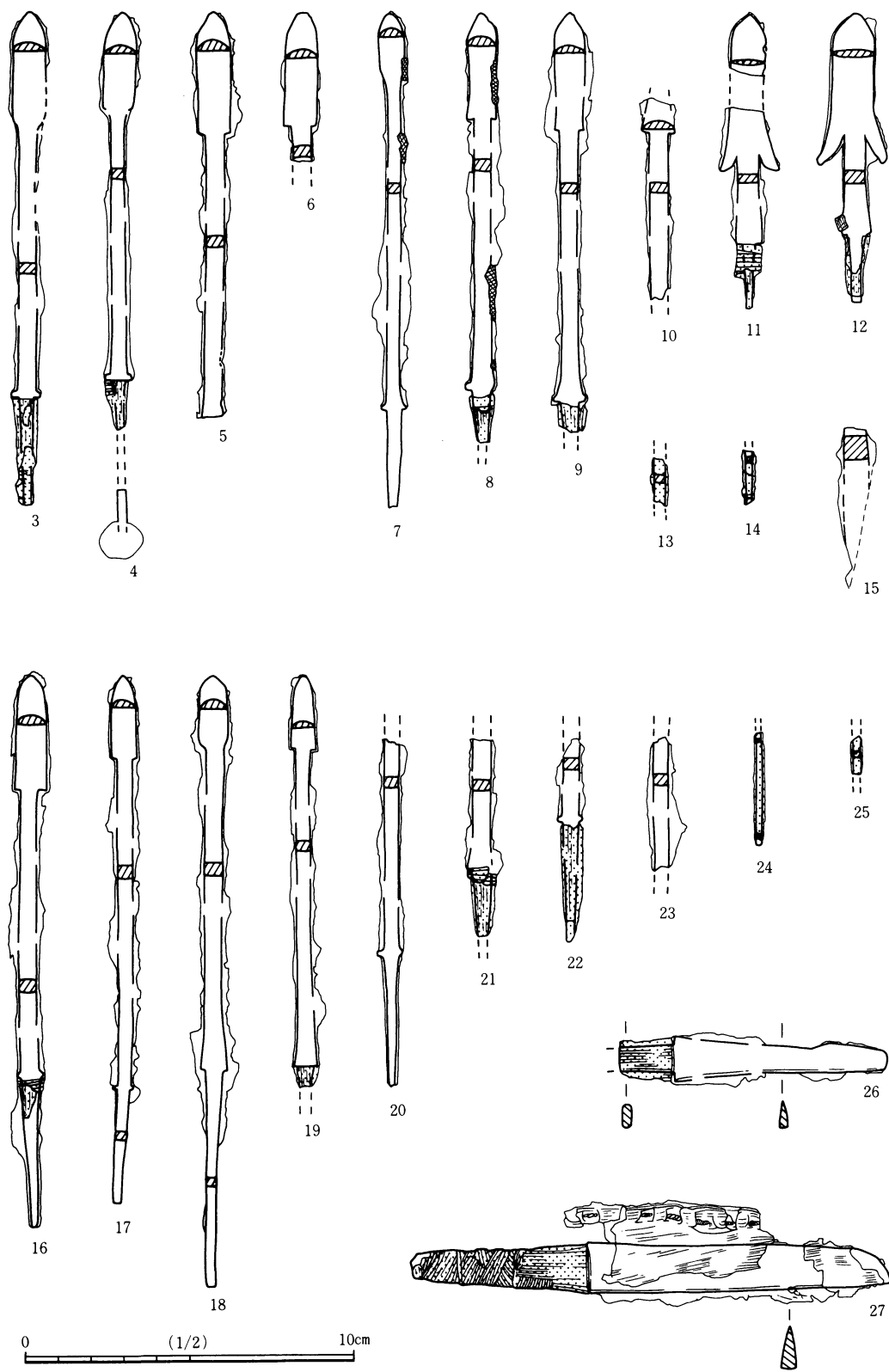
第11図 2号墳埋葬施設鉄製品(1)

ある。南側の直刀付近からまとめて出土した鉄鏃は10本と考えられる。直刀などの切先の方
 向から被葬者の頭位は東側と推測される。鉄鏃
 のうち欠失しているものもあるが、副葬品の出
 土状況は整然としており、また、埋葬施設の検
 出状況からも、盗掘は受けていないと考えられ
 る。

(4) 埋葬施設の出土遺物 (第11・12図、図版23)

埋葬施設から出土した遺物は、直刀2振、刀
 子2本、鉄鏃22点、不明鉄製品1点である。1
 は鉄製の直刀で、木棺の北側から出土した。鉄
 製の鐔と鍔がつく。関は刃の側にあり、緩やか
 な弧を描いて茎に移行する。茎は茎尻側の目釘
 孔付近でやや太くなり、茎尻の刃側を切り込ん
 でいる。目釘孔を2孔もつ。茎の一部に柄木が
 残る。なお、刀身の両面の多くに鞘木が付着し
 ている。鐔は無窓である。全長105.4cm、刀身長
 86.2cm、茎長19.2cm、刀身幅(関部)3.5cm、(中
 央部)3.2cm、(切先付近)2.7cm、背厚(関付近)
 0.9cm、(中央部)0.9cm、(切先基部)0.6cm、茎
 厚(中央部背側)0.6cm、(刃側)0.6cm、茎尻厚
 0.6cm、鐔長径9.4cm(内径4.1cm)、鐔短径8.5cm
 (内径2.9cm)、鐔厚(外側)0.5cm、(内側)0.4
 cm、鍔長径4.3cm、鍔短径2.9cm、鍔幅1.6cm、鍔
 厚0.2cmである。

2は1と同様に鉄製装具をもつ直刀で、木棺
 の南側から出土した。関は刃の側にあり、ほぼ
 直角に切り込まれている。茎は茎尻に向かって
 次第に細くなり、茎尻に隅切りが見られる。目
 釘孔を2孔もつ。茎尻から鍔内にかけて、柄木
 が部分的に残っている。刀身に部分的に鞘木が
 付着している。鐔は無窓である。全長81.6cm、
 刀身長67.3cm、茎長14.3cm、刀身幅(関部)2.9



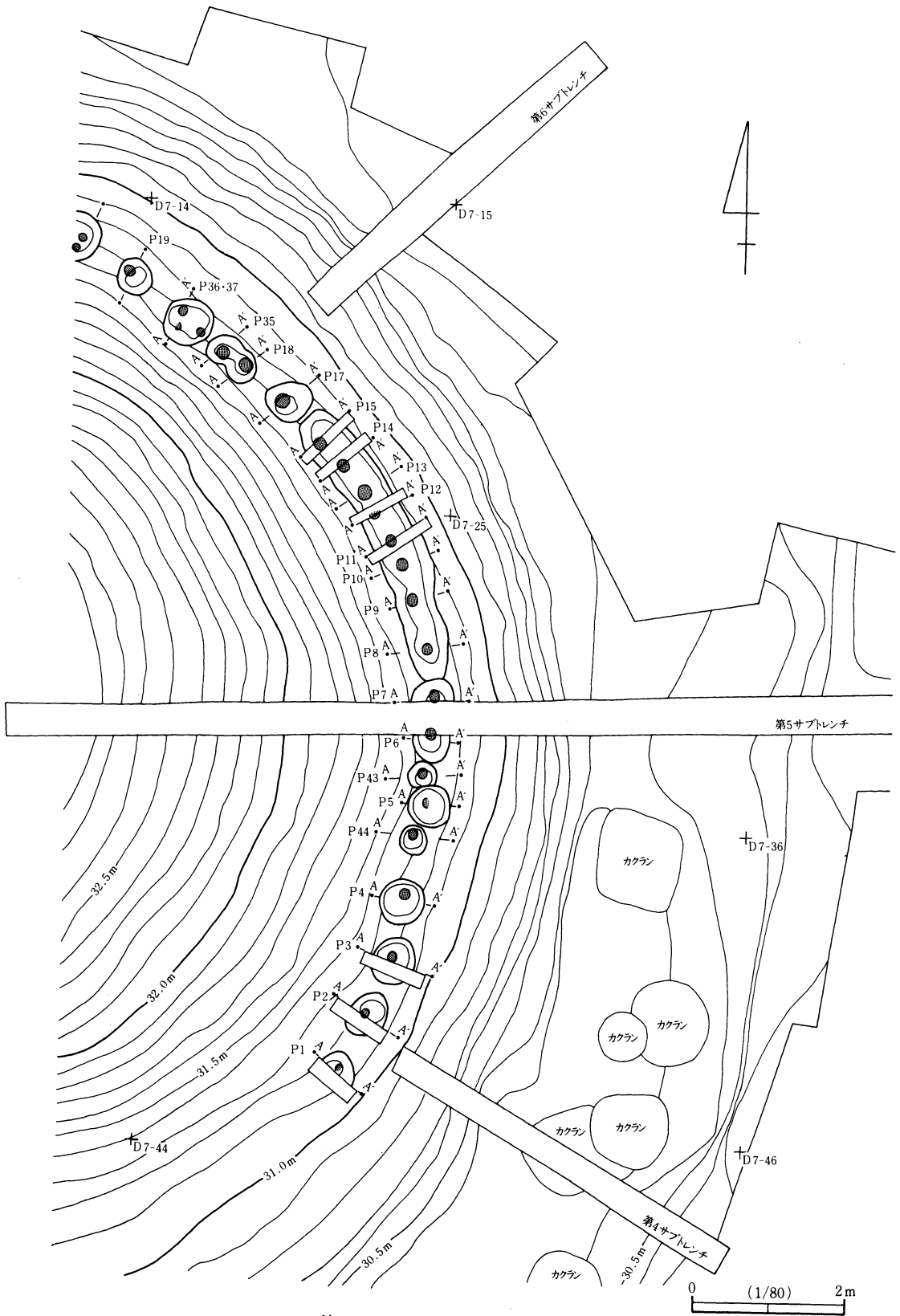
第12图 2号墳埋葬施設鉄製品(2)

No	計測部位 (cm)		身 部				棒 状 部					茎 部		現 在 重 量 (g)	備 考
	身の形態	全 長	長さ	逆刺 の 長さ	最大幅	厚さ	長さ	中央 付近 幅	下端 の幅	突起物 の長さ	厚さ	長さ	上端の 径・幅		
3	剣 身	14.8±	3.4±	-	1.0±	0.3±	8.3±	0.6±	0.9±	0.1±	0.35	3.1±	0.4±	不明	2に錆着
4	剣 身	12.77+	3.22	-	1.01	0.3±	7.90	0.63	0.88	0.15	0.35	1.65+	0.4±	不明	2に錆着
5	剣 身	12.31+	3.75	-	1.07	0.38	8.56+	0.57	-	-	0.38	欠損	-	14.63	
6	剣 身	4.58+	3.45	-	0.96	0.25	1.13+	-	-	-	0.39	欠損	-	3.83	
7	鑿 矢	14.86	1.95	-	0.81	0.24	9.97	0.51	0.76	0.1±	0.28	2.94	0.50	26.00	8と錆着
8	剣 身	12.96+	3.43	0.05	0.96	0.30	7.96	0.52	0.91	0.15	0.31	1.56+	0.56		7と錆着
9	剣 身	12.70+	3.56	-	0.91	0.22	8.20	0.52	1.03	0.2±	0.33	0.9+	0.5±	11.76	
10	不 明	6.14+	1.13+	-	1.00	0.34	5.01+	0.56	-	-	0.31	欠損	-	4.54	
11	腸袂三角	9.0±	4.8±	0.5±	1.86	0.2±	2.7±	0.7±	0.7±	-	0.3±	2.0±	不 明	不明	2に錆着
12	腸袂三角	8.91	4.76	0.93	2.15	0.27	3.03	0.64	0.9±	-	0.4±	2.05	0.55	不明	2に錆着
13	不 明	1.43+	欠損	-	-	-	欠損	-	-	-	-	1.43+	-	0.22	
14	不 明	1.63+	欠損	-	-	-	欠損	-	-	-	-	1.63+	0.2±	0.29	
16	剣 身	16.29	3.35	-	0.90	0.34	8.52	0.49	0.82	0.15	0.35	4.42	0.55	16.39	
17	剣 身	15.62	2.60	-	0.78	0.26	9.63	0.50	不明	0.1±	0.33	3.39	0.40	30.68	18と錆着
18	剣 身	18.0±	2.1±	-	0.93	0.3±	9.5±	0.58	不明	-	0.39	6.4±	0.5±		17と錆着
19	剣 身	12.18+	2.19	-	0.82	0.21	9.38	0.42	不明	-	0.30	0.48+	不 明	8.33	
20	不 明	10.31+	欠損	-	-	-	6.41+	0.42	0.69	0.1±	0.31	3.90	0.39	7.36	
21	不 明	5.89+	欠損	-	-	-	3.80+	0.42	不明	不明	0.36	2.09+	0.58	5.76	
22	不 明	6.02+	欠損	-	-	-	2.47+	0.46	0.76	0.1±	0.34	3.55	0.46	4.17	
23	不 明	4.12+	欠損	-	-	-	4.12+	0.52	-	-	0.36	欠損	-	3.51	
24	不 明	3.38+	欠損	-	-	-	欠損	-	-	-	-	3.38+	-	0.56	
25	不 明	1.12+	欠損	-	-	-	欠損	-	-	-	-	1.12+	-	0.30	

第2表 2号墳鉄鏃計測表

cm、(中央部) 3.2cm、(切先付近) 2.4cm、背厚(関付近) 0.8cm、(中央部) 0.8cm、(切先付近) 0.5cm、茎厚(中央部背側) 0.5cm、(刃側) 0.5cm、茎尻厚0.3cm、鏃長径7.6cm(内径3.4cm)、鏃短径-(内径2.3cm)、鏃長径3.7cm(内径3.5cm)、鏃短径2.5cm(内径2.2cm)、鏃幅1.9cm、鏃厚0.2cmである。

鉄鏃22点のうち鏃身の数は14点あり、いずれも長頸鏃である。鏃身の形態には剣身形が10本、鑿矢形1本、腸袂三角形2本、不明1本である。茎部が残っている大半(3、4、8、9、11、12、13、14、16、19、21、22、24、25)に、植物繊維による巻きが良好に残る。7、8、12には、布と思われる繊維質が付着している。15は欠損している上に2の直刀と錆着している。断面形が正方形の棒状鉄製品で、全体形は不明である。3~12の鉄鏃は2の直刀に接して出土した。16~24の鉄鏃は1の直刀に接して出土した。13、14、25は埋葬施設内の一括資料である。

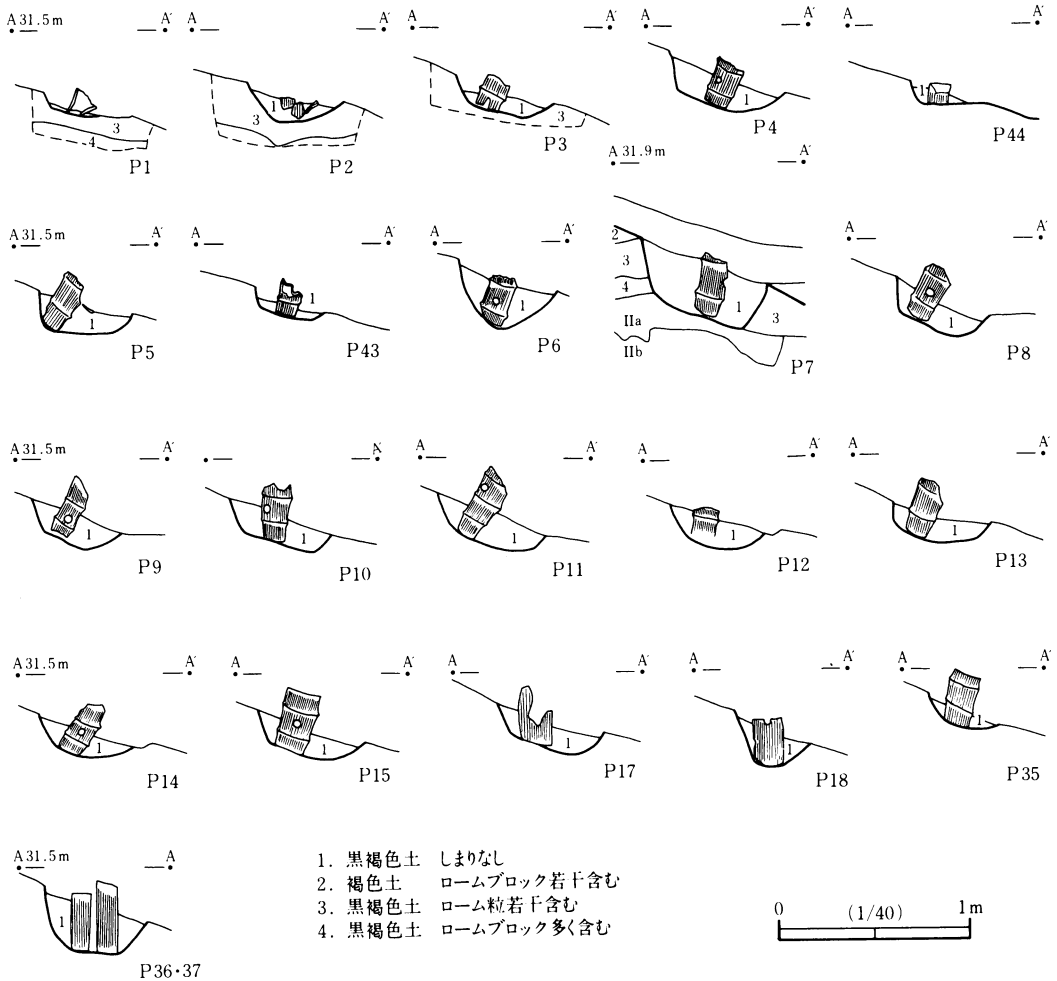


第13図 2号墳丘裾部埴輪列(1)

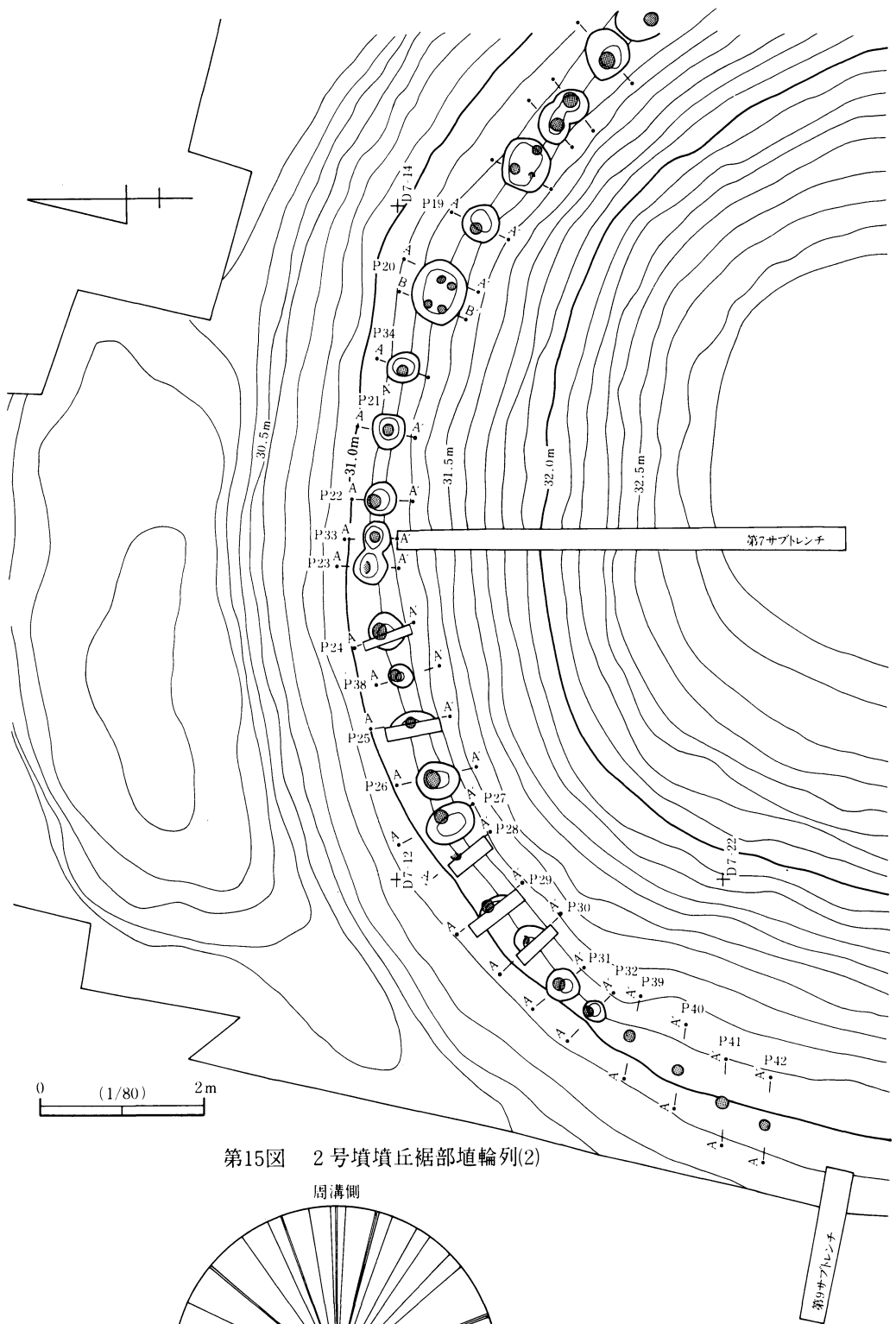
24は使い込まれた両関の刀子で、木棺のほぼ中央から出土した。茎尻を欠くが、木質が付着している。全長8.2+cm、刃部長6.5cm、茎長1.7+cm、刃幅（関部）1.4cm、（中央部）0.8cm、（切先付近）0.6cm、茎幅（中央部）0.8cm、重量11.83gである。25も両関の刀子で、1の直刀に接して出土した。刃部には鞘が部分的に残っている。両面に動物の皮が付着し、刃側を撚り紐で綴じている。ただし、背側については残っておらず、2枚の皮を両側で綴じたものか、1枚の皮を背側で折り刃側で綴じていたものかは不明である。また、茎部には綾に巻いた樹皮が良好に残り、その上に刃側では柄木の痕跡が付着している。幾重にも綾に巻いている樹皮は、柄木を装着するためのすべり止めと考えられる。全長14.7cm、刃身長9.2cm、茎長5.5cm、刃幅（関部）1.6cm、（中央部）1.4cm、（切先付近）1.0cm、茎幅（茎尻）0.8cm、重量35.32gを測る。

(5) 墳丘裾部の埴輪列（第13～17図、図版3～8）

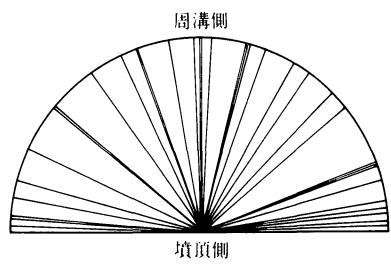
東側の裾部を中心に、円弧を描いてほぼ半周の範囲で一列に42個体の埴輪が検出された。埴



第14図 2号墳丘裾部埴輪列断面図(1)



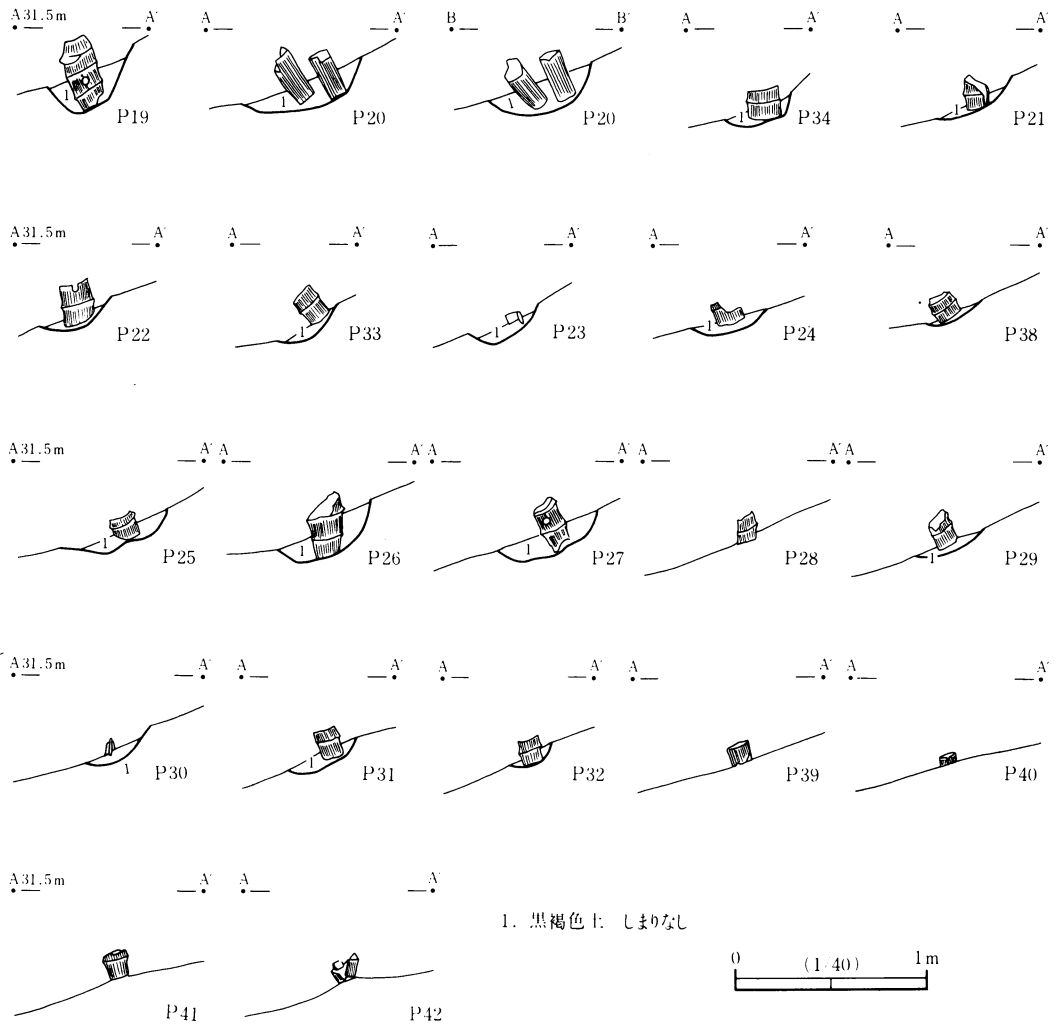
第15図 2号墳墳丘裾部埴輪列(2)



第16図 2号墳墳丘裾部埴輪列 第2段透孔穿孔方向グラフ

輪列周辺にテラス状の平坦面は全く認められない。表土を除去した後で墳丘斜面に壺掘り状のピットを検出した。埴輪を据えた際の掘込み穴と捉えることができる。盛土層から旧表土層をやや掘込んだもので、径40cm～60cmほど、深さは良好なもので20cmほどの丸底状のピットである。覆土は黒褐色土を主体としたもので、しまりは弱い。また、埴輪の間隔が狭い箇所では、布掘り状にピットが連なって検出されたものもある。

埴輪の掘込み穴は、北側ほど良好であり、東側や西側ほど不明確になる。最も東側のP1では、若干の掘込みを確認したにとどまり、西側のP28とP39～P42では掘込みは検出できなかった。埴輪の底部が据えられた標高はいずれも31.4mに一定している。検出された埴輪の掘込み穴の差異は、古墳が造られた当時の埴輪の埋込みの深さの差異ではなく、墳丘盛土の残存状況の差異によるものと考えられる。つまり、埴輪の掘込み穴が不明確であった埴輪列の東端と西端の状況は、埴輪の埋込みが浅かったからではなく、墳丘の盛土が北側に比べて多く流出し



第17図 2号墳墳丘裾部埴輪列断面図(2)

たことによる。埴輪列が検出されなかった墳丘の南側にも、周溝内から大量の埴輪片が出土したことから、さらに埴輪列が伸びていた可能性は高いと考えられる。出土した埴輪列の大半の埴輪は、周溝側にやや傾いた状態で検出された。恐らく、古墳に立てられた当時から傾いていたものではなく、墳丘の盛土が流れたために、やや外側に傾いたものと考えられる。

検出された42個体の埴輪の内訳は、円筒埴輪31、人物埴輪9、馬形埴輪2である。2本の円筒埴輪を間に挟むものの、形象埴輪は埴輪列の北側に連続して検出された。埴輪の立つ間隔は埴輪の中心間で、形象埴輪間で60cm～100cmほど、円筒埴輪間で40cm～60cmほどである。形象埴輪間と円筒埴輪間とに違いが認められるが、それぞれの埴輪間においては一定の間隔で立てられている。ただし、埴輪列東端の5本の円筒埴輪の間隔については、80cmほどとほかの部分での円筒埴輪の間隔よりも長い。これらの円筒埴輪の遺存状況が比較的明瞭でなかったことから、これらの埴輪の間に1本ずつ別の埴輪が立てられていた可能性も否定できないが、この部分については埴輪の間隔を広く設定していた可能性が高い。埴輪列の中心を北側の形象埴輪群と仮定すると、この埴輪の間隔が広い部分は、検出された埴輪列のうち、最も中心から離れた埴輪である。形象埴輪列周辺は密に円筒埴輪を据え、そのほかについてはまばらに円筒埴輪を据えたとも考えられる。

次に埴輪の透孔の向きについて触れたい。第16図は、円筒埴輪と人物埴輪のうち第2段の透孔が残っている40個体について調べたものである。これは、周溝側を向いた第2段の透孔の向きについて、各埴輪から墳丘の中心を望んだ線を基準に左右の振れを表したものである。半円形の中心点から上に引かれた線は、第2段の透孔の一つを周溝側正面に向けていた資料を表している。また、半円形の中心から左右に横に引かれた線は第2段の透孔を真横に向けていた資料を表している。第2段の透孔と第3段の透孔はほぼ90°ずつずれて一対ずつ設けられていることから、後者については第3段の透孔の一つを周溝側正面に向けていたものである。この図から第2段ないし第3段の透孔の一つを周溝側正面に向けて設置した例が多かった傾向が窺える。

(6) 墳頂部の埴輪列 (第19図、図版9)

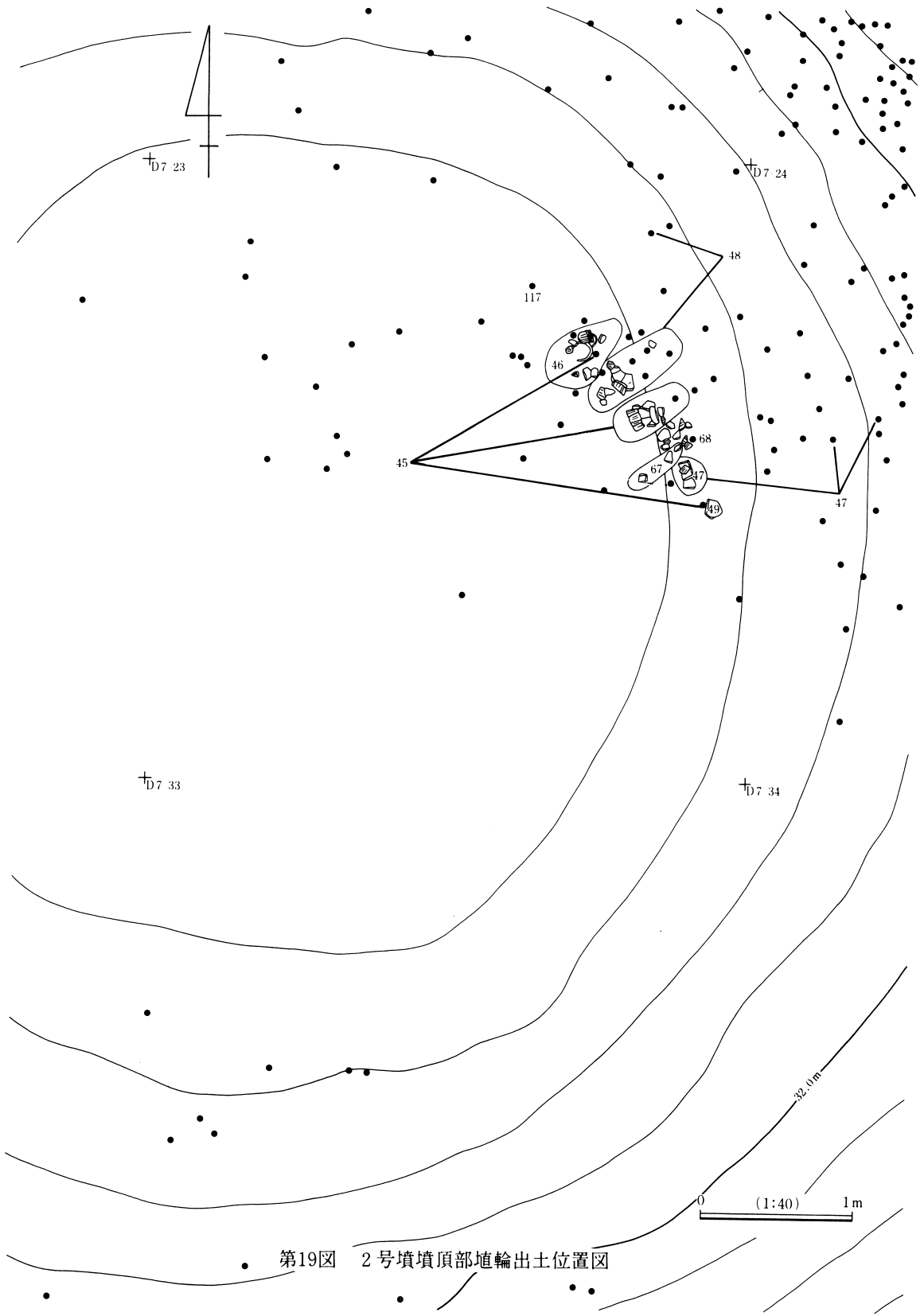
墳頂部の北東側で、埴輪7個体が基部が立った状態、又は倒れた状態で並んで出土した。このうち45～48の4個体については出土状況からほぼ原位置を動いていないものと捉えられる。これらの埴輪が立つ間隔は埴輪の中心間で、およそ40cmほどと推測され、北側の墳丘裾で検出された埴輪列の間隔よりも若干短く立てられていたと考えられる。なお、基部が据えられている高さは、調査前の表土面から35cmほど下である。埴輪を据えた際の掘込み穴などの痕跡は認められず、埴輪の設置方法については不明である。また、墳頂部の西側には大きな木が調査前まで存在し、北東側より標高が低かったので、多くの埴輪が墳頂部から流れている可能性がある。

(7) 遺物出土状況 (第18~27図)

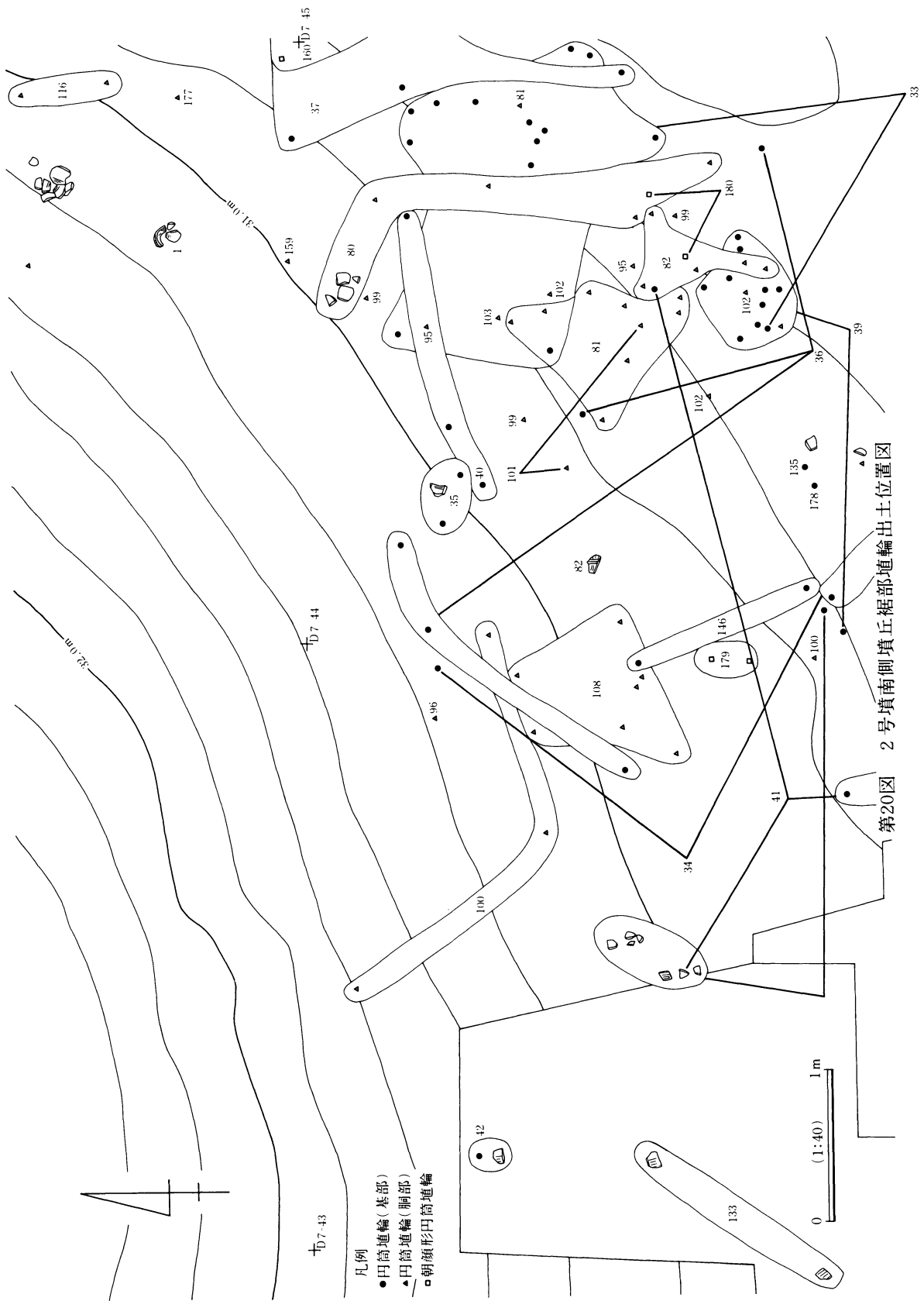
2号墳に伴う遺物は、埋葬施設の副葬品と古墳全面から出土した埴輪がその大半である。土器は、南側の墳丘裾部周辺の表土中から土師器杯の破片1点(第9図13)と須恵器杯の破片1点(第9図14)が出土しているのみである。また、古墳全体から雲母片岩の小片も多く出土しており、特に墳頂部から西側墳丘にかけて集中する傾向が認められる。ただし、総量が1,955g



第18図 2号墳埴輪出土位置全体図

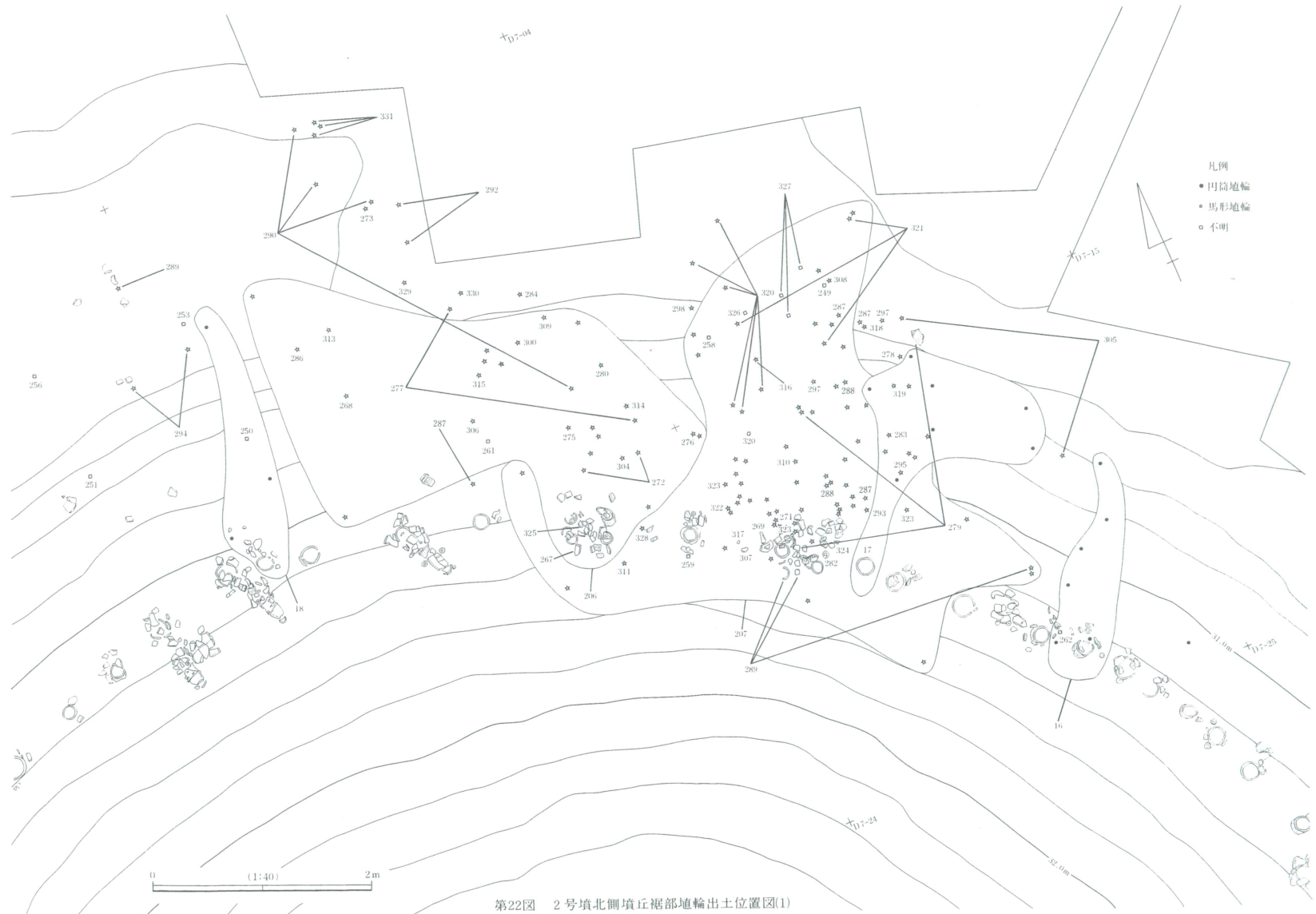


第19図 2号墳墳頂部埴輪出土位置図



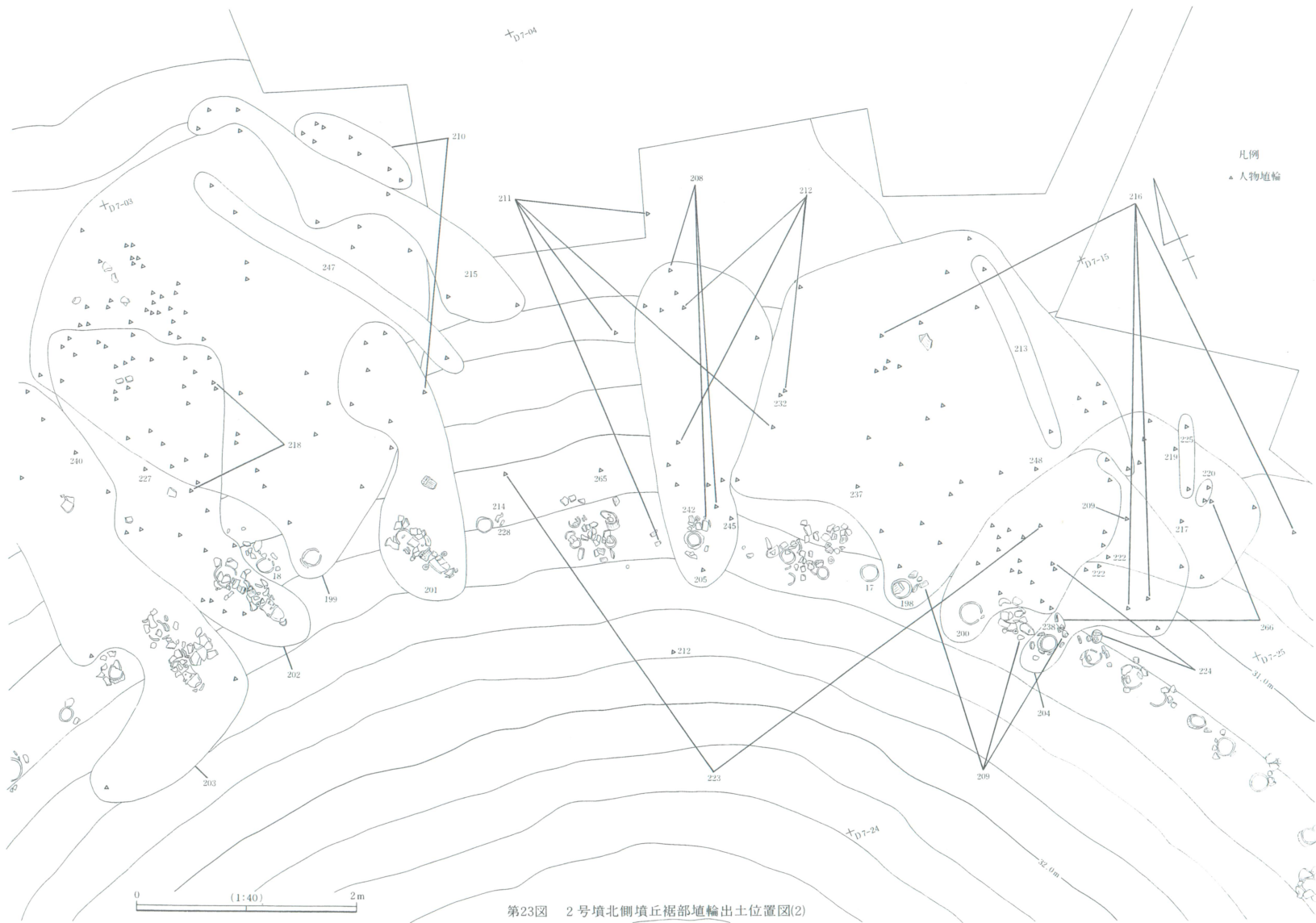


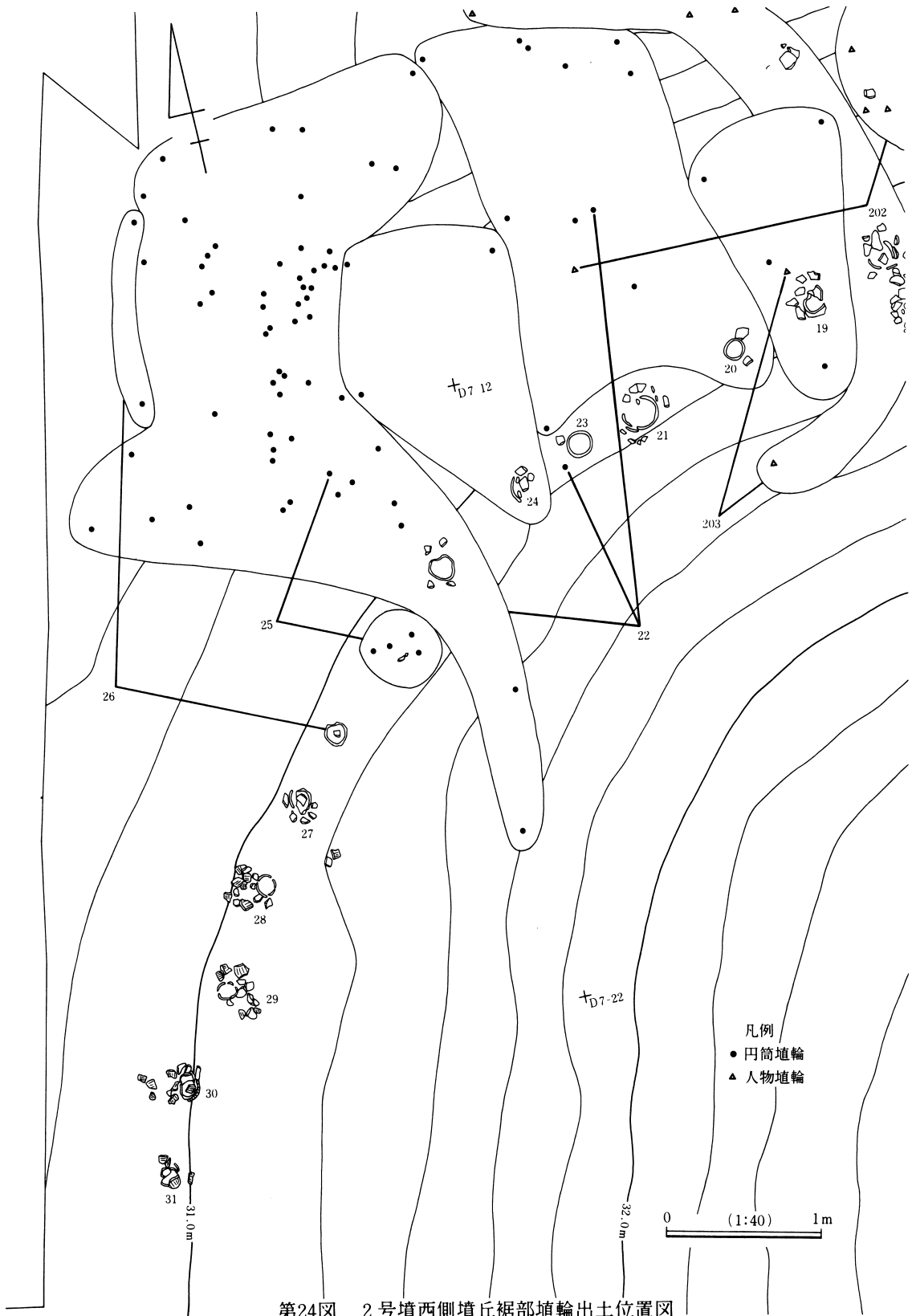
第21図 2号墳東側墳丘裾部埴輪出土位置図



凡例
 ● 陶輪
 ■ 馬形陶輪
 ○ 不明

第22図 2号墳北側墳丘裾部地輪出土位置図(1)





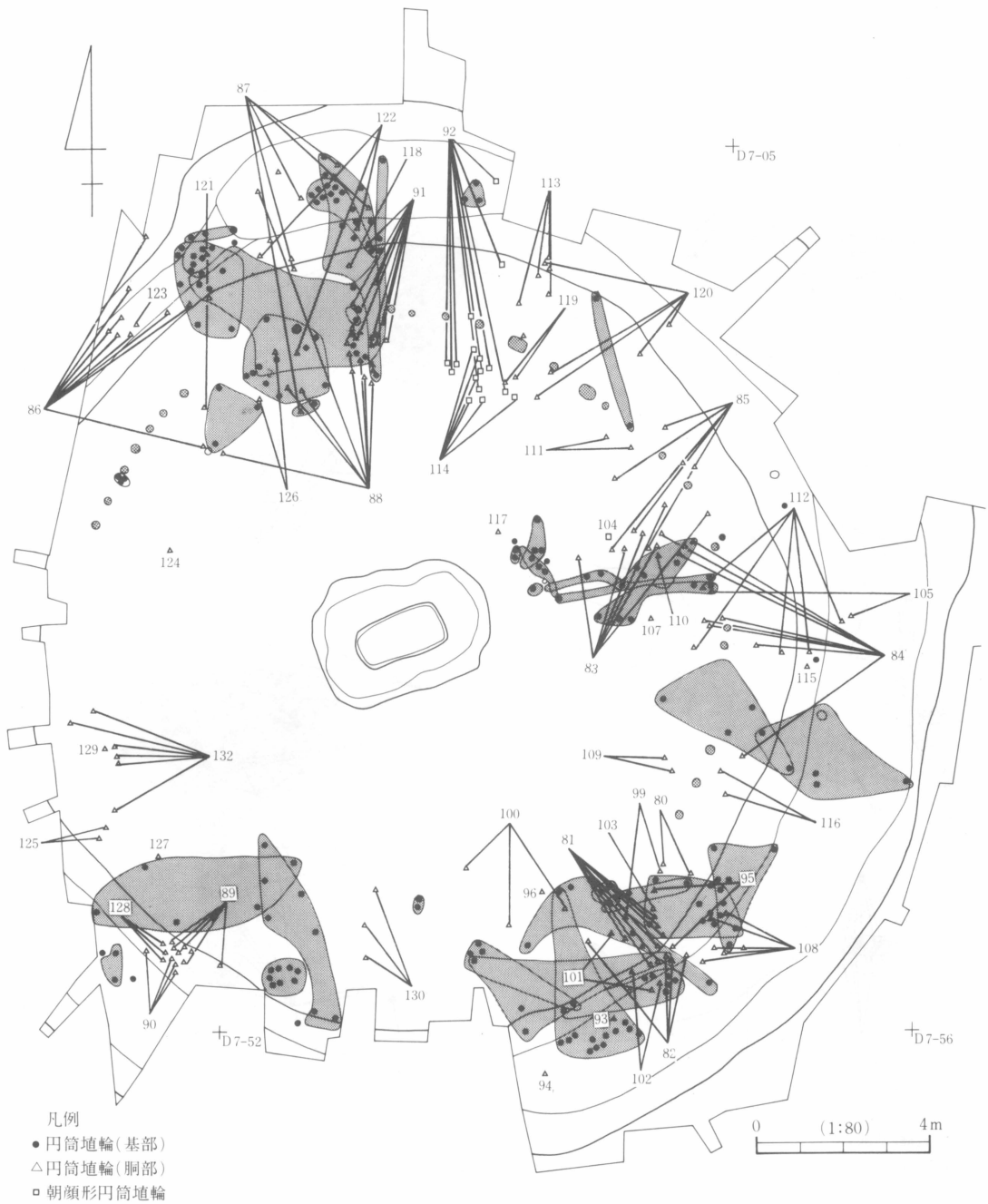
第24図 2号墳西側墳丘裾部埴輪出土位置図

ほどで、それに伴う遺構も認められなかったことから、古墳に伴うものではないと考えられる。

埴輪は、墳頂部、墳丘斜面、裾部、周溝内から出土した。特に墳丘裾部から周溝内の墳丘側への立上がり部分に集中して出土している。この状況は裾部において埴輪列が検出された墳丘の北側だけでなく、埴輪列が検出されていない墳丘の南側においても同様である。ただし、裾部の西側については、他の裾部に比べ埴輪の出土量は極端に少ない。後世の攪乱による影響と考えられる。墳頂部は、北東側で検出された埴輪列周辺でやや多くの埴輪が出土した。北東側を除く墳頂部の埴輪の出土は、散漫に小片が出土した程度である。墳丘斜面については、墳頂部付近はやや散漫な出土であるが、裾部に近づくほど埴輪の出土量が多い。ただし、北東斜面については、墳頂部付近から裾部にかけて密に埴輪が出土している。

北側の墳丘裾部は、標高32.0mの等高線付近から周溝の墳丘側への立上がり部分にかけて多くの埴輪が密に出土した。発見された裾部の埴輪列よりも墳頂側にかなり寄った範囲からも密に埴輪が出土している。南側の墳丘裾部では、墳丘の標高31.4mの等高線付近から周溝内の墳丘立上がり部分に集中して出土した。周溝内においては、墳丘側への立上がり部分で出土するものが圧倒的に多く、立上がり部分から離れるほど、埴輪の出土量は少ない。周溝の外側への立上がり部分付近では、埴輪の出土は散漫で、出土量はごく少量である。以上の出土状況は、後世の攪乱の影響は少なく、樹立されていた埴輪が転落した状況を示している。

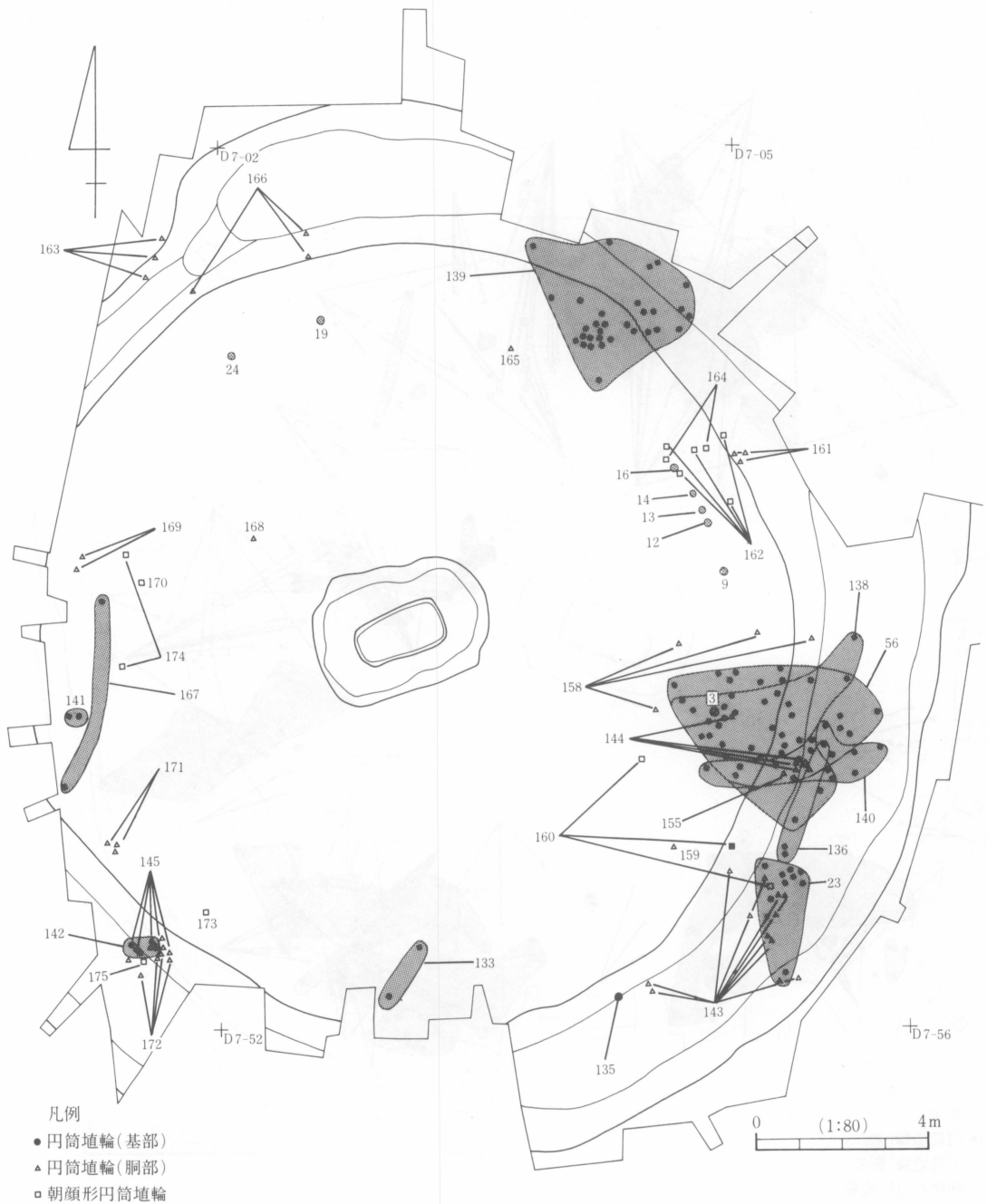
次に埴輪片の接合関係をふまえて、墳頂部と墳丘南側の裾部、墳丘北側の裾部の埴輪の出土状況について触れる。第19図は、墳頂部の埴輪の出土と接合関係を示したものである。埴輪列のものについては、基部の資料ごとに接合関係がまとまる傾向にある。また、墳頂部の資料と斜面の資料が接合しているものがあり、墳頂部の埴輪が斜面へ流れたことがわかる。第20図は墳丘南側の裾部の状況である。35や42は標高31.0m付近にまとまった分布範囲を持つ基部資料である。37や33などは標高31.0m付近から周溝にかけて、まとまった分布範囲を持つ基部資料である。墳丘斜面に直交する方向に長軸を持った、周溝側にやや幅広い長楕円形の分布範囲を示すものが多い。これらの資料は、標高31.0m付近の墳丘裾に据えられていた可能性があるのではなからうか。第21図は墳丘東側の埴輪列資料の接合関係を示したものである。埴輪列の各埴輪が、墳丘斜面に直交する方向に長軸を持った長楕円形の分布範囲を持ち、埴輪列から周溝側の資料と接合している。第22図は墳丘北側の埴輪列のうち、馬形埴輪と円筒埴輪の接合関係を示したものである。206と207の馬形埴輪は、それぞれ径約4mの広い範囲に分布しており、埴輪列より墳頂部側には分布は広がらないようである。第23図は墳丘北側の埴輪列のうち、人物埴輪の接合関係を示したものである。第24図は西側墳丘の埴輪列の接合関係を示したものである。これも同様に、墳丘斜面に直交する方向に長軸を持った長楕円形の分布範囲を持っている。このように、北側の墳丘裾部の埴輪列の各埴輪は一樣の傾向の分布範囲を持っている。埴輪列が見つからない南側の墳丘裾部においても、北側の埴輪列の埴輪と同じ傾向の分布範



第25図 2号墳埴輪(ハケI)出土位置全体図

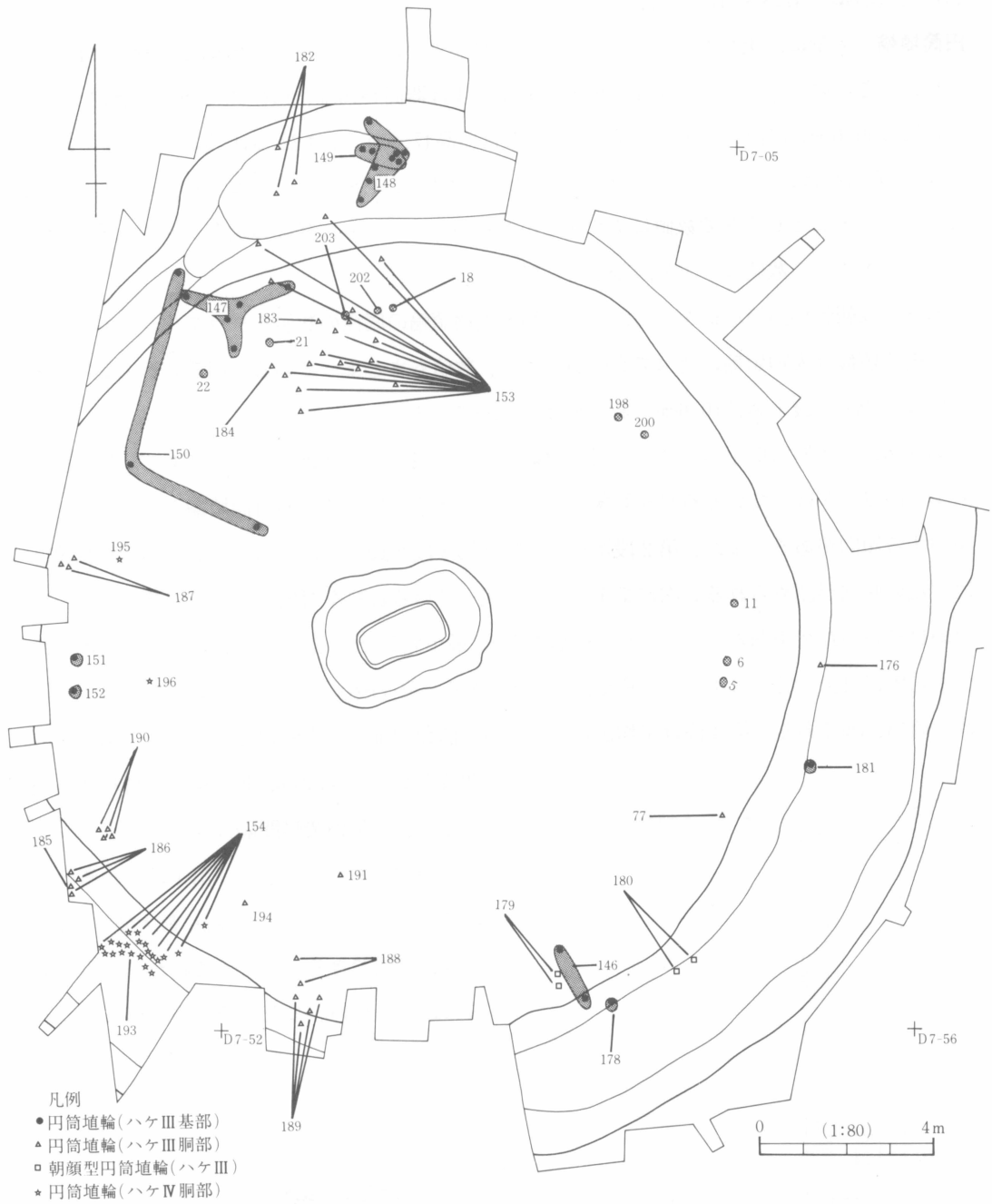
冪を持つ資料が見られる点は重要であろう。

第25図～第27図は、古墳全体の埴輪の接合関係を示した図である。接合資料が多いため、便宜的に3枚に分けて図示した。まとめの項で触れるハケの分類に従っている。なお、第21図～第24図で図示した埴輪列の接合範囲については省略した。墳丘北側の資料が、裾部の埴輪列より



第26図 2号埴輪(ハケII) 出土位置全体図

も埴頂側にも分布範囲が広がっている点が注目される。埴輪列の接合資料が、埴輪列から周溝側に分布している点と対称的である。埴輪列より埴頂側にも分布範囲が広がっている資料は、埴頂部から転落したものと考えられる。第27図の150は埴頂部の西側から転落したものであろうか。また、埴丘の南西側の裾部にも、周溝に沿って基部資料が点在している。



第27図 2号埴輪(ハケⅢ・ハケⅣ) 出土位置全体図

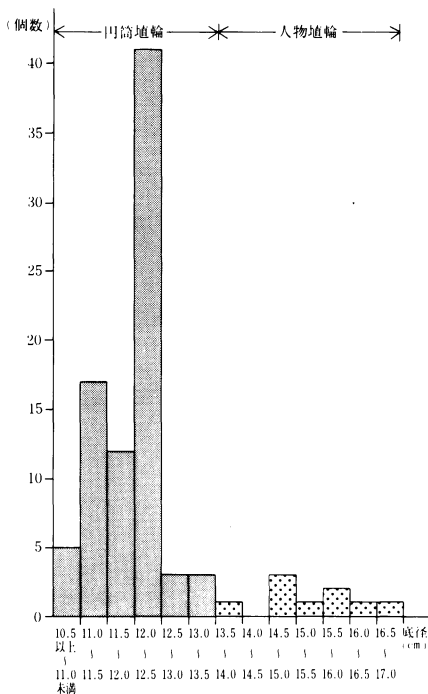
(8)円筒埴輪 (第28～51図、図版24～28)

円筒埴輪 大量に出土したものの、基部から口縁部まで復原できた円筒埴輪は3個体(4、6、22)にすぎない。いずれも3条4段構成である。4は器高48.0cm、口径22.0cm、底径12.0cm、6は器高50.6cm、口径24.8cm、底径11.2cm、22は器高47.8cm、口径22.2cm、底径12.1cmである。底径:口径:器高は、4は1:1.8:4、6は1:2.2:4.5、22は1:1.8:4、3個体の平均は1:1.9:4.2となる。4・22と6の間で数値にやや開きがあるが、いずれも口縁部の遺存が悪く、資料自体の歪みも大きく、数値は多少の誤差を含んでいる。

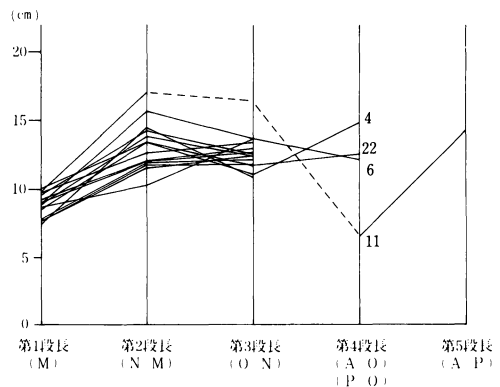
第28図は朝顔形円筒埴輪を含めた円筒埴輪と人物埴輪の底径の数値をグラフ化したものである。円筒埴輪は人物埴輪に比べて底径が小さく、数値もまとまっている。円筒埴輪の底径の平均値は11.9cm、最小値は10.6cm、最大値は13.4cmである。

第29図は朝顔形円筒埴輪を含めた円筒埴輪の突帯間隔をグラフ化したものである。第1段から第3段以上が残っている資料を対象としたものである。11の朝顔形円筒埴輪を除き、数値が集中する傾向がある。また、第2段が短い資料は第3段が長く、逆に第2段が長い資料は第3段が短い傾向が認められる。次に第1段以上が残っている資料を対象とすると、朝顔形円筒埴輪の11を除いた突帯間隔は第1段が平均値8.7cm、最小値5.7cm、最大値11.7cmである。第2段は平均値13.1cm、最小値10.3cm、最大値15.7cmである。第3段は平均値12.4cm、最小値10.9cm、最大値13.7cmである。第4段は平均値13.7cm、最小値12.2cm、最大値14.9cmである。第1段の

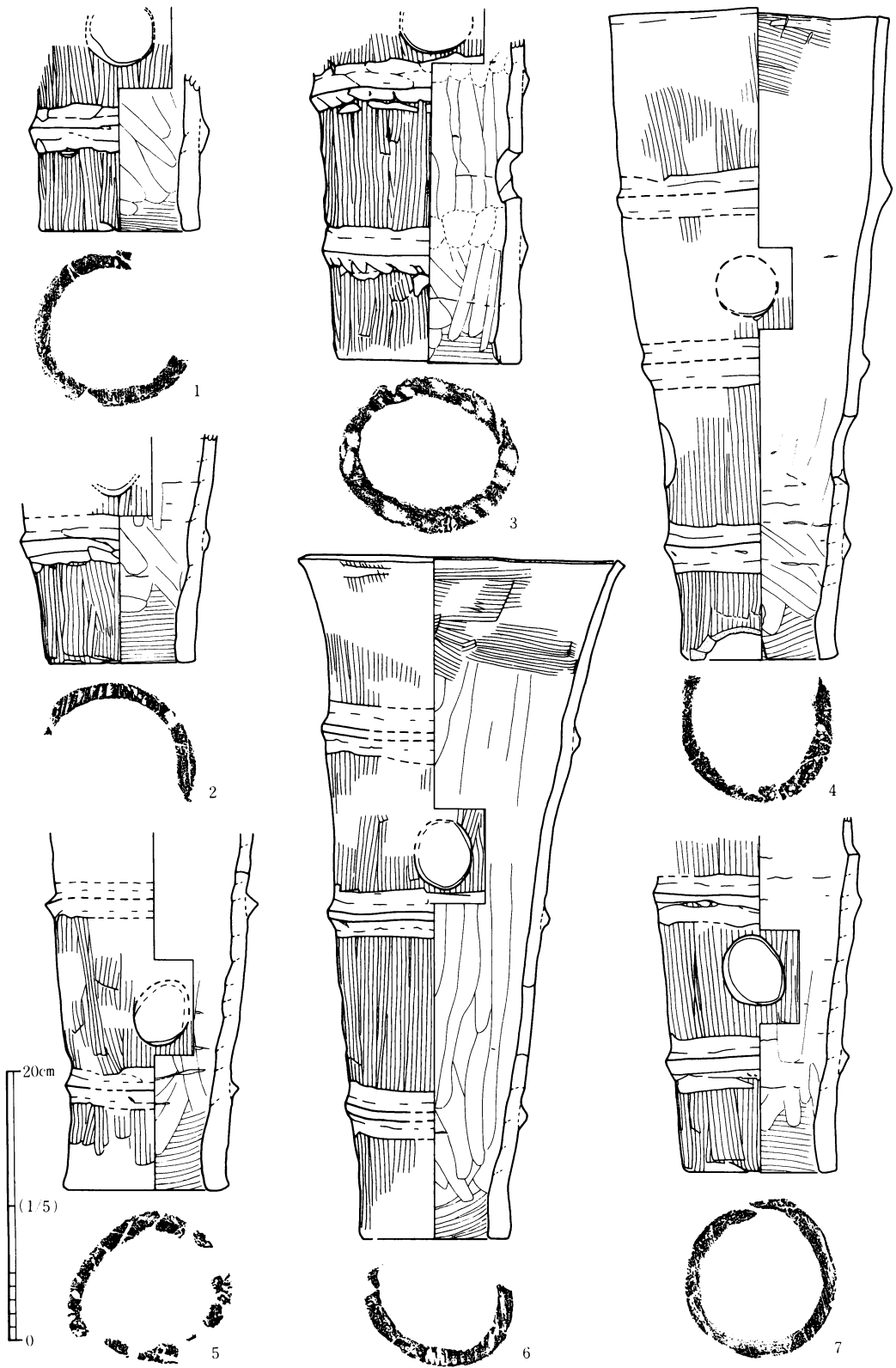
計測資料から第4段の計測資料へと資料数が減少するが、上部の突帯間隔ほどバラツキが少なくなる傾向がある。第2段-第1段の数値は、平均値+4.3cm、最小値+1.6cm、最大値+7.1cmであり、確認できるすべての資料が第1段が第2段に比べて短い。また、第1段は第2段以上



第28図 円筒埴輪・人物埴輪の底径



第29図 円筒埴輪の突帯間隔



第30图 2号填凹筒埴輪(1)

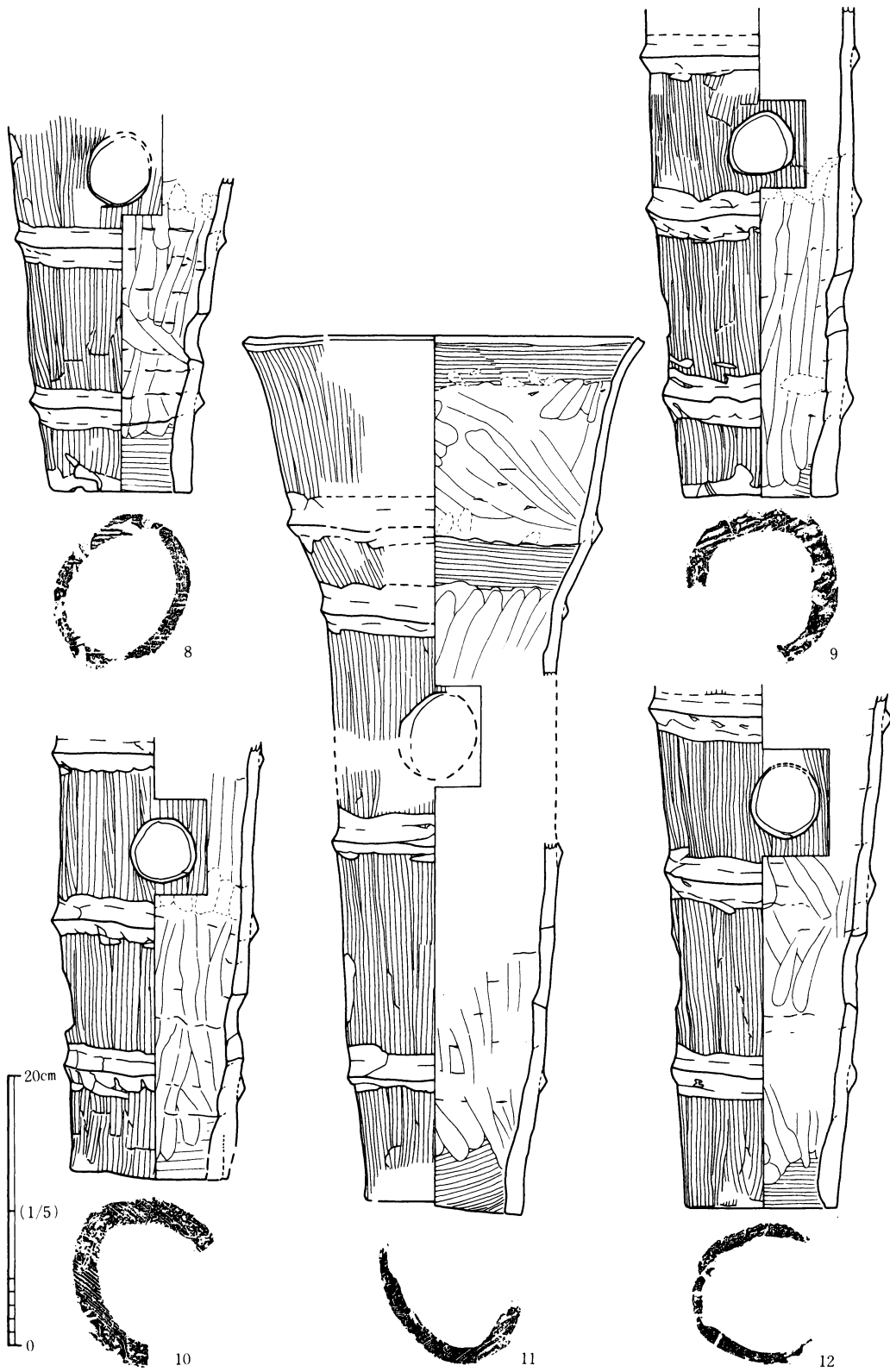
のすべての突帯間隔に比べても短い。この点は本古墳の円筒埴輪の特徴である。第3段—第2段は平均値-1.4cm、最小値-3.6cm、最大値+3.4cmであり、第2段と第3段の間隔はほぼ同じ、ないし第2段がやや長い。第4段—第3段は平均値+1.7cm、最小値-1.5cm、最大値+3.8cmであり、3点だけの資料ではあるが、第4段が第3段より長い資料が2点あることは、本古墳の円筒埴輪の特徴と言える。

透孔は、第2段と第3段にほぼ90度ずつずれて一対ずつ設けられている。透孔の形はすべて楕円形を呈しているが、タテナガ及びヨコナガの楕円形の透孔をもつ埴輪が存在している点も本古墳の円筒埴輪の特徴である。突帯の断面形は三角形又はくずれた台形である。突帯の下側のナデつけの不十分な資料が多い。

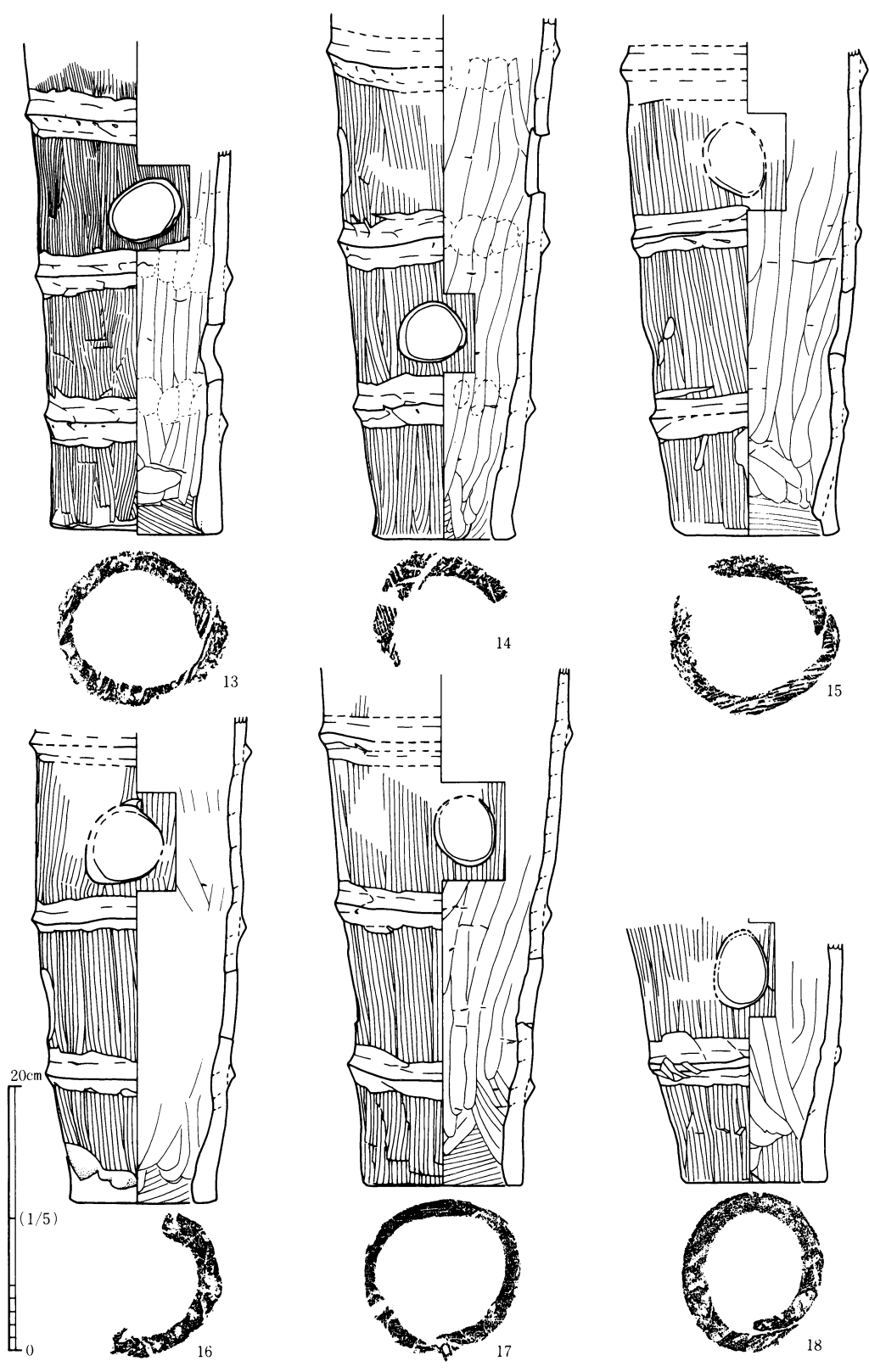
口縁部の形態は、大半の資料が小破片のため全体像をつかむことができる資料は少ないが、4のような直線的に緩く外側に開く形態、22のような口唇部直下で大きく外側に屈曲する形態、さらに6や91のように第4段の上半分部分から外側に屈曲する形態がある。

基部は、一枚の粘土帯を巻いて成形している。133と152を除くすべての基部資料で粘土帯の内面に板目の圧痕が認められた。板の上で粘土帯を成形したことによるものである。133と152も粘土帯の外面に板目の圧痕が認められ、基本的には同じ製作方法である。底面にも板目の圧痕があり、円筒埴輪の製作が基本的に板の上で行われたと推測される。また、ナデ調整により確認できない資料もあるが、底面には離れ砂と思われる荒砂が付着しているものや、篠のような圧痕も認められた。板の上での成形と関連するものであろう。粘土帯より上部については、複数回に分けて、粘土紐を巻き上げている。外面の調整はタテハケの一次調整のみであり、下から上へとハケを施している。内面の整形は下から上へのユビナデ調整で、口縁部付近のみにヨコハケが施されている。

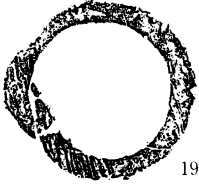
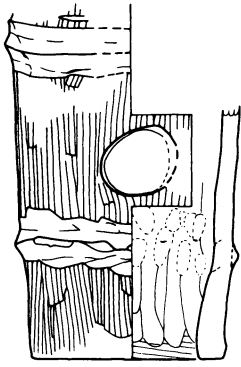
円筒埴輪の形態や製作方法は「下総型埴輪」として捉えられる一群である。図示した円筒埴輪の計測値や基本的な整形・調整の説明については、円筒埴輪表にまとめた。表に書き込むことができなかった点について若干補足する。3は第1突帯付近と第2突帯付近の内面に、突帯のナデつけの際に内面にあてた指押さえの痕跡が明瞭に残されていた。このほかにも8や9など多くの資料で同様の指押さえの痕跡が確認された。5は突帯の下側がほとんどナデつけられてなく、外面のタテハケが底面から2cmほど上位から始まっている。底面付近にはタテハケが施されていない。こうした例は8、21、44、57、74、148などにも見られ、突帯のナデつけが十分になされていないものや、底部の歪みが比較的大きいものが多い。そのうち74はタテハケが施されていない底面付近の外面に、粘土帯の合わせ目の際の指押さえの痕跡が明瞭に残されている。14は、基部の粘土帯の板目圧痕が斜方向に付着している。大半の粘土帯の板目圧痕がほぼ横方向に付着しているのとは顕著に異なっており、このほかにも16、24、44、56、57、61、135、137、140が顕著に斜方向の板目圧痕が認められた。また、18は唯一、縦方向の板目圧痕が認め



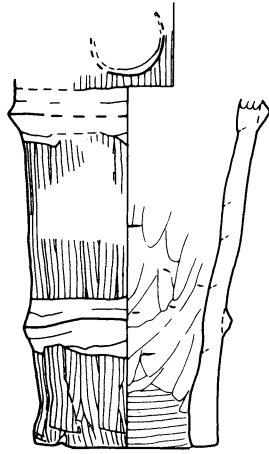
第31图 2号埴田筒植輪(2)



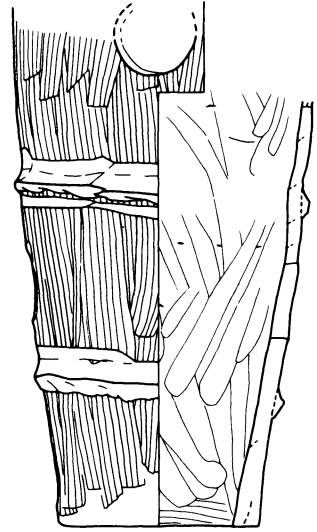
第32図 2号墳円筒埴輪(3)



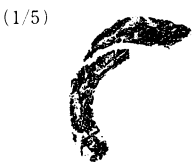
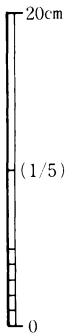
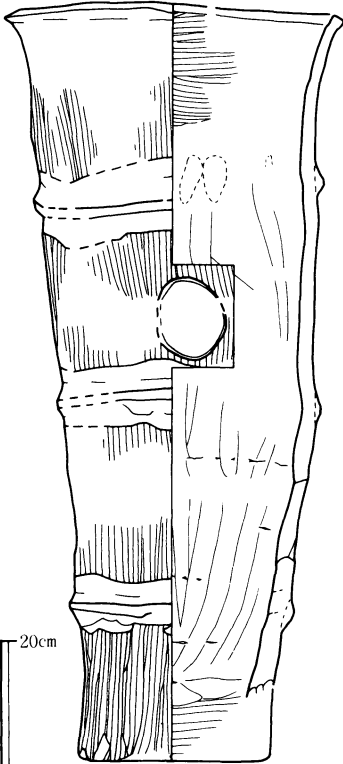
19



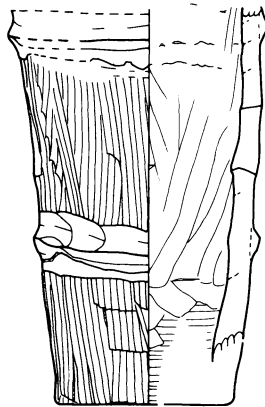
20



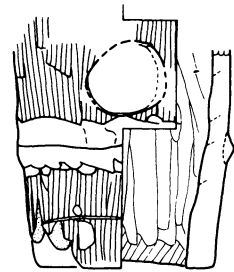
21



22

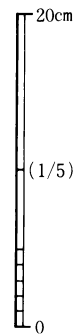
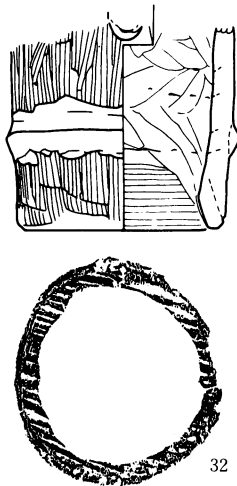
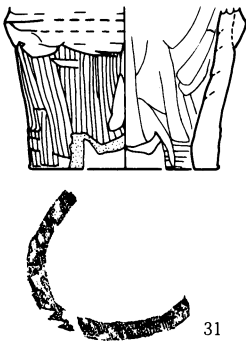
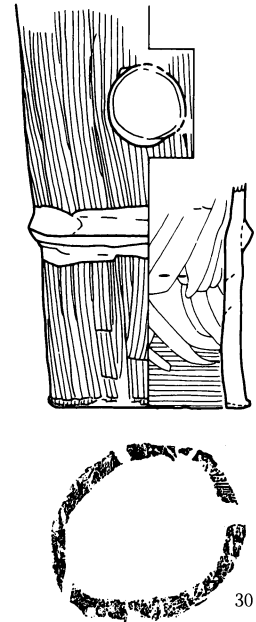
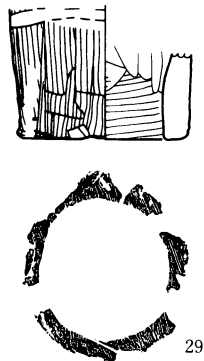
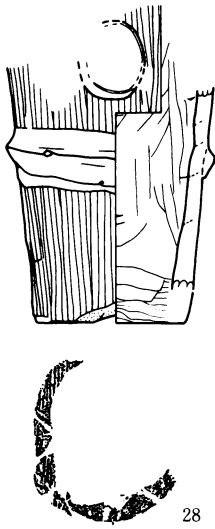
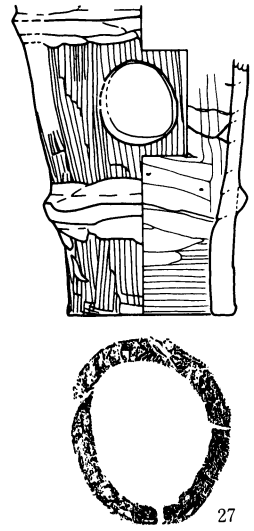
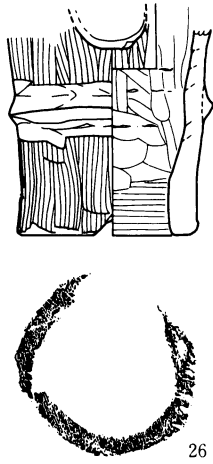
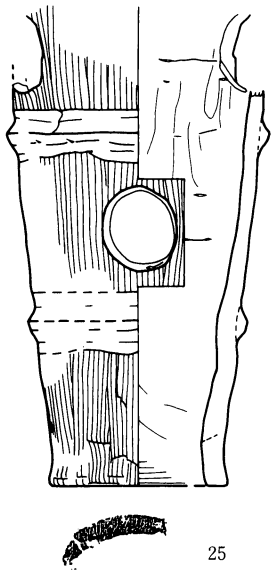


23

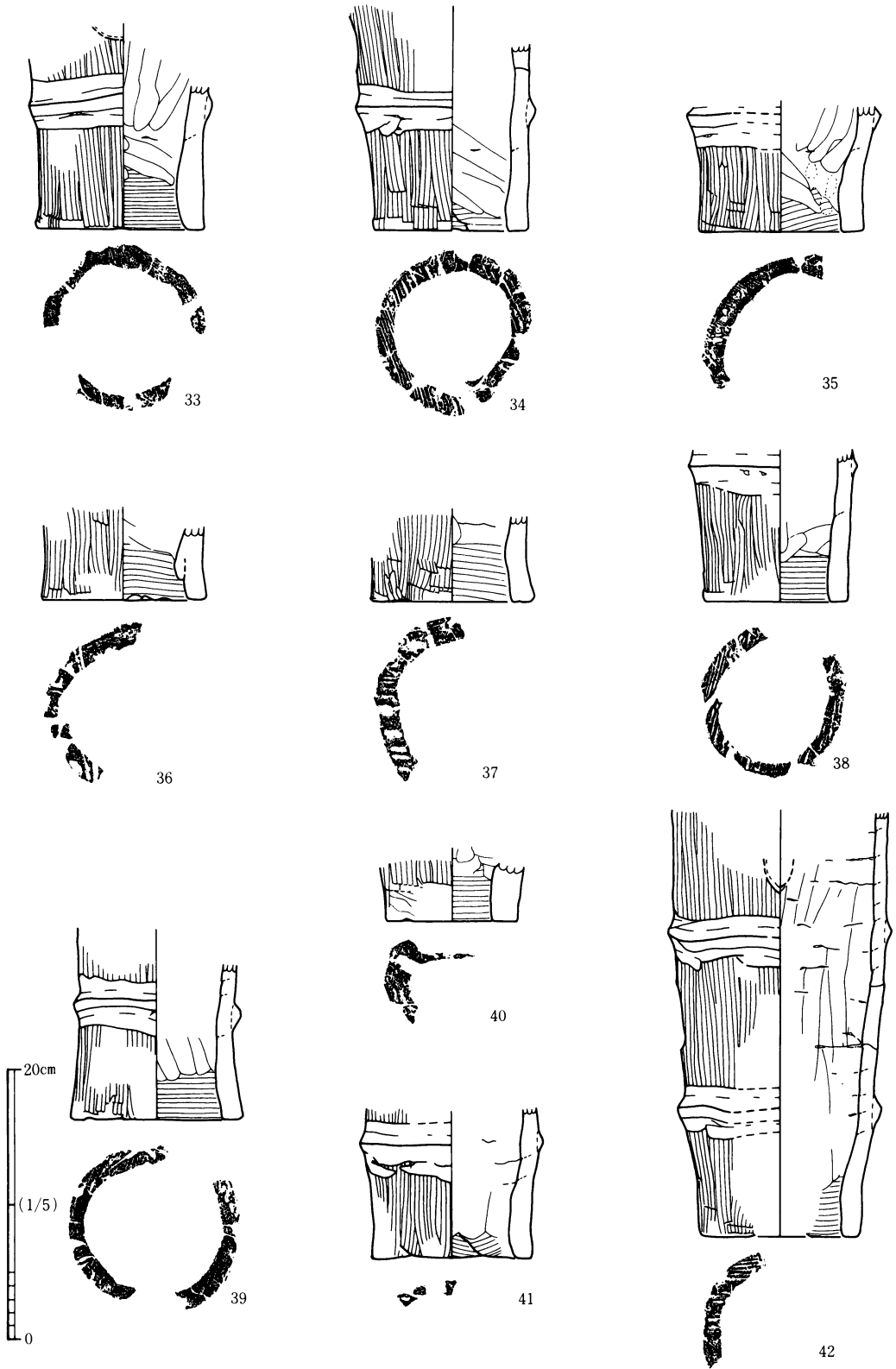


24

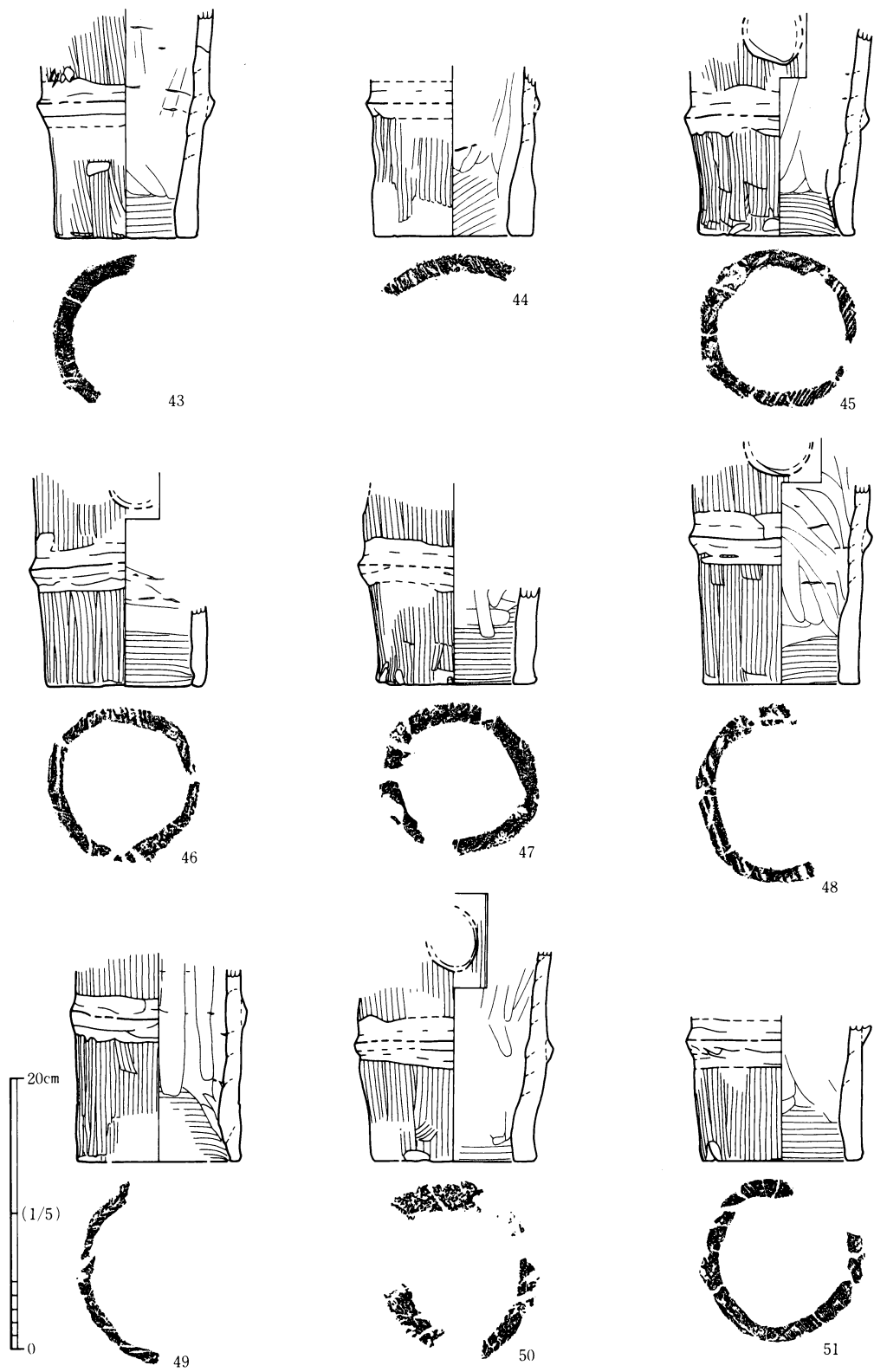
第33图 2号墳円筒埴輪(4)



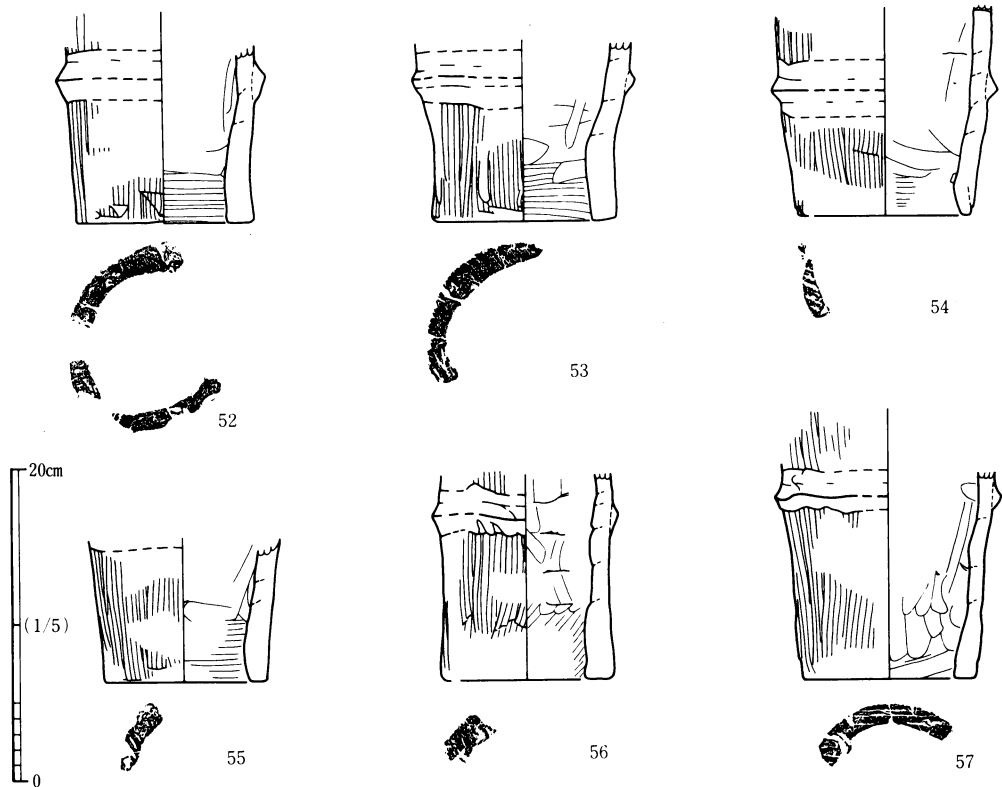
第34图 2号墳円筒埴輪(5)



第35图 2号墳円筒埴輪(6)



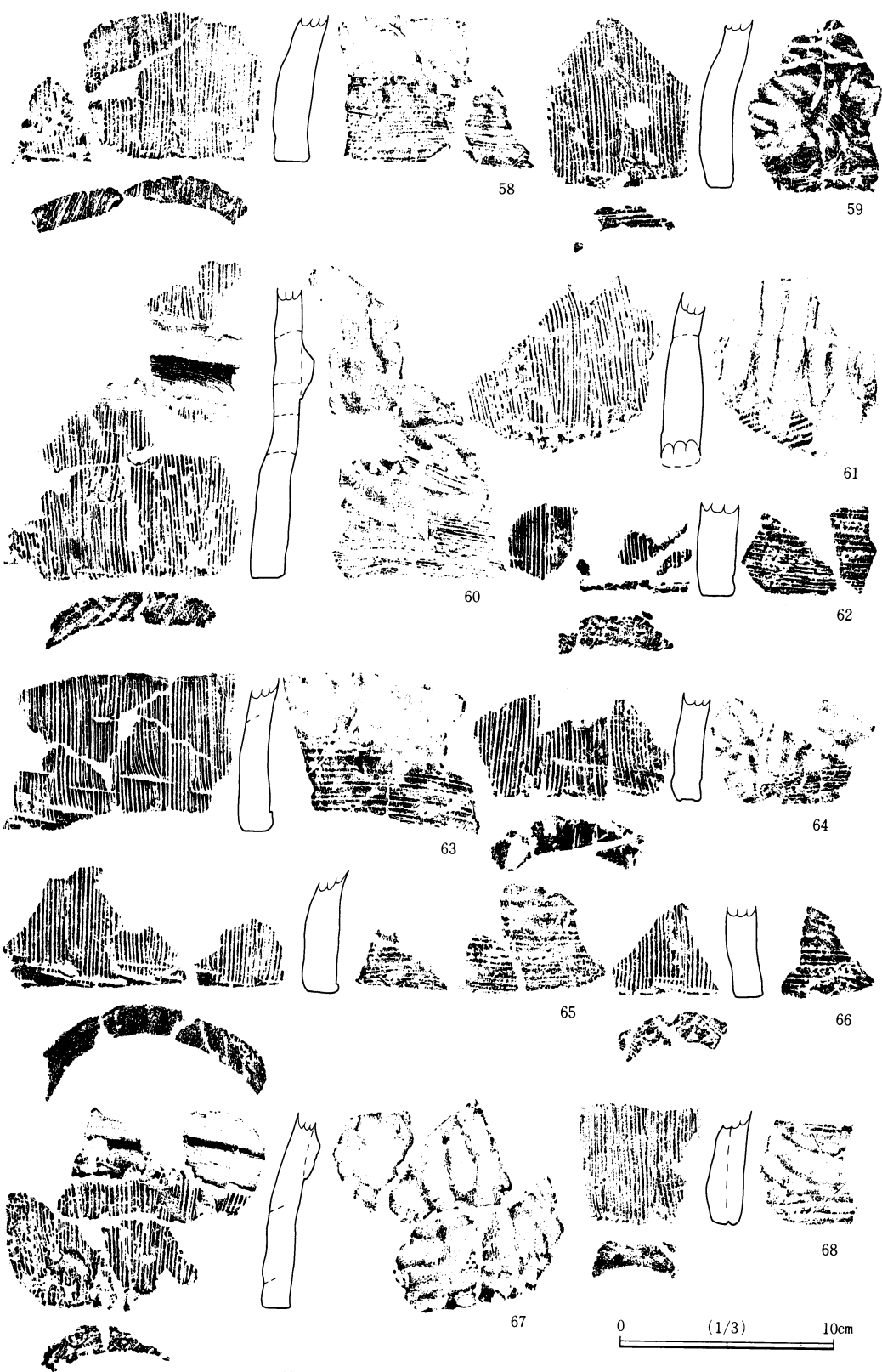
第36图 2号墳円筒埴輪(7)



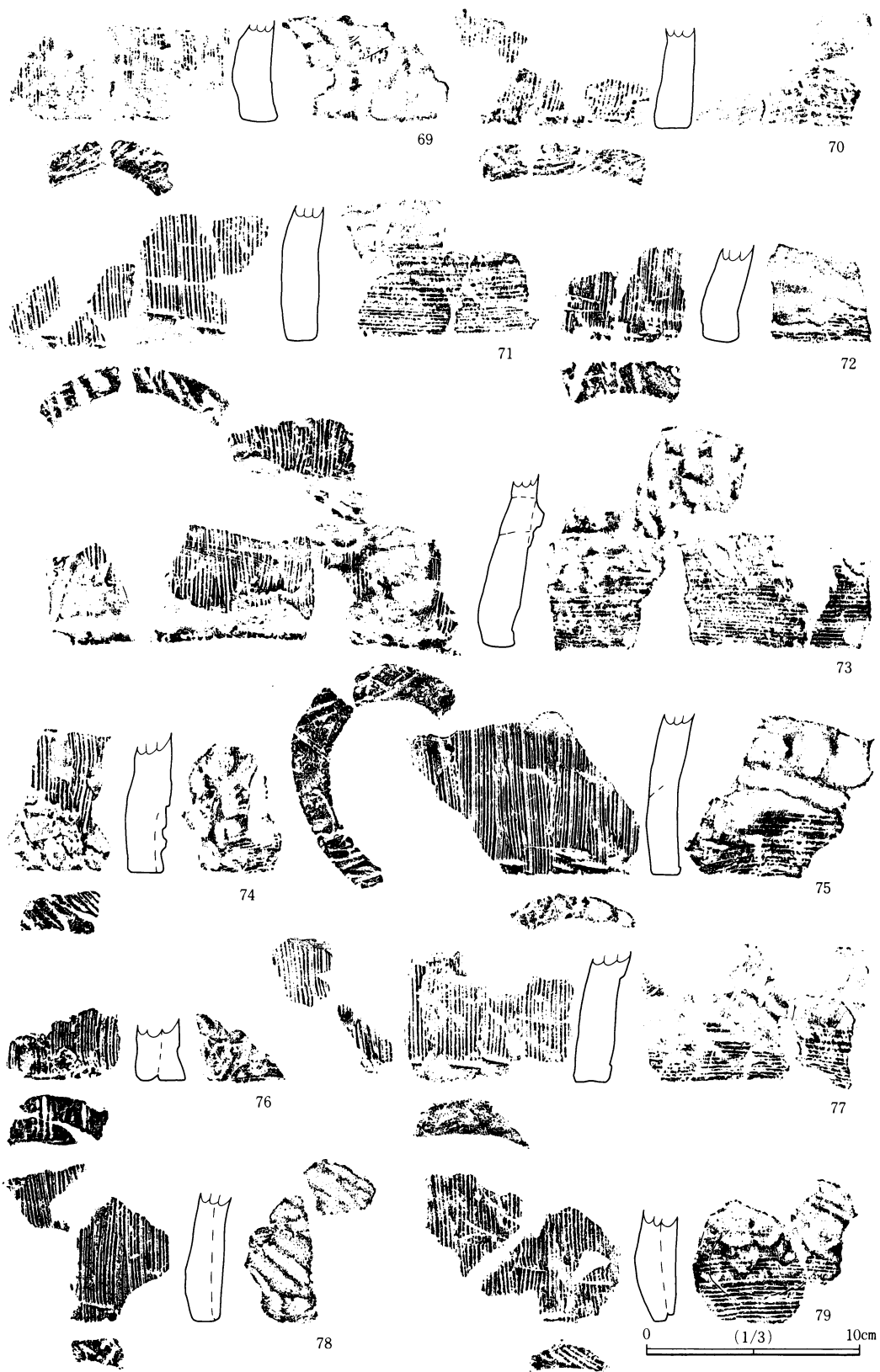
第37図 2号埴円筒埴輪(8)

られた。32は、その形態と周辺の人物埴輪の破片の出土状況から、最終的に人物埴輪の基台と結論したものである。67は唯一、底部から粘土紐作りをしている可能性がある。ただし、粘土紐の境目で剥がれた胴部の破片資料の可能性もある。133は基部の粘土帯の外面に板目圧痕が認められ、内面には板目圧痕が認められない。第1段の突帯高が円筒埴輪の中で最も低く、器厚も薄く特徴的なものである。148と152は外面の整形が不十分なため、外面の底部付近に粘土がはみ出ている。なお、152は133同様に、基部の外面に板目圧痕が認められ、内面に板目圧痕が認められない。

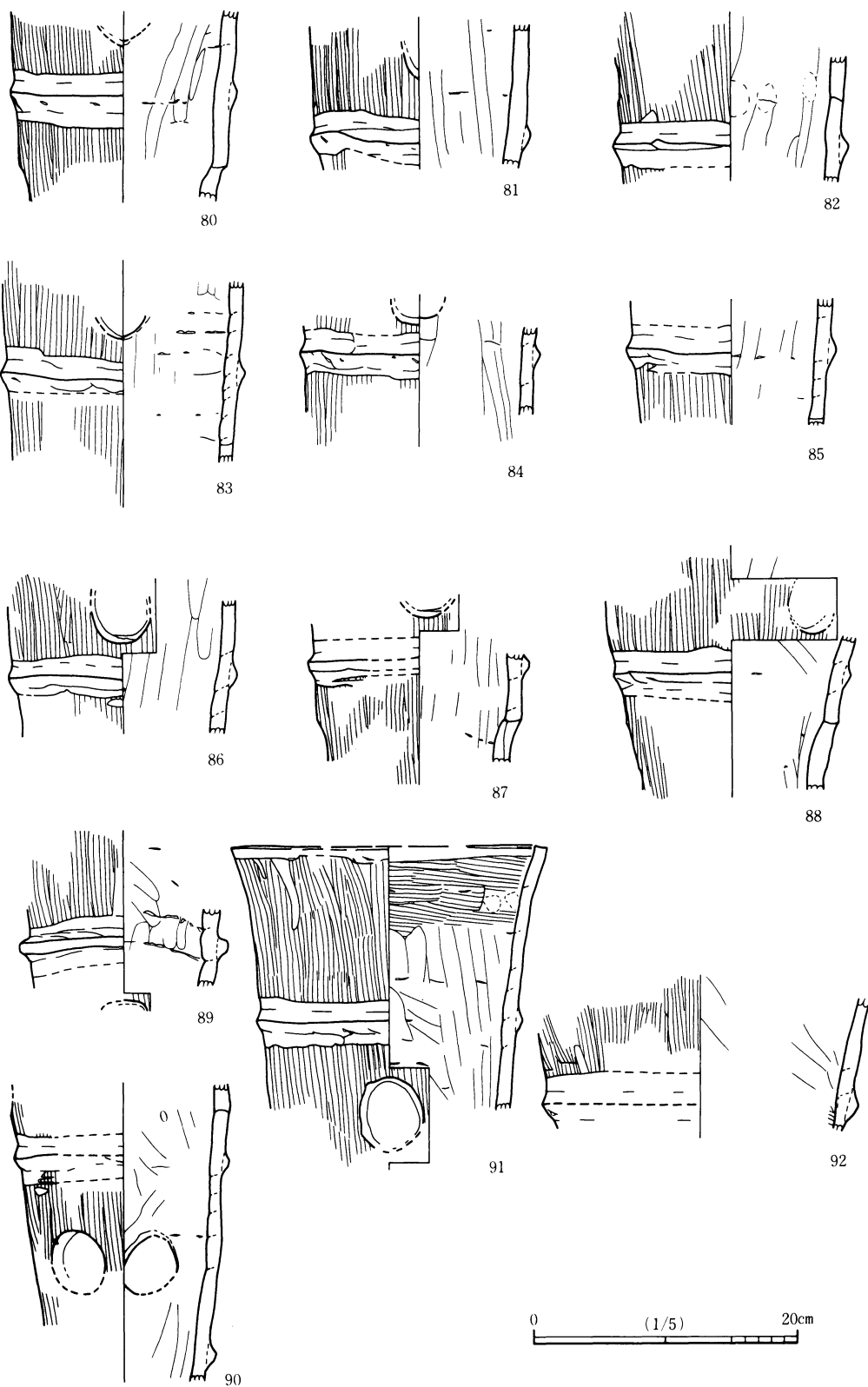
朝顔形円筒埴輪 基部から口縁部まで復原できた資料はなく、11のみ推定復原が可能であった。11は4条5段構成で、第4段の頸部で直線的に大きく開くものである。第4段以外は円筒埴輪と同様に直線的な外形線を有し、口縁部でやや大きく外反する。第2段と第3段の突帯間隔が円筒埴輪と比べ著しく長い(第29図)。製作上においては、第4段まで粘土紐を積み上げた後、円筒埴輪と同様に内面を下から上へユビナデし、第4段の内面にヨコハケを施した後に、第5段の粘土紐を積み上げて、第5段の内面調整を施している。92、98、104、114、160、162、164、170、173、174、175、179、180はいずれも第4突帯付近の破片資料で、内面にヨコハケを施した後、その上に粘土紐を巻き上げている資料である。その中で、164は第4突帯部分に擬口縁が



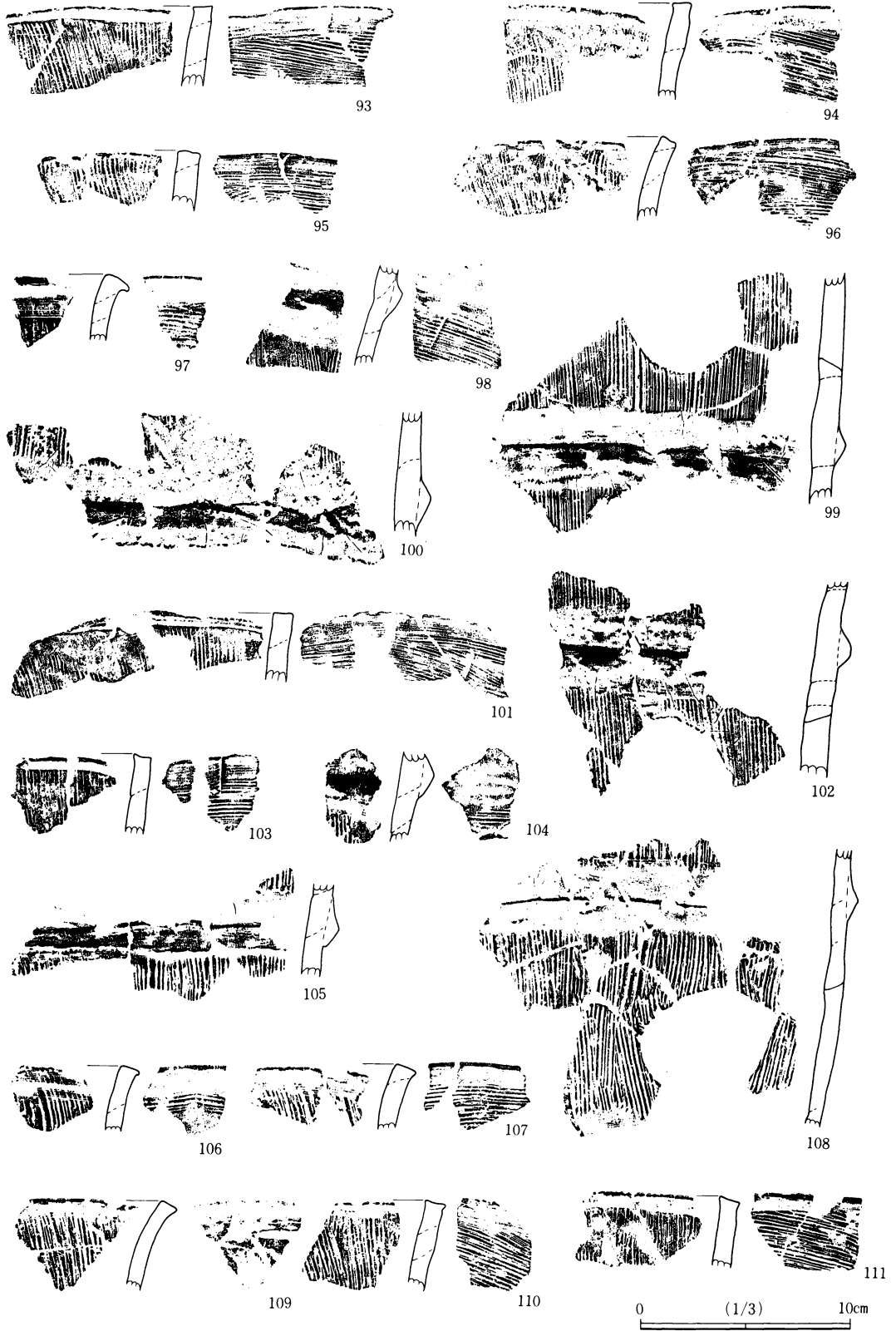
第38図 2号墳円筒埴輪(9)



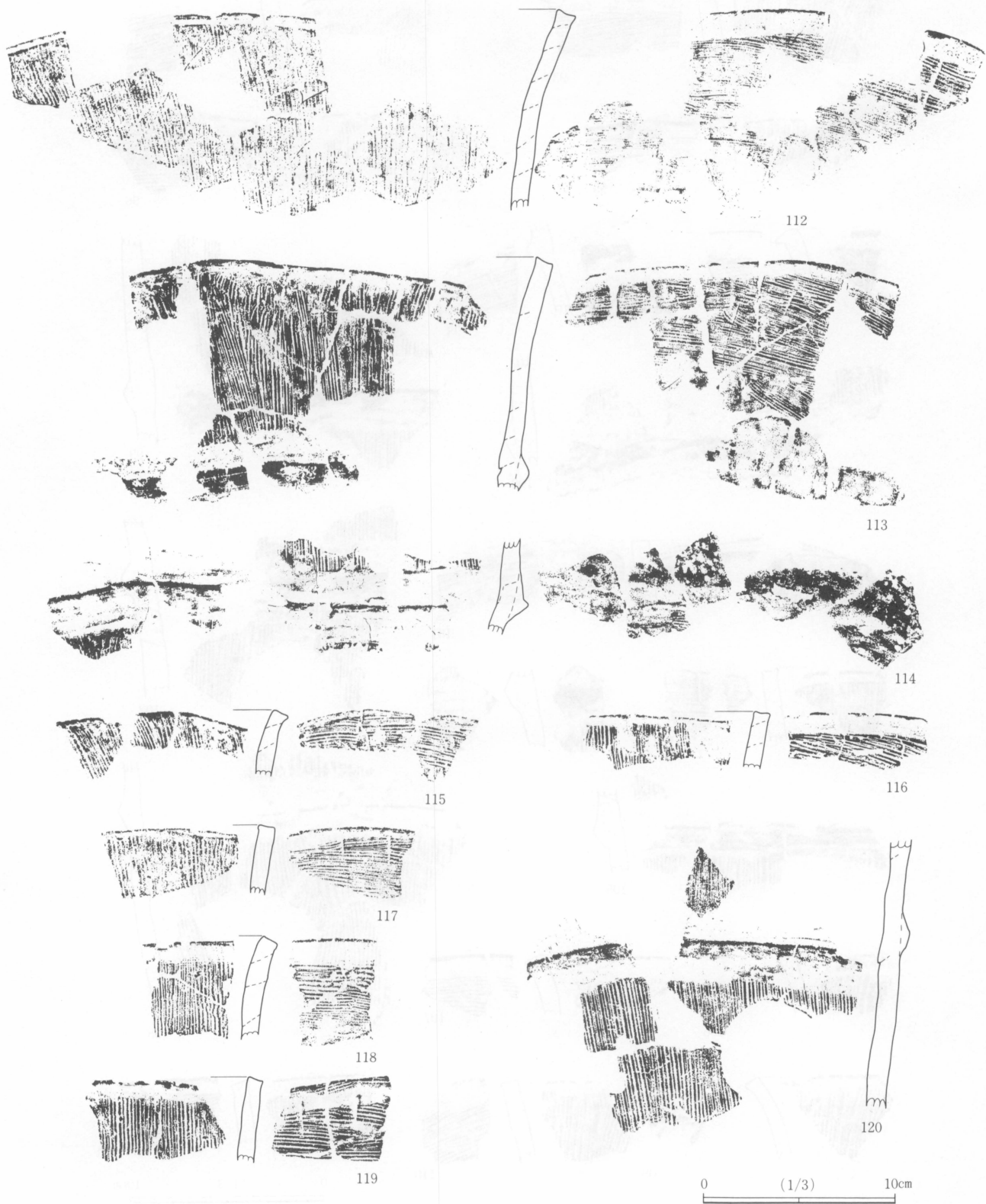
第39图 2号墳円筒埴輪(10)



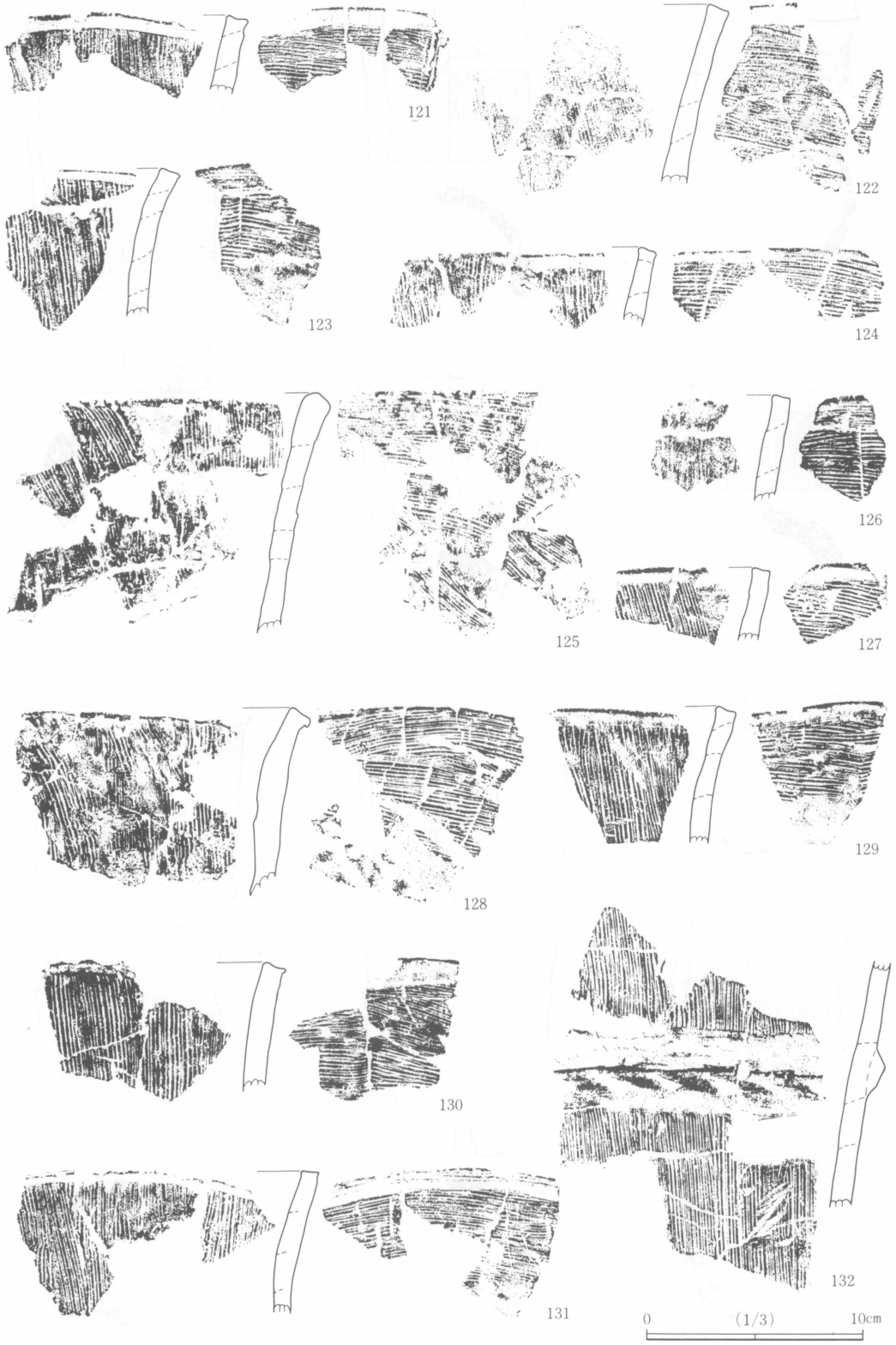
第40图 2号墳円筒埴輪(11)



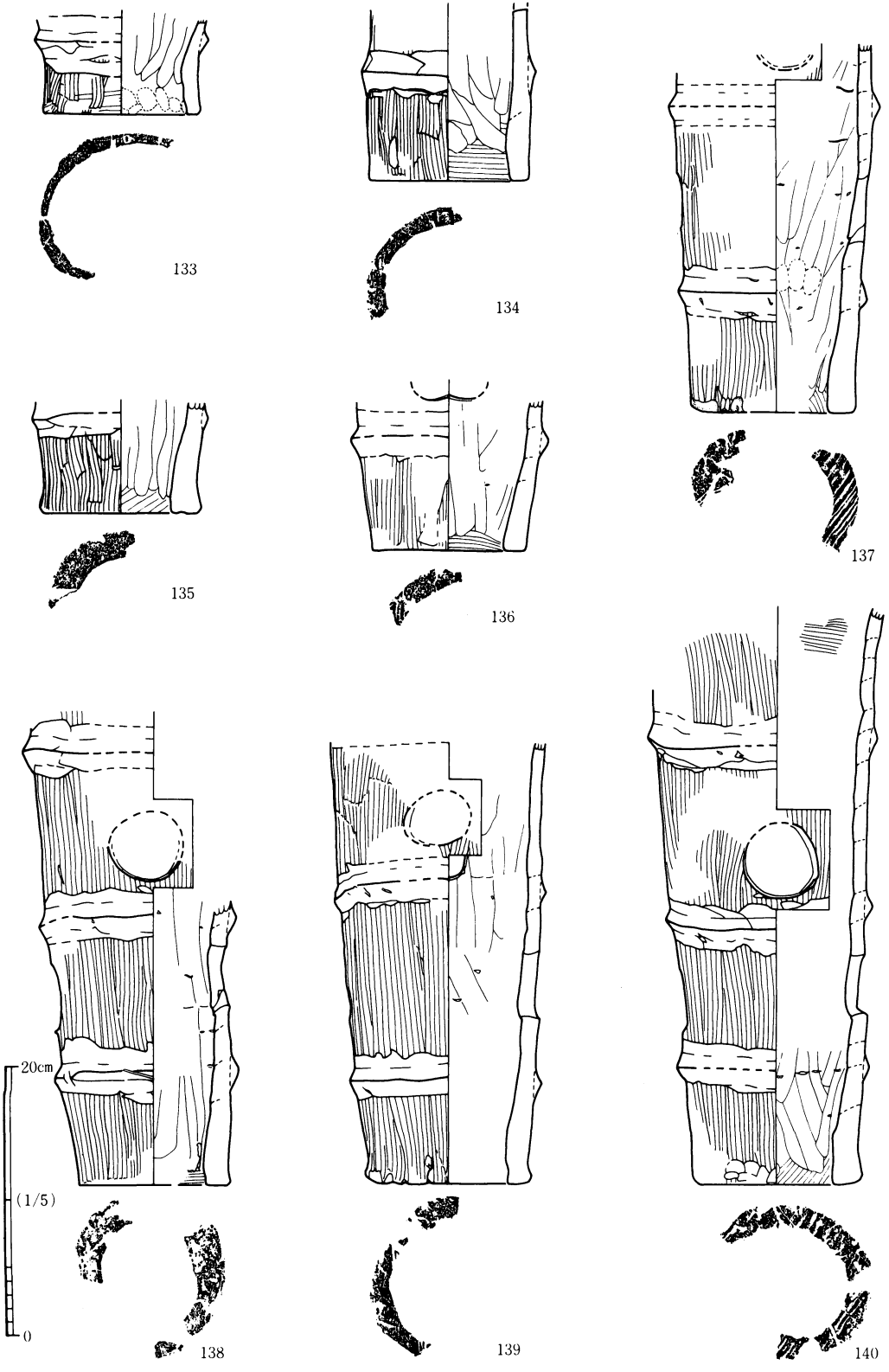
第41图 2号墳円筒埴輪(12)



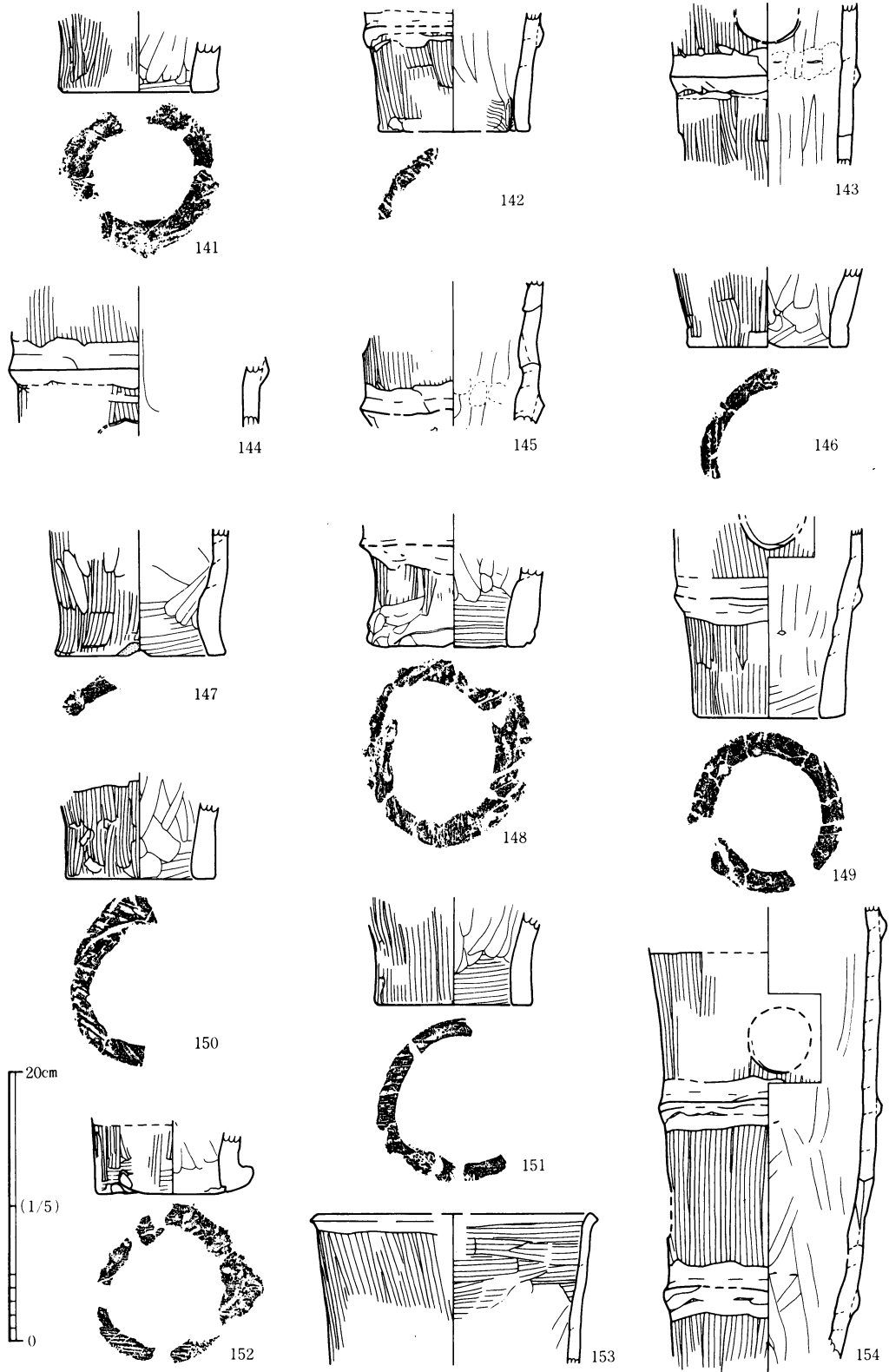
第42図 2号墳円筒埴輪(13)



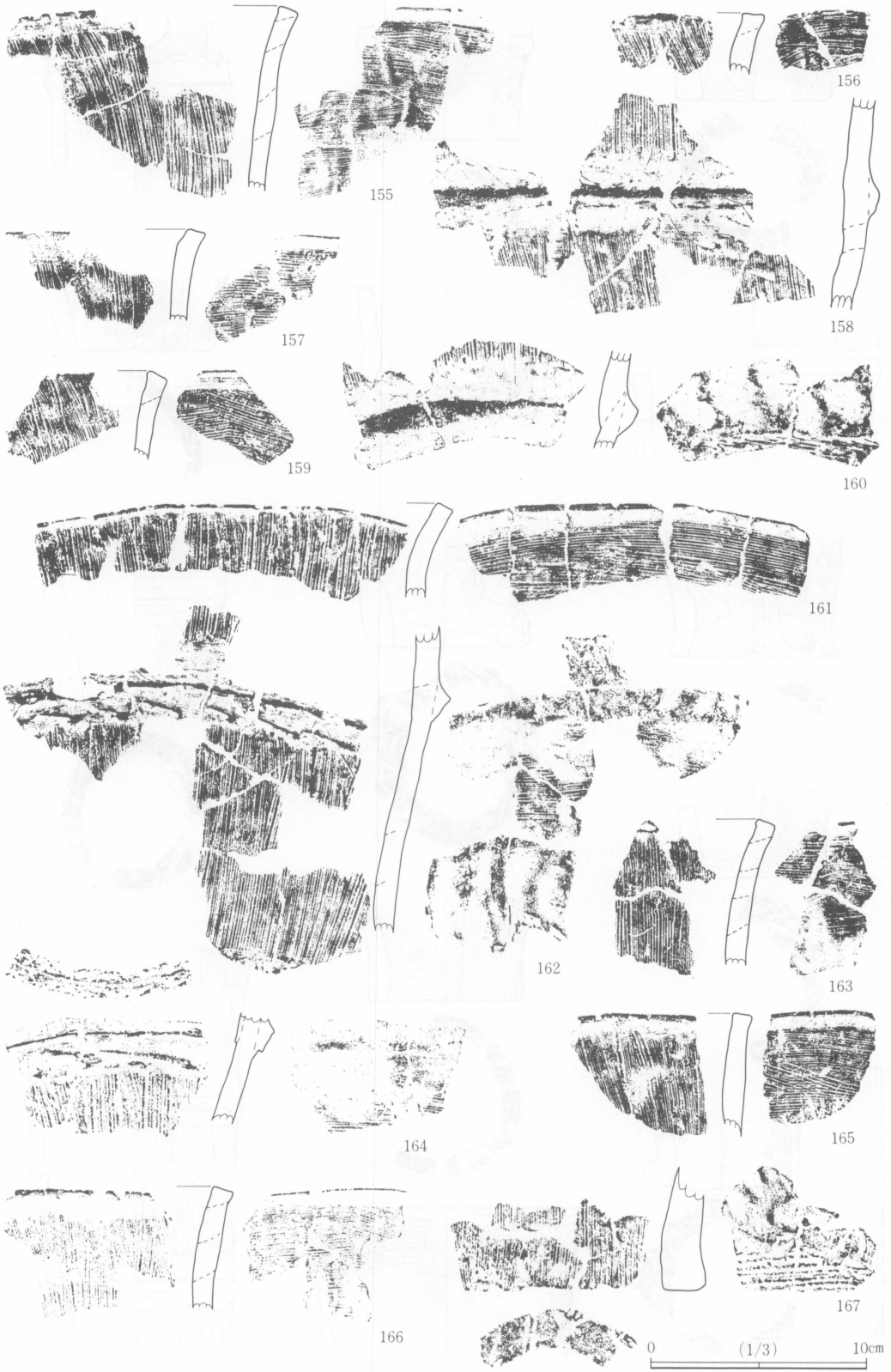
第43図 2号墳円筒埴輪(14)



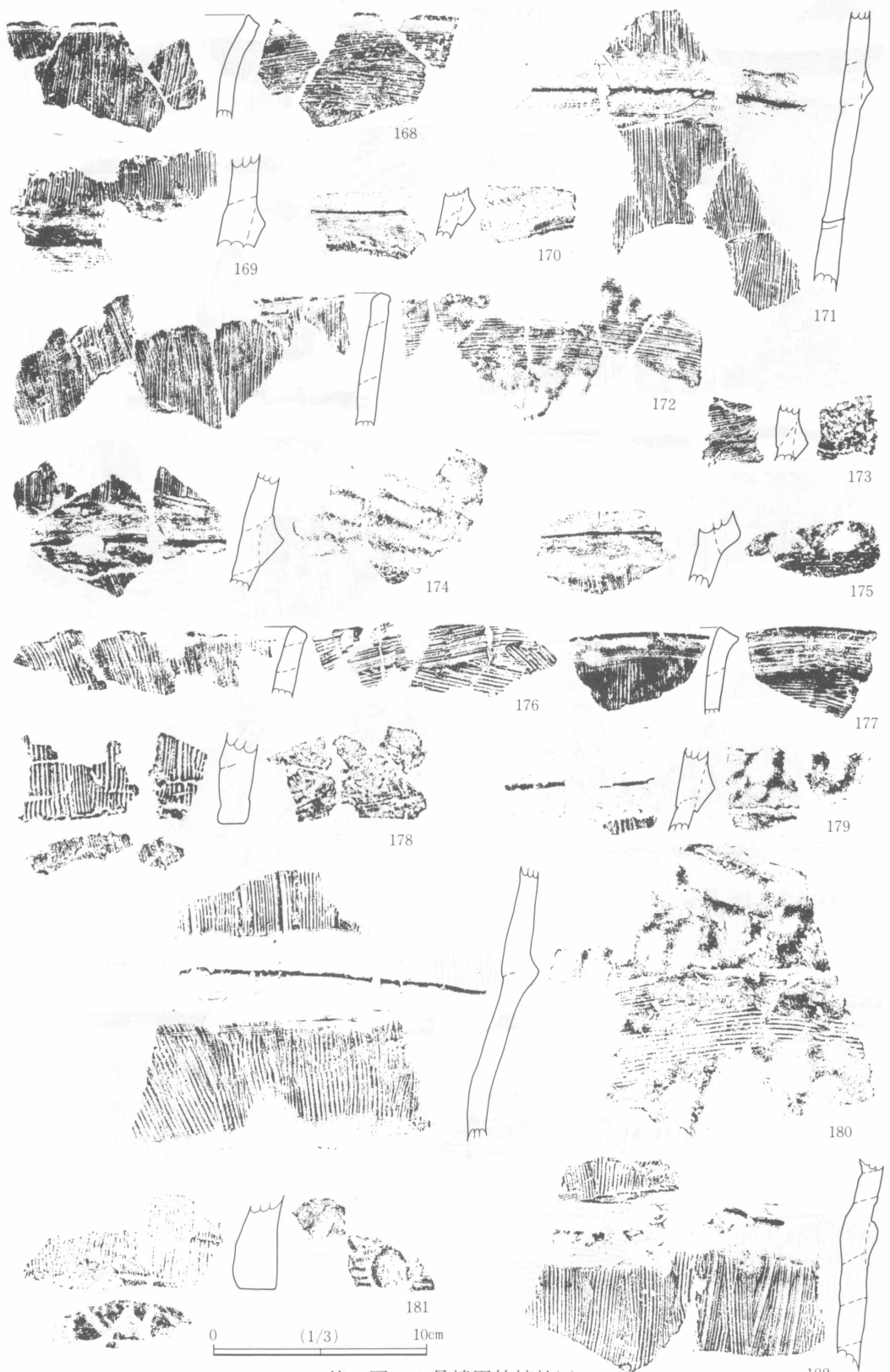
第44图 2号墳円筒埴輪(15)



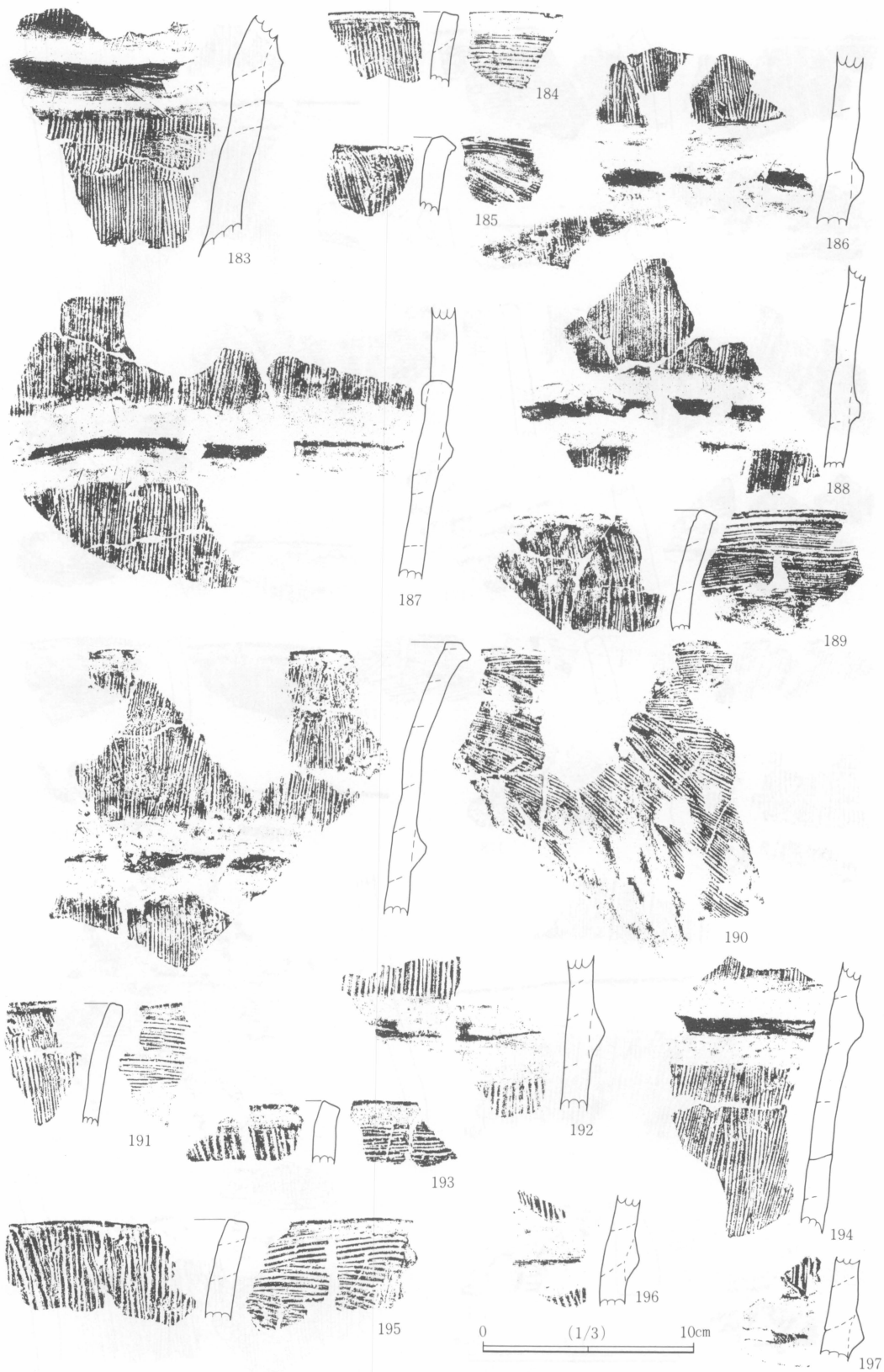
第45图 2号填円筒植輪(16)



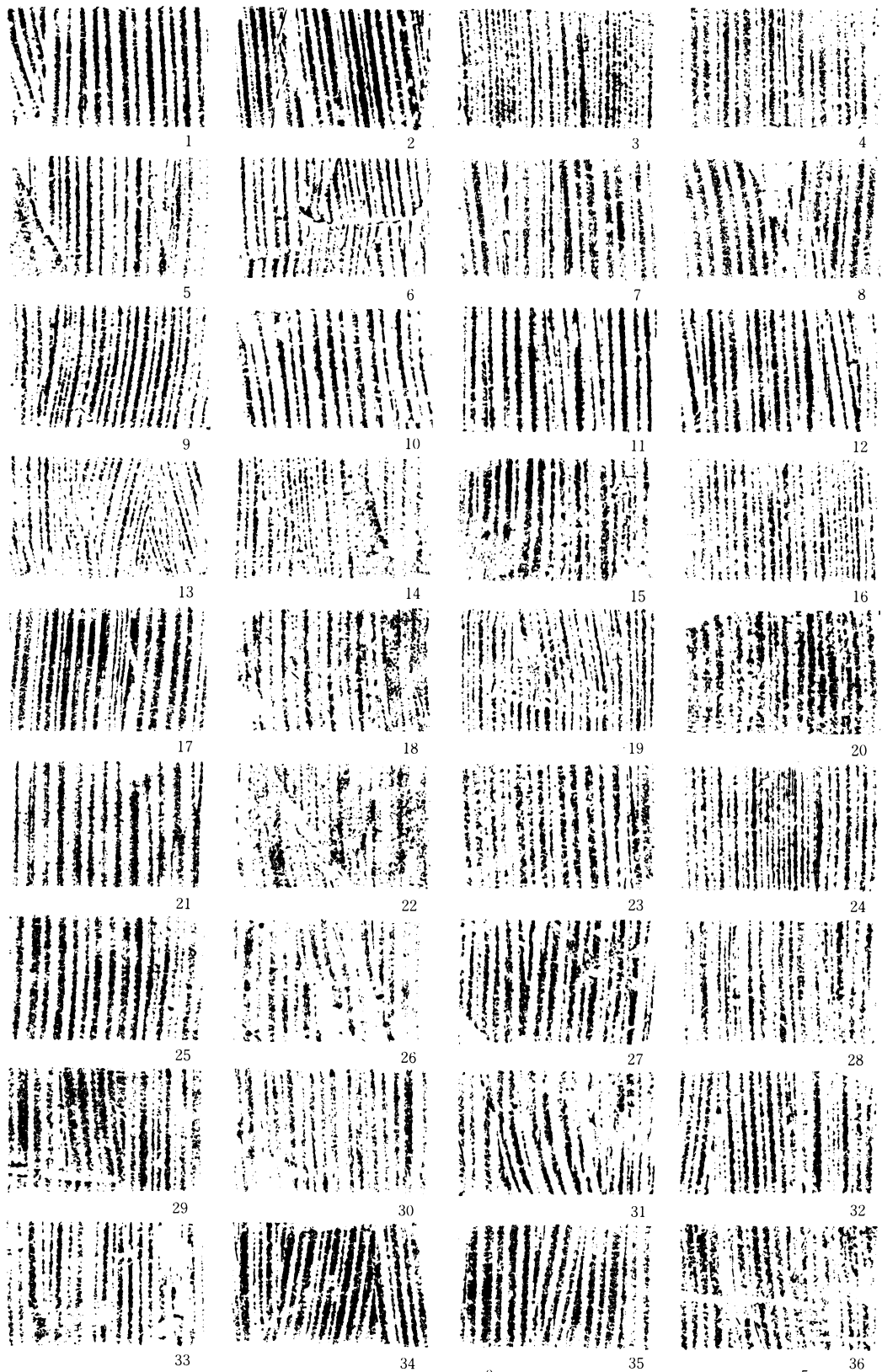
第46图 2号墳円筒埴輪(17)



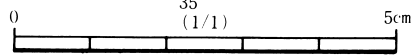
第47图 2号墳円筒埴輪(18)

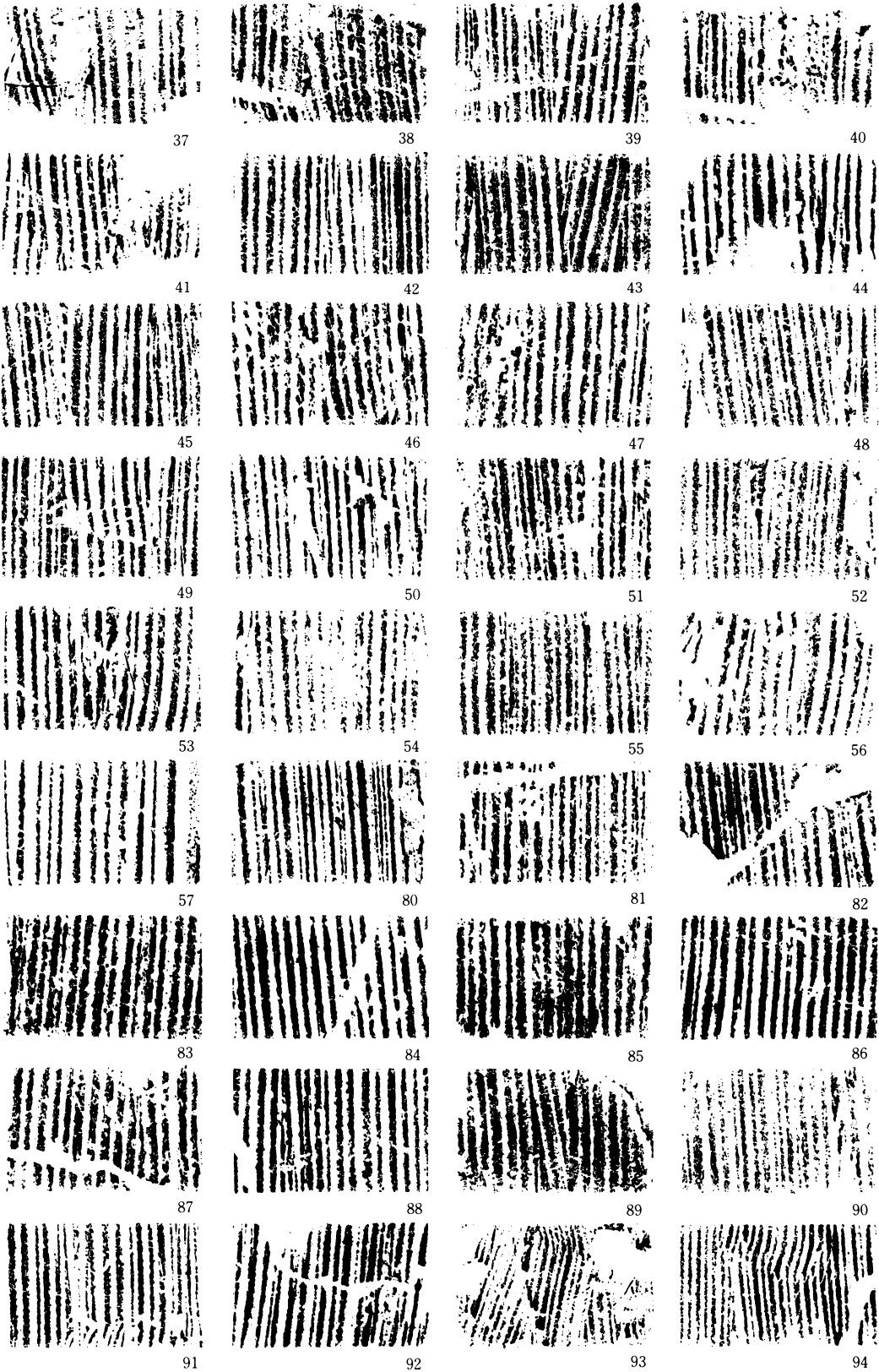


第48図 2号墳円筒埴輪(19)

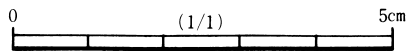


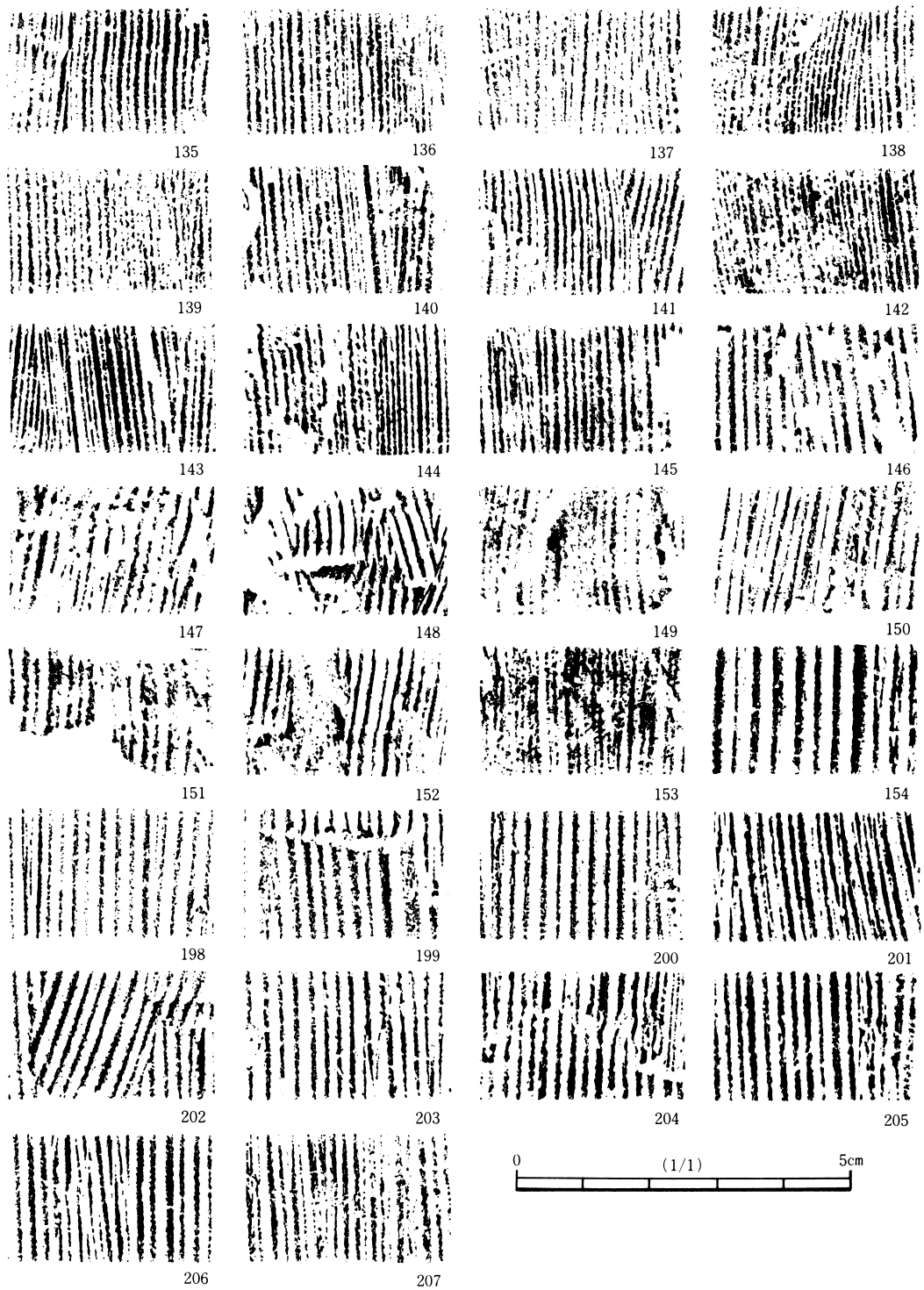
第49図 2号填植輪ハケ拓影(1)





第50図 2号墳埴輪ハケ拓影(2)





第51図 2号墳埴輪ハケ拓影(3)

認められた。口縁部と同じように内面をヨコハケし、端部に口唇部のようにナデ整形している。162と180は第3突帯の一部から第4突帯までの資料であるが、180は11と同様に第4段の突帯間隔が短く、やや大きく外側に開く資料である。それに対して、162は第4段の突帯間隔が長く、直線的にやや緩く外側に開いている。数が少ない上に破片資料であるが、本古墳の朝顔形円筒埴輪には第4段の頸部の違いにより、2形態に分類できる。

(9) 形象埴輪 (第52～69図、図版29～36)

形象埴輪は北側の墳丘裾及び周溝内から出土している。基台から形象部まで復原できた資料は6個体の人物埴輪(198～203)と1個体の馬形埴輪(207)である。204、205は基台から形象部下半の裳の部分までが残っている。これらの人物埴輪の基台は、底径が大きく、径が底部付近から形象部との接合部まで一定で、全体の造りが丁寧である点において円筒埴輪と異なっている。また、円筒埴輪とは突帯間隔も異なっている。人物埴輪の基台の底径と円筒埴輪の底径の違いを表したものが第28図である。ここで問題になる資料が底径13.9cmの第34図32の資料であるが、人物埴輪の基台の特徴を持ち、第一突帯の位置が低く人物埴輪の199や201、204、205の突帯間隔と共通性がある。また、周辺から出土している破片資料からも人物埴輪の基台と推定される。206は4足の動物埴輪の脚部であるが、これも周辺の破片資料から馬形埴輪の脚部と推定される。部位不明の破片資料もあるが、本古墳に樹立された形象埴輪の個体数は人物埴輪9個体、馬形埴輪2個体と捉えられる。

人物埴輪 199、201、204、205の基台は2条3段であるが、199、201、204の第3段の透孔は径が著しく小さい。203の基台は1条2段で、透孔は第2段の一对のみである。198、200、202の基台は透孔が2段一对ずつ設けられているが、突帯が全く作られていない。

人物はすべて半身像で、全体に小型である。腰の部分の突帯付近と頸部でくびれているが、ほぼ円筒形である。198、199、201、208、209、246、247は頸部に突帯が設けられているのに対して、200、202、203には突帯が設けられていない。腕は胴部と別々に造られ、ホゾ差込み式で胴部に付けられている。腕は短く、左右にやや開き気味である。200、201、202、203には腕の差込み部分の下に透孔が設けられている。ほかの資料では欠失しており透孔の有無は不明である。顔は円筒状に作られた頭部に粘土板を貼り付け、その上で描出している。粘土板の縁は円筒部にナデつけられておらず、そのままに残している。目と口はヘラで切り抜いて表現し、鼻は粘土紐を貼り付けて表現している。239、243の顔の破片や、199、201などの顔面の剝がれた痕跡から推測すると、顔面に貼り付けられた粘土板は、粘土紐で縁取りした上に粘土を足して作っていることがわかる。

顔面の目の上には、粘土紐を付け足して突帯状のものを作っている。その顔面の上の突帯両端付近の円筒部には、透孔を設け、その下に粘土紐を折り曲げて作った耳環を付けている。199、208、209でも、透孔の下に剝離痕が認められる。201、210には頭部の後ろにも透孔が1孔設け

られている。人物埴輪は個体間で意匠や突帯・透孔の位置や数などに違いはあるが、全体の製作方法と形態は共通しており、「下総型人物埴輪」の一群と考えられる。

198は上に向かって直線的に開く天冠状のものを被る男子像である。その天冠状のものは表面を丁寧にナデ調整を施している。被り物の開口部の内面には円筒埴輪と同様にヨコハケが施されている。耳環に付着して、下げ美豆良の一部が残っている。美豆良はその痕跡から、内面から透孔を通して外面へ伸びていたことが窺える。また、ほかの個体の美豆良に比べ、その形は扁平で幅広い。頸部には突帯の下に粘土粒が一周巡り、さらに胸部分へ2列3段に粘土粒を下ろして首飾りを表現している。腰には刀を下げている。

199はやや屈曲しながら上に向かって開く冠状のものを被る男子像である。その冠状のものには、顔面上部の突帯から左右へ2本ずつ上方へ伸びる線をヘラ描きで表現している。その大半には刷毛目が残っているが、正面については部分的にナデにより消されている。腰には刀を下げている。1本の刀に接して、両端部が欠失している棒状のものが付いている。恐らく、266と同じ刀子状のものと推測される。

200は頭部が欠失している。右側に耳環が残っているが、平たく作られており、美豆良が付いていた痕跡はない。腰のくびれ部分に突帯がなく、裳の先端部分に突帯状のものが2段まわっている。形象部の前面は丁寧に刷毛目をナデ消している。美豆良の痕跡がない点から、島田髷の女子像又は双輪形の結髪像などが考えられる。

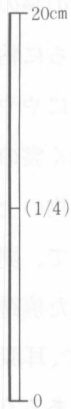
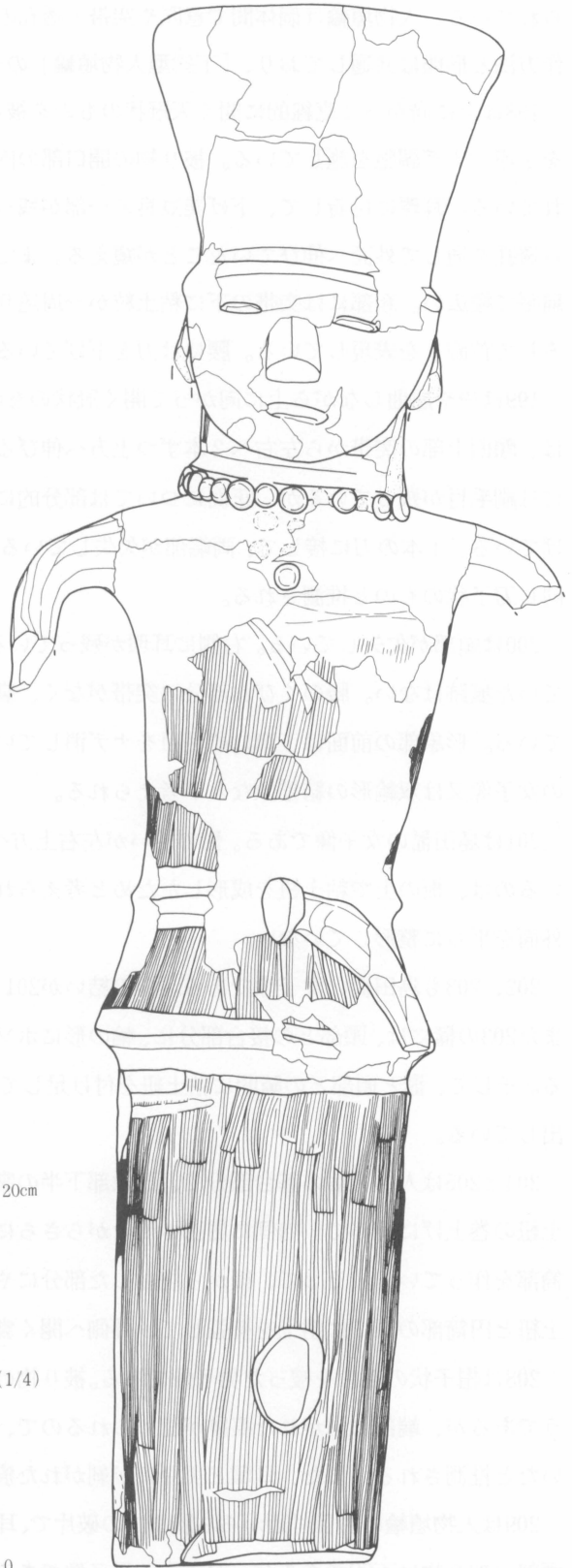
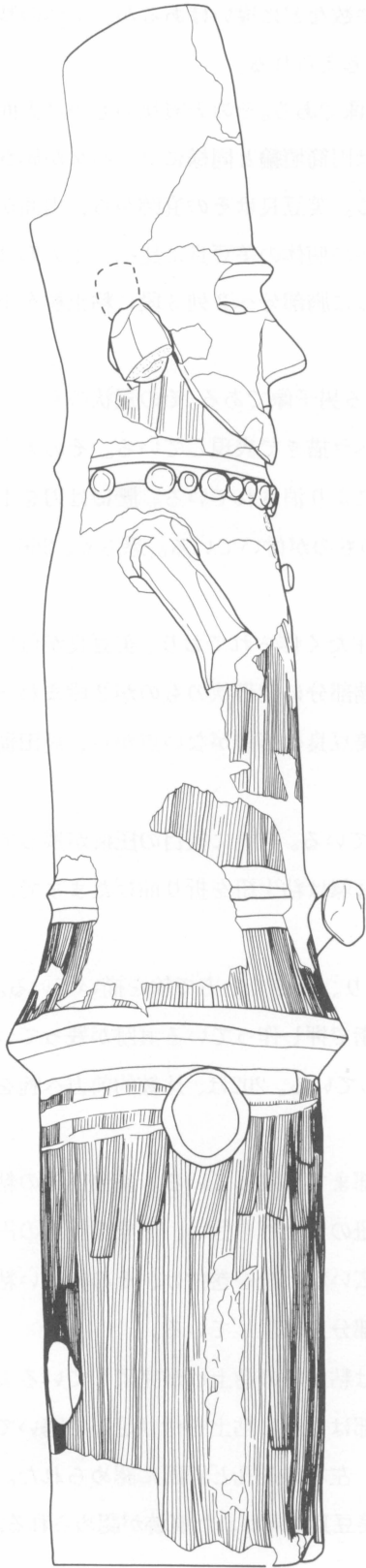
201は島田髷の女子像である。髷の結いが左右上方へ開いている。結いに板目の圧痕が残っているのは、板の上で粘土紐を成形したためと考えられる。耳環は粘土紐を折り曲げたままで、外面を平らに整形していない。

202、203も島田髷の女子像である。髷の結いが201と異なり、大きく上方で輪を描いている。また203の髷には、頭部との接合部分に、輪の形にホゾ溝を指で押し作っている痕跡が残っている。そして、髷と頭部との隙間に粘土紐を付け足して補強している。202は、比較的前方へ腕を出している。

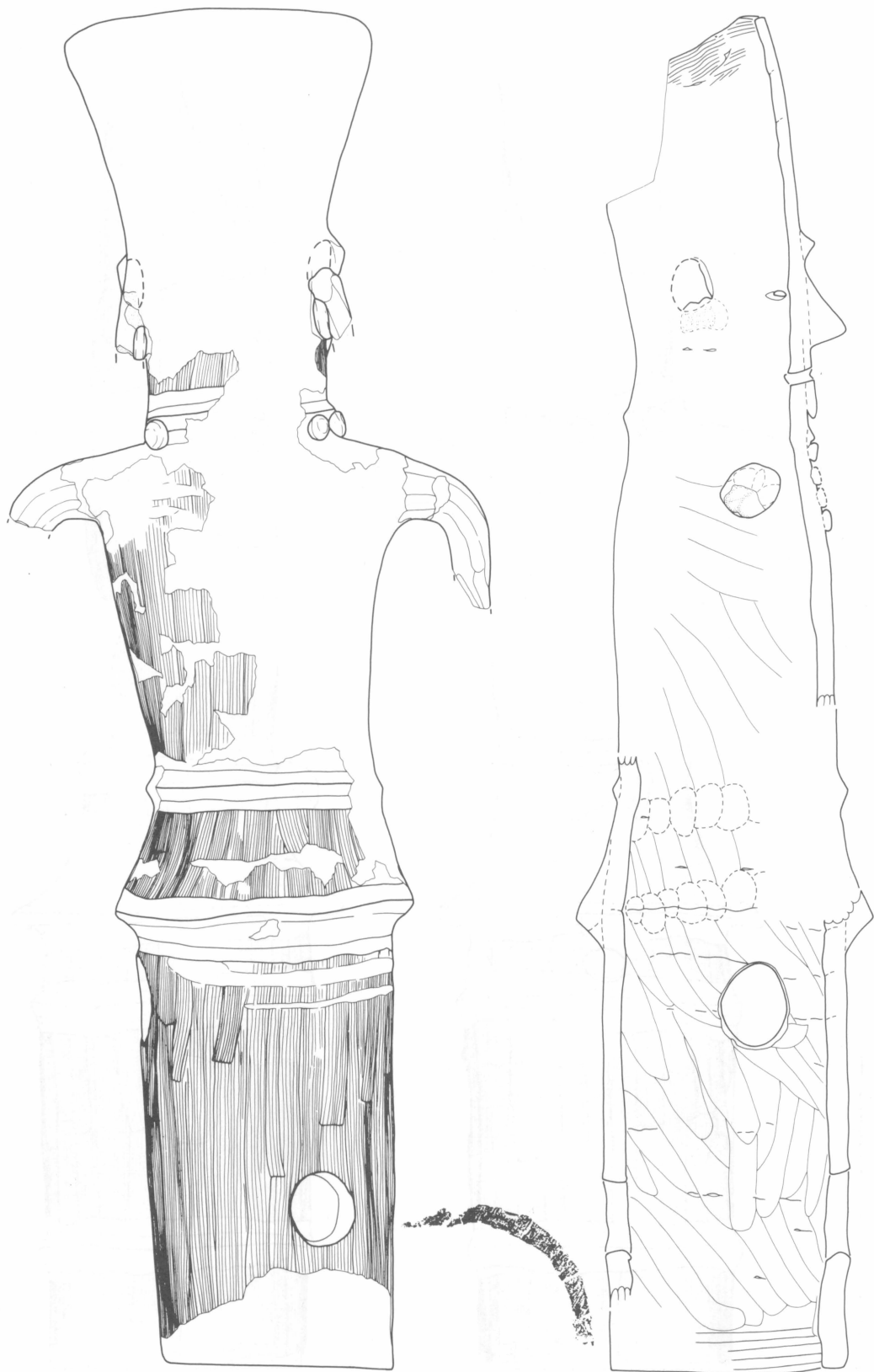
204と205は人物埴輪の基台部分で、形象部下半の裳の一部までが残っている。基台部分の粘土紐の巻上げに続いて、内側に屈曲させながらさらに粘土紐の巻上げを行い、形象部下半の円筒部を作っている。そして、後から屈曲した部分にやや幅広い粘土紐を巻付け、その幅広い粘土紐と円筒部の隙間に粘土を補強して、外側へ開く裳の裾部分を表現している。

208は帽子状のものを被った男子像である。被り物の上部は粘土紐の巻上げが完了しているようであるが、端部に剝がれた痕跡が認められるので、開口部はさらに粘土を付け足して塞いだと推測される。また、耳環と美豆良が剝がれた痕跡が、左右の透孔と器面に認められた。

209は人物埴輪の右目付近から右腕までの破片で、耳環と美豆良が剝がれた痕跡が認められる。頭部の被り物は不明であるが、おそらく男子像であろう。

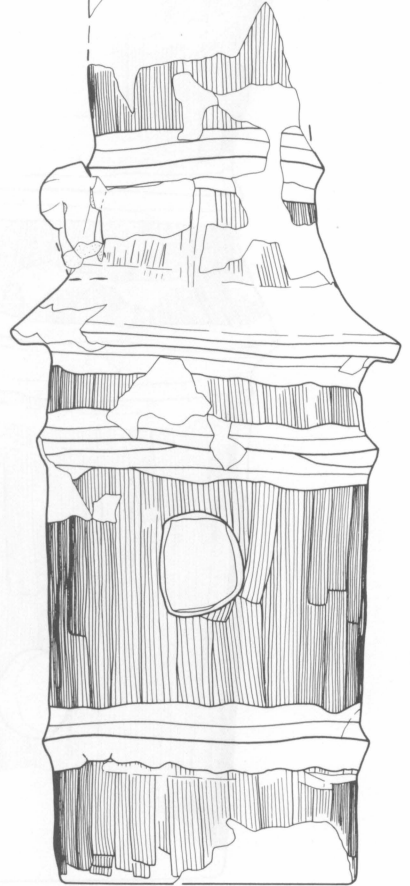
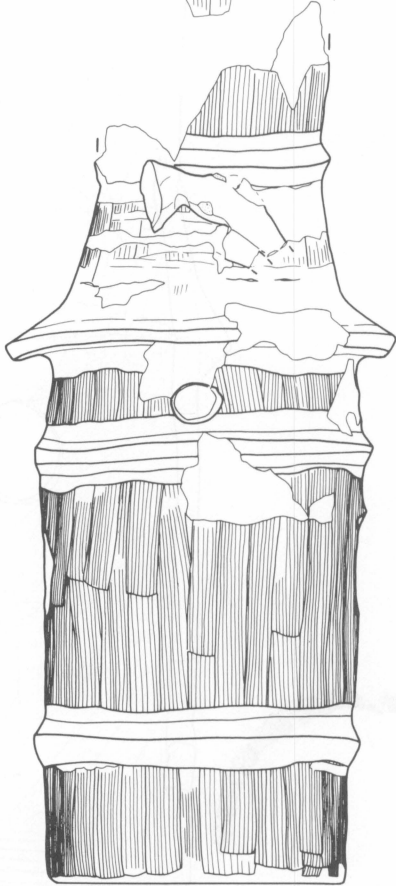


198

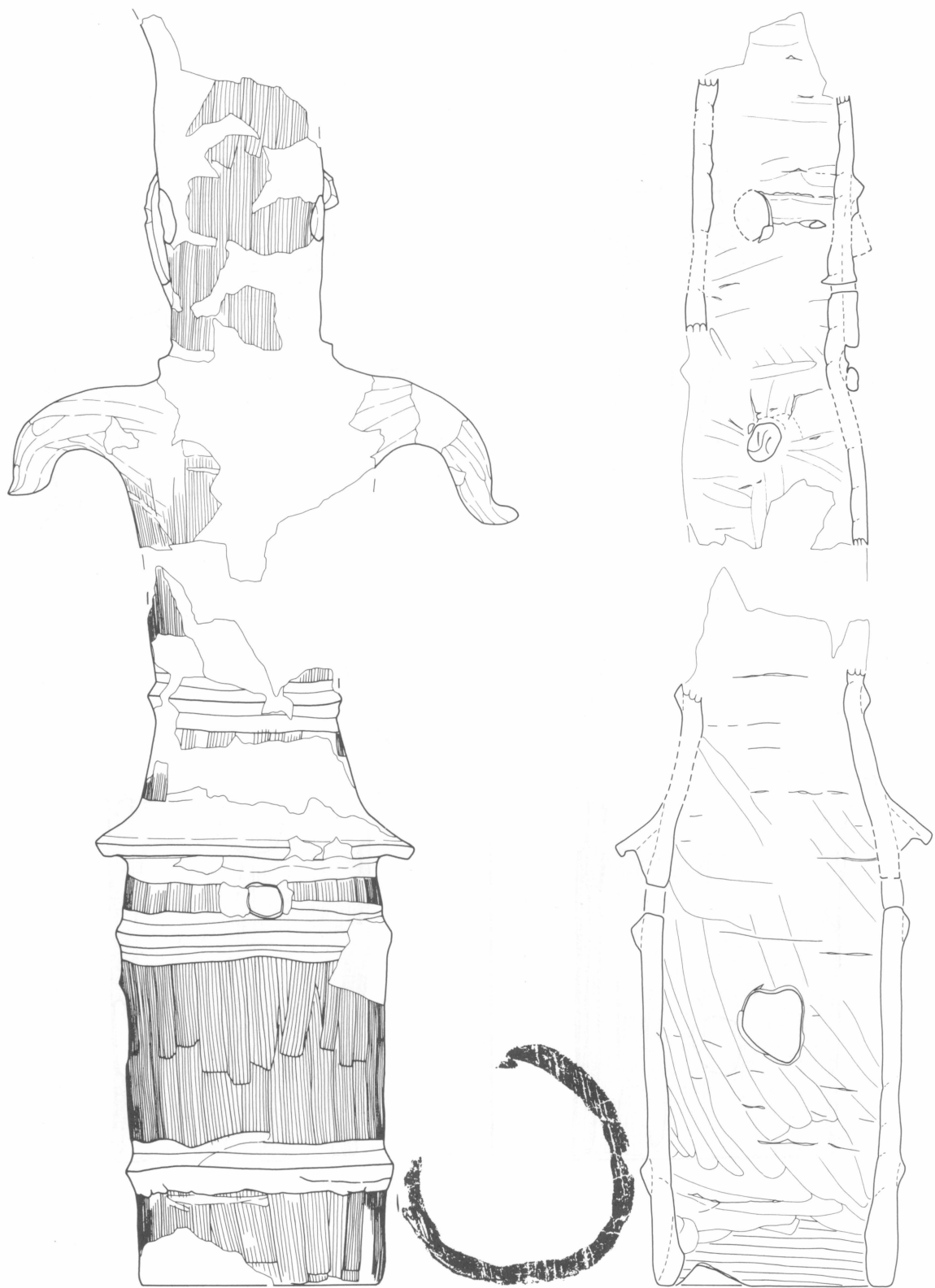


第52図 2号墳形象埴輪(1)

198

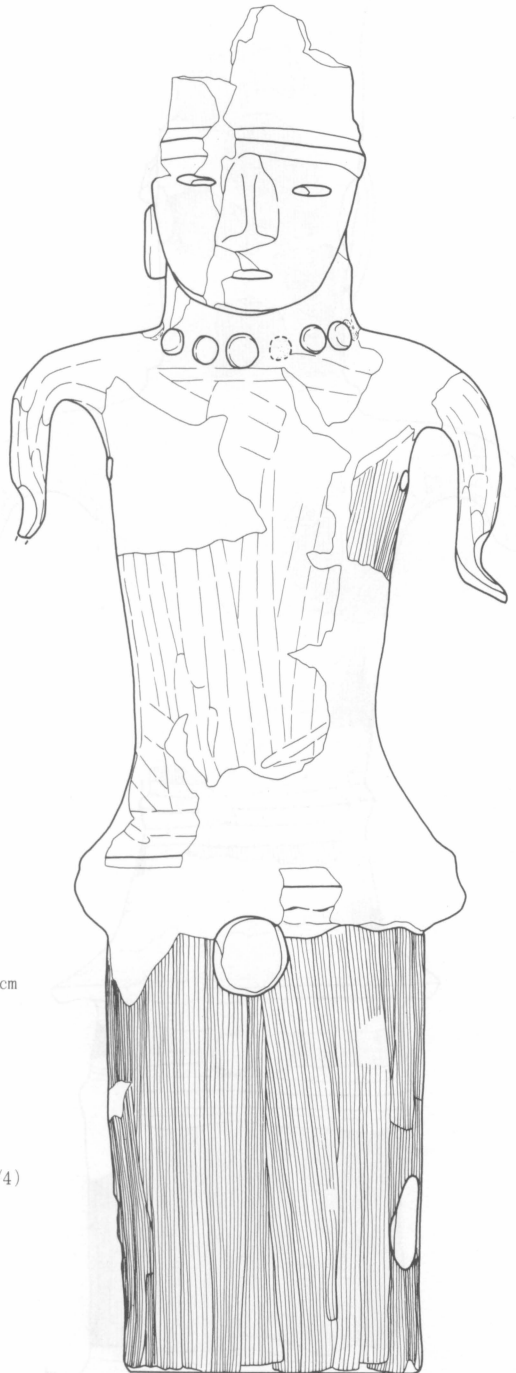
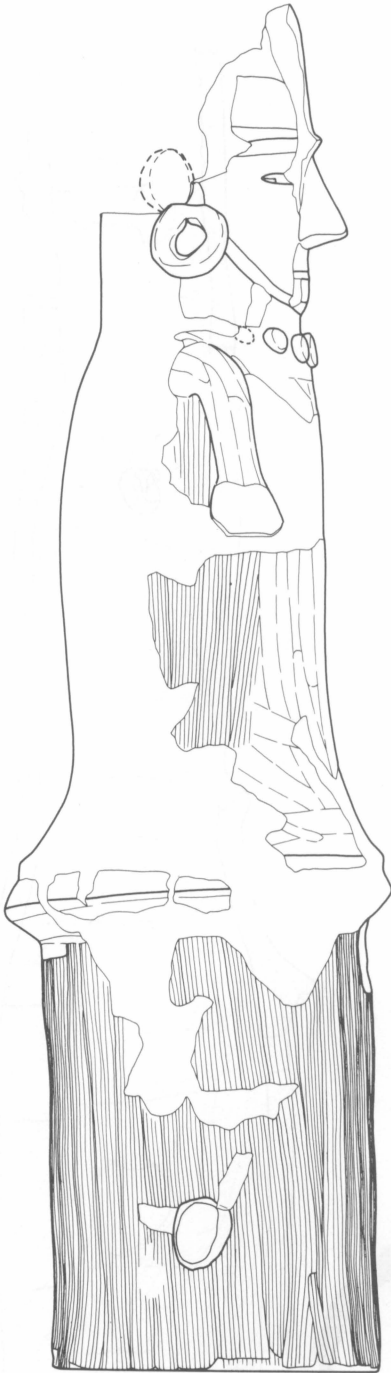


199

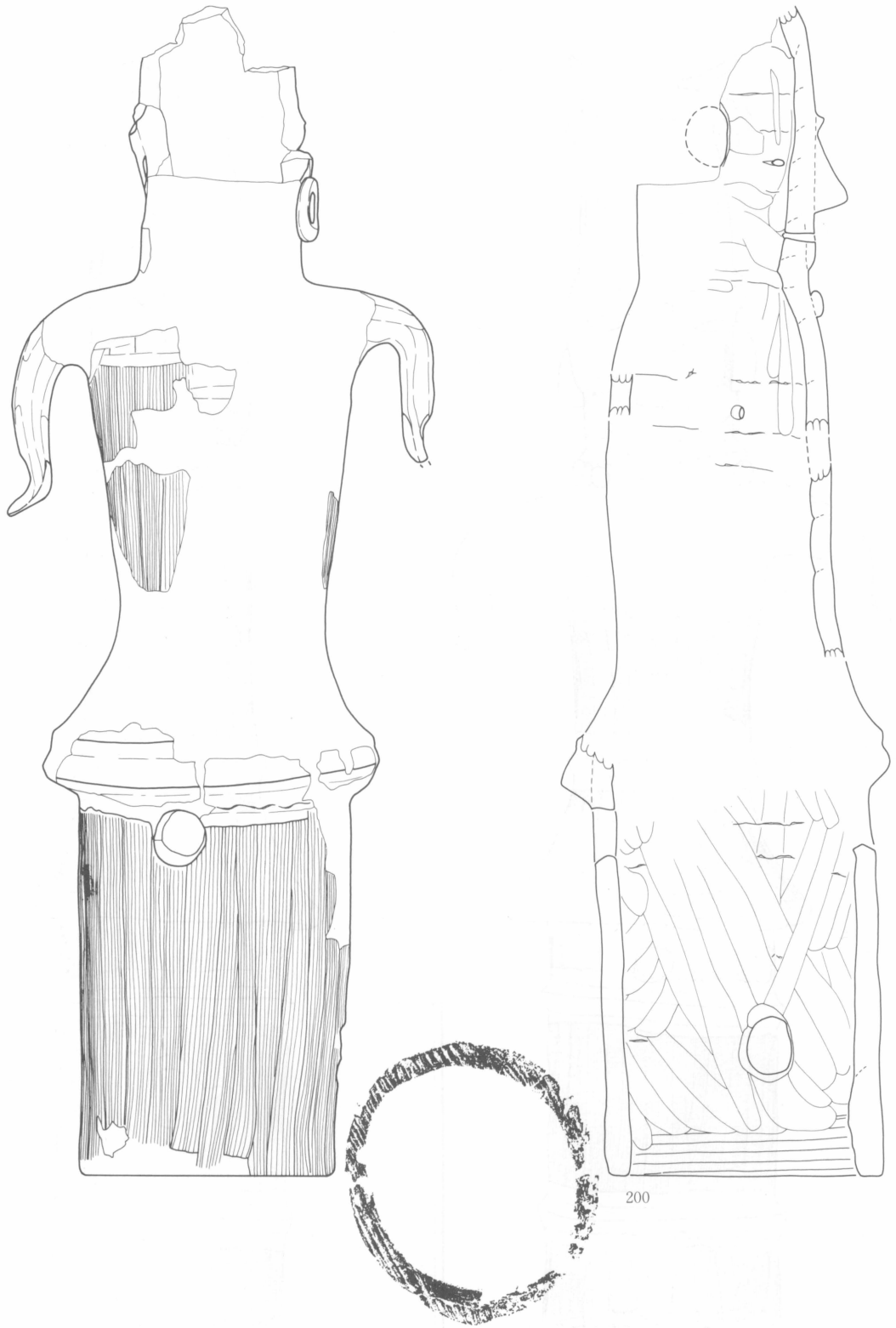


199

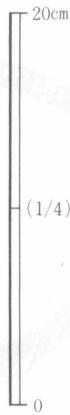
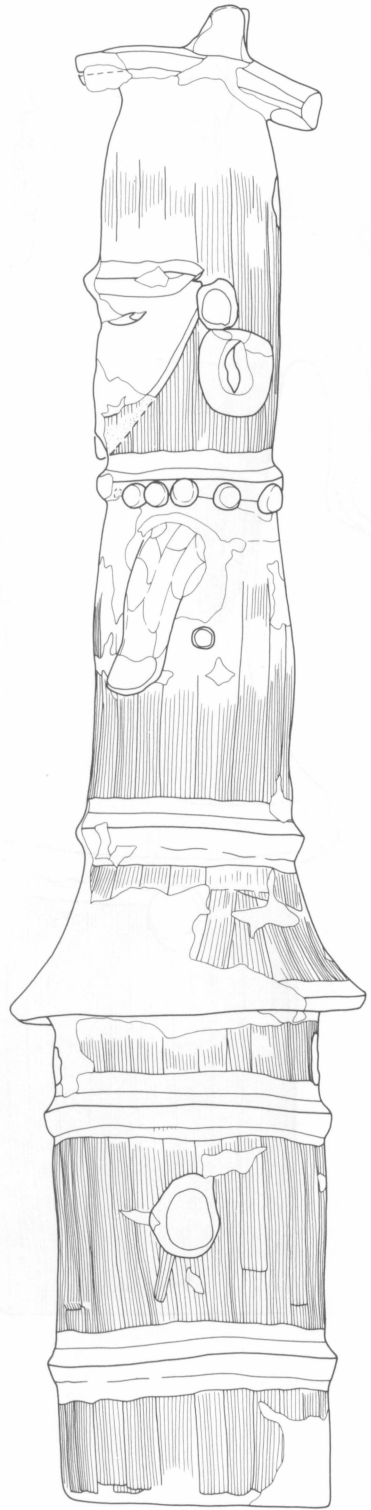
第53图 2号墳形象埴輪(2)



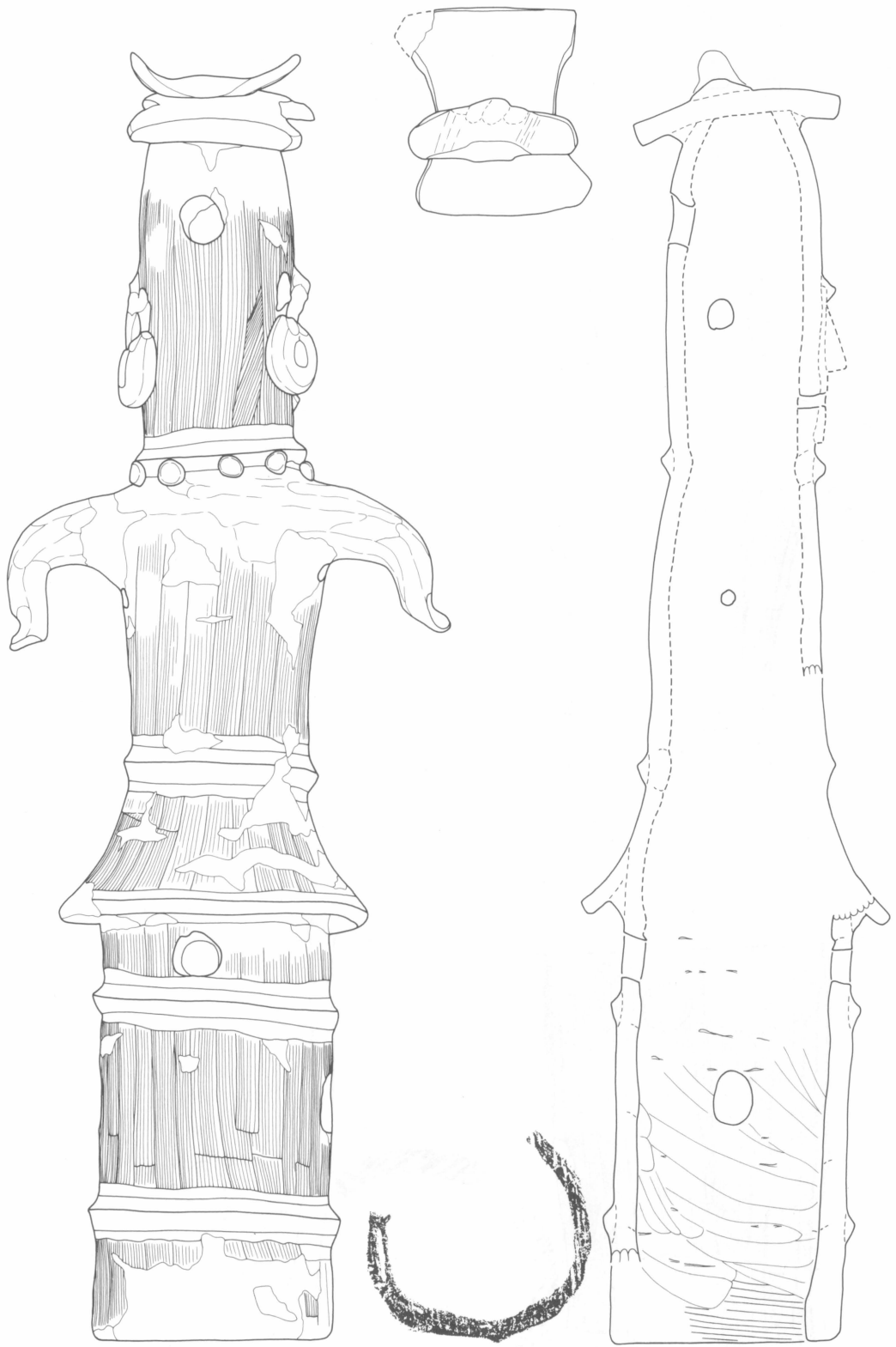
200



第54图 2号墳形象埴輪(3)

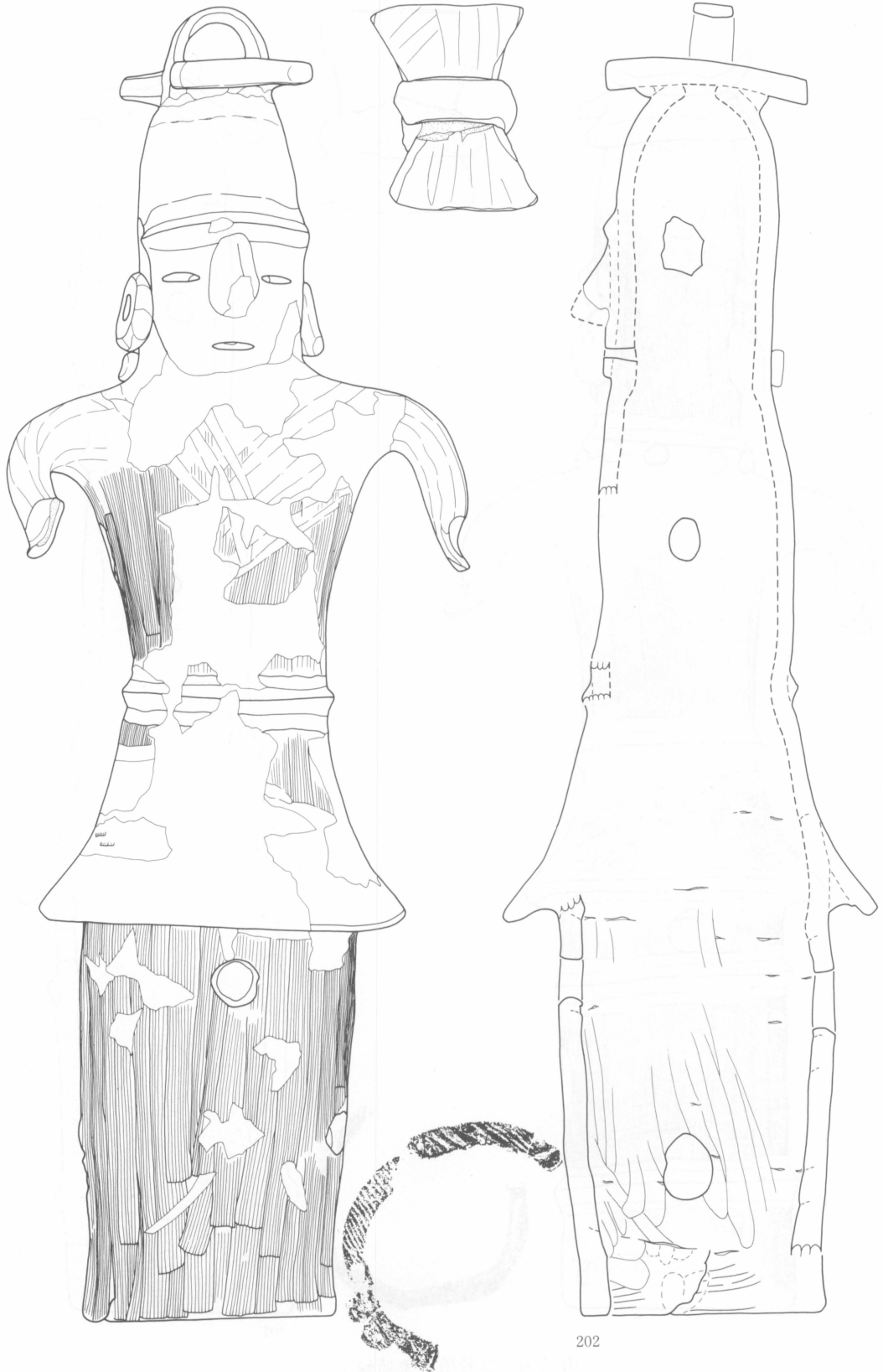


201

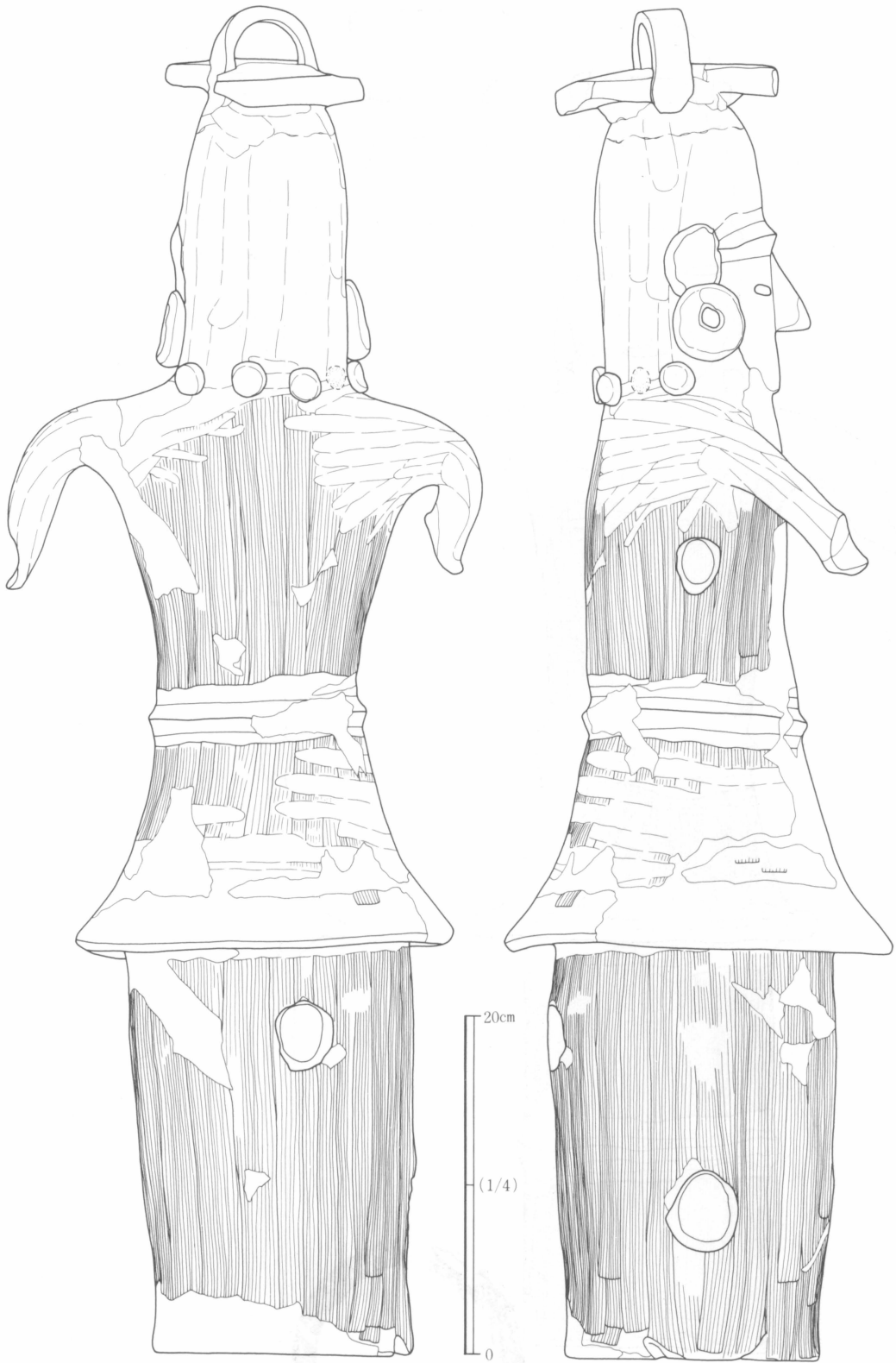


201

第55图 2号墳形象埴輪(4)

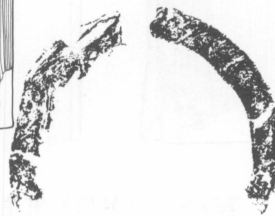
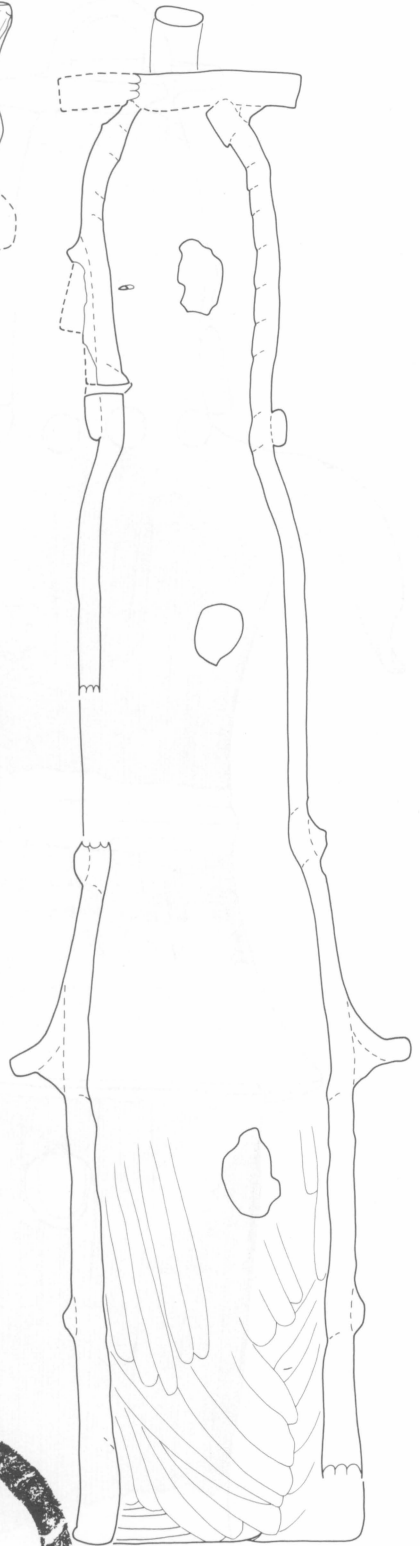


202

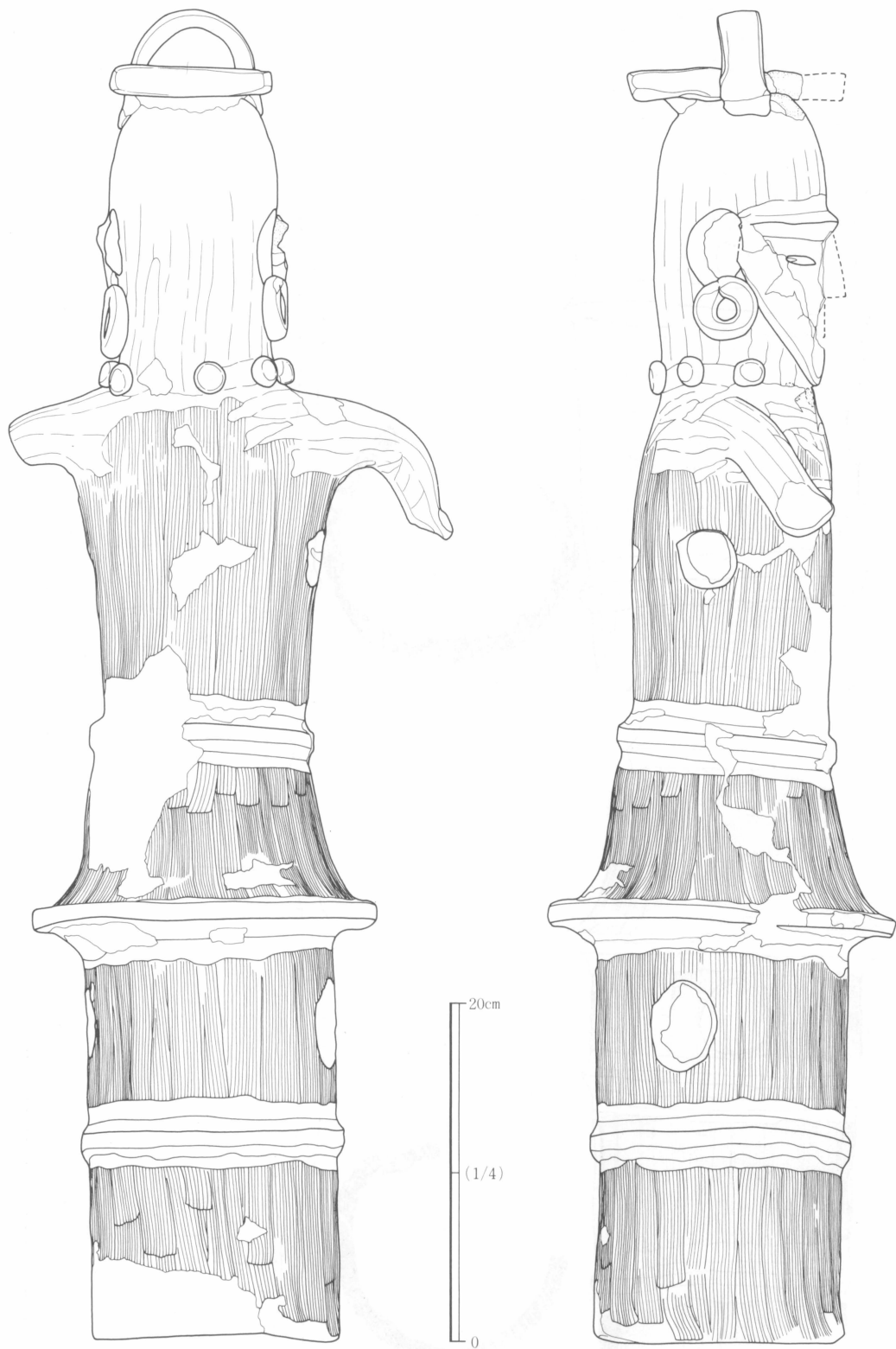


202

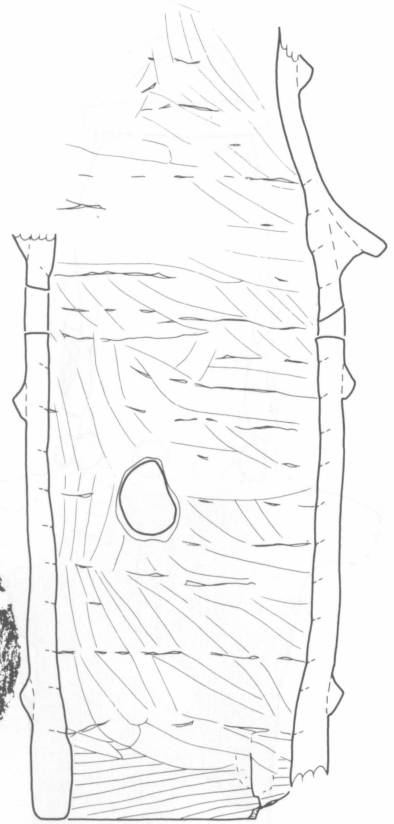
第56图 2号墳形象埴輪(5)



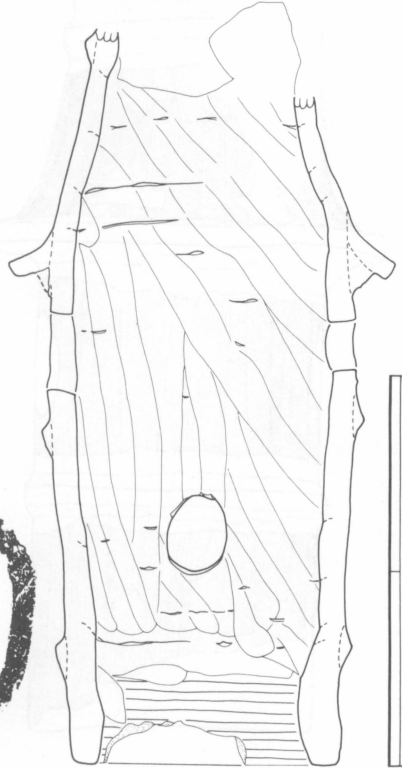
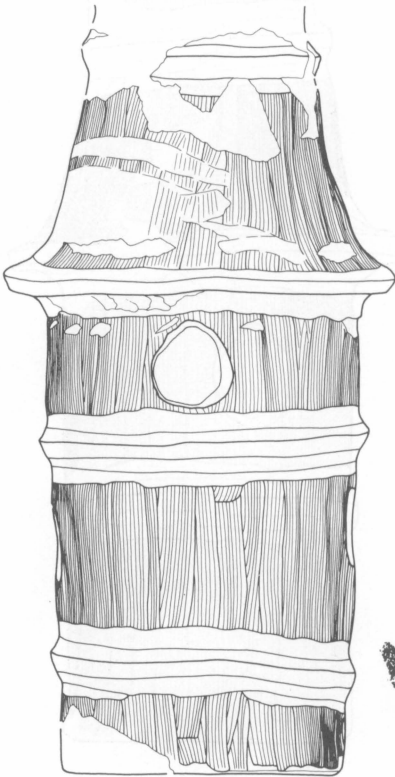
203



第57图 2号墳形象埴輪(6)



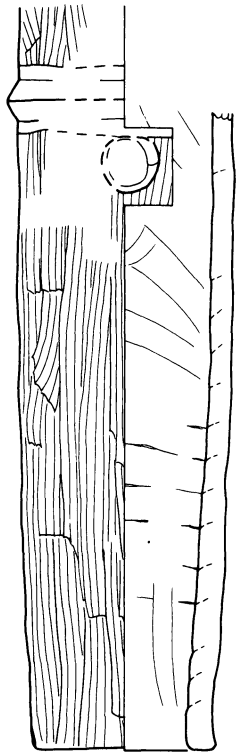
204



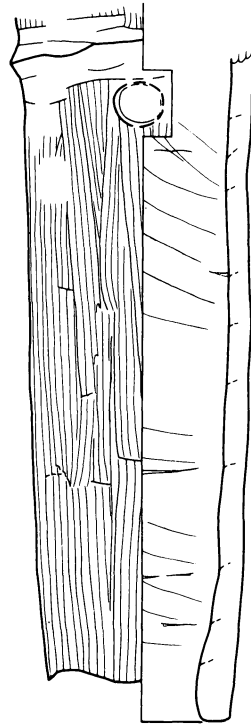
205



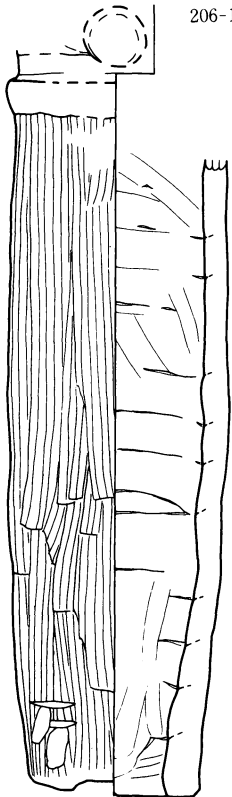
第58图 2号墳形象埴輪(7)



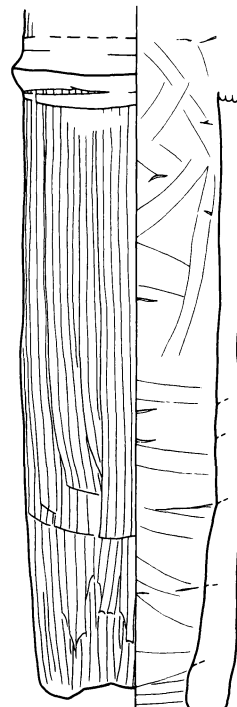
206-1



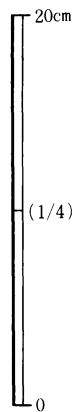
206-2



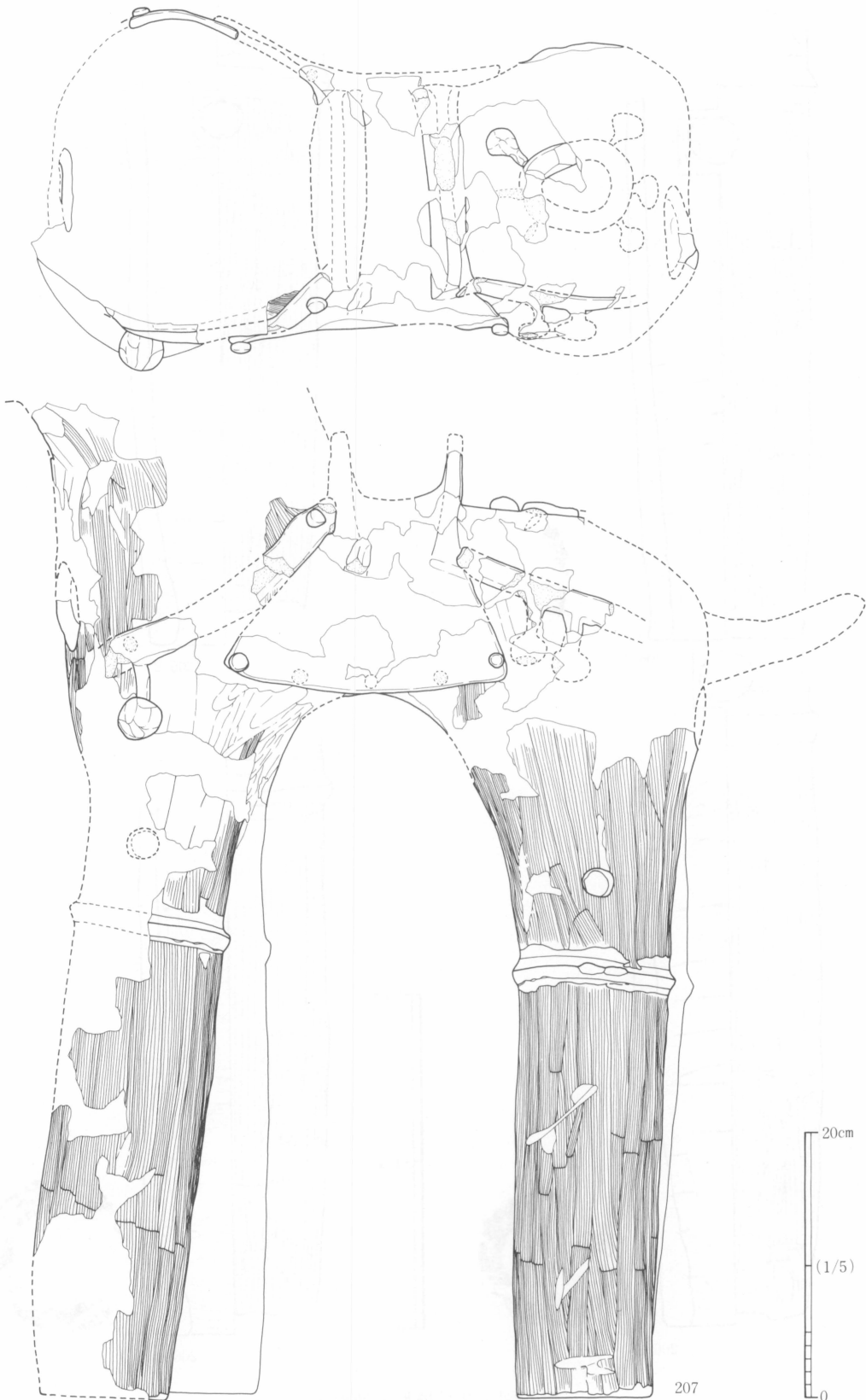
206-3

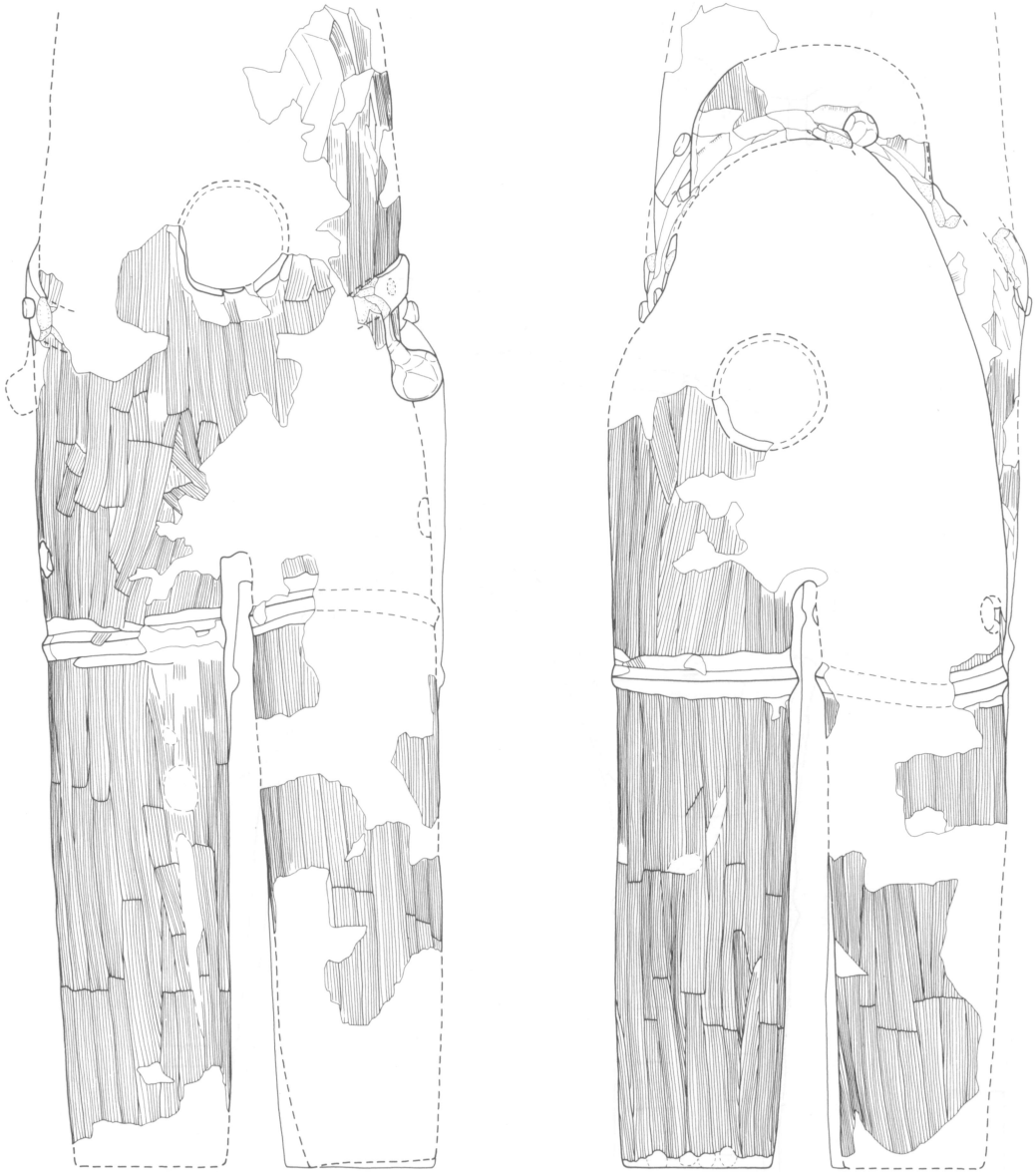


206-4



第59图 2号墳形象埴輪(8)

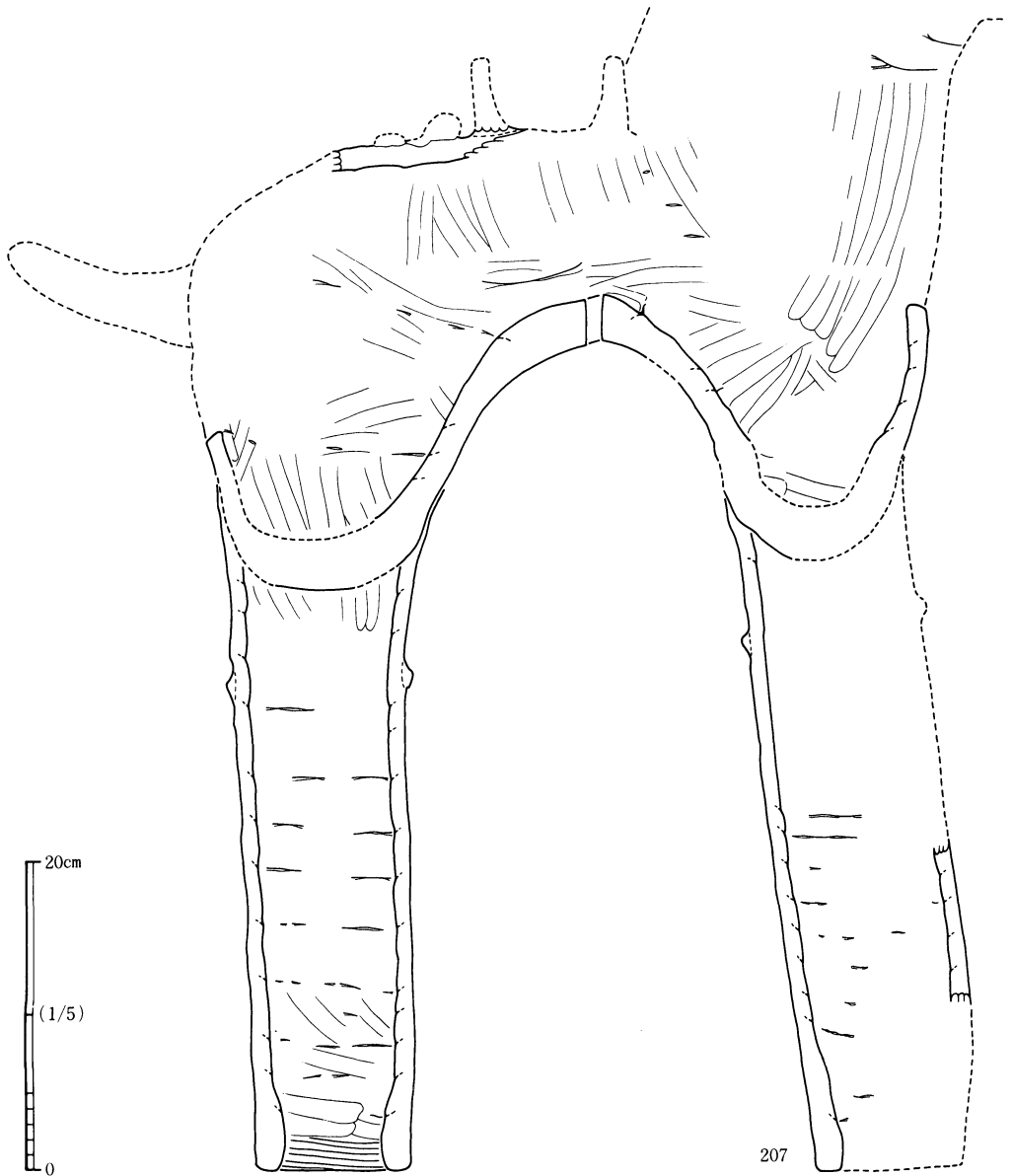
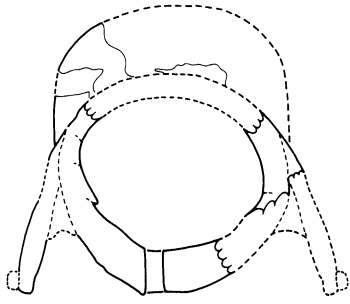




207



第60图 2号墳形象埴輪(9)



第61图 2号墳形象埴輪(10)

210は人物埴輪の頭部である。鬘状の粘土紐が背面の透孔まで巡っている。その粘土紐の上にはリボン状の粘土粒を付けている。

211～215までは人物埴輪の腕である。腕の先は外側に向けてヘラ状に折られているのみで、手の指の表現はない。216～220までは冠状の被り物の破片資料と思われる。216は、199の被り物同様にやや屈曲しながら上方へ開く形で、右側へ1本、左側へ2本上方へ伸びる線がヘラ描きされている。また、210の資料と類似する鬘状の粘土紐が回っている。219、220は同一個体の可能性がある。鬘状の粘土紐は、210同様に正面から背面へ向かって上がり気味に巻かれていたものと推測される。216は正面に相当し、刷毛目がナデ消されているのに対して、219、220は刷毛目がナデ消されていない。217、218は冠状の被り物の開口部の破片資料と思われる。円筒埴輪の口縁部や198の天冠状被り物の資料とは異なり、内面にヨコハケが施されていない。217、218ともに若干ナデ消されているが、刷毛目が残る資料であり、199や216などの被り物に類似する。221は刷毛目をナデ消した後にヘラ描きで線が表現されている。

222は人物埴輪の耳環が剥がれた器面の資料である。透孔の部分に美豆良の一部分が付着している。223～229は美豆良である。断面形は丸形で、透孔から耳環への取付き部分で曲がっているが、その下の棒状部分はほぼ直線的である点で、198の扁平な美豆良とは異なっている。

230～235は女子像の島田髷の部分の可能性がある。201～203の良好な資料から推察すると、髷の正面と背面は直線的で側面が内側に曲線を描いており、それぞれの資料が該当する。232は髷部分と頭部とをつなぐ際の補強の粘土紐が付着している。236は202、203の島田髷の結びと形が近似しているが、厚さが薄い。237は人物埴輪の手の先、又は島田髷の左右上方へ開く結いの先端と類似する。片側に板目圧痕が残っている。238は櫛である。櫛の先端部分に剥がれた痕跡がある。239は209の口部分である。顔面の粘土板が粘土紐で縁取られている。243、244も顔面の粘土板の縁取り部分である。240、241は鼻部分で、断面丸形の太い粘土紐の形状をよく残している。242、245は耳環である。粘土紐を丸く輪にしたままの形状である。美豆良が付いていたかは不明である。248は耳環が剥がれた器面の資料である。上部に残る透孔部分には、美豆良が剥がれた痕跡も残されている。246、247は頸部の資料である。247では腕の差込み部分に対応するホゾ部分が残っている。249～262は人物埴輪の首飾り、若しくは馬形埴輪の障泥の止め金具などと考えられる。263～266は刀状のものである。263は198の刀である。柄部を断面丸く作りだし、刀身部は幅広で直線的である。266は刀と刀子を上下につなげている。柄部は断面丸く作り出し、刀身部は全体にやや屈曲し、断面が細くやや丸い。264、265は266と同様の形態のもと考えられ、199の破片の可能性もある。刀状のものは、扁平で1本で完結する263と、全体形がやや屈曲し、刀と刀子がセットとなる266、199の少なくとも3セット出土している。

馬形埴輪 206は馬形埴輪の脚部である。P20に一括して立てられており、一個体の4本足に相当する。写実的な表現は認められず、円筒化している。それぞれ突帯が一条めぐり、206-1・2は

突帯直下に、206-3は突帯直上に透孔が1孔ある。それぞれの透孔は、出土した際の向きから、馬の側面外側の透孔と考えられる。206-3・4は、円筒埴輪の基部同様に内面に板目圧痕が残る粘土帯を巻き、その上から粘土紐を巻上げている。ただし、粘土帯の幅は短く、その上で巻上げている粘土紐の太さと大差ない。206-1・2については内面の磨滅が激しく、板目圧痕が残っていないが、206-3・4と基本的に同じ作り方である。

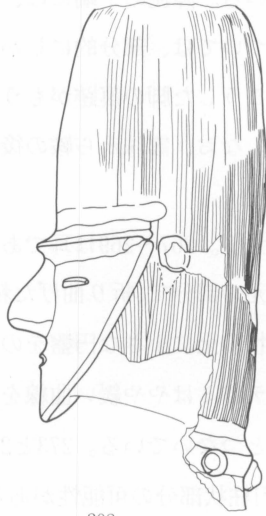
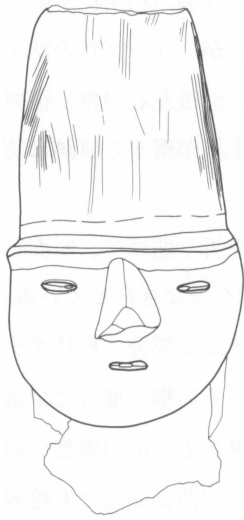
207も馬形埴輪である。鞍や雲珠、馬鈴などが装着されており、飾馬である。顔から頭部、頸部、鞍の前輪、雲珠の尻側部分から尻繫及び尻尾の部分が欠失している。残存高は74.8cm、残存長は51.4cmである。脚部には1条の突帯が回る。脚部の透孔は突帯の上に外側側面にのみ1孔ずつ設けられている。透孔はほかに正面と背面に推定径約7cmの大きいものが設けられ、腹部中央にも径約1cmの小さなものが1孔設けられている。脚部は円筒状で、底部付近が欠損しているものもあるが、円筒埴輪と同様に板目圧痕が残る粘土帯を巻いて基部を作っている。円筒状の脚部の径は、底部から左右の脚部が繋がる部分までほぼ均一である。並べた左右の脚部は、上部の約2cmの隙間に厚さ3cmほどの粘土塊を詰めて接合している。さらに接合した左右の脚部をまとめて、前脚と後脚それぞれで粘土紐の積上げを重ねる。その際、側面側のラインはそのままで、前脚側は正面の胸側よりも腹側を大きく広げ、後脚側は背面の尻側よりも腹側を大きく広げながら粘土紐を積上げる。こうして胸・尻の下部を作りながら、前脚と後脚の接合部である腹部を作っている。そして、最終的に両者を橋渡しするように粘土板を用いて接合している。腹部の接合には、内外面から粘土を付足している。腹部は側方から見るとアーチ状を呈している。また、この腹部の粘土板は両側面に向かって立ち上げ、胴体の側部をつなげる。さらに、前脚から胸下部と後脚から尻下部が接合された基部の上に再度粘土紐を積上げて、胸部から胴側部、尻部を作っている。胴部の両側面をつなげる背部は、粘土板を使用しているようである。外面調整は基本的に1次調整のタテハケのみであるが、前脚部と後脚部をつなぐ腹部については、広い面積にわたって、ナデ調整を施している。また、胴側部から背部、顎に近い胸部分もナデ調整である。内面は、脚部が下から上へのナデ、左右脚部の接合部から前後脚部の接合の高さまでは左右方向のナデ、背面と胸部分ではまた下から上へナデ調整である。脚部を作る段階→左右脚部の接合から前後脚部を接合する段階→背面から胸部分を作る段階の各過程と内面調整の方向の段階が一致しているようである。そして、本体成形後に障泥や胸繫、馬鈴などを付している。

胸繫は、鞍の前輪と障泥とが接する付近から伸びるが、胸の正面では剥落しているようである。胸繫の端と馬鈴が付く箇所には、粘土粒で止め金具を表現している。尻繫も鞍の後輪と障泥の接合付近から尻側へ伸びている。尻をまわっているかどうかは欠損のため不明である。左側面の尻繫には二個の馬鈴が付いていた痕跡がある。

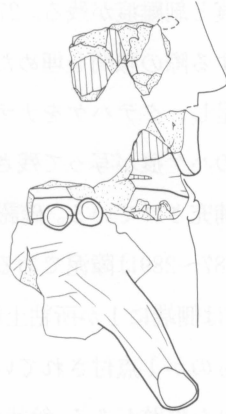
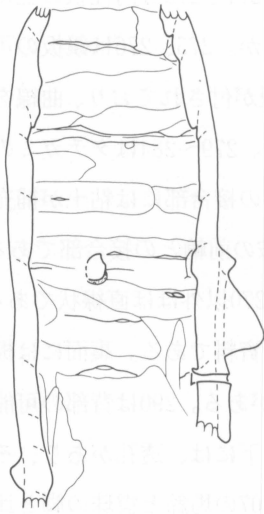
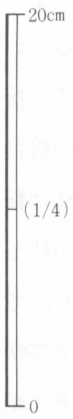
鞍部は鞍橋、障泥、鐙からなっている。前輪の取付き部に接して、鐙の根もとの痕跡が残る。

後輪には、タテハケが両面に残っている。障泥の下端には、止め金具状に5個の粘土粒が貼り付けられていたようである。雲珠については、部分的にしか残っていないが、リング状の粘土紐に鈴状の脚が1点付されている。こうした脚の痕跡がもう2か所あり、前後左右対称に復原すれば6脚又は8脚に復元できよう。なお、雲珠から鞍の後輪などに粘土紐が繋がる痕跡は認められない。

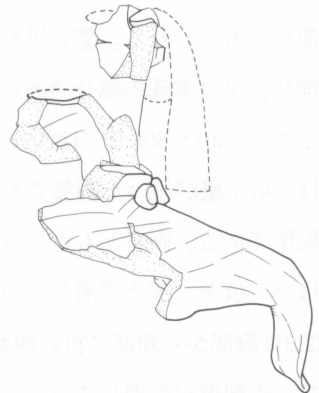
次に馬形埴輪の破片について説明する。267～269は耳である。粘土板を折り曲げて、断面U字状に作られている。267では耳の根元の部分で、折り曲げた粘土板の両端をつなぎ合せている。270はタテガミの頭頂部である。円柱状の上に小さな円盤をのせた角状タテガミ部分に板状タテガミ部分が接合されている。板状タテガミはやや緩い曲線を描いており、その根元部分に少量の粘土を付け足して、円柱状の部分とつないでいる。273と274は、角状タテガミの円盤部分の一部と考えられる。277、278はその円柱状部分の可能性のあるものである。277は側面にも接着痕がある。278は、粘土紐にひねりが加えられている。271と272も円柱状の上に断面台形の円盤が付いている。雲珠などに付く金具状のものであろうか。275、276は鏡板の可能性もある。裏面に板目の圧痕と剝離痕が残る。276では、細い粘土紐が付されており、曲線を描く本体と平らな本例を接合する際の隙間を埋めたものと推測される。279～284はタテガミの破片である。いずれも板状を呈し、タテハケをナデ消している。背との接合部には粘土が補充されている。接合面には背側のハケ痕が写って残されている。284は鞍の前輪との接合部である。前輪との接合部にも粘土が補充されている。確認されたタテガミは270以外ほぼ直線状である。285、286は鞍の輪である。287～289は障泥である。289は207の接合資料である。裏面には板目の圧痕が残っている。287には側端に1か所粘土粒が剝がれた痕跡がある。290は背部の可能性のあるものである。鈴状のものが1点付されている。鈴状のものの中には、透孔があり、その下には突帯状のものが剝がれた痕跡がある。鈴状のもの大きさが207の馬鈴と雲珠の脚と比べると後者に類似している。突帯状のものは、鞍の後輪の可能性もある。291、292は胴部の繫とそれに付く馬鈴の一部である。293は鈴状のものの根元部分が付いた胴部と思われる。294は繫と馬鈴の根元部分とも思われる。繫と思われる粘土紐の延長上には透孔が設けられている。295～303は繫の部分、又は雲珠の部分であろうか。301～303は繫の端部に当たる。304～319までは鈴状のものである。304や305などは207の馬鈴に、316や317などは207の雲珠の脚に類似している。320～323は、粘土紐が付いた胴部である。207の胸繫や尻繫の粘土紐と比べると著しく細い。324、325は尻尾である。両者ともホゾへの差込み部が良好に残っている。324はハケ痕を良好に残し、325はハケ痕を一部ナデ消している。326、327は透孔ないし、口部分とも推測されるが不明である。329は胸部から頸部に折れ曲がる部分の可能性もある。330、331は腹部である。328は断面円形で、両端部が欠損している。細くなる端部側は折れ曲がっているようである。全面ナデ調整されている。部位は不明である。



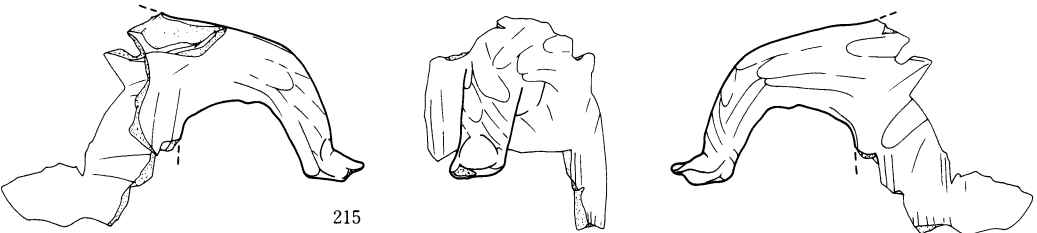
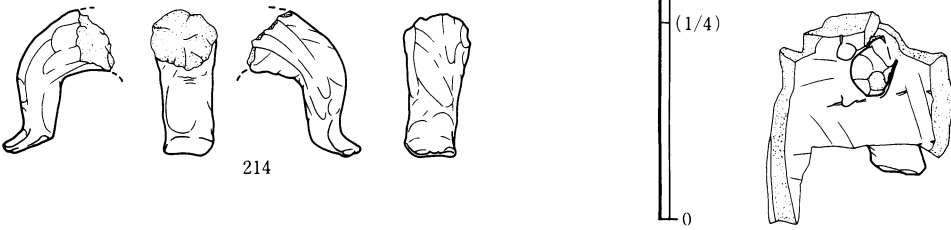
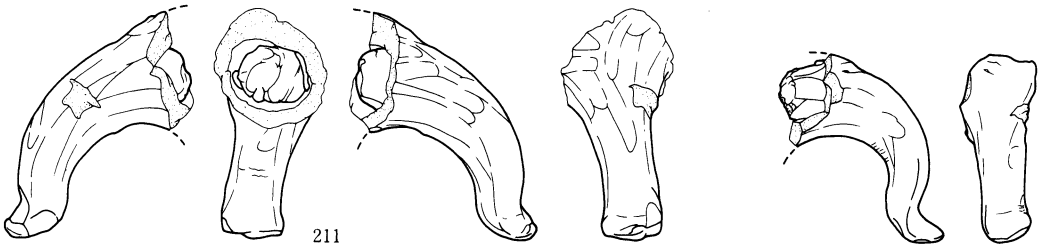
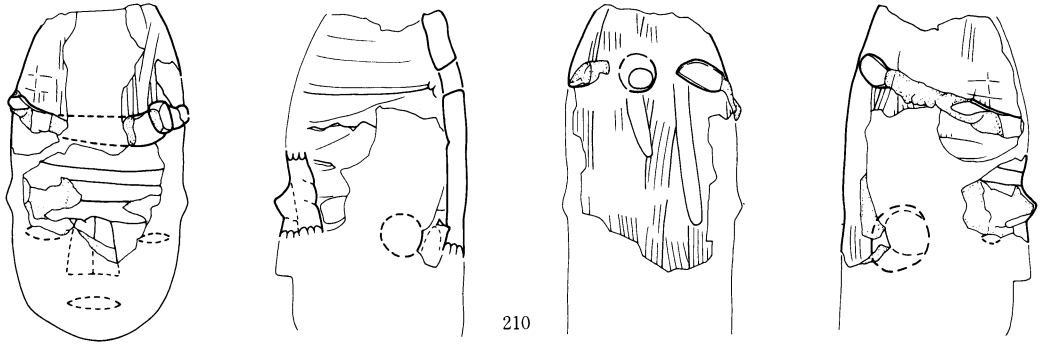
208



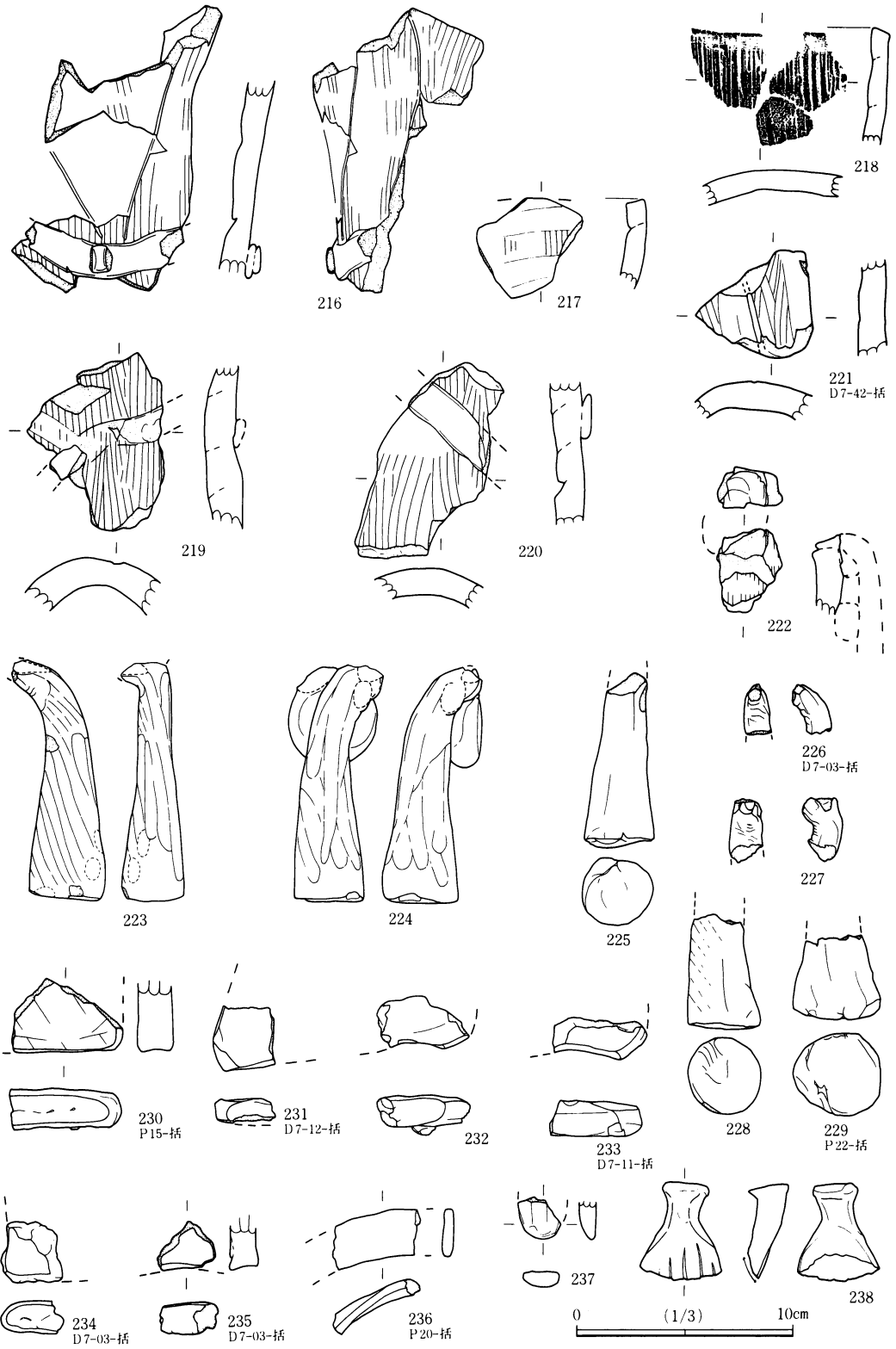
209



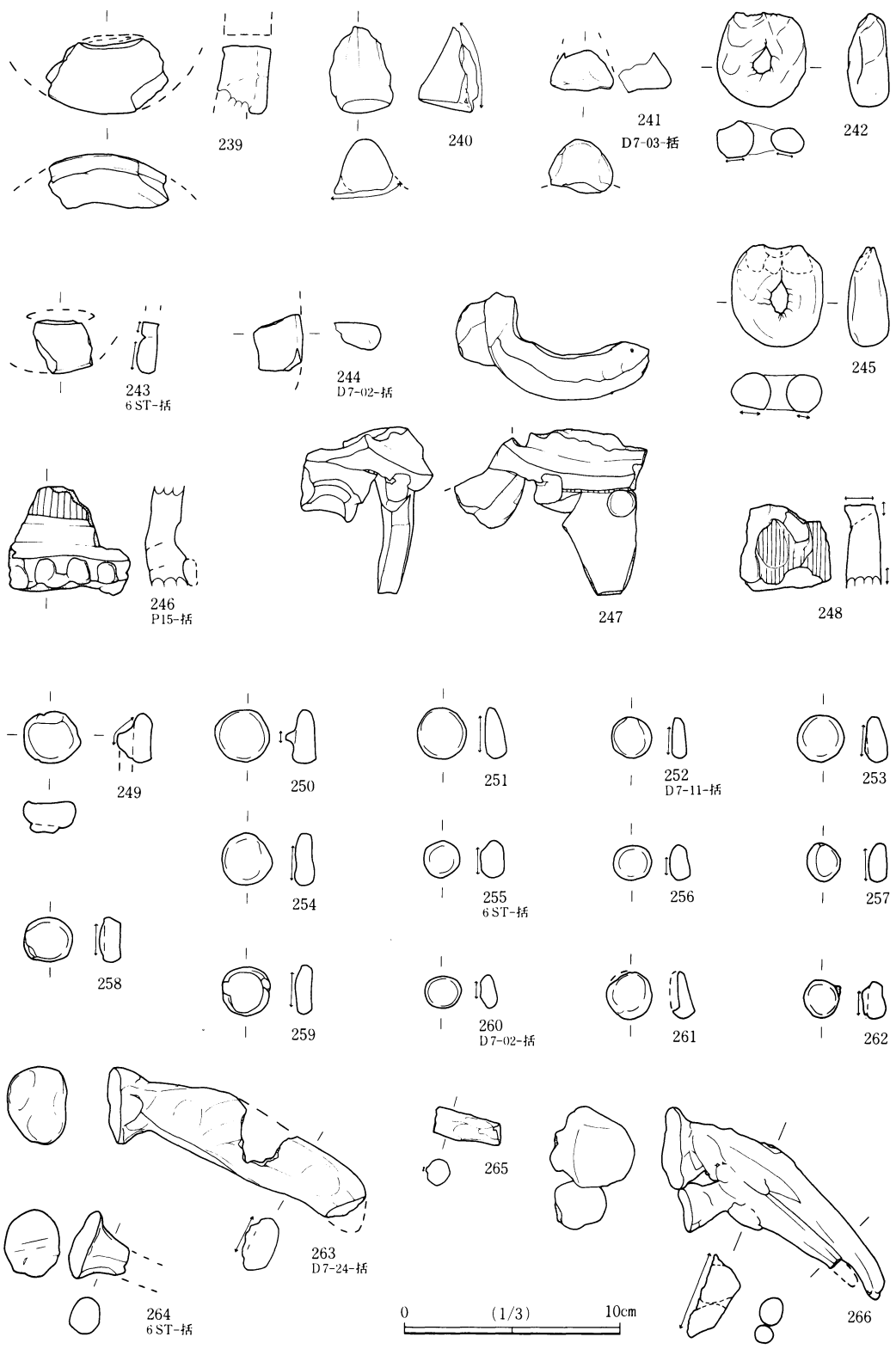
第62图 2号墳形象埴輪(11)



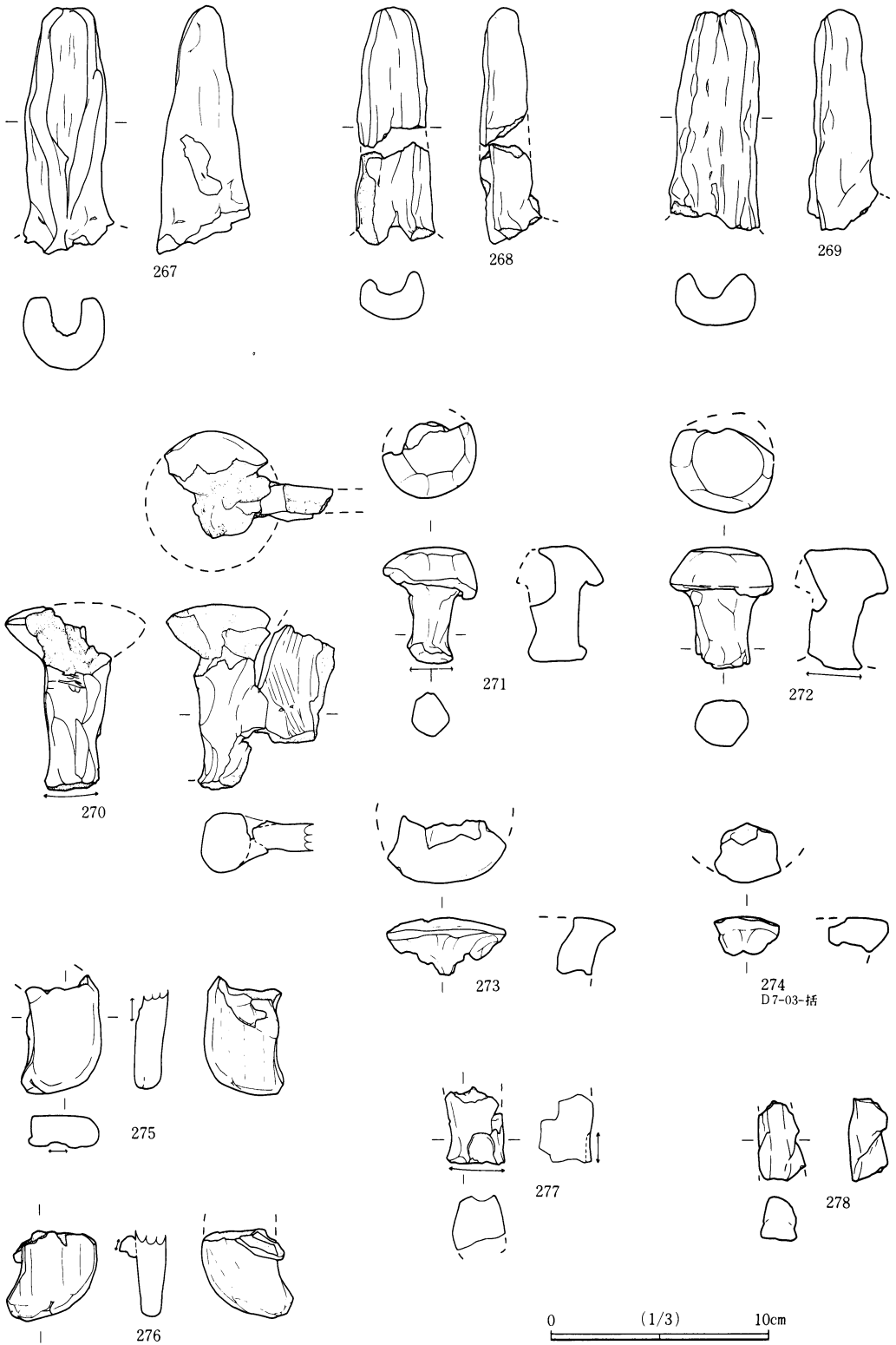
第63图 2号墳形象埴輪(12)



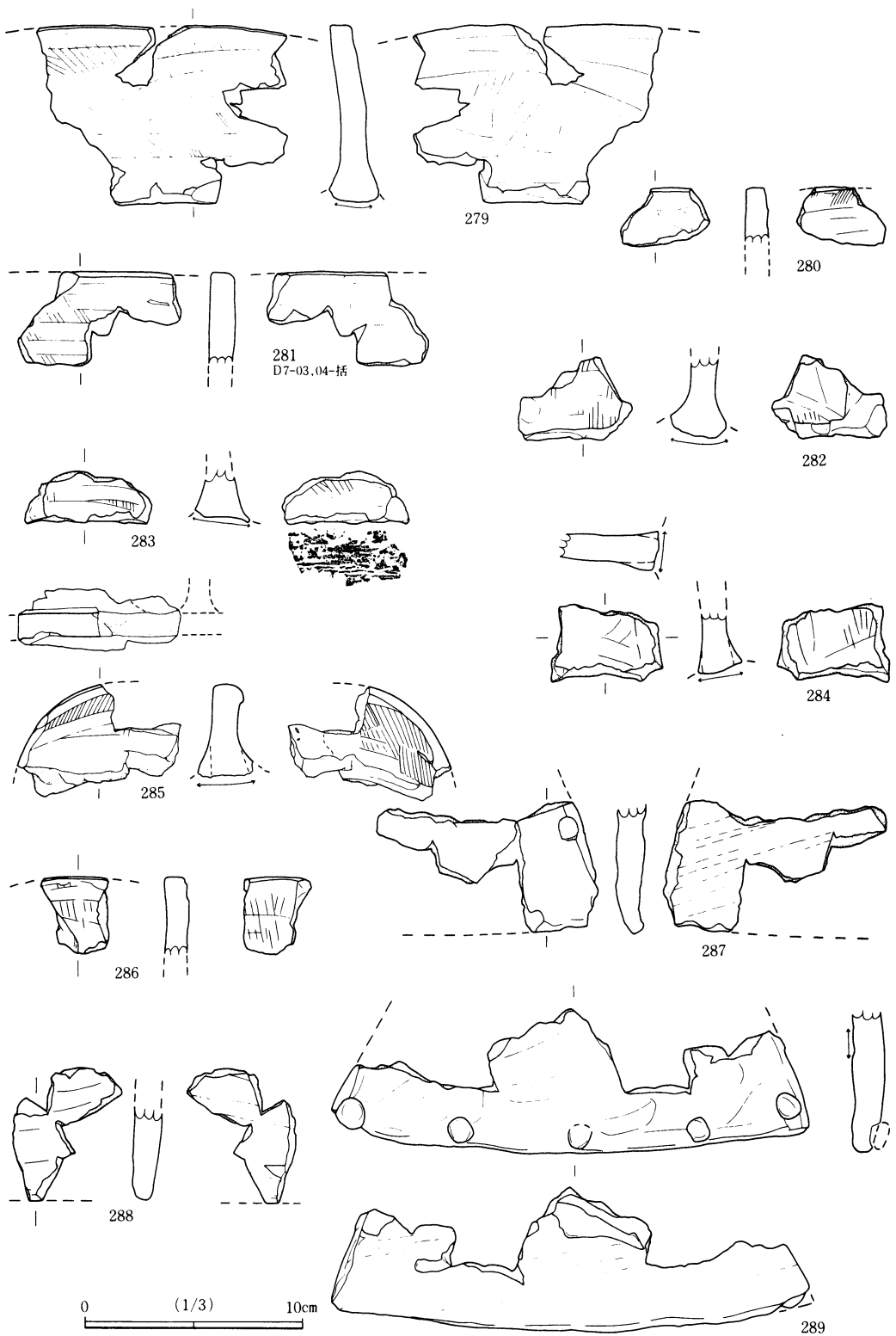
第64图 2号墳形象埴輪(13)



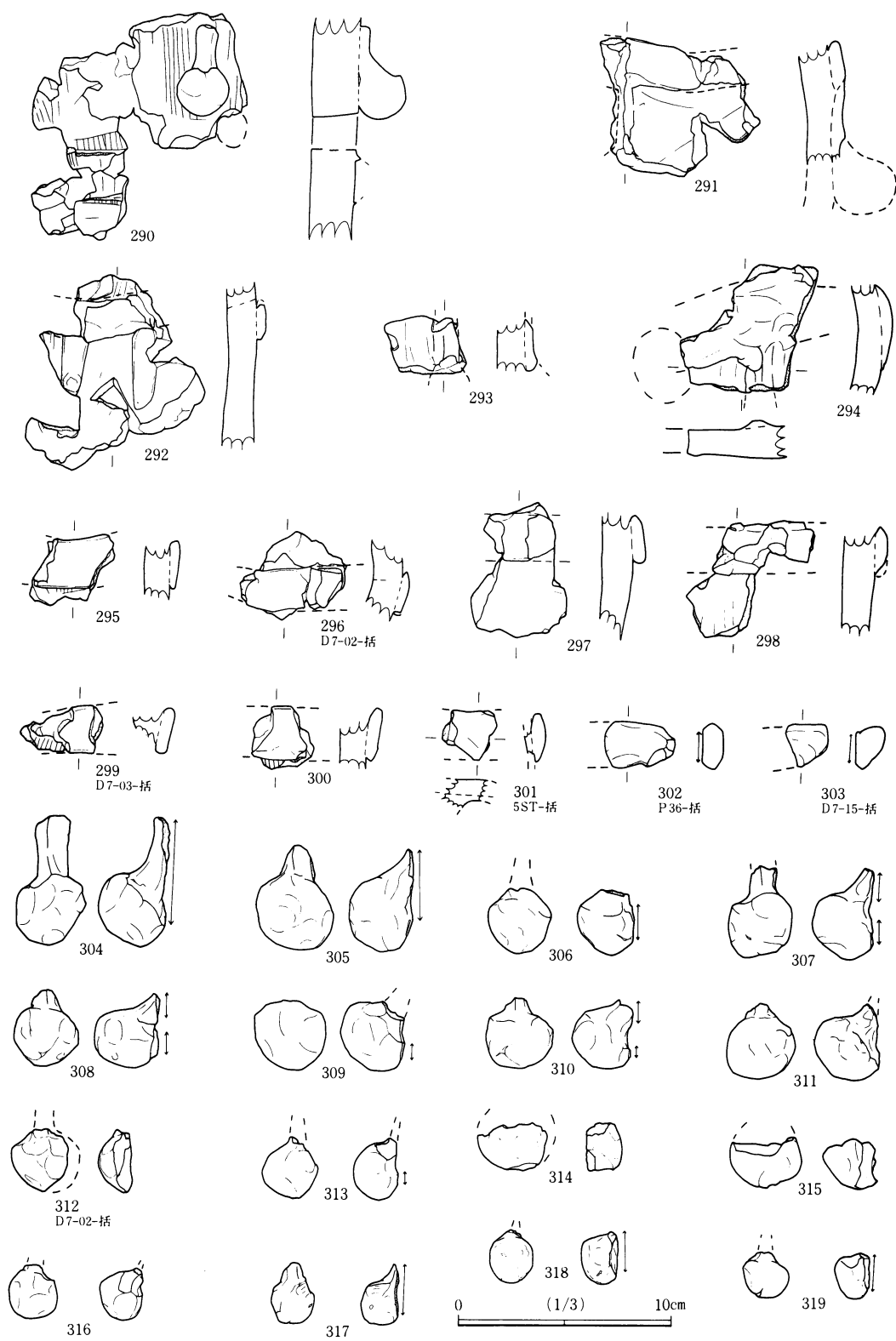
第65图 2号墳形象埴輪(14)



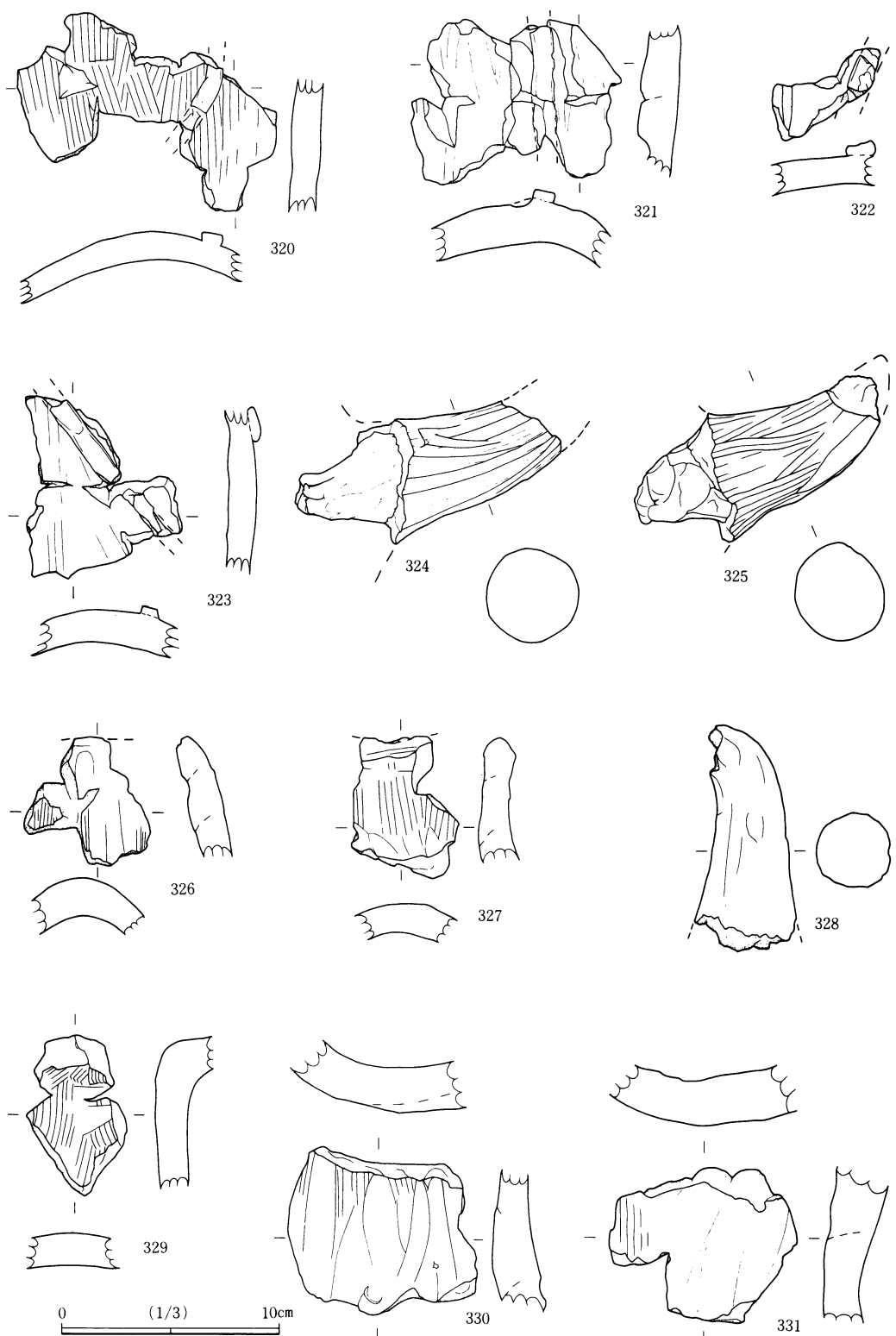
第66图 2号墳形象埴輪(15)



第67图 2号墳形象埴輪(16)



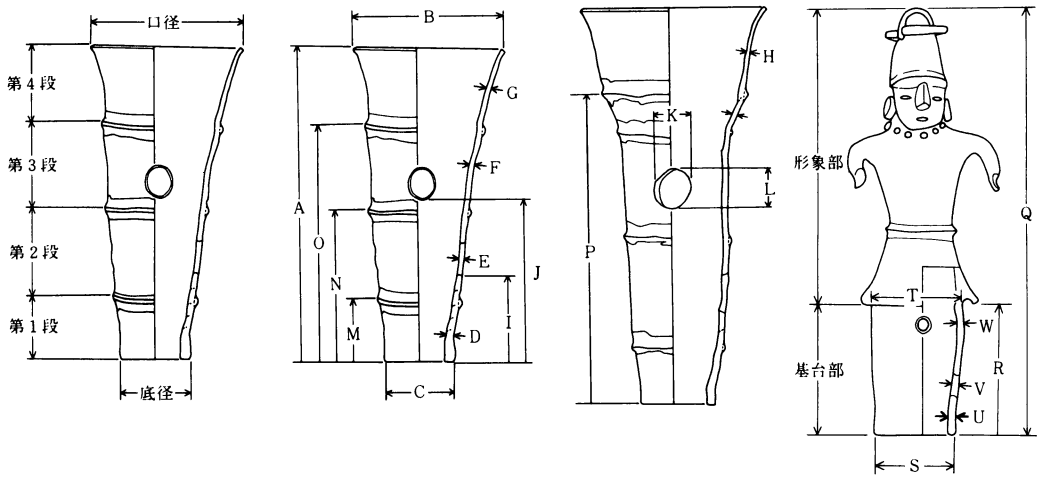
第68图 2号墳形象埴輪(17)



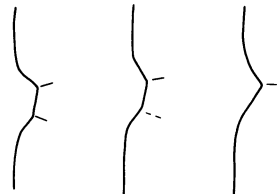
第69图 2号墳形象埴輪(18)

埴輪観察表凡例

1. 円筒表は、外寸の計測（器高・口径・底径）、器厚、透孔の位置と計測、突帯の位置、突帯形、ハケメの分類と単位、色調・胎土・焼成、成形・調整などに分け記載した。
2. 形象表は、外寸の計測（器高・基台高・基台上端径・底径）、基台の器厚、基台の透孔の位置と計測、基台の突帯の位置、突帯形などに分け記載した。
3. 器高・口径・底径・基台高・基台上端径は、任意に計測箇所を選び計測したため、実測図とは必ずしも一致しないが、おおむね平均値を示す。また、()書きは推定値を、計測できないものは、-で表示した。
4. 器厚は、普通形円筒埴輪はすべて3条4段構成と認められたため、下から第1段～第4段の計4か所、朝顔形円筒埴輪は第1段～第5段の5か所の各段の遺存良好な部分を任意に選び計測した。形象埴輪は基台部の各段の器厚を計測した。基台部が無条の資料は、透孔の位置から各段に相当する部分の器厚を計測した。
5. 透孔は、底面から透孔下端までの寸法と透孔の幅・高さを計測表示した。円筒埴輪は第2段と第3段に2個一対で穿つため4孔の計測値を表示する。なお、形象埴輪の基台部のうち透孔が2孔の資料については、その2孔についてのみ第2段の欄に表示した。
6. 突帯は、下から第1突帯・第2突帯・第3突帯とし、底面からの高さを計測した。形象埴輪については、基台部の突帯のみ表示した。
7. 突帯形は、断面形がくずれた台形ながら下側の稜線が明確に残るものをAとし、くずれた台形で下側の稜線も不明確なものをBとし、断面形が三角形のものをCとした。数値は上から突帯の上側稜線と下側稜線の幅・突帯の幅・突帯の高さを表示した、なお、突帯形の把握と計測についても、任意の箇所を選び計測した。おおむね平均的な形態と数値を示す。また、形象埴輪のうち、基台部が無条の資料については、形象部の突帯形を表示する。
8. ハケメは、重複していない箇所を選び2cm幅の本数を測定した。ハケメの分類については、10条～14条／2cmをハケI、15条～21条／2cmをハケII、5条～8条／2cmをハケIVとした。なお、器面に残された凸幅が顕著に狭く凹幅が広い特徴的なハケメが認められたので、これを別にハケIIIとした。
9. 色調・胎土・焼成は、それぞれ凡例を設けアルファベットで表示した。
10. 成形・調整については、内面調整、基部成形の一带「の」の字状接合と一带逆「の」字状接合の表示、基部内面の圧痕、底部の痕跡について記した。
11. 備考欄には、埴輪列中からの出土品は遺構番号を記し、外面タテハケの特徴や口縁形などについても記した。口縁形については、凡例を設けアルファベットで記した。なお、外面タテハケの際に底面付近でハケ工具を止めて押しつけた後、上方向へタテハケを施す特徴が顕著に認められる資料については、「底面付近に特徴的ハケ」と記した。



突帯形分類



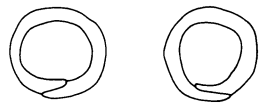
突帯 A 突帯 B 突帯 C

口縁形分類

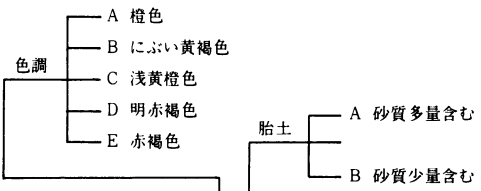


口縁形 A 口縁形 B 口縁形 C

基部成形 (埴輪を倒立させて見た底部)



一帯「の」の字状接合 一帯逆「の」の字状接合

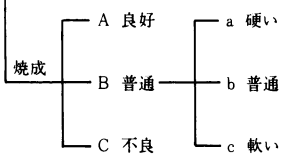


円筒埴輪観察表

No	器高	口径 底径	器厚	透孔				突帯高	突帯形	ハケメ	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
				第2段		第3段									
6	A 50.6	B (24.8) C 11.2	H G 0.7 F 0.9 E 1.1 D 1.4	I		J		P							
				K 4.6 L 4.6	L 5.5 5.5	K - 4.6	L 5.0 5.2	N 24.7 M 9.0							

形象埴輪観察表

No	器高	基台高	基台上端径 底径	器厚	基台透孔				突帯高	突帯形
					第2段		第3段			
202	Q 80.6	R 24.0	T 17.0	W 1.4 V 1.5 U 1.7	10.1	6.7	19.1	17.1		
			(2.5)		2.6	3.1	2.9			
			4.5		4.8	3.5	4.0			



No	器高	口径 底径	器厚	透 孔			突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段									
1	16.7+	—	—	—	—	—	—	B 0.7	10 I	D	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	P 1 ・底面付近に特徴的ハケ
		12.2	1.3 1.6	12.7 —	— —	— —	— —	2.5 7.9	0.5					
2	27.2+	—	—	—	—	—	—	B 0.9	10 I	D	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	P 2 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ ・粘土紐左まわり
		11.3	0.9 1.4	13.9 —	12.5 —	— —	— —	9.2	0.4					
3	25.2+	—	—	—	—	—	—	C 0	18 II	D	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P 4 ・粘土紐左まわり
		13.1	1.2 1.5	11.9 5.2	12.0 4.7	23.3 —	— —	21.4 8.6	2.3 0.5					
4	(48.0)	(22.0)	1.1	—	—	—	—	B 0.6	13 I	C	B	Bb	内面 やや丁寧なナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P 3 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ ・口縁形 A
		12.0	1.1 1.5	12.7 5.0	13.2 —	26.1 5.2	— —	33.1 22.0	0.6 2.0					
5	26.6+	—	—	—	—	—	—	C 0	12 III	E	B	Bb	内面 雑なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	P 44 ・外面タテハケが底面 3 cm 上から始まる
		11.4	1.3 1.8	10.8 —	— —	23.3 —	— —	20.9 7.8	1.6 0.9					
6	50.6	(24.8)	0.7	—	—	—	—	A 0.6	13 III	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P 5 ・底面付近に特徴的ハケ ・粘土紐左まわり ・口縁形 C
		11.2	0.9 1.1 1.4	13.8 4.6 4.6	13.5 5.5 5.5	26.0 — 4.6	27.1 5.0 5.2	38.4 24.7 9.0	0.6 1.9 0.6					
7	25.7+	—	—	—	—	—	—	B 0.7	13 I	C	B	Bc	内面 やや丁寧なナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基底内面 板目圧痕 底部 ナデ	P 43 ・底面付近に特徴的ハケ
		11.6	1.0 1.1 1.6	12.3 4.9 4.7	12.5 5.4 5.5	23.7 — —	— — —	20.7 8.2	1.7 0.4					
8	27.8+	—	—	—	—	—	—	C 0	13 I	C	B	Bc	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目・篠圧痕	P 6 ・外面に補修ナデあり ・外面タテハケが底面 2 cm 上から始まる
		11.4	0.8 1.0 1.5	9.5 4.7 5.2	8.8 3.9 4.7	23.0 4.8 —	21.1 5.1 —	20.5 8.7	1.8 0.5					
9	35.2+	—	—	—	—	—	—	C 0	17 II	D	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	P 8 ・底部の一部欠損 ・粘土紐左まわり
		11.6	1.1 1.2 1.9	12.3 5.3 5.5	11.4 4.6 4.6	25.9 5.0 —	23.6 4.8 —	32.8 21.9 7.4	0 2.1 0.7					
10	36.0+	—	—	—	—	—	—	C 0	10 I	D	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	P 9 ・底部の一部欠損 ・粘土紐左まわり
		12.4	1.0 1.0 1.7	9.4 5.5 6.3	10.6 5.0 4.7	23.2 4.9 6.1	21.4 4.8 5.4	31.4 19.5 7.7	0 2.0 0.8					
11	65	(30.6)	0.7	—	—	—	—	C 0	9 III	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	P 7 ・朝顔形円筒埴輪 ・底面付近に特徴的ハケ ・底部の一部欠損 ・口縁形 C
		11.4	0.8 1.0 1.2	14.3 4.4 4.2	15.4 5.2 6.0	— — —	— — —	27.0 9.9	0.4					

単位=cm

第3表 円筒埴輪観察表(1)

No	器高	口径 底径	器厚	透 孔				突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考		
				第2段		第3段											
12	40.8+	—	—	0.9 1.0 11.4	14.5 5.1 4.8	15.0 5.4 6.0	28.8 5.0 —	27.3 — —	36.3 23.9 9.6	0.8 1.9 0.5	B I	12	D	B	Bb	内面 雑なナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P10 ・底面付近に特徴的ハケ ・底部の一部欠損 ・粘土紐左まわり
13	38.2+	—	—	0.9 1.1 12.4	11.6 5.4 5.6	11.5 4.5 4.4	21.8 5.5 5.1	24.3 5.0 3.5	31.8 19.4 7.7	0 2.0 0.5	C	17	D	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	P11 ・粘土紐左まわり
14	40.3+	—	—	1.0 1.1 11.2	13.3 5.4 —	— 4.5 —	26.1 5.4 —	— 5.4 —	36.0 22.5 9.8	0 2.1 0.7	C	18	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面斜ニ板目圧痕 底部 板目圧痕、篠圧痕	P12
15	37.8+	—	—	0.9 1.1 12.2	13.3 4.9 5.3	12.3 5.4 5.5	25.7 5.0 —	25.5 5.6 —	35.4 22.8 8.9	0.7 1.8 0.6	B	13	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	P13 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ ・粘土紐左まわり
16	37.1+	—	—	1.1 1.2 11.4	12.6 5.6 4.7	12.1 5.4 5.4	24.3 6.1 6.1	24.2 6.1 6.3	34.4 21.4 9.3	0 1.4 0.4	C	16	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面斜ニ板目圧痕 底部 荒砂付着	P14 ・底部の一部欠損 ・粘土紐左まわり
17	39.3+	—	—	1.0 1.1 12.4	11.8 5.2 5.0	12.3 5.6 5.8	25.0 4.9 —	24.1 — —	33.8 21.1 9.0	0.7 1.8 0.6	B	12	A	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕、荒砂	P35 ・底面付近に特徴的ハケ ・粘土紐左まわり
18	24.7+	—	—	0.9 11.8	13.1 4.2 4.4	13.5 5.8 (5.2)	— — —	— — —	0.5 1.9 9.0	A III	12	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面縦ニ板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	P33 ・底面付近に特徴的ハケ	
19	23.9+	—	—	1.2 12.0	10.7 5.0 —	10.8 4.7 —	22.1 — —	— — —	0 20.3 7.5	0 1.9 0.5	C	16	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、篠圧痕	P38 ・粘土紐左まわり
20	28.3+	—	—	1.3 12.0	11.3 5.0 —	12.9 5.0 5.1	24.2 — —	— — —	0.6 21.7 8.2	0.6 2.4 0.5	B	12	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、篠圧痕	P25 ・底面付近に特徴的ハケ
21	35.5+	—	—	0.9 1.0 13.4	11.7 4.6 5.4	13.0 5.4 5.3	29.2 — —	28.4 — —	— 21.5 9.0	0 2.0 0.5	C	11	E	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	P26 ・底面付近に特徴的ハケ ・外面タテハケが底面2cm 上から始まる
22	47.8+	22.2	0.8	1.0 1.1 12.1	12.6 4.3 —	13.1 5.5 —	25.5 (4.7) 5.1	25.7 5.2 5.3	35.2 23.4 10.0	0.5 1.7 0.4	A III	12	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P29 ・底部の一部欠損 ・口縁形 B

第3表 円筒埴輪観察表(2)

No	器 高	口径 底径	器 厚	透 孔				突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土 成	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段		第3段									
23	26.8+	—	—	14.4 1.3	14.5 5.4	—	—	—	B 0.7	11 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 篠圧痕	P 2 7 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ
24	18.0+	—	—	9.9 1.2	12.0 (5.3)	—	—	—	C 0	15 II	C	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 斜二板目圧痕 底部 篠圧痕、荒砂	P 2 8 ・底部の一部欠損
25	31.6+	—	—	14.0 1.1	— 5.2	25.7 5.5	—	—	B 0.6	10 I	E	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形粘土帯繋ぎ目 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P 3 0 ・底面付近に特徴的ハケ
26	18.1+	—	—	12.4 1.0	— —	— —	—	—	B 0.7	11 I	C	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 篠圧痕、荒砂	P 3 1 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ
27	22.0+	—	—	11.3 0.9	13.2 5.1	— 5.6	—	—	B 1.0	11 I	D	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	P 3 2 ・底面付近に特徴的ハケ ・外面に補修ナデ有り
28	21.7+	—	—	14.4 1.0	— —	— —	—	—	B 0.8	12 I	C	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、篠圧痕	P 3 9 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ
29	9.8+	—	—	— —	— —	— —	—	—	—	13 I	E	B	Ba	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目、篠圧痕	P 4 0 ・底面付近に特徴的ハケ
30	25.9+	—	—	16.7 0.9	— 5.1	— (5.4)	—	—	B 0.6	11 I	C	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部板目・篠圧痕、荒砂	P 4 1 ・底面付近に特徴的ハケ
31	11.2+	—	—	— —	— —	— —	—	—	B 0.5	10 I	E	B	Ba	内面丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	P 4 2 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ ・外面に補修ナデ有り
32	13.9+	—	—	12.3 1.1	11.9 —	— —	—	—	B 0.7	13 I	C	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	P 3 4 ・底面付近に特徴的ハケ
33	14.8+	—	—	14.5 1.2	— —	— —	—	—	B 0.6	14 I	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ

第3表 円筒埴輪観察表(3)

No	器高	口径 底径	器厚	透孔			突帯高	突帯形	ハケメ	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
				第2段	第3段									
34	17.2+	—	—	12.2	—	—	—	B 0.6	14 I	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
35	10.3+	—	—	—	—	—	—	B 0.9	11 I	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ
36	7.2+	—	—	—	—	—	—	—	14 I	E	B	Bc	内面 丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
37	6.8+	—	—	—	—	—	—	—	14 I	E	B	Ba	内面 ヨコナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 板目・篠圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
38	11.4+	—	—	—	—	—	—	C 0	13 I	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目・篠圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
39	14.3+	—	—	13.4	—	—	—	B 0.5	14 I	C	B	Bc	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
40	10.5+	—	—	—	—	—	—	—	12 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ ・外面タテハケが底面2cm 上から始まる
41	12.1+	—	—	—	—	—	—	B 0.6	10 I	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 —	
42	31.4+	—	—	13.6	—	—	—	B 0.8	12 I	C	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
43	17.2+	—	—	14.0	—	—	—	B 1.0	12 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目・篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
44	13.1+	—	—	—	—	—	—	C 0	11 I	E	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 — 基部内面 斜二板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	・外面タテハケが底面2cm 上から始まる ・61と同一個体か

第3表 円筒埴輪観察表(4)

No	器 高	口径 底径	器 厚	透 孔				突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段		第3段									
45	16.4+	-	-						B	12	E	B	Bc	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目・篠圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
				13.0	12.9	-	-	-	0.5	I					
			1.1	-	-	-	-	-	1.9						
		12.0	1.3	-	-	-	-	8.0	0.5						
46	16.3+	-	-						B	11	A	A	C	内面 雑なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、荒砂付着	・底面付近に特徴的ハケ
				13.3	12.3	-	-	-	0.6	I					
			0.9	-	-	-	-	-	2.1						
		11.8	1.3	-	-	-	-	8.8	0.6						
47	14.3+	-	-						B	11	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
				12.6	-	-	-	-	0.8	I					
			1.2	-	-	-	-	-	2.1						
		12.0	1.6	-	-	-	-	8.8	0.7						
48	21.8+	-	-						B	12	E	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
				15.5	15.5	-	-	-	0.6	I					
			1.1	-	-	-	-	-	2.1						
		(11.8)	1.6	-	-	-	-	11.0	0.5						
49	15.9+	-	-						B	11	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
									1.1	I					
			1.1						2.4						
		(12.4)	1.2					11.3	0.4						
50	21.3+	-	-						B	13	C	A	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯 基部内面 板目圧痕 底部 篠圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
				14.2	-	-	-	-	0.7	I					
			1.0	-	-	-	-	-	1.8						
		12.1	1.6	-	-	-	-	8.0	0.5						
51	11.5+	-	-						B	13	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
									0.8	I					
									2.3						
		12.2	1.7					9.1	0.7						
52	14.6+	-	-						C	13	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
									0	I					
			1.2						2.4						
		12.0	1.6					9.5	0.7						
53	14.2+	-	-						B	10	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ ・外面に補修ナデ有り
									0.6	I					
			1.3						1.8						
		(12.0)	1.5					9.5	0.5						
54	14.5+	-	-						C	10	E	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	
				13.4	-	-	-	-	0	I					
			1.2	-	-	-	-	-	1.7						
		(11.4)	1.3	-	-	-	-	8.3	0.7						
55	9.3+	-	-							13	C	B	Bb	内面 丁寧なヨコナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
										I					
			1.0												
		(10.6)	1.2												

第3表 円筒埴輪観察表(5)

No	器高	口径 底径	器厚	透孔		突帯高	突帯形	ハケメ	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
				第2段	第3段								
56	13.8+	- - (11.4)	- - 1.0 1.2			- - 10.7	C 0 2.0 0.5	10 I	C	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 斜二板目圧痕 底部 荒砂付着	・底面付近に特徴的ハケ
57	17.3+	- - (11.4)	- - 1.0 1.0			- - 11.7	C 0 1.5 0.5	10 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 斜二板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・外面タテハケが底面1.5cm上から始まる
58	7.5+	- - -	- - - 1.7					10 I	A	B	Bc	内面 ナメナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
59	8.4+	- - -	- - - 1.5					10 I	E	B	Bc	内面 やや丁寧なナメナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
60	14.5+	- - (12.2)	- - 1.2 1.2			- - 9.9	B 0.8 1.8 0.5	10 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ
61	7.3+	- - -	- - - 1.3					10 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 斜二板目圧痕 底部 -	・44と同一個体か
62	4.5+	- - -	- - - 1.7					11 I	E	B	Bb	内面 - 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、荒砂付着	
63	7.3+	- - -	- - - 1.3					11 I	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
64	5.0+	- - (10.6)	- - - 1.3					10 I	E	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
65	5.8+	- - (12.0)	- - - 1.6					10 I	E	B	Ba	内面 丁寧なヨコナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ
66	5.4+	- - -	- - - 1.4					10 I	E	B	Ba	内面 ナデ 基部成形 「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ

第3表 円筒埴輪観察表(6)

No	器 高	口径 底径	器 厚	透 孔				突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段										
67	8.5+	-	-						B 10 I	E	B	Bb	内面 タテ・ヨコナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 荒砂付着		
68	5.5+	-	-						12 I	E	B	Bb	内面 ナナメナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ		
69	5.1+	-	-						12 I	C	B	Bc	内面 タテ・ヨコナデ 基部成形 - 基部内面 全面ナデ消し 底部 ナデ	・外面に補修ナデ有り	
70	5.7+	-	-						10 I	C	B	Bc	内面 ヨコナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕		
71	5.4+	-	-						10 I	E	B	Bb	内面 ヨコナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ	
72	4.8+	-	-						12 I	D	B	Bb	内面 タテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部板目・篠圧痕、荒砂	・底面付近に特徴的ハケ	
73	10.2+	-	-	10.0	-	-	-	-	B 10 I	D	B	Bc	内面 やや雑なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	・外面に補修ナデ有り ・74と同一個体か	
74	5.6+	-	-						10 I	E	B	Bb	内面 タテナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・外面タテハケが底面2cm 上から始まる ・73と同一個体か	
75	7.8+	-	-						14 I	E	B	Ba	内面 ヨコナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ	
76	3.7+	-	-						12 I	C	B	Bc	内面 ナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ	
77	7.0+	-	-						11 I	E	B	Ba	内面 ナナメナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ	

第3表 円筒埴輪観察表(7)

No	器 高	口 径 底 径	器 厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段								
78	7.5+	-	- - - 1.5					12 I	D	B	Bb	内面 ナナメナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 荒砂付着	・底面付近に特徴的ハケ
79	7.2+	-	- - - 1.8					11 I	E	B	Bc	内面 ナナメナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
80			- 1.1 1.1 -				C 0 2.4 0.5	14 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 -	
81			1.1				C 0 2.2 0.5	14 I	E	A	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 -	
82			1.0				B 0.2 2.6 0.6	12 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 -	
83			- 1.0 1.0 -				C 0 2.4 0.5	11 I	A	B	Bc	内面 やや雑なタテナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 -	
84			0.9				C 0 2.1 0.4	10 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 - 底部 -	
85			1.0				B 0.3 2.4 0.5	13 I	A	B	Bc	内面 やや雑なナナメナデ	
86			- 0.9 1.1 -				B 0.7 2.1 0.4	11 I	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ	
87			- 1.1 1.2 -				B 0.6 2.1 0.5	10 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ	
88			- 1.1 1.1 -				B 0.6 1.9 0.4	10 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ	

第3表 円筒埴輪観察表(8)

No	器高	口径 底径	器厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段								
89			1.2				A 0.7 1.5 0.8	10 I	E	B	Ba	内面 やや雑なナメナデ	・突帯の上部のナデつけが 甘く、突帯形が異質
90			— 1.0 1.0 —				B 0.6 1.6 0.5	13 I	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ	
91		(24.0)	0.9 1.0 — —				B 0.8 2.3 0.5	11 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 C
92			1.1				B 0.7 2.2 0.6	12 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
93			1.0					11 I	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
94			0.8					12 I	B	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 C
95			1.0					10 I	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
96			0.9					10 I	C	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
97			0.8					— I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
98			0.9				B 0.8 2.0 0.6	14 I	B	B	Bb	内面 ヨコナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
99			1.1				C 0 1.9 0.5	13 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ	
100			1.1				B 0.8 2.3 0.5	11 I	A	A	Bc	内面 丁寧なタテナデ	・外面に補修ナデ有り
101			0.9					13 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 A
102			1.2				B 0.5 2.0 0.5	11 I	E	B	Ba	内面 やや丁寧なナメナデ	

第3表 円筒埴輪観察表(9)

No.	器 高	口 径 底 径	器 厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第 2 段	第 3 段								
103			0.8					12 I	A	B	Bc	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 A
104			0.9				B 0.8 2.0 0.5	11 I	E	B	Ba	内面 ヨコナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
105			0.9				C 0 2.4 0.6	10 I	A	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ	
106			0.8					10 I	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
107			0.8					11 I	A	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
108			0.8				C 0 1.9 0.5	10 I	A	B	Bb	内面 やや雑なタテナデ	
109			0.7					11 I	A	B	Bc	内面 ヨコナデ	・口縁形 B
110			0.9					11 I	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
111			0.8					11 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 A
112			1.0					11 I	C	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
113			1.0				B 0.8 2.1 0.7	13 I	B	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 C
114			1.0				B 0.5 2.1 0.8	13 I	E	B	Ba	内面やや丁寧なナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
115			0.8					14 I	A	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
116			0.9					11 I	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 A
117			0.9					10 I	E	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
118			1.0					13 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 C

第 3 表 円筒埴輪観察表(10)

No	器高	口径 底径	器厚	透 孔			突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段									
119			0.8						10 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
120			1.0					B 0.7 2.4 0.4	10 I	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ	
121			1.0						14 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
122			0.9						13 I	B	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
123			0.9						12 I	B	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
124			0.9						11 I	B	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
125			1.0						10 I	A	B	Bc	内面 ヨコ、ナナメハケ	・口縁形 A
126			1.0						12 I	A	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
127			0.8						12 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・外面に補修ナデ有り ・口縁形 A
128			1.3						10 I	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
129			0.8						11 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
130			1.0						11 I	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
131			1.0						11 I	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
132			1.0					B 0.8 2.3 0.6	13 I	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ	
133	7.8+	-	-					C 0 2.2 5.7	18 II	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部外面 板目圧痕 底部 ナデ、襷圧痕	・外面タテハケが底面1cm 上から始まる
134	13.2+	-	-	12.9	-	-	-	C 0 3.0 8.4	17 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	
135	8.6+	-	-					C 0 1.6 7.0	17 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 斜二板目圧痕 底部 襷圧痕	

第3表 円筒埴輪観察表(11)

No	器高	口径 底径	器厚	透 孔			突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段									
136	12.5+	-	-	11.3	-	-	-	C 0	16 II	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 - 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	
		(11.6)	1.1 1.2	- -	- -	- -	8.3	2.2 0.6						
137	29.2+	-	-	13.8	12.7	25.0	-	0	19 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 斜ニ板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	
			-	-	4.3	-	-	23.0	2.1					
		12.2	1.5	-	-	-	-	8.9	0.5					
138	35.1+	-	-	13.3	11.5	22.5	-	0	17 II	C	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 荒砂付着	
			-	5.0	4.3	-	-	31.9	2.5					
		11.4	1.2	5.3	-	-	-	7.8	0.5					
139	33.5+	-	-	12.3	-	22.4	25.1	0	17 II	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、籬圧痕	
			-	5.5	-	4.6	-	22.3	1.5					
		12.2	1.3	-	-	-	-	7.7	0.4					
140	42.5+	-	-	12.8	-	21.3	-	0	17 II	E	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯 基部内面 斜ニ板目圧痕 底部板目・籬圧痕、荒砂	
			-	-	4.9	6.0	-	32.7	1.9					
		12.4	1.3	-	-	-	-	19.0	0.5					
141	6.1+	-	-	-	-	-	-	-	16 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部板目・籬圧痕、荒砂	
		12.0	1.6											
142	9.2+	-	-	-	-	-	-	0	19 II	E	A	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	
		(11.5)	1.2					1.7 7.5	0.4					
143			1.1 1.1 -					0 1.9 0.5	19 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
144			1.1					0 2.4 0.5	17 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
145			1.4					0 2.2 0.7	18 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
146	5.9+	-	-						12 III	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯「の」 基部内面 ナデ 底部 ナデ、板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
		12.0	1.5											

第3表 円筒埴輪観察表(12)

No	器高	口径 底径	器厚	透孔			突帯高	突帯形	ハケメ	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
				第2段	第3段									
147	9.4+	— — (12.4)	— — 1.3						9 III	D	B	Bc	内面 やや丁寧なナメナデ 基部成形 — 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・底面付近に特徴的ハケ ・外面に補修ナデ有り
148	9.9+	— — 13.0	— — 1.9				— — 7.7	C 0 1.4 0.6	11 III	E	B	Bb	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、篠圧痕	・外面に補修ナデ有り ・外面タテハケが底面2cm 上から始まる ・底部付近の外面無調整
149	14.8+	— — 11.7	— — 1.2	12.6	—	—	— — 9.0	B 1.7 0.6 0.5	12 III	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	
150	8.2+	— — 11.4	— — 1.5						11 III	E	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	
151	8.2+	— — (11.8)	— — 1.4						11 III	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	
152	6.3+	— — 11.0	— — 1.5						11 III	E	B	Ba	内面 やや丁寧なタテナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部外面 板目圧痕 底部 板目圧痕、荒砂	・外面タテハケが底面2cm 上から始まる ・底部付近の外面無調整
153	—	(21.8)	0.8						12 III	C	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
154			— 1.1 1.1 1.2					B 0.5 1.5 0.5	7 IV	C	A	Bc	内面 丁寧なタテナデ	
155			0.9						17 II	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
156			1.0						18 II	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
157			0.9						17 II	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
158			1.0					B 0.8 2.2 0.5	20 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	

第3表 円筒埴輪観察表(13)

No	器 高	口 径 底 径	器 厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第 2 段	第 3 段								
159			0.7					20 II	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
160			0.9				B 0.7 2.2 0.7	17 II	E	B	Ba	内面 ナナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
161			0.9					17 II	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪 ・口縁形 B
162			0.9				C 0 1.9 0.7	20 II	D	B	Bb	内面 タテナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
163			0.9					18 II	A	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
164			0.8				C 0 1.5 0.4	17 II	D	A	Bb	内面 ナナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪 ・上部の破断面にナデ痕跡 有り
165			1.0					18 II	D	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
166			1.0					18 II	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
167	5.7+	-	- - - (11.0)	1.5				21 II	C	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部内面 板目圧痕 底部 籾圧痕、荒砂	
168			0.7					15 II	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
169			1.3					16 II	E	B	Ba	内面丁寧なナナメナデ	・突帯に繊維状圧痕有り
170			0.8					16 II	E	B	Bb	内面 ナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
171			0.9				C 0 1.8 0.5	16 II	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
172			0.9					17 II	A	B	Bb	内面 ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪 ・口縁形 A

第 3 表 円筒埴輪観察表(14)

No	器 高	口 径 底 径	器 厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段								
173			1.0				C 0 2.0 0.6	— II	E	B	Bb	内面 ナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
174			1.1				C 0 2.2 0.6	20 II	A	B	Bb	内面 ナナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
175			1.0				C 0 2.0 0.6	20 II	C	B	Bb	内面 ナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
176			1.0					11 III	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
177			0.8					13 III	E	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
178	4.6+	— — 1.6						10 III	B	B	Bc	内面 ナデ 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ、板目圧痕	・底面付近に特徴的ハケ
179			0.9				C 0 2.3 0.5	9 III	D	B	Bb	内面 ナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
180			0.9 0.9 — —				C 0 2.4 0.6	10 III	D	B	Bc	内面 ナナメナデ ヨコハケ	・朝顔形円筒埴輪
181	4.5+	— — — (12.0)	1.7					12 III	E	B	Bb	内面 タテナデ 基部成形 逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	・底面付近に特徴的ハケ
182			1.2				C 0 1.4 0.5	12 III	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ	
183			1.5				A 0.8 2.2 0.6	10 III	E	B	Bb	内面 丁寧なタテナデ	
184			0.9					10 III	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A

第3表 円筒埴輪観察表(15)

No	器 高	口径 底径	器 厚	透 孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
				第2段	第3段								
185			1.0					12 III	A	B	Bc	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
186			1.2				B 0.8 1.9 0.5	11 III	C	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ	
187			1.1				B 0.4 1.9 0.5	10 III	E	B	Bc	内面 丁寧なタテナデ	
188			0.9				A 0.6 1.9 0.5	12 III	B	B	A	内面 丁寧なタテナデ	
189			0.8					12 III	B	B	A	内面 ヨコハケ	・口縁形 C
190			0.9 1.0 — —				B 0.4 1.8 0.7	13 III	C	B	Bb	内面 ヨコ、ナナメハケ	・口縁形 C
191			0.7					11 III	E	B	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 B
192			1.2				C 0 2.2 0.6	7 IV	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
193			0.8					5 IV	C	A	Bb	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
194			1.0				A 0.8 2.4 0.5	12 III	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
195			1.2					8 IV	E	B	Ba	内面 ヨコハケ	・口縁形 A
196			1.2				C 0 2.1 0.4	8 IV	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	
197			1.2				C 0 2.0 0.6	6 IV	E	B	Ba	内面 丁寧なタテナデ	

第3表 円筒埴輪観察表(16)

No	器 高	基 台 高	基台 上端径 底径	器 厚	基台透孔				突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
					第2段		第3段									
198	83.6	27.5	15.2	1.4 1.4 14.6	7.0 3.8 4.5	7.4 5.5 4.6	19.3 5.3 4.8	21.2 5.6 5.3		C 0 1.7 0.5	9 III	E	B Bb	内面丁寧なナメナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部ナデ、板目圧痕	P18 ・天冠男子像 ・底面付近に特徴的ハケ ・底部の一部欠損	
199	45.5+	27.0	16.2	1.2 1.3 15.8	13.5 3.9 4.5	13.7 4.8 5.5	23.4 2.5 (2.3)	24.0 (1.9) 2.0		B 0.7 2.0 0.6	10 I	A	B Bb	内面やや丁寧なナメナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕	P22 ・天冠男子像 ・底面付近に特徴的ハケ	
200	71.0+	23.0	16.8	1.2 1.3 16.6	5.3 4.0 3.5	5.4 5.0 3.8	19.6 4.0 (3.8)	18.8 (4.1) (3.5)			9 III	D	B Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部ナデ、板目・襷圧痕	P17 ・女子像 ・底面付近に特徴的ハケ	
201	77.3	25.0	13.8	1.2 1.4 14.8	12.6 3.5 3.5	12.5 4.2 3.3	21.1 (2.4) 2.2	21.8 2.2 2.5		B 0.7 1.7 0.5	13 I	E	B Bb	内面丁寧なナメナデ 基部成形 一帯 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P21 ・女子像 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ	
202	80.6	24.0	17.0	1.4 1.5 16.0	10.1 (2.5) 4.5	6.7 2.6 4.8	19.1 3.1 3.5	17.1 2.9 4.0		C 0 1.5 0.5	9 III	D	B Bb	内面 丁寧なタテナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目圧痕・荒砂	P23 ・女子像 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ	
203	79.4	23.0	15.0	1.4 1.4 15.2	16.3 3.8 4.0	16.2 4.5 5.3				A 0.9 2.2 0.5	9 III	E	B Bb	内面丁寧なナメナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 ナデ	P24 ・女子像 ・底部の一部欠損	
204	43.5+	29.0	16.7	1.2 1.3 15.8	13.3 4.0 3.4	14.0 4.8 4.5	24.7 1.9 2.7	24.5 1.7 2.7		B 0.7 2.0 0.6	12 I	D	B Bb	内面やや丁寧なナメナデ 基部成形一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 板目・襷圧痕	P15 ・底部の一部欠損 ・底面付近に特徴的ハケ	
205	39.0+	23.6	16.2	1.4 1.4 14.6	9.6 4.0 3.5	10.3 4.2 4.2	18.9 4.0 3.0	20.3 4.3 2.7		B 0.8 2.1 0.5	10 I	A	B Bb	内面調整丁寧なナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部ナデ・板目圧痕	P19 ・底面付近に特徴的ハケ ・底部の一部欠損	
206 -1	39.1+			1.3 9.8	28.6 — —	— — —				C 0 2.2 0.6	11 I	D	B Bb	内面やや丁寧なナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 不明 底部 不明	P20 ・底面付近に特徴的ハケ	
206 -2	38.7+			1.3 9.4	30.5 — —	— — —				C 0 1.8 0.5	11 I	D	B Bb	内面やや丁寧なナメナデ 基部成形 不明 基部内面 不明 底部 不明	P20 ・底面付近に特徴的ハケ	
206 -3	38.7+			1.4 9.0	— — —	— — —				C 0 2.1 0.6	11 I	C	B Bb	内面やや丁寧なナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 不明	P20 ・底面付近に特徴的ハケ	

単位=cm

第4表 形象埴輪観察表(1)

No	器 高	基 台 高	基台 上端径 底径	器 厚	基台透孔		突 帯 高	突 帯 形	ハ ケ メ	色 調	胎 土	焼 成	成形・調整	備 考
					第2段	第3段								
206 -4	36.9+				-	-	32.5	C 0 2.1 0.6	11 I	C	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 不明	P20 ・底面付近に特徴的ハケ
207 -1	74.7+				37.9 2.8	2.5	(34.0)	C 0 1.8 0.6	10 I	D	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 不明 底部 不明	P36,37 ・底面付近に特徴的ハケ ・右前脚
207 -2					- -	-	(36.6)	C 0 1.4 0.7	10 I	D	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 不明 基部内面 不明 底部 不明	P36,37 ・底面付近に特徴的ハケ ・左前脚
207 -3					- -	-	(31.0)	C 0 1.6 0.5	10 I	B	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 不明 基部内面 不明 底部 不明	P36,37 ・底面付近に特徴的ハケ ・右後脚
207 -4					37.7 2.5	2.1	31.2	C 0 1.5 0.5	10 I	B	B	Bb	内面やや丁寧なナナメナデ 基部成形 一帯逆「の」 基部内面 板目圧痕 底部 不明	P36,37 ・底面付近に特徴的ハケ ・左後脚

第4表 形象埴輪観察表(2)

第3節 古墳時代以外の出土遺物 (第70図、図版36)

2号墳の墳丘盛土下の旧表土層から縄文土器、周溝内に掘られた近世墓の埋土中からカワラケや土人形、古銭などが出土した。

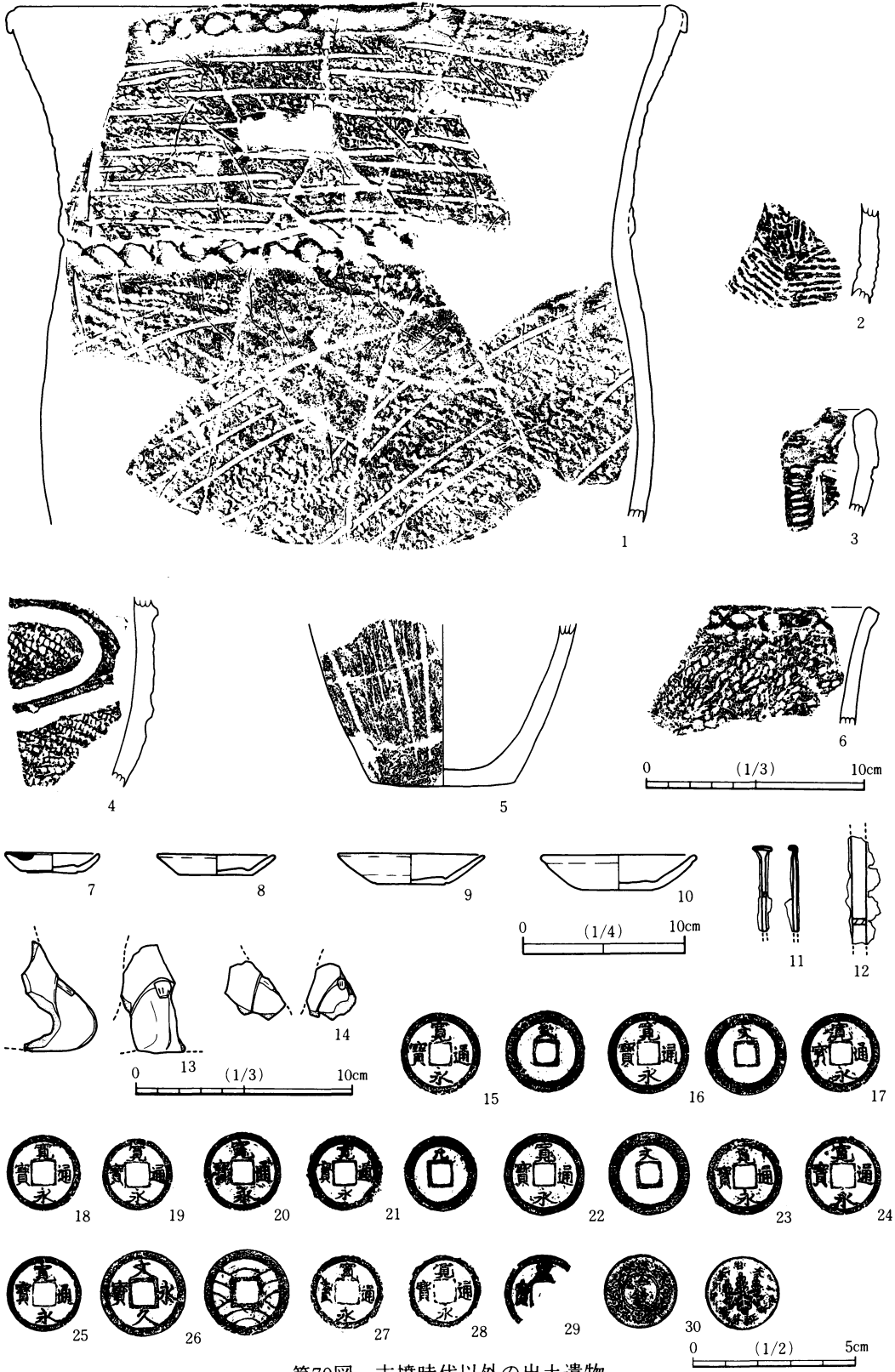
1は口径30.6cmを測る加曾利B2式の粗製深鉢で、縄文を地文に沈線を施した後に、口縁部と頸部に紐線文を施している。紐線文に連続した指頭押捺が見られる。2は条痕文系土器で、外面のみ条痕が認められる。3は貼付文と印刻状の沈線が認められる阿玉台式土器である。胎土中に粗い石英と長石を多量含み、細かな雲母粒も含まれている。4は隆帯と沈線によって楕円形の区画文を有した加曾利E3式土器である。5は数条の沈線が垂下する加曾利E式土器の底部である。6は縄文を地文に、口縁部に紐線文を有した加曾利B式土器である。紐線文に連続した指頭押捺が見られる。

7～10のカワラケは、ロクロ成形で底部回転糸切り無調整で共通したものである。7は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものである。7は口径5.8cm、底径3.0cm、器高1.2cmである。8は口径7.2cm、底径4.4cm、器高1.2cmである。9は口径9.0cm、底径4.2cm、器高1.8cmである。10は口径9.6cm、底径4.4cm、器高2.1cmである。11、12は鉄釘である。11は断面正方形の角釘で、基部の上端を薄く叩き延ばしてから折り曲げて、頭部を作り出している。12は断面長方形の角釘と思われる。棺に使用されたものであろう。13、14は土人形で、共に振袖姿の女性像右手付近の部分と見られる。表裏を型押しして接合するもので、13には接合面が残っている。内部は空洞である。15～30は古銭で、このほかにも図示できなかったが、鉄銭が3枚出土している。内訳は新寛永通宝が14枚、鉄銭が3枚、文久永宝1枚、近代銭1枚である。

No	挿図番号	遺構	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	備考
1	第70図30	D7-14	一銭	23.05	—	—	—	—	—	3.62	桐一銭銅貨
2	第70図16	D7-21	寛永通宝	25.05	19.55	6.80	5.83	1.35	0.83	3.38	新寛永(亀戸銭背文、寛文8年(1668)初鑄)
3	第70図17	D7-26	寛永通宝	24.15	18.55	7.00	5.88	1.19	0.65	2.59	新寛永
4	第70図15	D7-26	寛永通宝	25.25	20.00	7.00	5.88	1.23	0.65	3.38	新寛永
5	第70図18	D7-26	寛永通宝	22.80	18.55	7.68	6.45	1.19	0.74	2.51	新寛永
6	第70図20	D7-35	寛永通宝	23.75	19.45	6.98	6.00	1.18	0.77	2.81	新寛永
7	第70図21	D7-35	寛永通宝	22.80	17.20	7.30	6.30	1.20	0.68	2.47	新寛永(高津銭背元、寛保元年(1741)初鑄)
8	第70図22	D7-35	寛永通宝	25.05	19.55	8.20	6.05	1.34	0.85	3.53	新寛永(亀戸銭背文、寛文8年(1668)初鑄)
9	第70図23	D7-45	寛永通宝	23.10	18.15	6.95	5.93	1.33	1.07	2.64	新寛永
10	第70図24	D7-45	寛永通宝	23.50	19.50	7.50	6.60	1.29	0.84	3.10	新寛永
11	第70図25	D7-45	寛永通宝	23.08	19.20	7.40	6.70	0.98	0.62	2.15	新寛永
12	第70図26	D7-47	文久永宝	26.23	20.98	9.40	6.90	0.97	0.70	3.11	新寛永
13	第70図27	D7-47	寛永通宝	22.70	18.30	8.20	6.83	1.05	0.59	2.16	新寛永
14	第70図28	D7-53	寛永通宝	22.75	18.38	7.28	6.23	1.11	0.67	2.09	新寛永
15		D7-67	寛永通宝	3ヶ体付着	—	—	—	—	—	9.19	鉄銭
16	第70図19	遺跡一括	寛永通宝	21.65	17.65	8.10	6.73	1.15	0.78	1.96	新寛永
17	第70図29	遺跡一括	寛永通宝	—	—	—	—	0.99	0.70	1.21	

単位=径・厚:mm、重量:g

第5表 銭貨計測表



第70図 古墳時代以外の出土遺物

第3章 井戸向遺跡

第1節 調査区の概要（第71～74図）

調査区は東西約3.5kmにわたっている。調査区西側では縄文時代早期と近世の遺構群が、調査区東側では先土器時代・縄文時代早期・平安時代などの遺構群が検出された。両地区の間には複数の谷が入っており、また遺構の様相も異にしている。そこで前者を西側調査区、後者を東側調査区と分けて報告する。

B1区～B6区に位置する西側調査区では南から谷が入っており、北側には台地平坦面が大きく広がっている。調査地点は南側からの谷に面した台地端部に位置し、縄文時代早期の土器と炉穴群などが検出された。また、炭焼台所在塚に接して近世の土壌墓群と屋敷跡が検出された。近世の遺構群の位置は現国道と松虫へ抜ける道、また印旛沼へ下りる道の辻に当たっている。なお、西側調査区の範囲は『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－』においては炭焼台遺跡と堀尻台遺跡の名称が与えられている。調査前の状況は畑地と山林と宅地である。

F16区～H20区に位置する東側調査区は西側に南からの谷が、北側に北からの谷が入り、南側と東側にはやや広い台地平坦面が続いている。北からの谷に面した台地端部に先土器時代の石器集中地点や縄文時代早期の炉穴群、平安時代の溝状遺構と瓦塔の破片などが出土した。また、北からの谷と南からの谷に挟まれた尾根状に狭まった台地平坦面からは縄文時代の陥穴群や近世の溝状遺構と地下式坑などが出土した。調査前の状況は畑地である。

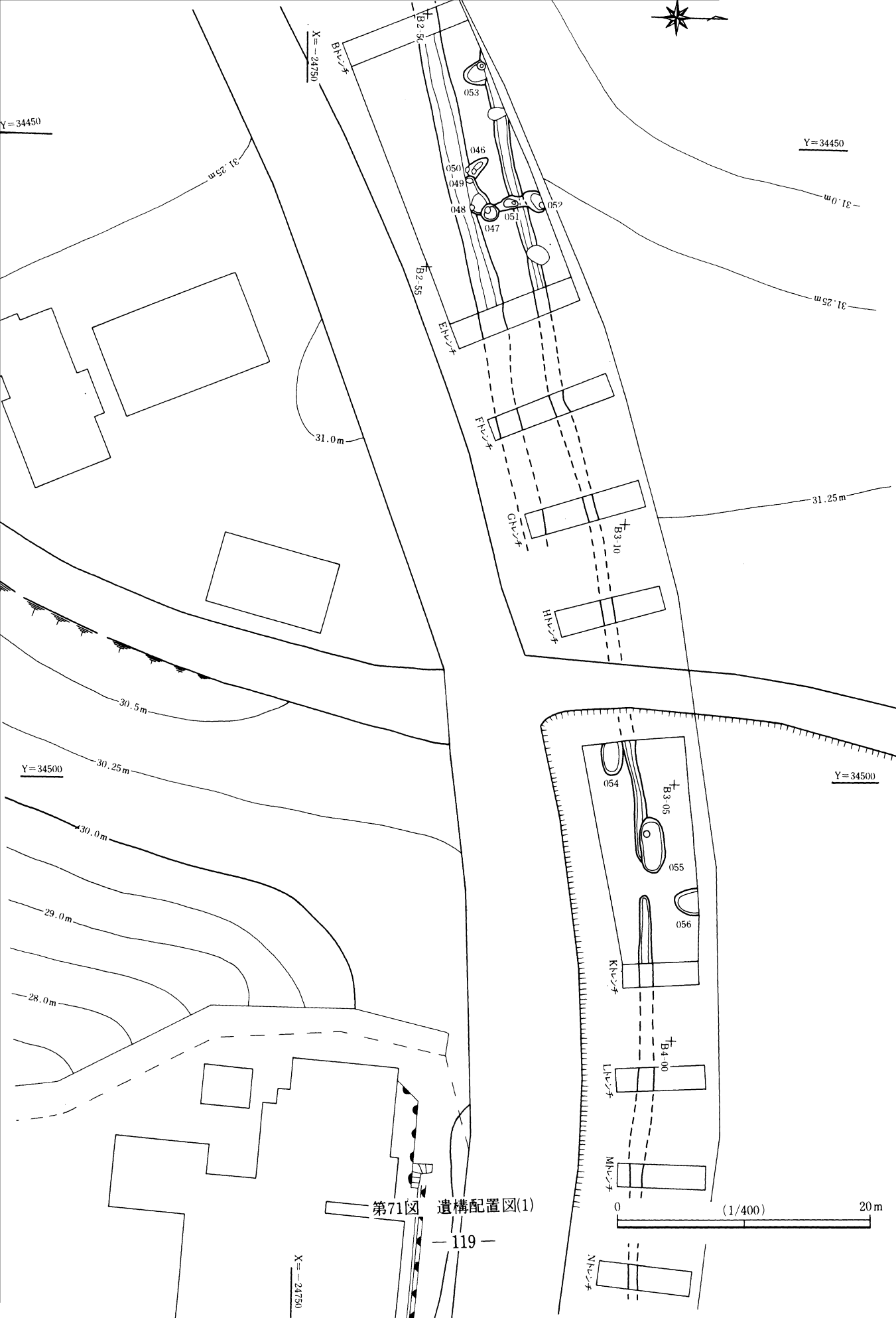
西側調査区と東側調査区に挟まれた調査地点については、大木台古墳群や和田谷津塚と隣接する地点ではあるが、縄文時代前中期の土器などが出土したものの、遺構は検出されなかった。調査前の状況は畑地と山林と宅地である。

第2節 先土器時代

東側調査区から3か所の石器集中地点を検出した。これらは、北側から入り込む谷頭に沿った台地縁辺に点々と位置している。調査区域外の南側には平坦な台地が広がっており、これらの石器集中地点はほぼ同じ立地下にある。各ブロックの属する層序はⅢ層を主体とした第1ブロックとⅨ層を主体とした第2ブロック・第3ブロックとに分けられる。このほかに東側調査区では、上層の確認調査中にⅢ層から単独で石器が出土している。なお、井戸向遺跡の調査は東西に約3.5kmにわたって細長く行ったが、北側からの谷に面した東側調査区のみで、先土器時代の遺物が出土し、台地中央部や南側からの谷に面した西側の調査区からは遺物は出土していない。

Y=34450

Y=34450



X=24750

31.0m

31.25m

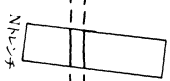
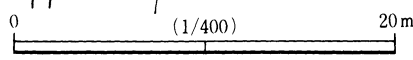
31.1m

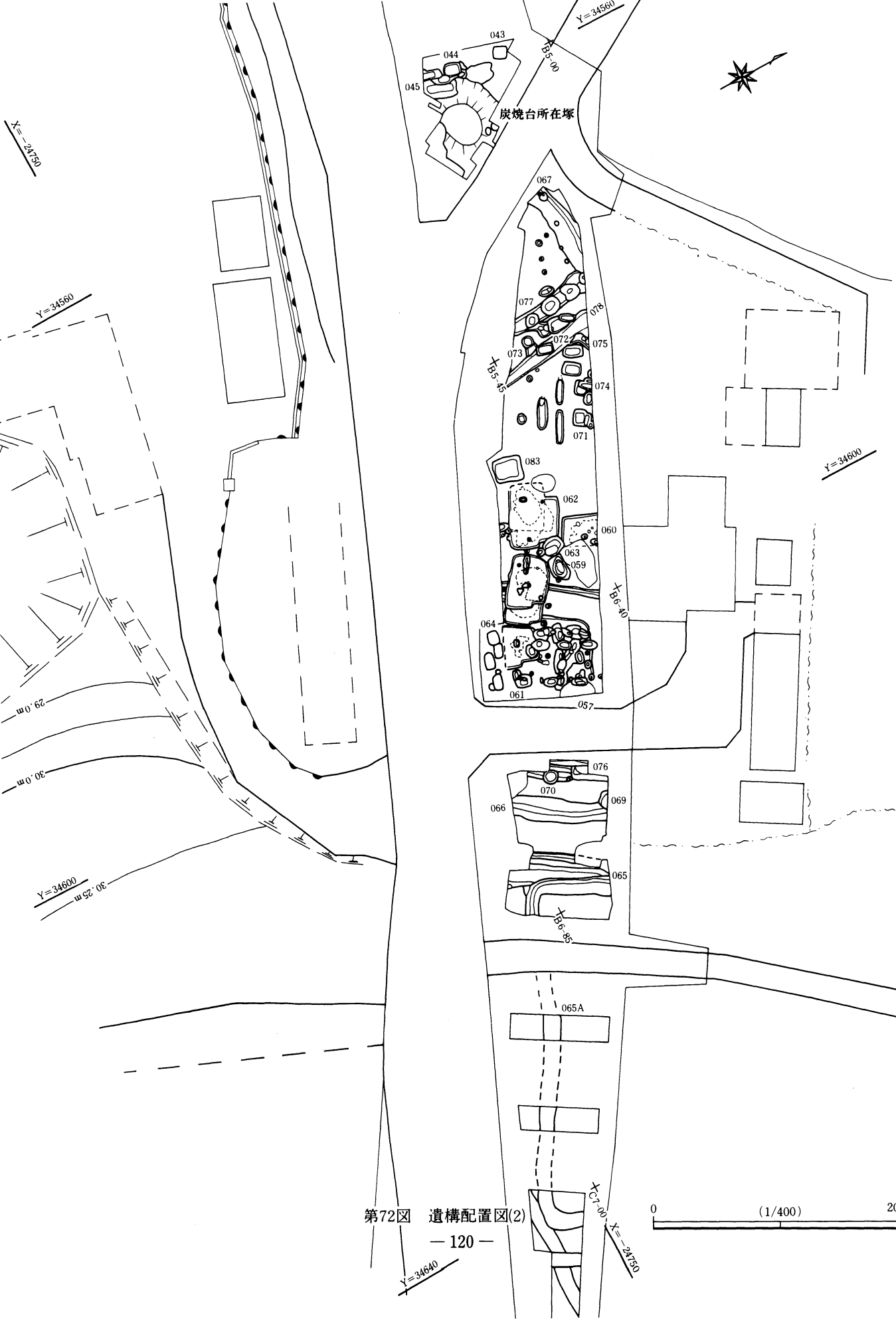
Y=34500

Y=34500

第71図 遺構配置図(1)

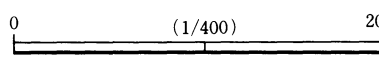
X=24750

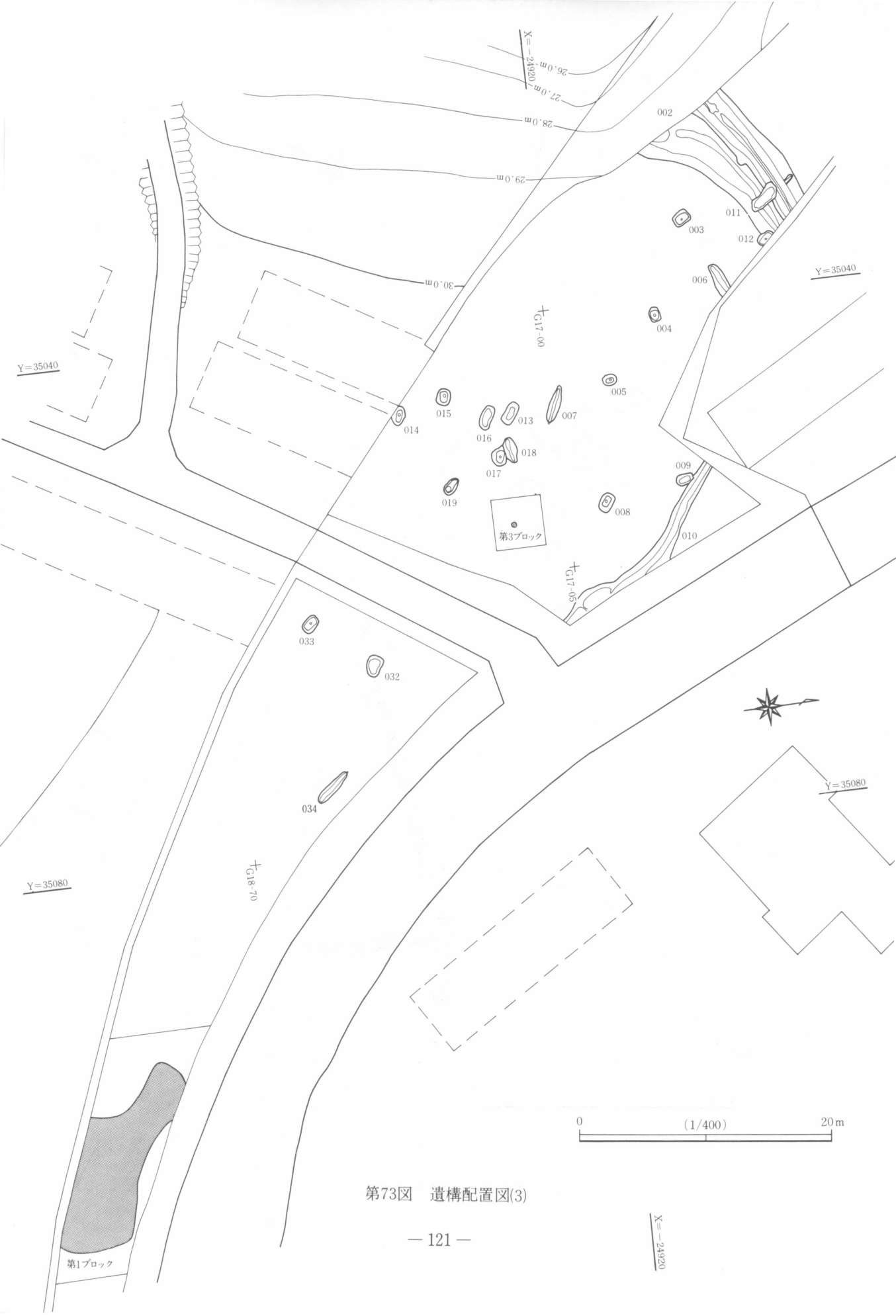




炭焼台所在塚

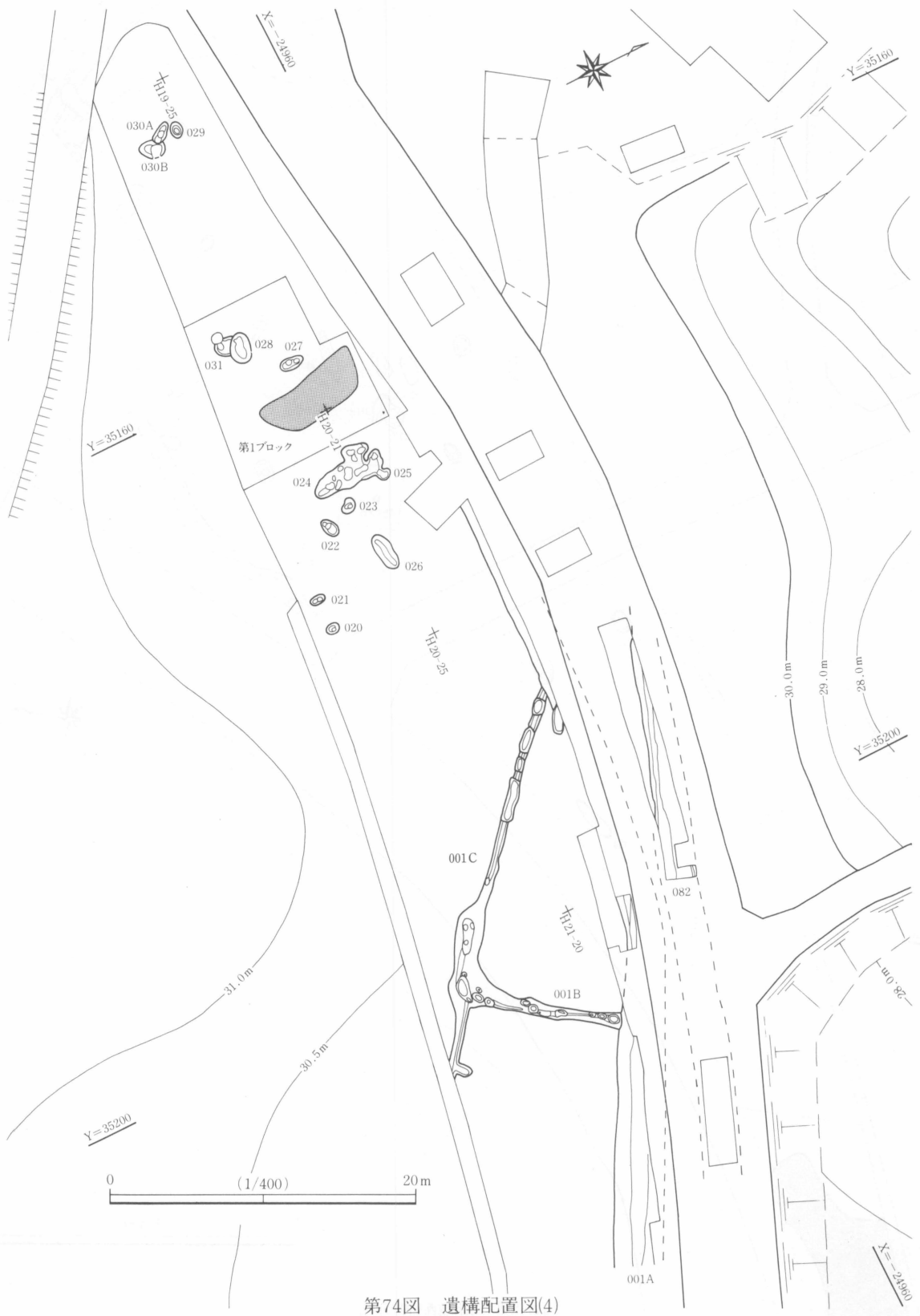
第72図 遺構配置図(2)





第73図 遺構配置図(3)

X=-24920



第74図 遺構配置図(4)

第1ブロック (第75・76図、図版12)

遺構 第1ブロックの出土層位はIII層である。すべての遺物がほぼ同一レベルに集中して分布している。平面分布においてはH18-05区周辺とG18-94区周辺の2か所にやや集中する傾向が見られるが、南北の調査区際までブロックが広がっており、さらに南側と北側の調査区外へ広がっている可能性がある。

石器の石質は珪質頁岩と安山岩が大半を占め、ごく少数チャートと凝灰岩が含まれる。珪質頁岩製の石器はH18-05区に、安山岩製の石器はG18-94区に集中しており、分布域を明瞭に分けることが可能である。珪質頁岩製の石器の平面分布は長軸10m、短軸4mとやや大きな楕円形を呈している。珪質頁岩製の石器は大半が剝片と碎片であるが、その中で使用痕のある剝片と石核が分布域の中心付近から出土している。

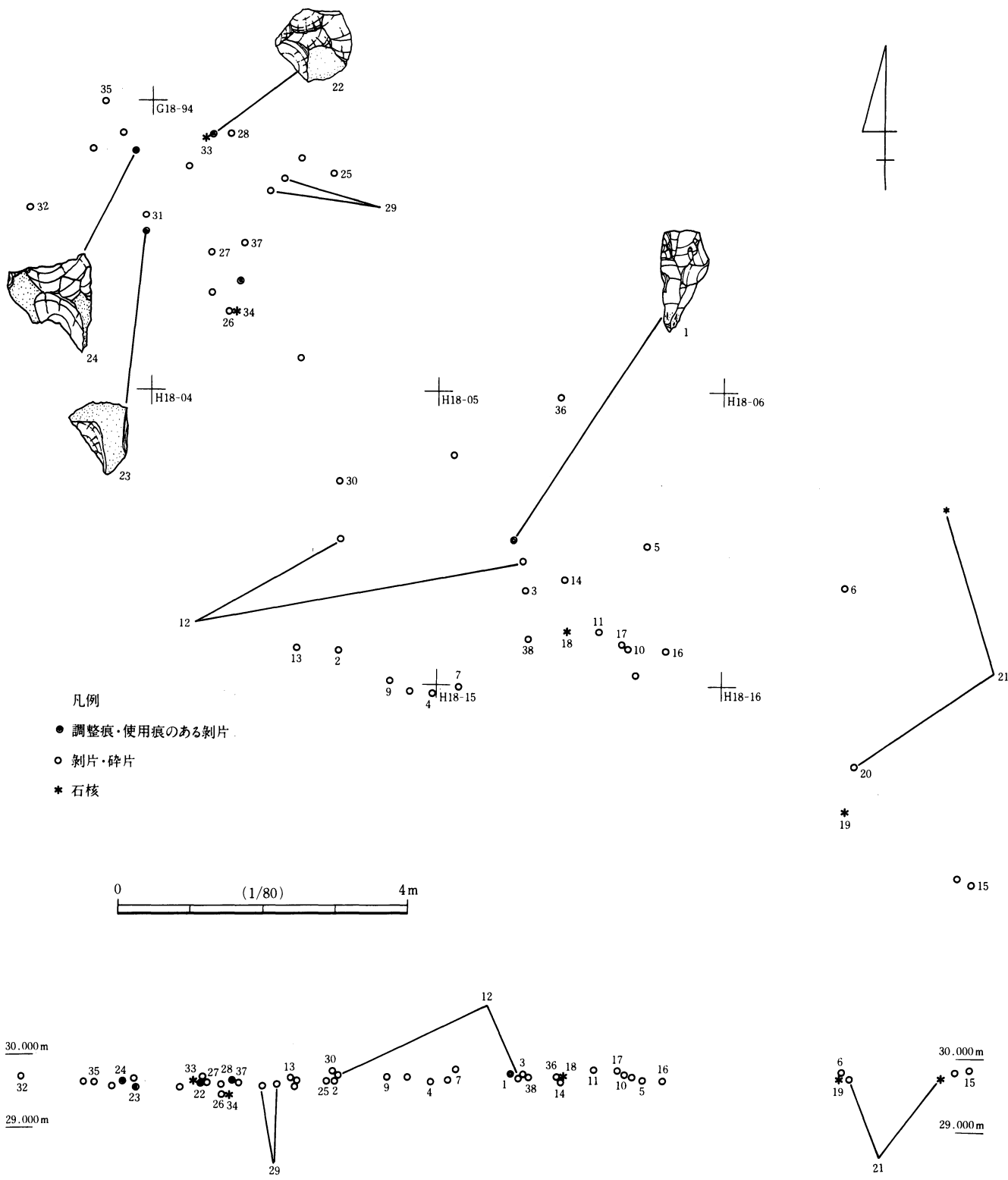
安山岩製の石器の平面分布は長軸6m、短軸3mの楕円形を呈している。安山岩製の石器については、各器種が分布域の中でほぼ散漫に分布している。

チャート製と凝灰岩製の石器については少数ではあるが、調査区北側の際付近から主に出土している。

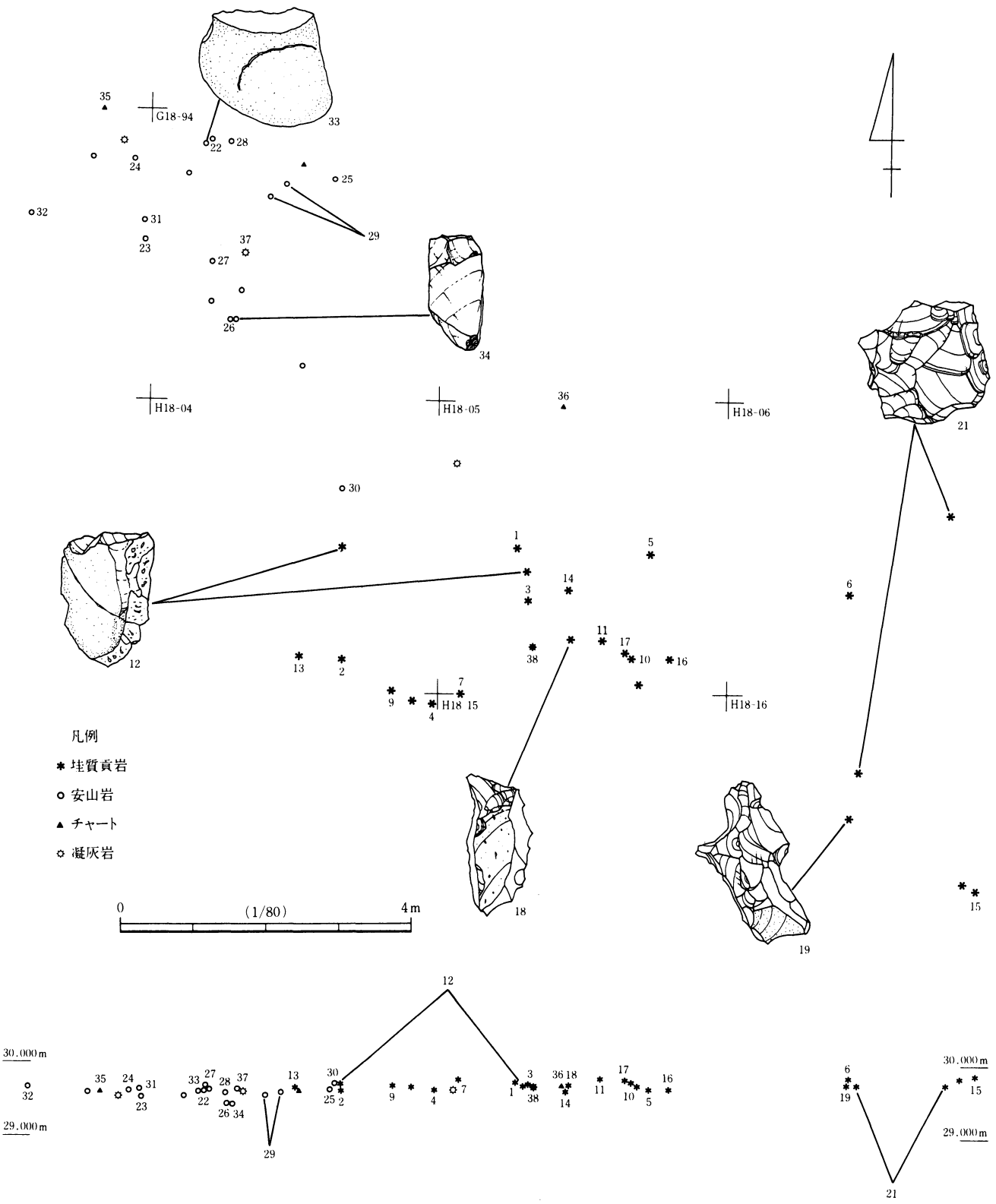
遺物 (第77～80図、第6表、図版38・39)

第1ブロックからは計52点の石器が出土している。内訳は珪質頁岩製が25点、安山岩製が19点、チャート製が3点、凝灰岩製が5点である。そのうちの接合資料を含めた38点について図示した。1は珪質頁岩製の使用痕を有する剝片で、不定形剝片の右側縁に使用痕が認められる。2～17と20は珪質頁岩製の剝片、碎片であるが、そのうち、3と6の剝片については折断が認められる。19と21は珪質頁岩製の石核であるが、21は20の剝片が接合した状況を図示したものである。珪質頁岩製の石器については、小型の不定形剝片が大半を占めている。石核のうち、縁辺部から求心的に剝片を作出しているものが見られるため、上記の形状の剝片が主に作出されたのであろう。珪質頁岩製の定形的な石器は出土していないが、剝片剝離技術及び剝片の形状から、不定形剝片を素材とした小型のナイフ形石器を作出しているものと思われる。

22～24は調整痕が認められる安山岩製の剝片で、表面に原石面を残している。25～32は安山岩製の剝片で、多くのものが原石面を有している。33と34は安山岩製の石核で、これも同様に原石面を残している。安山岩製のものについても定形的な石器は見られず、安山岩製の調整痕の認められる剝片3点が出土している程度である。同方向の打面から連続的に作り出された安山岩製の剝片が大半を占め、剝片剝離技術と言えるだろう。素材剝片の形状はいわゆる石刃状のものではなく、加えて、定形的な石器が出土していないことから、断定はできないが、ナイフ形石器の作出を意図して、剝片剝離を行った結果、形成されたブロックであろう。



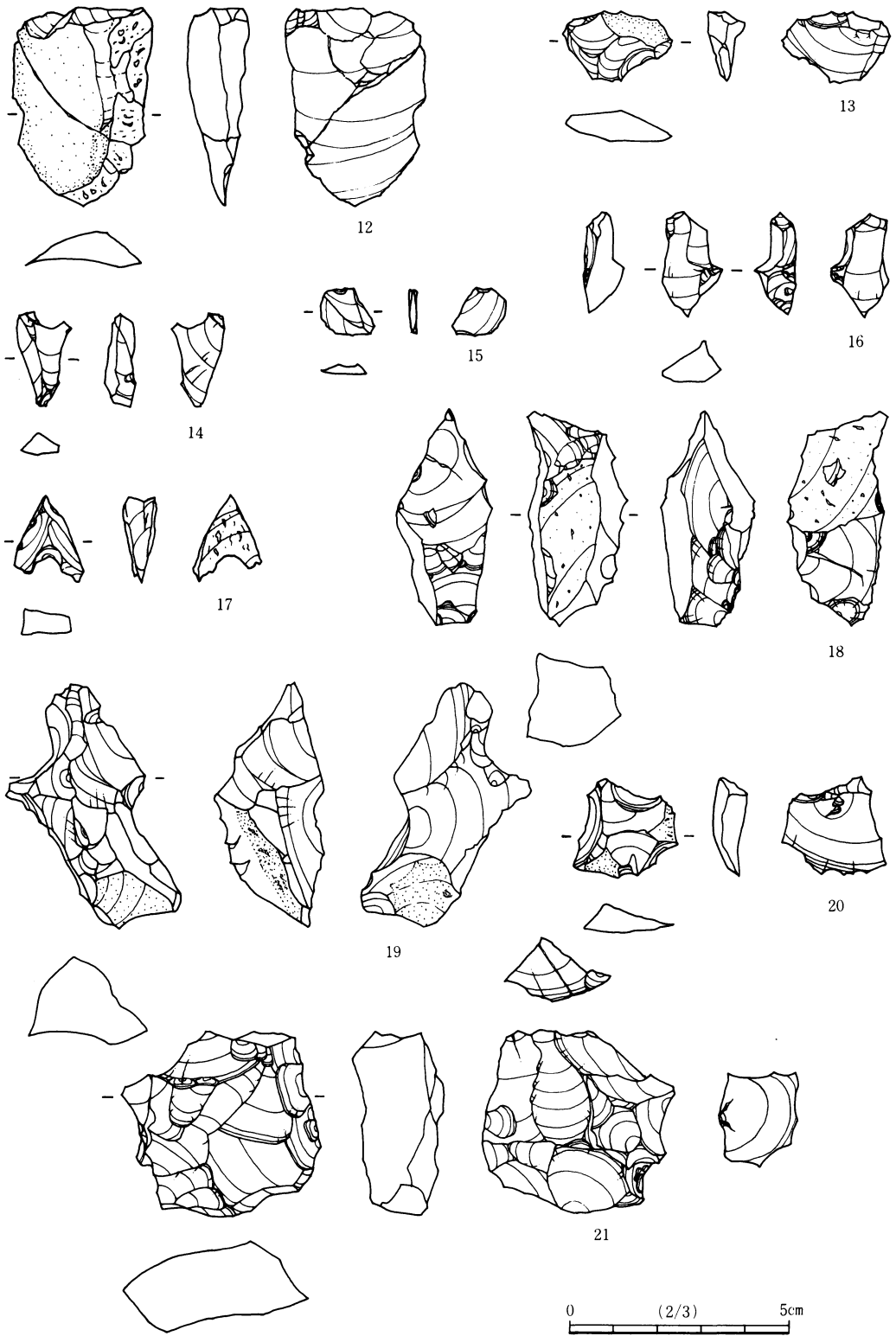
第75図 第1ブロック器種別遺物分布図



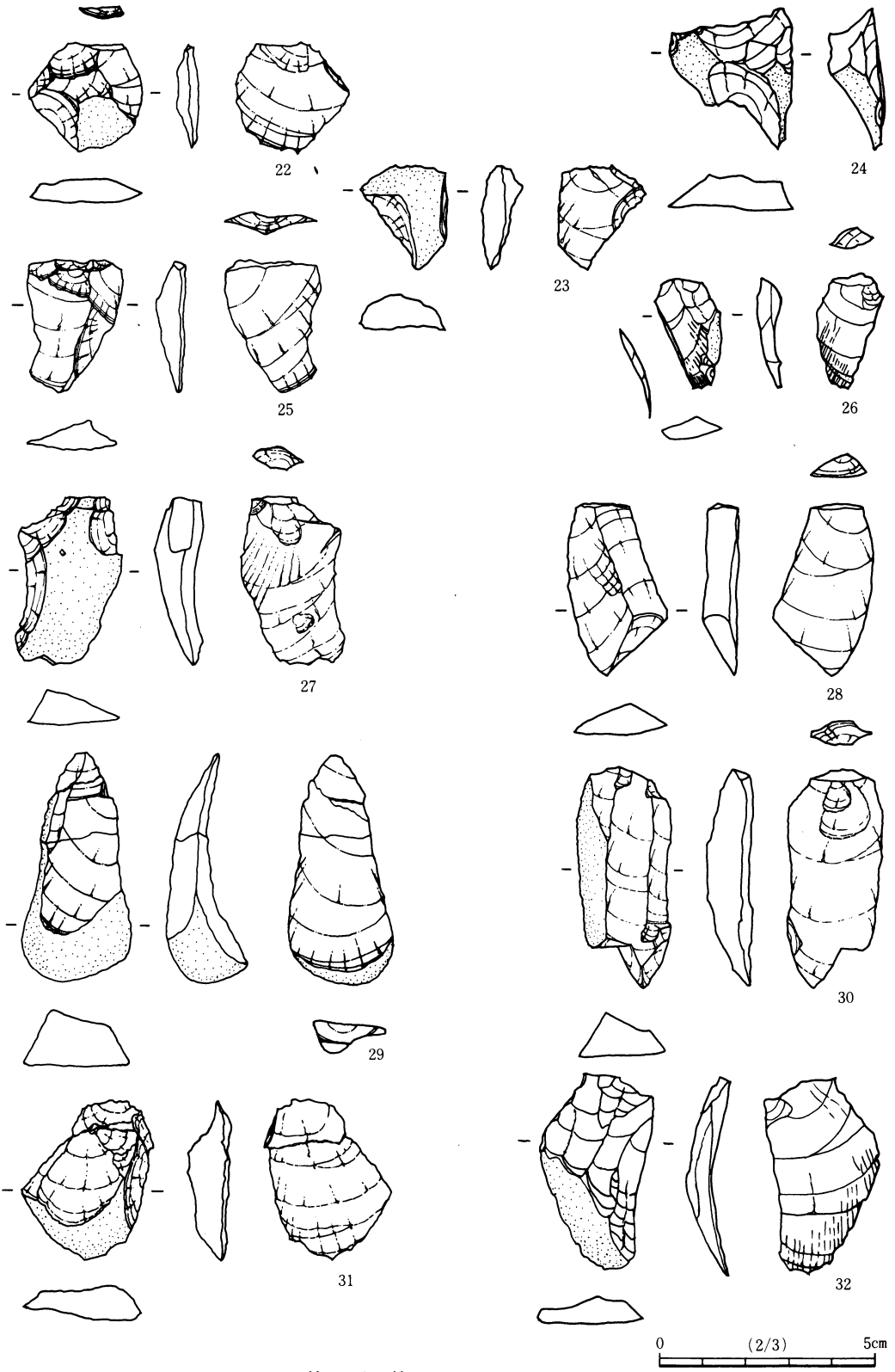
第76図 第1ブロック母岩別遺物分布図



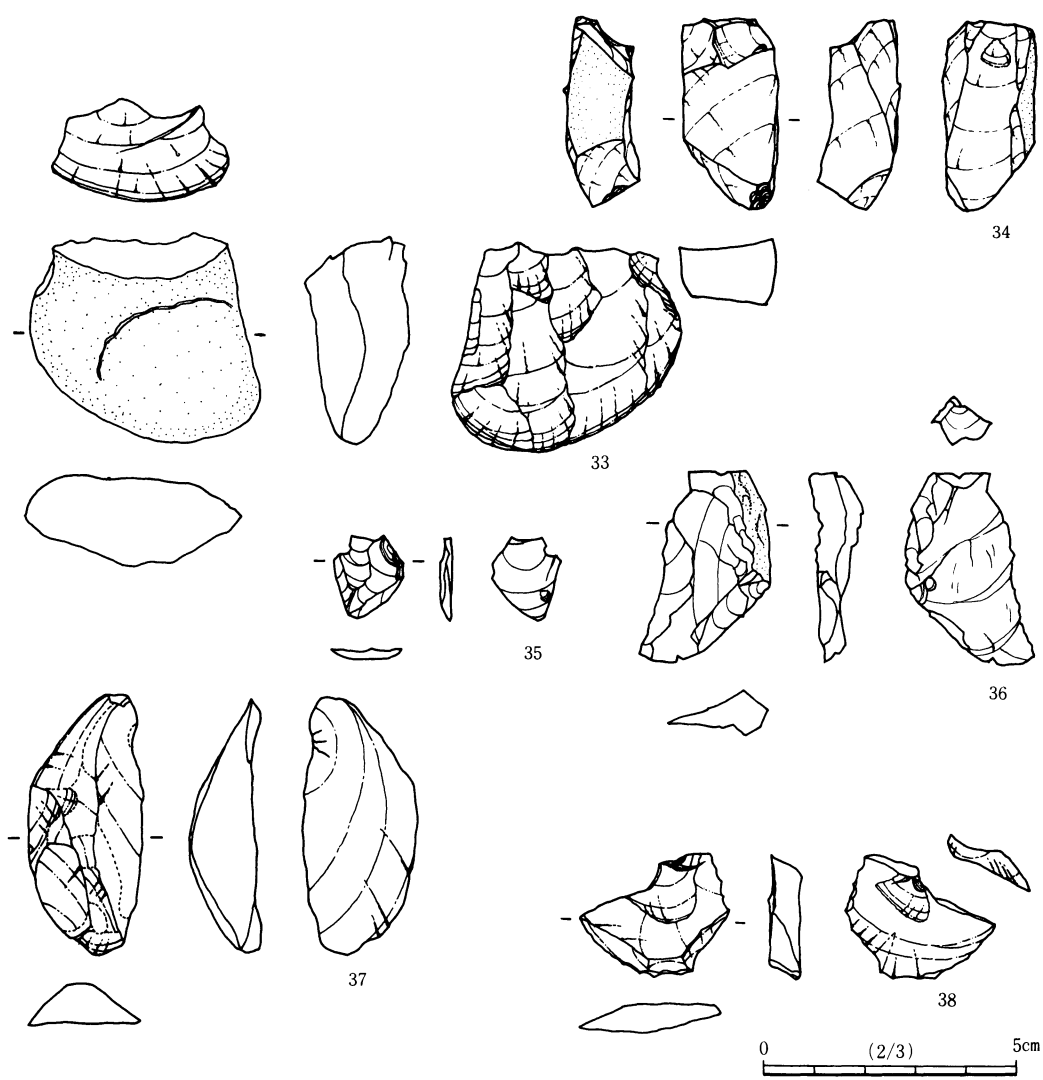
第77図 第1ブロック石器(1)



第78図 第1ブロック石器(2)



第79図 第1ブロック石器(3)



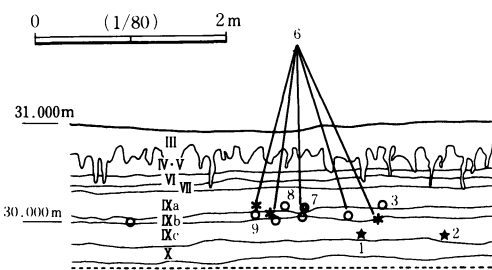
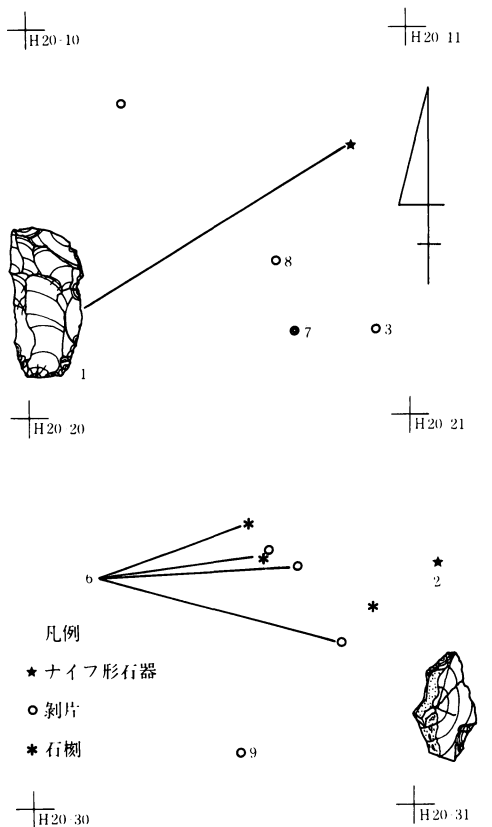
第80図 第1ブロック石器(4)

No	遺物番号	器種	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
1	H18-05-3	使用痕ある剥片	珩質頁岩	3.42	1.60	0.80	2.93	
2	H18-05-5	剥片	珩質頁岩	2.36	1.46	1.17	3.20	
3	H18-14-1	剥片	珩質頁岩	2.51	1.38	0.50	1.51	
4	H18-05-2	剥片	珩質頁岩	4.70	3.41	1.48	23.10	
5	H18-06-2	剥片	珩質頁岩	3.75	1.88	1.28	6.20	
6	H18-15-1	剥片	珩質頁岩	3.04	2.81	0.80	4.46	原石面残る
7	H18-04-1	剥片	珩質頁岩	3.73	2.59	1.20	6.43	原石面残る
8	H18-04-1	剥片	珩質頁岩	3.45	2.80	0.80	6.26	原石面残る、グリッド一括
9	H18-04-2	剥片	珩質頁岩	2.77	2.55	0.70	4.01	
10	H18-05-13	剥片	珩質頁岩	2.87	1.38	0.60	1.76	
11	H18-05-10	剥片	珩質頁岩	5.70	4.40	1.70	29.29	
12	H18-04-5、H18-05-4	剥片	珩質頁岩	4.60	3.19	1.40	16.03	原石面残る
13	H18-04-4	碎片	珩質頁岩	1.69	2.47	0.86	1.99	
14	H18-16-3	碎片	珩質頁岩	2.10	1.23	0.70	1.07	
15	H18-16-3	碎片	珩質頁岩	1.35	1.16	0.20	0.23	
16	H18-05-7	碎片	珩質頁岩	2.29	1.32	0.75	1.75	
17	H18-05-9	碎片	珩質頁岩	2.00	1.55	0.80	1.29	
18	H18-05-11	石核	珩質頁岩	4.85	2.23	2.19	19.14	
19	H18-16-2	石核	珩質頁岩	5.50	4.10	2.56	25.48	
20	H18-16-1	剥片	珩質頁岩	2.26	2.65	0.80	3.18	
21	H18-16-1、H18-06-1	石核	珩質頁岩	4.24	4.50	2.10	32.77	
22	G18-94-12	調整痕ある剥片	安山岩	2.56	2.66	0.52	3.61	原石面残る
23	G18-93-3	調整痕ある剥片	安山岩	2.45	2.05	9.50	2.90	原石面残る
24	G18-93-5	調整痕ある剥片	安山岩	3.17	2.80	1.10	6.54	原石面残る
25	G18-94-8	剥片	安山岩	3.07	2.16	0.70	3.37	
26	G18-94-2	剥片	安山岩	2.50	1.34	0.50	1.42	原石面残る
27	G18-94-5	剥片	安山岩	4.28	3.36	0.10	6.24	原石面残る
28	G18-94-11	剥片	安山岩	3.86	2.28	0.72	5.44	
29	G18-94-9、16	剥片	安山岩	5.20	2.50	1.90	15.50	原石面残る
30	H18-04-6	剥片	安山岩	4.99	2.17	1.10	11.70	原石面残る
31	G18-93-4	剥片	安山岩	3.63	2.96	0.99	7.12	原石面残る
32	G18-93-9	剥片	安山岩	4.28	3.36	1.00	6.24	原石面残る
33	G18-94-13	石核	安山岩	4.10	4.76	2.06	44.19	原石面残る
34	G18-94-15	石核	安山岩	3.84	1.90	1.60	5.51	原石面残る
35	G18-93-7	剥片	チャート	1.60	1.40	0.25	0.59	
36	H18-05-1	剥片	チャート	3.82	2.59	1.08	5.75	
37	G18-94-6	剥片	凝灰岩	5.00	2.20	1.50	9.60	
38	H18-05-2	剥片	凝灰岩	2.58	3.03	0.65	3.92	

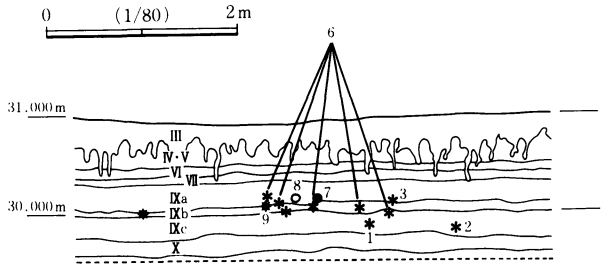
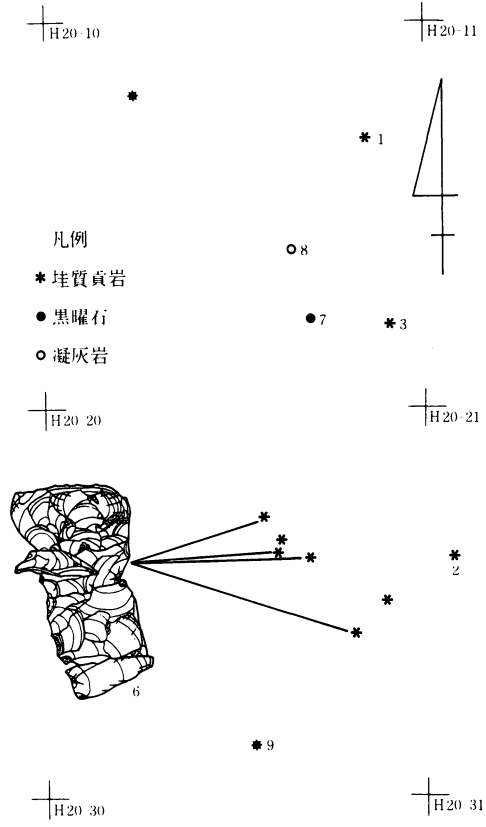
第6表 第1ブロック石器観察表

第2ブロック (第81・82図、図版12)

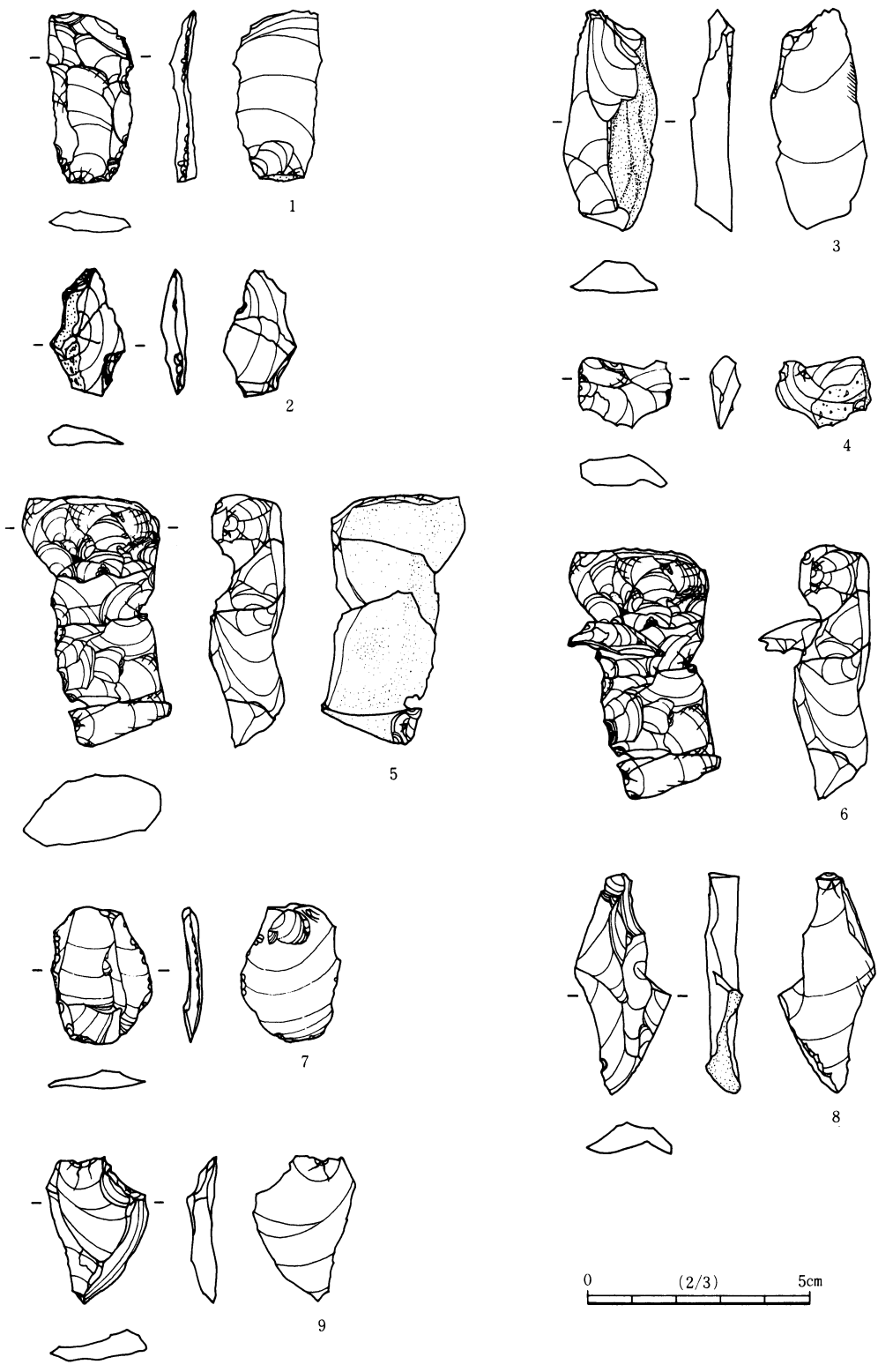
遺構 第2ブロックはIXa層からIXc層にかけて分布し、特にIXb層に分布の中心が見られる。平面分布は長軸6m、短軸3mの楕円形を呈している。H20-20区にやや集中して見られるが、全体的に散漫な出土状況である。その中で珪質頁岩製の石器についてはブロック全体から出土しており、南側に石核などが分布し、北側と東側にナイフ形石器が分布している。黒曜石製と凝灰岩製の石器については少数ではあるが、ブロックの北側に分布している。



第81図 第2ブロック器種別遺物分布図



第82図 第2ブロック母岩別遺物分布図



第83図 第2ブロック石器

遺物（第83図、第7表、図版40）

第2ブロックからは14点の石器が出土している。内訳は珪質頁岩製が10点、黒曜石製が1点、凝灰岩製が3点で、大半が珪質頁岩製の石器である。そのうちの5点の珪質頁岩製の石器が接合している。1は基部加工を施した珪質頁岩製のナイフ形石器である。片側縁に微細な調整を施している。2は不定形剥片を素材とした珪質頁岩製のナイフ形石器である。側縁の一部に調整を施している。3と4は珪質砂岩製の剥片である。3については一部原石面を残している。5は剥片利用石核で、4点の剥片が接合したものである。6は5の剥片利用石核に、さらに3の剥片が接合した状況を図示したものである。7は黒曜石製の使用痕のある剥片である。8と9は凝灰岩製の剥片である。

第2ブロックはナイフ形石器2点をはじめとする珪質頁岩製の石器が大半を占めている。これらは、剥片剥離工程の初期の段階で作出された大型の剥片を分割するように剥片剥離を行い、分割した後、各々の石器についてさらに剥片剥離を行い、小型の不定形剥片を作出している。

No	遺物番号	器種	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
1	H20-10-4	ナイフ形石器	珪質頁岩	3.86	1.97	0.60	3.82	
2	H20-21-1	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.74	1.65	0.55	1.81	原石面残る
3	H20-10-2	剥片	珪質頁岩	5.07	2.12	0.88	8.03	原石面残る
4	H20-20-2	剥片	珪質頁岩	1.69	2.13	0.64	1.77	
5	H20-20-1、3、4、5	石核	珪質頁岩	5.60	3.14	1.59	28.95	原石面残る
6	H20-20-1、2、3、4、5	石核	珪質頁岩	5.60	3.51	2.49	30.72	原石面残る
7	H20-10-1	剥片	黒曜石	2.97	2.26	4.40	3.38	
8	H20-10-3	剥片	凝灰岩	4.85	2.17	0.73	4.30	原石面残る
9	H20-20-9	剥片	凝灰岩	3.17	2.29	0.65	3.16	

第7表 第2ブロック石器観察表

第3ブロック（第84図）

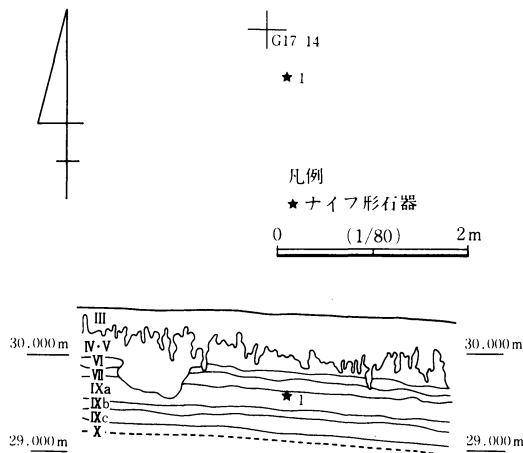
遺構 剥片1点のみの単独出土である。出土層位はIXa層上面である。ブロックとして捉えるには疑問がある。

遺物（第85図、図版40）

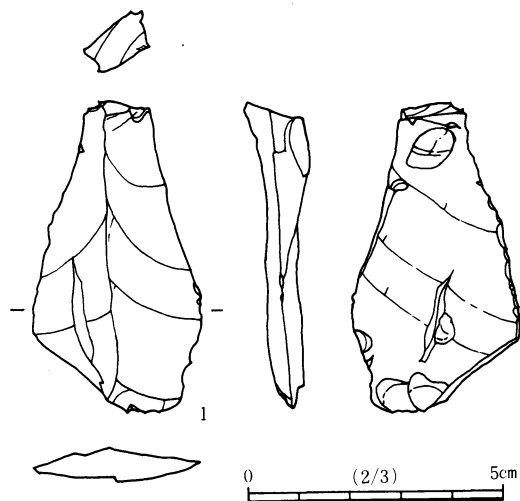
1は調整痕のある剥片である。凝灰岩製で、剥片の右側縁部に調整を施している。長さ6.17cm、幅3.34cm、厚み1.28cm、重量15.09gを測る。

単独出土遺物（第86図、図版40）

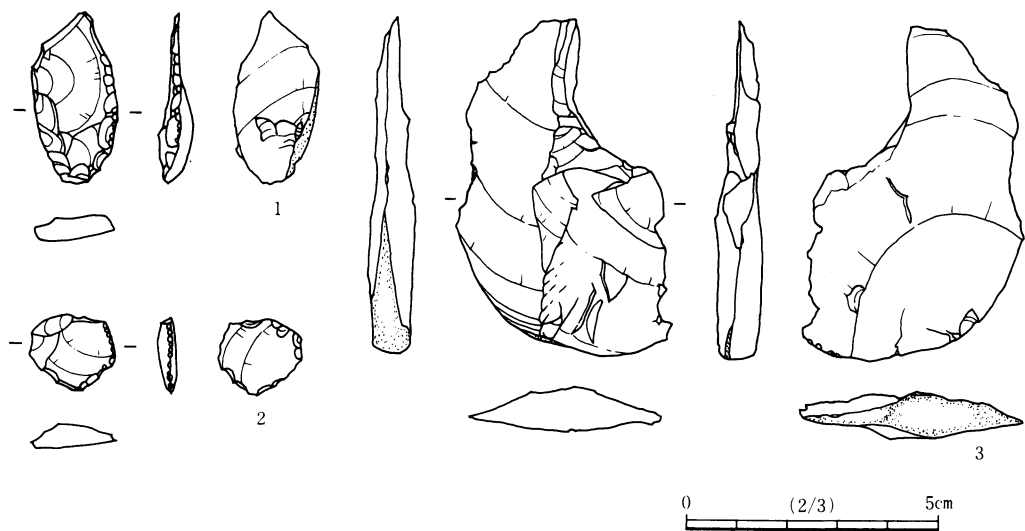
いずれも上層の確認調査中にIII層中から出土したもので、グリッド一括遺物である。1はG17-01区からの出土で、チャート製のナイフ形石器である。小型の剥片の右側縁部に微細な調整を



第84図 第3ブロック遺物分布図



第85図 第3ブロック石器



第86図 グリッド出土石器

施している。一部原石面を残している。長さ3.38cm、幅1.69cm、厚み0.67cm、重量3.05gを測る。2はG17-23区からの出土で、チャート製のスクレイパーである。主に表面から縁辺部に微細な調整を施しているが、一部裏面からも調整を施している。長さ1.51cm、幅1.65cm、厚み0.41cm、重量1.12gを測る。3はG17-46区からの出土で、凝灰岩製の使用痕のある剥片である。一部原石面を残している。長さ6.65cm、幅4.38cm、厚み0.95cm、重量19.99gを測る。

第3節 縄文時代

1 西側調査区の炉穴・土坑

西側調査区からは縄文時代早期の条痕文系土器と共に16基の炉穴と1基の土坑が検出された。これらの遺構の分布状況はB2-43区周辺とB3-06区周辺、B5-25区周辺の3か所に集中している。この3か所は、いずれも南側から入り込む谷に沿った台地縁辺に位置している。

B2-43区周辺では約12mの範囲から、大半が重複した状態で、8基の炉穴が検出された。炉穴の分布域が北側の調査区外へ若干伸びている可能性がある。各炉穴の長さは1.5m～2.4m、幅は1.1m～1.8mで、ほぼ同一規模である。B3-06区周辺では約15mの範囲から3基の炉穴が検出された。055以外は調査区域外へ伸びているため全体の規模は不明であるが、幅が1.6m～1.9mと大きなものである。B5-25区周辺では約5mの範囲から5基の炉穴と1基の土坑が検出された。近世遺構と重複しており、炉穴はいずれも遺存状況が悪く、幅が0.5m～1.2mと比較的規模が小さいものである。これらの3か所における炉穴の規模の相違は、使用されていた当時の規模の違いを表しているかは不明であるが、近世遺構などの後世の所作による遺存状況の差が、3か所の規模の差に少なからず影響していると思われる。

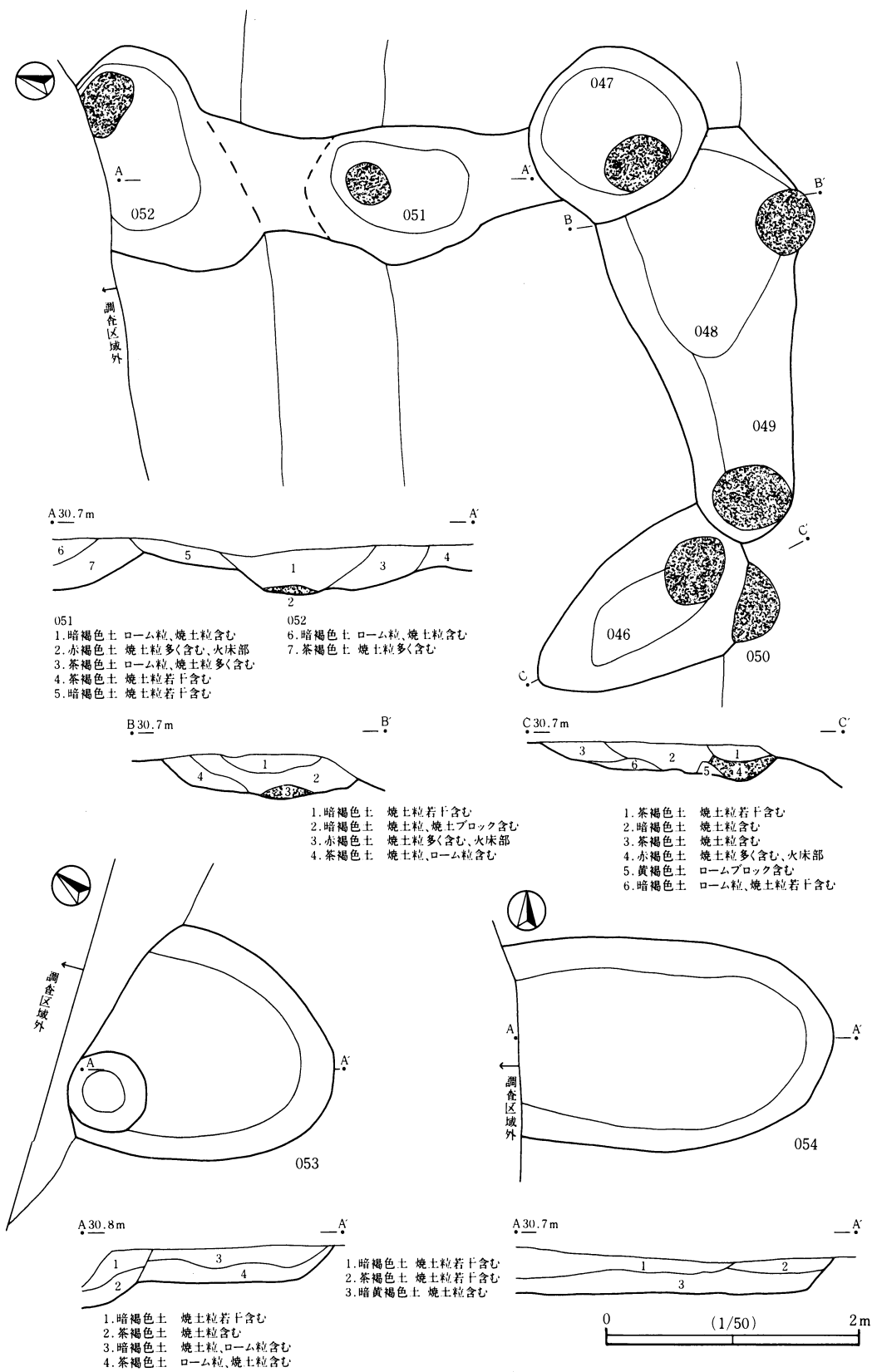
046 (第87図、図版17) B2-32・33・42・43区に位置する長楕円形の炉穴で、南側で049と050と重複している。新旧関係は不明である。北西－南東方向に主軸を持つ。長さ1.9m、幅1.1m、深さ0.2m～0.3mを測る。南東端の底面から立上がり部分にかけて火床部がある。覆土中から少量の条痕文系土器が出土した。

047 (第87図、図版17) B2-43区に位置する円形に近い楕円形の炉穴で、南側で048と、北側で051と重複している。新旧関係は不明である。北東－南西方向に主軸を持つ。長さ1.3m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。南西端の底面に火床部がある。覆土中から少量の条痕文系土器が出土した。

048 (第87図、図版17) B2-33・43区に位置する楕円形の炉穴で、北側で047と、西側で049と重複している。新旧関係は不明である。また、南側は近世溝に切られている。北西－南東方向に主軸を持つ。長さ1.8m以上、幅1.7m、深さ0.3m～0.4mを測る。南東端の底面から立上がり部分にかけて火床部がある。覆土中から少量の条痕文系土器が出土した。

049 (第87図、図版17) B2-43区に位置する長楕円形の炉穴で、東側で048と、西側で046と重複している。新旧関係は不明である。また、南側を近世溝に切られている。東－西方向に主軸を持つ。長さ1.5m以上、幅0.8m以上、深さ0.3m～0.4mを測る。西端の底面から立上がり部分にかけて火床部がある。遺物は出土していない。

050 (第87図、図版17) B2-43区に位置する炉穴で、近世溝によって大半が消失しており、近世溝の壁面にわずかに火床部が検出された。また、北側で046と重複している。新旧関係は不明である。深さは0.2mを測る。遺物は出土していない。



第87図 炉穴(1)

051 (第87図、図版17) B2-33区に位置する長楕円形の炉穴で、北側で052と南側で047と重複している。新旧関係は052→051である。047との新旧関係は不明である。また、近世溝に覆土の一部が切られている。南－北方向に主軸を持つ。長さ2.4m、幅1.1m、深さ0.2m～0.4mを測る。炉穴の北側と南側の掘込みは浅く、火床部が位置する中央付近が一段深い。遺物は出土していない。

052 (第87図、図版17) B2-23・24区に位置する長楕円形の炉穴で、北側は調査区外へ伸びている。南側は051と重複している。北東－南西方向に主軸を持つ。長さ1.9m、幅1.2m以上を測る。北東端の底面に火床部が検出された。深さは0.3m～0.5mを測る。条痕文系土器が少量出土した。(第89図5、6)

053 (第87図、図版18) B2-30・31・40・41区に位置する炉穴で、北側が近世溝とピットに切られている。北西－南東方向に主軸を持ち、長楕円形と推測される。長さ1.6m以上、幅1.8m、深さ0.3mを測る。火床部は検出されなかったが、周辺の炉穴の覆土と類似している。底面はほぼ平らである。少量の早期の縄文土器とともに中期の土器が1点出土した。(第89図7、12)

054 (第87図、図版18) B3-05区に位置する長楕円形の炉穴で、西側が調査区外へ伸びている。東－西方向に主軸を持つ。長さ2.4m以上、幅1.6m、深さ0.3mを測る。火床部は検出されなかったが、周辺の炉穴の覆土と類似している。底面はほぼ平らである。少量の条痕文系土器が出土した。(第89図4)

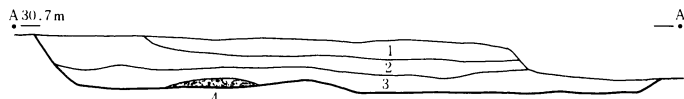
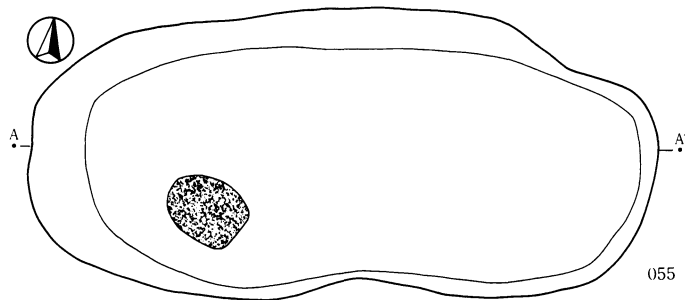
055 (第88図、図版18) B3-05・06区に位置する長楕円形の炉穴で、南側の覆土の一部が近世溝に切られている。東－西方向に主軸を持つ。長さ4.2m、幅1.9m、深さ0.3mを測る。西側の底面に火床部がある。底面はほぼ平らである。少量の条痕文系土器が出土した。(第89図1)

056 (第88図、図版18) A3-97区に位置する長楕円形の炉穴で、北側が調査区外へ伸びている。北－南方向に主軸を持つ。長さ1.8m以上、幅1.9m、深さ0.2mを測る。火床部は検出されなかったが、覆土が周辺の炉穴の覆土と類似している。遺物は出土していない。

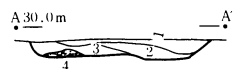
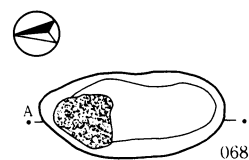
068 (第88図、図版18) B5-24区に位置する長楕円形の炉穴で、北－南方向に主軸を持つ。長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。北端の底面に火床部がある。遺物は出土していない。

072A・B (第88図、図版18) B5-24・25・34区に位置する長楕円形の炉穴で、東・西側と北側を近世溝077・078と近世の土坑に切られている。北東－南西方向に主軸を持つ072Aと、北－南方向に主軸を持つ072Bの2基の重複である。新旧関係は072B→072Aである。072Aは長さ1.5m以上、幅1.2mを測る。072Bは長さ1.7m以上、幅0.7mを測る。深さはともに0.1m～0.2mを測る。072Aは南側に、072Bは北東側にそれぞれ火床部がある。縄文土器の小片が1点出土した。

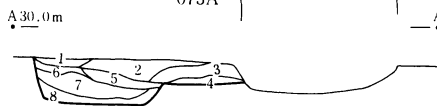
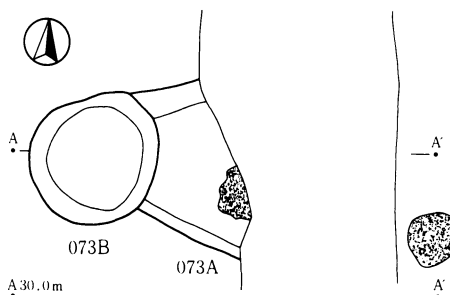
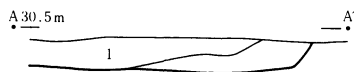
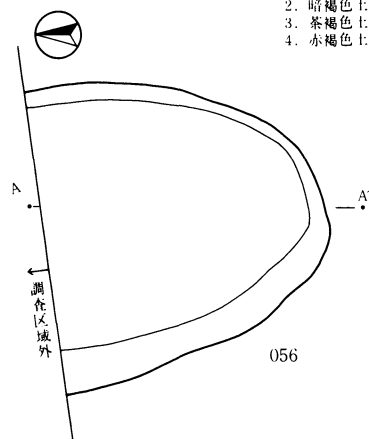
073A・B (第88図、図版18) B5-34、35区に位置する炉穴と土坑で、近世溝078に切られている。073Aは東－西方向に主軸を持つ長楕円形の炉穴である。長さ1.1m以上、幅1.0m、深さ0.1mを測る。東側に火床部がある。また、近世溝078を介して1mほど離れた東側にも火床



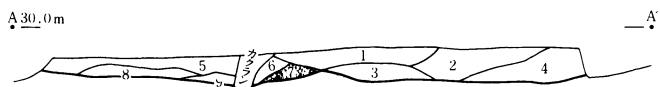
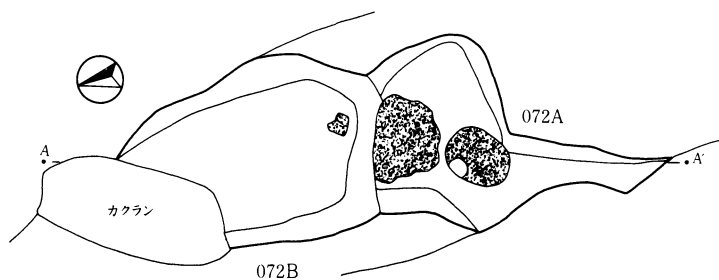
- 1. カクラン
- 2. 暗褐色土 焼土粒若干含む
- 3. 茶褐色土 焼土粒若干含む
- 4. 赤褐色土 焼土粒含む、火床部



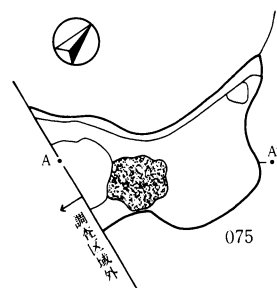
- 1. 暗褐色土
- 2. 茶褐色土
- 3. 茶褐色土 焼土粒若干含む
- 4. 赤褐色土 焼土粒含む、火床部



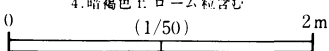
- 073A
- 1. 暗褐色土
- 2. 暗褐色土 焼土粒若干含む
- 3. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒若干含む
- 4. 暗褐色土 ローム粒を含む
- 073B
- 5. 暗褐色土 焼土粒若干含む
- 6. 暗褐色土
- 7. 黒褐色土
- 8. 暗褐色土



- 072A
- 1. 褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土 ローム粒若干含む
- 4. 暗褐色土 ローム粒含む
- 072B
- 5. 褐色土
- 6. 暗褐色土 焼土粒若干含む
- 7. 赤褐色土 焼土粒含む、火床部
- 8. 暗褐色土
- 9. 褐色土



- 1. 暗褐色土 焼土粒若干含む
- 2. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒若干含む
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土 ローム粒含む



第88図 炉穴(2)

部のみが検出されているが、これに伴う掘込みは検出されていない。遺物は出土していない。073Bは径0.9mの円形の土坑である。底面は平らで、しっかりした立上がりを持つ。073Aに切られている。検出面からの深さは0.3mを測る。縄文土器の小片が2点出土した。

075 (第88図、図版18) B5-25区に位置する長楕円形の炉穴で、北側は調査区外へ伸びている。東側が近世溝078に切られている。北東-南西方向に主軸を持つ。長さ1.1m以上、幅0.7m以上、深さ0.1mを測る。ほぼ中央に火床部が検出された。遺物は出土していない。

2 西側調査区の出土遺物 (第89図、図版40・41)

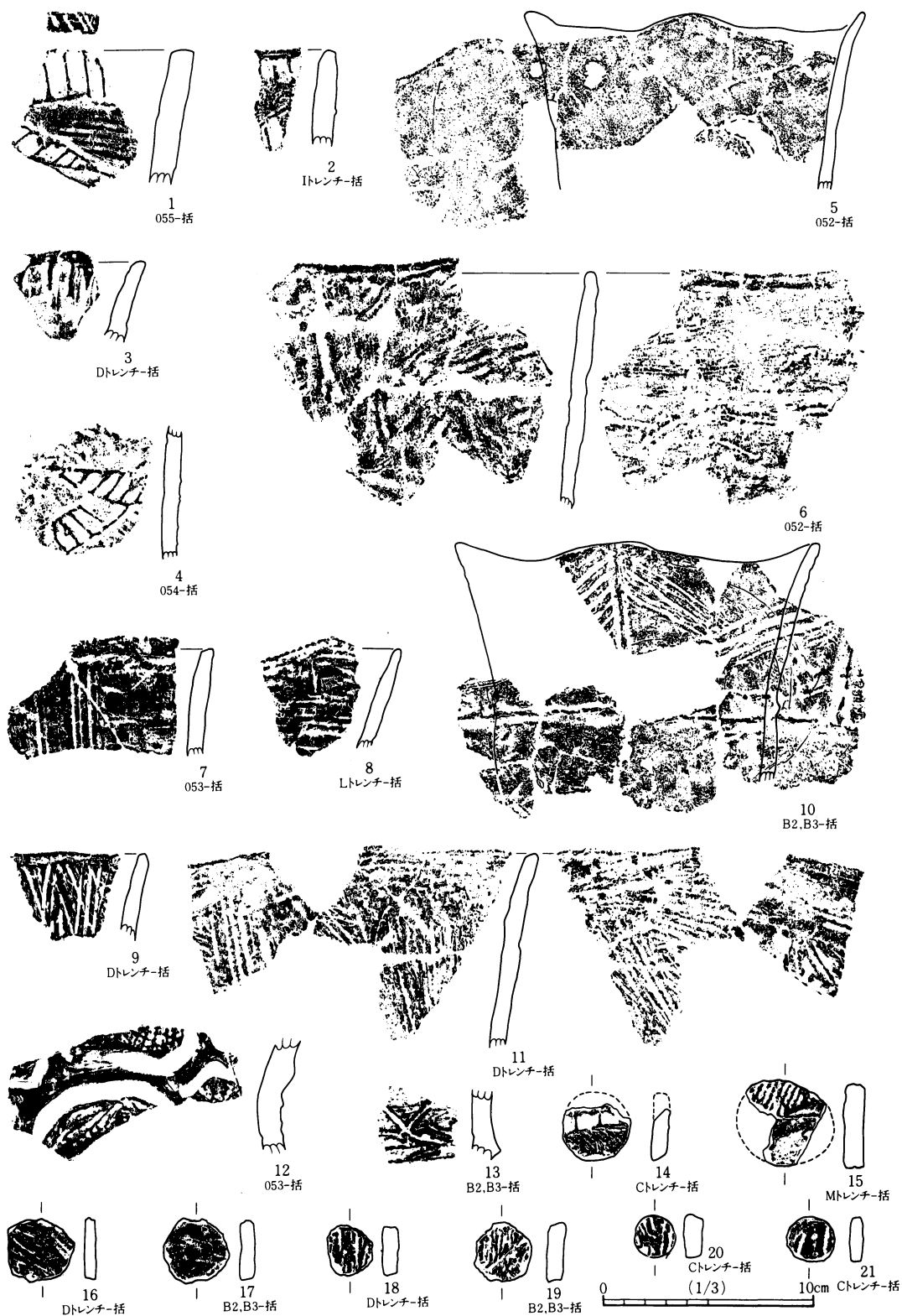
各遺構とその周辺グリットから少量の縄文土器が出土した。ただし東側に位置する炉穴群周辺のB5-24・25・34・35区では近世以降の宅地化のためか、ほとんど遺物は出土していない。各遺構からの遺物の出土は少なく、大半が小片である。炉穴内において使用された状態で出土したものはなく、炉穴の廃棄に伴うものと考えられ、グリット出土遺物と一緒に扱う。なお、西側調査区出土の縄文土器は整理箱3箱分である。大半は野島～茅山上層式土器のいわゆる条痕文系土器であり、若干中期の土器を含んでいる。

1、2、4は細隆起線文により文様が施された野島式土器である。斜位の細隆起線文を主体に窓枠状の区画文が施されている。1の口唇部は平坦で、口唇上に刻み目が施されている。3は口唇下に縦位の隆起線が貼り付けられたもので、子母口式から野島式付近の時期に比定されるものであろう。5は擦痕の上に丁寧なナデを施したもので、内面には明瞭な擦痕が残る条痕文系土器である。波状口縁で口径16.2cmに復原される。6～9、11は内外面に条痕が施されたもので、主に横方向や斜め方向の条痕が目立つ。10は波状口縁で波頂部から貼付線が垂下し、頸部付近では横位の貼付線が巡る。貼付線の区画内には沈線文が施されている。野島式土器に比定される。推定口径は17.4cmである。12は隆帯と沈線による、楕円形の区画文を有した加曾利E3式土器と思われる。13は胴部の段部分で、胴部上位に沈線を施している野島式土器付近に比定されるものであろう。14～21は土製円盤で、14と15は欠損しているが、14は野島式に15は加曾利E式に属するものであろう。そのほかは条痕文系に属するものである。

このほかに磨製石斧が1点出土している(第95図1)。刃部だけの欠損品である。残存する刃部の形態は円刃を呈しており、断面形も円味を帯びている。凝灰岩製である。

3 東側調査区の遺構

東側調査区からは陥穴16基、土坑4基、炉穴10基が検出された。陥穴と土坑の大半はF16区からG17区にかけての長さ約60mの範囲に集中して分布している。この範囲は南側から入ってくる谷と北側から入ってくる谷に挟まれており、台地平坦面が尾根状に狭まっている。このほかに陥穴は、炉穴が集中するH19区からH20区においても2基検出された。陥穴の形態は、長軸と短軸の比が4～2:1ほどで長楕円形を呈し、底面の幅が著しく狭い形態と長軸と短軸の比が1.4～1.1:1ほどで長方形を呈し、底面に小ピットを有する形態とに分けられる。前者が7基、



第89図 縄文土器(1)

後者が9基である。前者の規模は長軸2.0m～3.5m、短軸0.8m～1.3mである。一方、後者の規模は長軸1.1m～1.6m、短軸0.9m～1.2mで、両形態ともほぼ大きさが一定している。なお、両形態が時期的な相違か、目的とする獲物の違いによる相違かは不明であるが、両者が重複する1例は前者の形態が先行する。また、土坑としたものについても、底面に小ピットがないものの、陥穴の後者の形態が類似するものがある。009と013は形態や覆土から陥穴の可能性も考えられる。030B、032は平面形がやや不整形で、030Bは立上がりには段を持っており、032はやや丸底で、ほかの土坑や陥穴とは形態を異にしている。

F16区からG17区にかけての陥穴は、各形態が混在して分布しているが、ともに北西-南東方向に主軸を持つものが多い。陥穴が集中する範囲は北東側と南西側が谷に面しており、北西-南東の主軸方向は、両側の谷に向かって直交する方向と捉えられる。北東-南西方向に主軸を持つものや、東-西方向に主軸を持つものは少なく、陥穴が集中する範囲の北東側に見られる傾向がある。北東-南西の主軸方向は、両側の谷に向かって平行する方向と捉えられる。

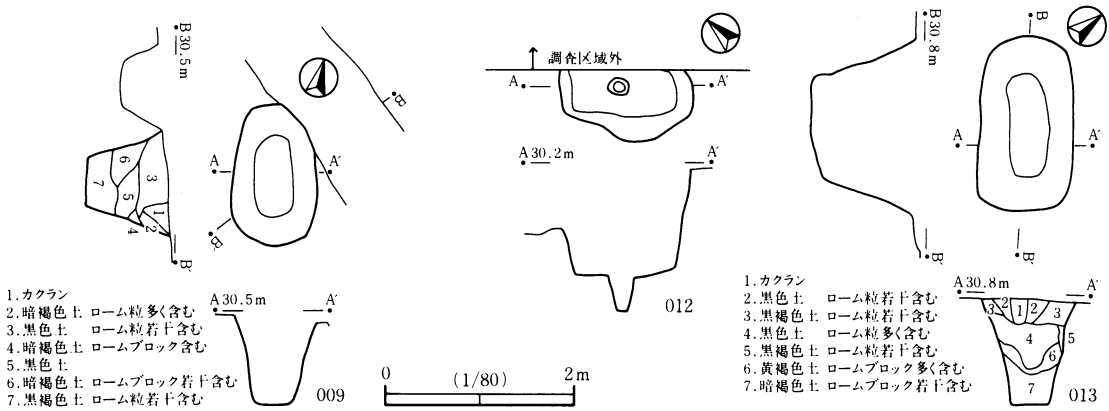
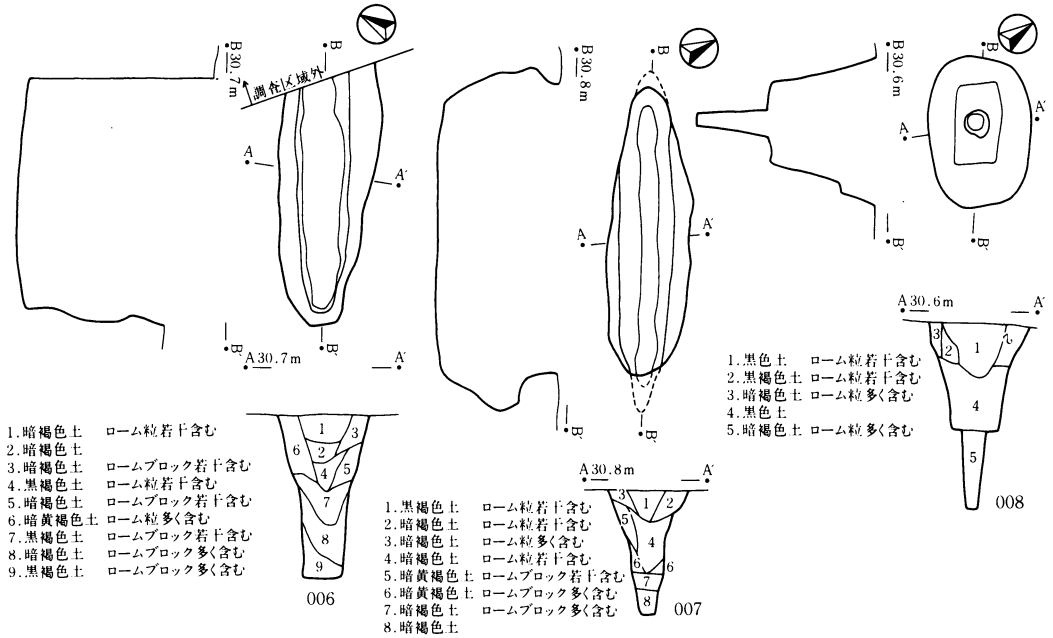
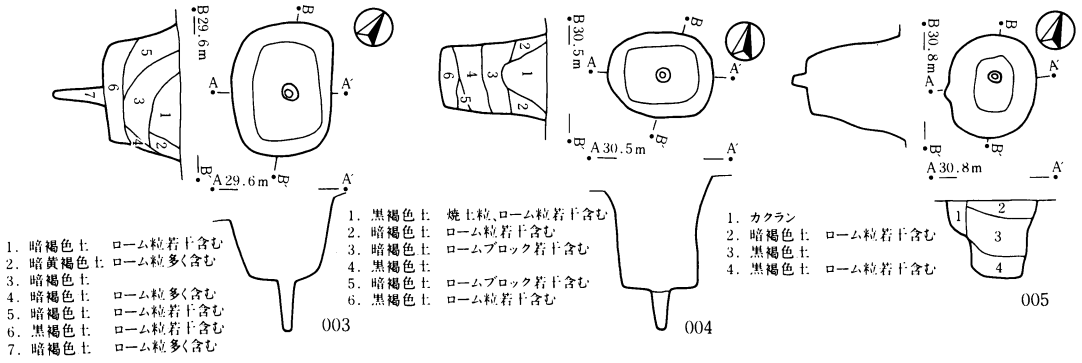
炉穴については、その大半がH19区からH20区の約35mの範囲に集中して分布している。このほかに陥穴が集中するG17区に1基が単独で位置している。炉穴が集中する範囲は北側から入ってくる谷頭に当たる。確認された炉穴はいずれも長軸1m前後のほぼ同規模のものである。火床部は土坑内において北側又は南側に位置しているものが多い傾向が窺える。炉穴と陥穴が重複しているものが1例あり、炉穴が陥穴に先行する。

003 (第90図、図版13) F16-68・78区に位置する長方形の陥穴で、北西-南東方向に主軸を持つ。長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.15m、深さ0.55mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。条痕文系土器などの小片が6点出土した。

004 (第90図、図版13) F17-70区に位置するほぼ長方形の陥穴で、北東-南西方向に主軸を持つ。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ1.1mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.12m、深さ0.40mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いているが、やや開きが少ない。遺物は出土していない。

005 (第90図、図版13) F17-81・91区に位置するほぼ長方形の陥穴で、北西-南東方向に主軸を持つ。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ1.0mを測る。底面はほぼ平らで、中央やや北側に径0.12m、深さ0.15mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。遺物は出土していない。

006 (第90図、図版13) F16-69・F17-60区に位置する長楕円形の陥穴で、北東-南西方向に主軸を持つ。東側は調査区外へ伸びている。長軸2.5m以上、短軸1.0mを測る。底面は平坦である。両側面の壁は、底面から0.9m上付近で外側に屈曲して、上方向へ開いている。遺物は出土していない。



第90図 陥穴、土坑(1)

007 (第90図、図版13) F17-91・92・G17-01・02区に位置する長楕円形の陥穴で、北西—南東方向に主軸を持つ。長軸3.5m、短軸0.8m、深さ1.3mを測る。両端部が袋状に抉れている。両側面の壁は、底面から0.8m付近で外側に屈曲して、上方向へ開いている。底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

008 (第90図、図版13) F17-93・94区に位置するほぼ長方形の陥穴で、北西—南東方向に主軸を持つ。長軸1.5m、短軸1.1m、深さ1.1mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.25m、深さ0.75mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。縄文土器の小片が1点出土した。

009 (第90図、図版13) F17-73区に位置するほぼ長方形の土坑で、北側の一部を溝010に切られている。北—南方向に主軸を持つ。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平らである。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。条痕文系土器などの小片が2点出土した。

012 (第90図、図版14) F16-59区に位置するほぼ長方形の陥穴で、北西側が溝002に切られている。東側は調査区外へ伸びている。北西—南東方向に主軸を持つ。長軸1.4m、短軸0.7m以上、深さ1.0mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.20m、深さ0.32mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。遺物は出土していない。

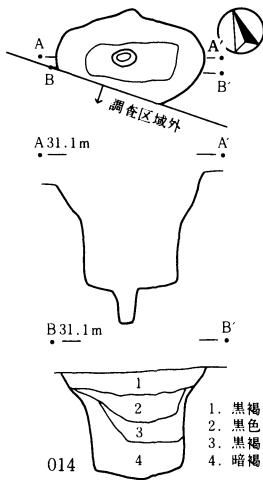
013 (第90図、図版14) G17-01・02・11・12区に位置するほぼ長方形の土坑で、北西—南東方向に主軸を持つ。長軸1.8m、短軸1.0m、深さ1.0mを測る。底面はほぼ平らである。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。やや開きが大きい。遺物は出土していない。

014 (第91図、図版14) G17-31区に位置するほぼ長方形の陥穴で、南側が調査区外へ伸びている。北西—南東方向に主軸を持つ。長軸1.5m、短軸0.9m以上、深さ1.2mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.20m、深さ0.35mのピットが検出された。壁は底面から0.6m上付近で外側へ屈曲して、上方向へ開いている。遺物は出土していない。

015 (第91図、図版14) G17-21区に位置するほぼ長方形の陥穴で、東—西方向に主軸を持つ。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.6mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.22m、深さ0.27mのピットが検出された。壁は底面から0.4m上付近で外側へ屈曲して、上方向へ開いている。遺物は出土していない。

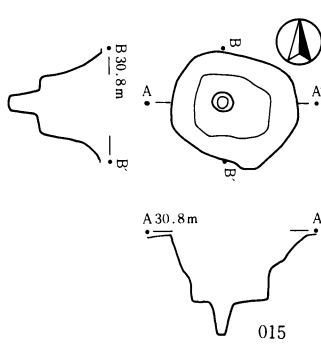
016 (第91図、図版14) G17-11・12区に位置する長楕円形の陥穴で、北西—南東方向に主軸を持つ。長軸2.0m、短軸1.0m、深さ2.4mを測る。底面はほぼ平らである。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。開きが極めて小さい。遺物は出土していない。

017・018 (第91図、図版14) G17-02・12区に位置する陥穴である。重複関係は018→017である。018は近代の炭焼窯にも切られている。017は長楕円形を呈し、北西—南東方向に主軸を持つ。長軸1.6m、短軸1.2m以上、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.25m、深さ0.20mのピットが検出された。壁は底面から0.4m上方で外側に屈曲して、上方向へ開いて



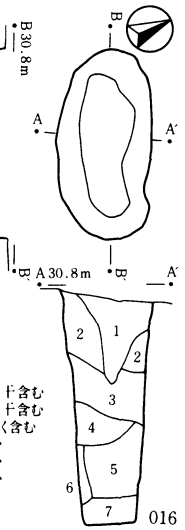
014

1. 黒褐色土
 2. 黒色土
 3. 黒褐色土
 4. 暗褐色土
- ローム粒若干含む
ローム粒若干含む
ローム粒若干含む
ロームブロック若干含む

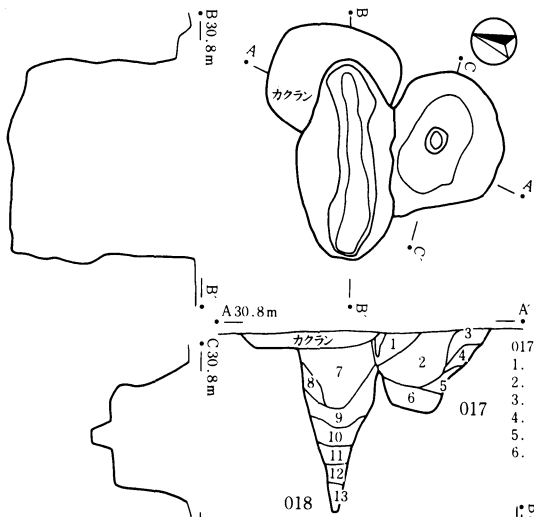


015

1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 黒褐色土
 4. 暗黄褐色土
 5. 黒色土
 6. 灰褐色土
 7. 黒褐色土
- ロームブロック若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック多く含む
ローム粒多く含む
ローム粒多く含む
ローム粒多く含む
ローム粒多く含む

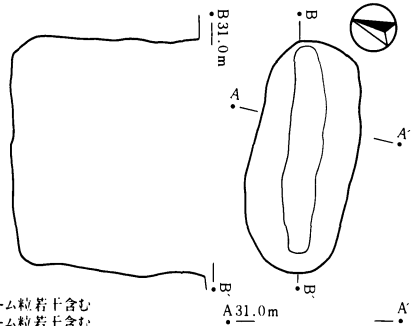


016



017

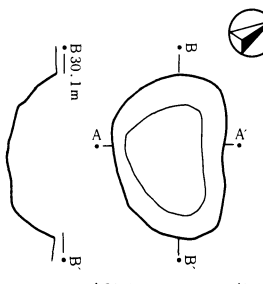
1. 暗褐色土
 2. 黒色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
- ローム粒若干含む
ローム粒若干含む
ローム粒若干含む
ローム粒含む
ローム粒多く含む
ロームブロック若干含む



018

7. 褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 黒褐色土
 10. 黄褐色土
 11. 黒褐色土
 12. 黄褐色土
 13. 黒褐色土
- ローム粒若干含む
ローム粒多く含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック多く含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック多く含む
ロームブロック多く含む

1. 暗褐色土
 2. 黒色土
 3. 黒褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 黒色土
 6. 黒褐色土
 7. 黒褐色土
- ローム粒若干含む
ローム粒若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック多く含む
ローム粒多く含む



032

1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 黒褐色土
- ローム粒若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック若干含む
ロームブロック若干含む
ローム粒多く含む

第91図 陥穴、土壇(2)

いる。遺物は出土していない。018は長楕円形を呈し、北東－南西方向に主軸を持つ。長軸2.0m、短軸1.0m以上、深さ2.0mを測る。底面はほぼ平らである。両側面の壁は底面より0.8m上方から外側へ屈曲して、上方向に開いている。遺物は出土していない。

026 (第91図、図版15) H20-23区に位置する長楕円形の陥穴で、北東－南西方向に主軸を持つ。長軸2.3m、短軸1.0m、深さ2.0mを測る。底面はほぼ平坦である。両側面の壁はほぼ直線的に、上方向へ開いている。1層～4層中から条痕文系土器が、6層中から中期の土器が1点出土した。(第94図34、35)

032 (第91図、図版15) G17-46区に位置する長楕円形の土坑で、北西－南東方向に主軸を持つ。長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。やや丸底で、緩やかな立上がり壁である。遺物は出土していない。

033 (第91図、図版15) G17-55区に位置する陥穴で、北西－南東方向に主軸を持つ。長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.4mを測る。底面はほぼ平らで、中央に径0.15m、深さ0.40mのピットが検出された。壁はほぼ直線的に上方向へ開いている。遺物は出土していない。

034 (第91図、図版15) G17-57区に位置する長楕円形の陥穴で、北西－南東方向に主軸を持つ。長軸3.2m、短軸0.8m、深さ1.0mを測る。両端が袋状に抉れている。両側面の壁はほぼ直線的に上方向に開いている。底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

019 (第92図、図版15) G17-23区に位置する長楕円形の炉穴で、北西－南東方向に主軸を持つ。長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。南側の底面に火床部がある。覆土中から焼礫1点と条痕文系土器が少量出土した。(第94図30)

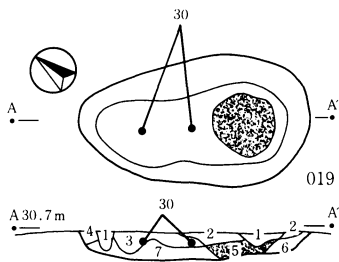
020 (第92図、図版15) H20-34区に位置する楕円形の炉穴で、北－南方向に主軸を持つ。長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。北側の底面に火床部がある。遺物は出土していない。

021 (第92図、図版15) H20-33区に位置する長楕円形の炉穴で、北－南方向に主軸を持つ。長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.1mを測る。北端の底面から立上がり部分にかけて火床部がある。遺物は出土していない。

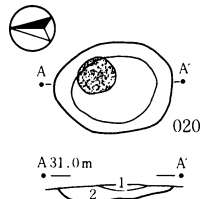
022 (第92図、図版16) H20-22区に位置する長楕円形の炉穴で、北東－南西方向に主軸を持つ。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。西側の底面に火床部がある。火床部上面から条痕文系土器が少量出土した。(第94図27)

023 (第92図、図版16) H20-22区に位置する楕円形の炉穴で、北－南方向に主軸を持つ。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。北端の底面から立上がり部分にかけて火床部がある。遺物は出土していない。

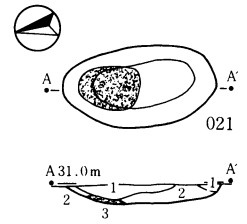
024 (第92図、図版16) H20-11・12・21・22区に位置する炉穴群である。個々の炉穴の掘込みが検出されず、炉穴群全体としては複雑な形状を示す。南北5.0m、東西2.5mの大きな掘込み



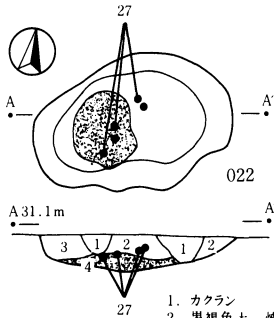
1. カクラン
2. 黒褐色土 焼土粒含む
3. 黒褐色土 焼土粒若干含む
4. 暗褐色土 ローム粒若干含む
5. 暗褐色土 焼土粒多く含む、火床部
6. 暗褐色土 焼土粒若干含む
7. 暗黄褐色土 焼土粒若干含む



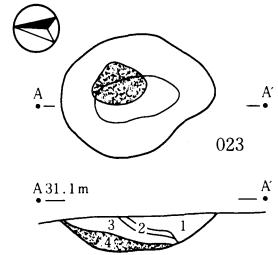
1. 暗褐色土 焼土粒含む
2. 暗褐色土 焼土粒若干含む



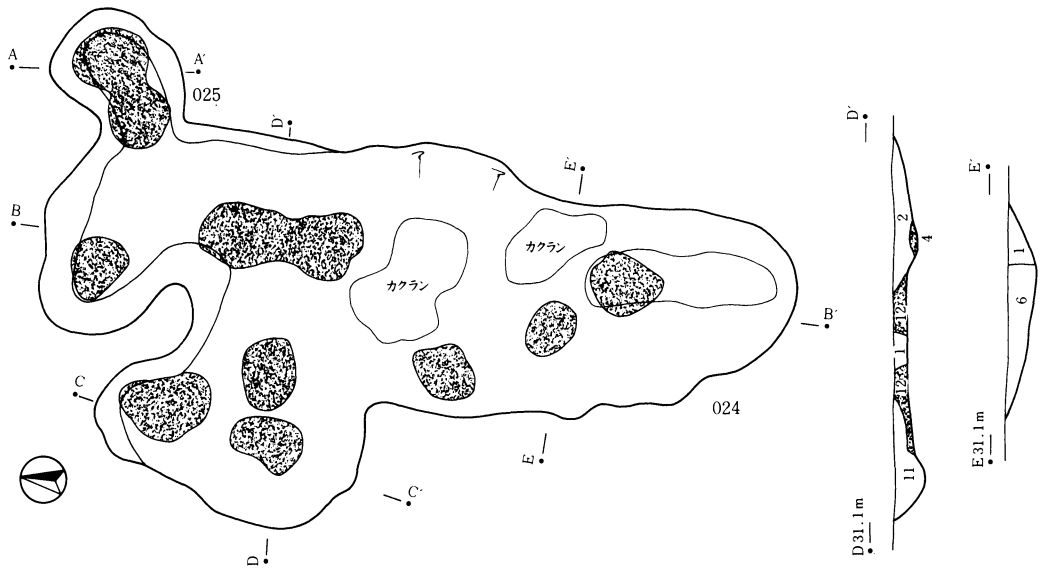
1. カクラン
2. 暗褐色土 焼土粒多く含む
3. 赤褐色土 焼土粒多く含む、火床部



1. カクラン
2. 黒褐色土 焼土粒含む
3. 暗褐色土 焼土粒若干含む
4. 赤褐色土 焼土粒多く含む、火床部



1. 黒色土 焼土ブロック多く含む
2. 赤褐色土 焼土粒多く含む
3. 黒色土 焼土粒若干含む
4. 赤褐色土 焼土ブロック多く含む、火床部



1. カクラン
2. 黒色土 焼土粒を多く含む
3. 黒褐色土 焼土粒若干含む
4. 黒褐色土 焼土粒多く含む、火床部
5. 暗褐色土 ロームブロック若干含む
6. 暗褐色土 焼土粒若干含む
7. 赤褐色土 焼土粒多く含む、火床部
8. 暗褐色土 焼土粒若干含む
9. 黒褐色土 焼土粒多く含む、火床部
10. 暗褐色土 焼土粒若干含む
11. 黒色土 焼土粒多く含む
12. 黒褐色土 焼土粒多く含む、火床部

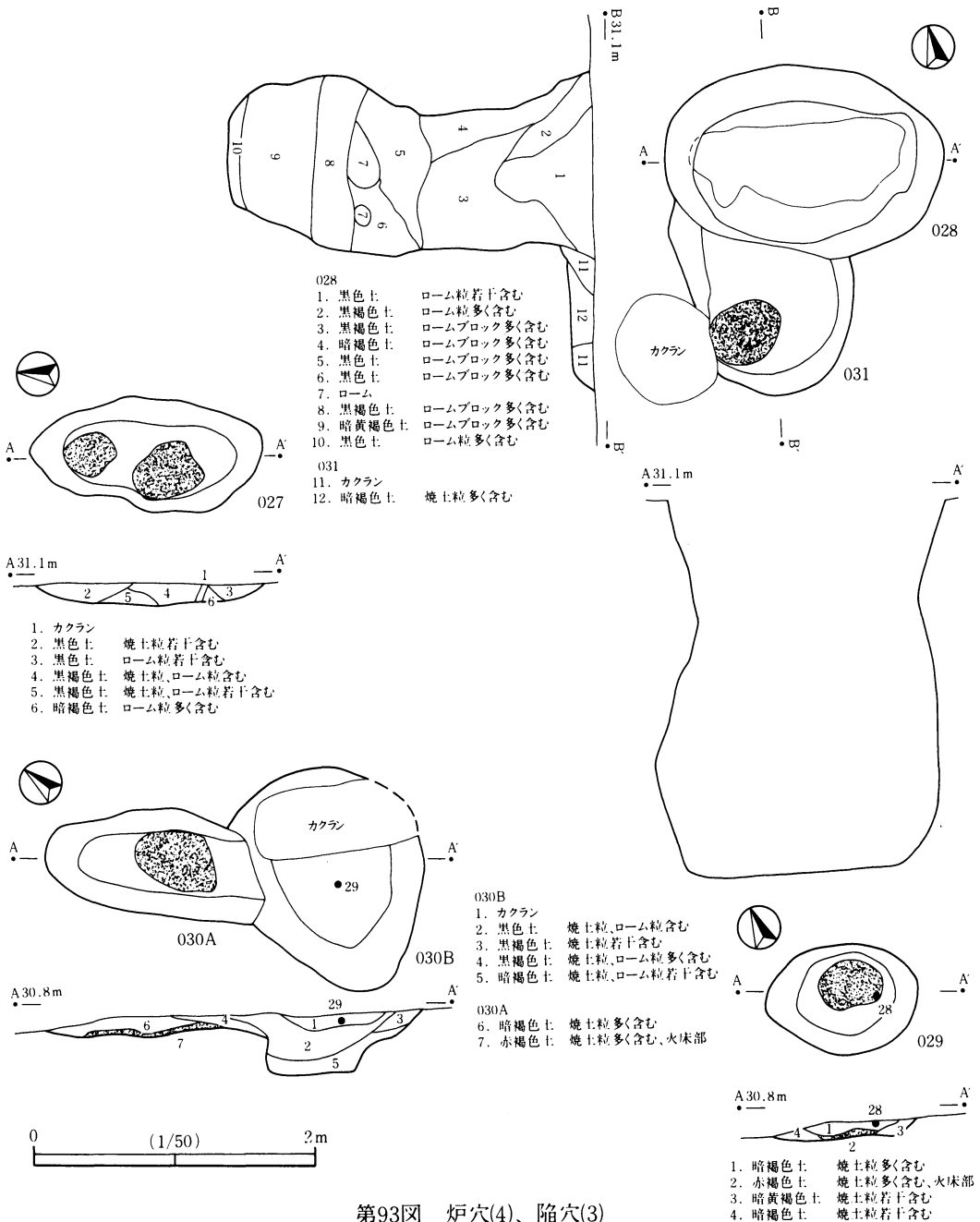
13. 暗褐色土 焼土粒多く含む、火床部

0 (1/50) 2m

第92図 炉穴(3)

の中に8か所の火床部が検出された。8基前後の重複である。北側の北西-南東方向に主軸を持つものや、西側と南側に北-南方向に主軸をもつものなどの存在が窺われる。それぞれの新旧関係は不明である。深さは0.1m~0.2mを測る。条痕文系土器が1点出土した。

025 (第92図、図版16) H20-12区に位置する楕円形の炉穴で、南西側で024と重複している。新旧関係は不明である。北東-南西に主軸を持つ。長軸1.0m以上、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。底面全体が火床部として検出された。遺物は出土していない。



027 (第93図、図版16) H21-20区に位置する長楕円形の炉穴で、北-南方向に主軸を持つ。長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.15mを測る。底面の北端と中央の2か所に火床部がある。遺物は出土していない。

028・031 (第93図、図版15・17) H19-29・39区に位置する炉穴と陥穴で、炉穴031→陥穴028の重複関係にある。028は長楕円形を呈し、北西-南東方向に主軸を持つ。長軸2.0m、短軸1.3m、深さ2.6mを測る。底面はほぼ平らで、壁は底面から1.5m～1.8m付近で大きく屈曲して、上方向へ開いている。屈曲部から下はやや大きく抉れている。条痕文系土器が少量出土した。031は楕円形を呈し、北-南方向に主軸を持つ。長軸1.0m以上、短軸1.1m、深さ0.15mを測る。南側の底面に火床部がある。火床部上面から条痕文系土器が少量出土した。

029 (第93図、図版16・17) H19-25区に位置する楕円形の炉穴で、北西-南東方向に主軸を持つ。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。底面のやや北側に火床部がある。覆土中から条痕文系土器が少量出土した。(第94図28)

030A・B (第93図、図版16) H19-25区に位置する炉穴と土坑で、炉穴030A→土坑030Bの前後関係にある。030Aは長楕円形を呈し、北西-南東方向に主軸を持つ。長軸1.4m以上、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。ほぼ中央に火床部がある。遺物は出土していない。030Bは楕円形を呈し、北東-南西方向に主軸を持つ。大半が攪乱を受けているが、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。底面はほぼ平らである。なお、覆土に比較的多くの焼土粒が含まれていた。覆土中から条痕文系土器が2点出土した。(第94図29)

4 東側調査区の出土遺物 (第94図、図版40～42)

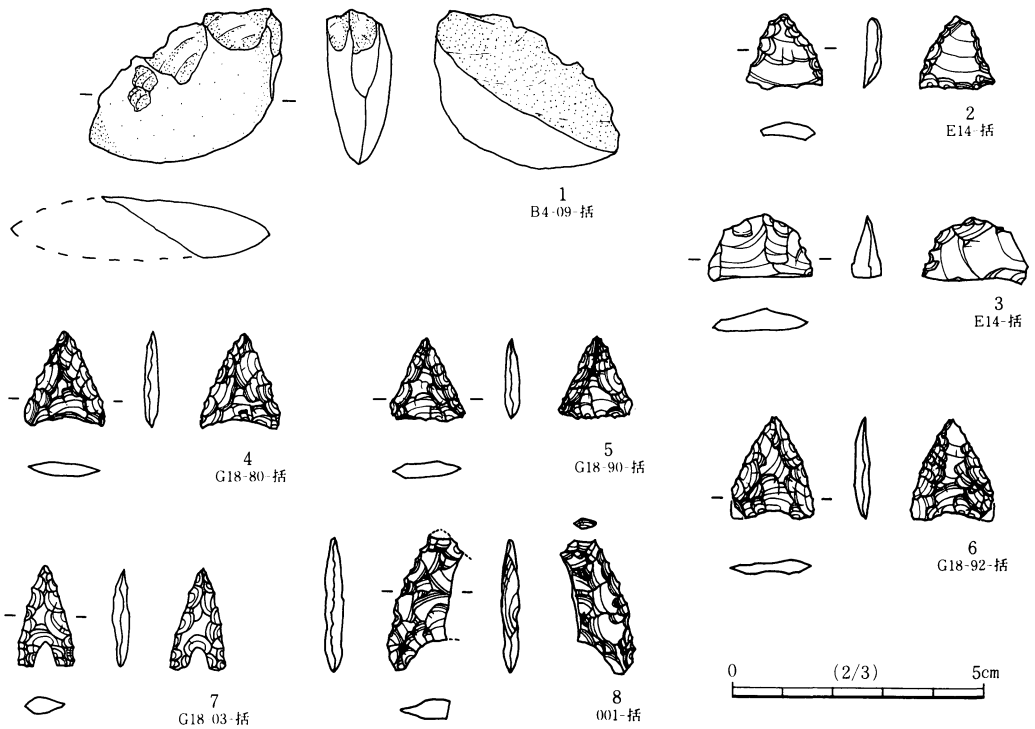
各遺構とその周辺グリットから少量の縄文土器が出土した。西側調査区同様、各遺構からの出土は少なく、大半が炉穴の廃棄後によるものと考えられ、グリット出土遺物と一緒に扱う。西側調査区に比べ、早期の撚糸文土器、沈線文土器、条痕文系土器とやや時期幅をもった土器群が出土しているが、大半は西側調査区同様に条痕文系土器であり、炉穴の覆土中の遺物の大半も条痕文系土器である。なお、中後期の土器も少量出土した。東側調査区出土の縄文土器は整理箱2箱分である。

22、23は撚糸文土器の口縁部である。24は細沈線文と貝殻腹縁文が交互に横走する。25は細沈線文と半載竹管文が横走する。24、25は田戸上層式土器に比定される。26は太い沈線文が横走する田戸下層式土器と思われる。27は地文に縦方向を主体とした条痕を施した後に横位の沈線文を施したもので、口縁部には連続刺突文が見られる。内面には横方向や斜方向の条痕が施されている。茅山上層式土器である。28～30は内外面に条痕が施されたもので、34は外面に条痕、内面に擦痕が認められるものである。35は阿玉台式、36は安行式、37は加曾利B式である。

土器のほかに石鏃が5点出土している(第95図4～8)。4～7は陥穴が集中するF16区～G17区と炉穴が集中するH19区～H20区に挟まれたG18区のグリッド一括遺物である。8は炉穴が集



第94図 繩文土器(2)



第95図 縄文時代石器

中する範囲よりも東側に位置する溝001の覆土中から出土した。4～7は小型で、4と6は挟りの少ないもの、5は正三角形で基部が直線のもの、7は挟りの深いものである。8は基部の挟りが明確なものである。なお、4～6はチャート製、7は安山岩製、8は黒曜石製である。4は最大長1.48cm、最大幅1.49cm、最大厚0.29cm、重量0.61gを測る。5は最大長1.55cm、最大幅1.43cm、最大厚0.31cm、重量0.64gを測る。6は最大長1.96cm、最大幅1.57cm、最大厚0.30cm、重量0.91cmを測る。7は最大長2.01cm、最大幅1.13cm、最大厚0.33cm、重量0.53gを測る。8は最大長2.54cm、最大厚0.31cm、重量1gを測る。

5 そのほかの地区の出土遺物 (第94・95図、図版41・42)

西側調査区と東側調査区に挟まれた地区においても、遺構は検出されなかったが、和田谷津塚付近から若干の縄文土器が出土した。31と32は、斜方向の沈線と半裁竹管の連続刺突文が施されている。浮島I式に比定される。33は加曾利E式である。また、石鏃の未製品も2点出土した。第95図2は剥離が全面に及んでいないが、定形化した石鏃にかなり近い形状を示す。黒曜石製で、最大長1.48cm、最大幅1.49cm、最大厚0.29cm、重量0.61gを測る。第95図3は分厚い剥片の周縁部を加工したもので、大きさは定形化した石鏃とほぼ同じである。黒曜石製で、最大長1.30cm、最大幅2.04cm、最大厚0.53cm、重量1.13gを測る。

第4節 歴史時代

1 東側調査区 (第73・74図)

001A (第96図、図版19) 北側から入り込む谷頭に沿った台地縁辺で、約24mにわたってほぼ直線的に検出された溝状遺構である。検出面での上幅は3.0m以上、下幅は1.1mほどで逆台形状の断面形を有し、底面はほぼ平坦で硬化しており、道としての機能も考えられる。東側延長部分は削平されており不明である。西側延長部分は、トレンチ調査でその確認に努めたが、直線上には確認できなかった。真っ直ぐ北側の谷に抜けずに、台地の縁辺に沿うように、ややカーブして続いていると推測される。また、覆土4層上面が全面にわたって堅くしまっていた点から、埋まっていく過程においても、道として機能していたと推測される。図示できた遺物はクロコ土師器杯1点である(第97図1、図版42)。このほかには土師器の高台杯の小片が1点、石鏃(第95図8)が1点出土した。1は体部が内湾気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し、端部を丸く収めている。体部下部に回転ヘラ削りを施し、底部は回転糸切り後、周縁部に回転ヘラ削りを施している。口径12.8cm、底径6.0cm、器高4.4cmを測る。1と高台杯の年代から、001Aは9世紀前半には機能が消失した古代の溝と捉えられる。

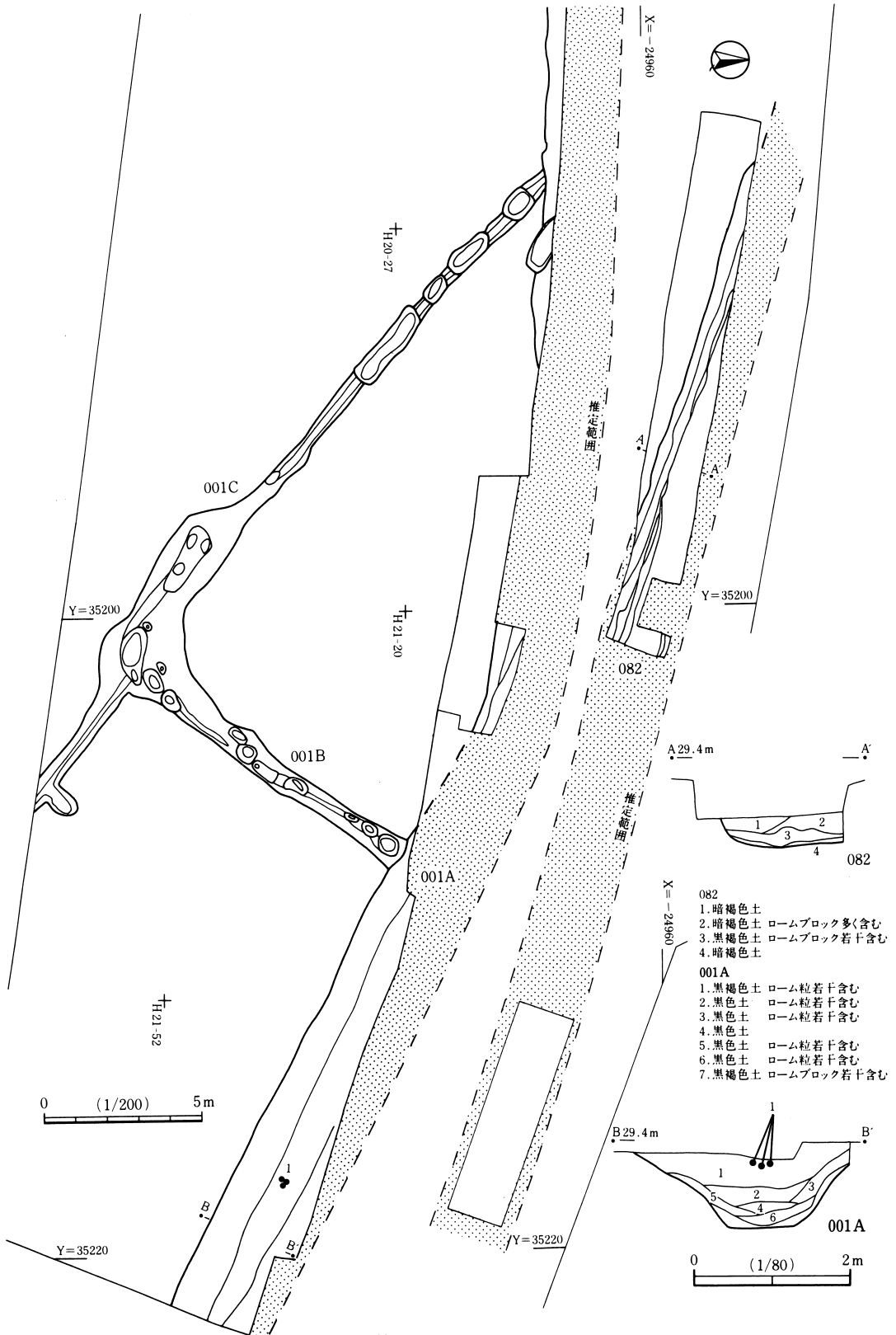
その他の遺構と遺物 001Aのほかに近世の溝状遺構5条、地下式坑1基、道路状遺構が検出された。002A、Bは、南北両側から入ってくる谷に挟まれて台地平坦面が尾根状に狭まった地点で、台地を東西に区切る溝と推測される。検出面で上幅2.7m～2.9m、深さ0.2m～0.7mを測り、断面V字形で、少なくとも1回の掘り返しが確認され、地下式坑011と重複している。また、道路状遺構082は現国道の下から検出された近世以降の道路跡である。幅を確認することはできなかったが、少なくとも底面幅は2.5m以上と推測される。

このほかに、グリッド一括遺物として瓦塔や紡垂車など古代の土製品が出土した(第97図、図版42)。2は瓦塔の屋蓋部の破片である。土師質で、瓦は丸瓦のみを表現している。丸瓦の幅は約4mmと狭く、行基葺を思わせる段が軒先から約2cmのところにある。裏面には屋根垂木が方形の削り出しで表現される。垂木幅は1.0cmを測る。3は土製の紡垂車で、径6.4cm、厚さ1.0cmの円盤形の中心に一辺0.6cmの方形の孔が開けられている。4と5は土玉で、片側のみ端部が面取りされている。4は長さ2.8cm、最大径2.5cm、5は長さ2.4cm、最大径3.0cmである。

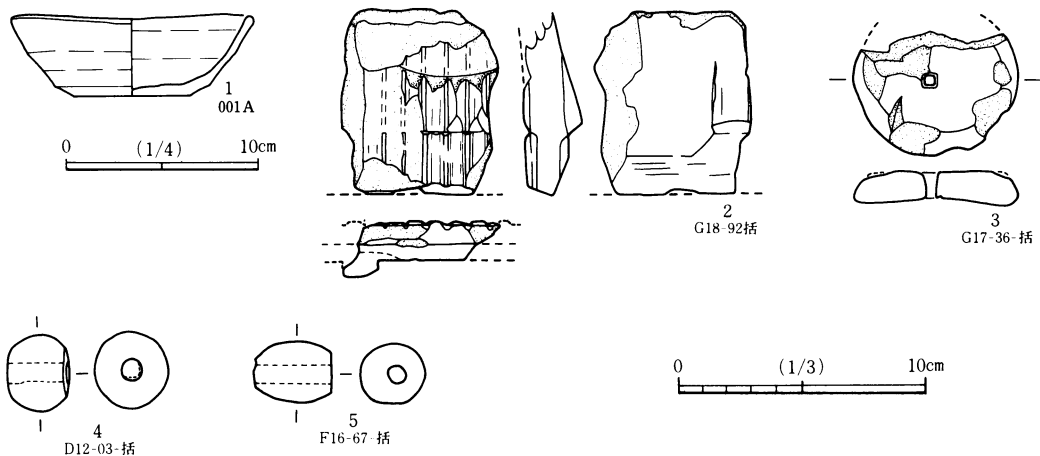
2 西側調査区 (第72図、図版19・20・42)

近世の屋敷跡の一部と炭焼台所在塚に接した土墳墓群が検出された。近世の屋敷跡と結論された遺構群は、当初、塚との関連及び中世に遡る可能性を考慮して調査したものである。

近世の屋敷跡は南側を現国道に面し、東西を溝によって区画され、北側は調査区域外へ広がっている。屋敷跡から検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構7基、地下式坑1基、井戸跡1基、粘土敷土坑1基、土坑15基、溝状遺構6条、道路状遺構2条である。屋敷内の東



第96図 001A、082



第97図 歴史時代出土遺物

側には建物遺構群が、西側には土坑群が位置している。この屋敷跡は、現在の大木家の下に位置しており、調査前まで建っていた建物群に先行するものである。

掘立柱建物跡は少なくとも3棟が重複している。061Aは桁行3間梁間2間の南北棟、061Bは桁行4間以上梁間1間以上の南北棟、061Cは桁行2間以上梁間2間の東西棟である。061Aには床持ち柱と雨落ち溝が部分的に検出された。前後関係は061A・061B→061Cである。柱穴の覆土中からキセル、鉄釘、砥石、永楽通宝、寛永通宝などが出土した。

竪穴状遺構の平面形は長方形と屈曲する隅部を有する長方形の2種類あり、すべて床面の中央から方形ないし楕円形プランの土坑が検出された。底から壁にかけて被熱し、中には灰が厚く堆積しており、囲炉裏の跡と考えられた。057は屈曲する隅部を有した竪穴状遺構が3基重複し、057Aは長軸4.2m、短軸3.2m、057Bは長軸3.3m、短軸2.9m、057Cは長軸3.3m、短軸2.6mを測る。前後関係は057C→057B→057Aである。焙烙や播鉢・カワラケ・土瓶などの土器・陶器や土人形、キセル、刀子、火打ち鉄、釘、砥石、寛永通宝などが各床面から出土した(図版42)。なお、057Bからは灰が山盛りに盛られた焙烙が囲炉裏状施設に接して出土し、竪穴の隅部からは灯明皿が出土した。060は、長軸2.8m以上、短軸推定2.2mを測り、床面から砥石1点と鉄銭が1枚が出土した。062は2基の竪穴状遺構が重複し、062Aは長軸3.5m、短軸2.8mを測り、062Bは長軸4.0m、短軸3.8mで、東側と西側の隅部に屈曲がある。前後関係は062B→062Aである。062Bの床面から茶碗や焙烙・播鉢・片口鉢・香油壺・小皿・火入れなどの土器・陶器類や小刀、釘、キセル、砥石、寛永通宝が出土した。064は061の廃棄後に造られ、長軸3.3m、短軸2.7mで、東側の隅部が屈曲し、その隅部に接した北側の壁際に置きカマドの跡がある。キセル、釘、縫い針、寛永通宝などが床面から出土した。なお、多くの古銭が各竪穴状遺構から出土したが、特に囲炉裏状施設の覆土中や、その周辺の床面から出土する傾向が認められた。

土坑については、屋敷跡の東側では地下式坑や粘土敷土坑など特徴的な土坑が散在して検出されたのに対して、西側では方形の平底の土坑が13基集中して検出された。西側の土坑は貯蔵穴としての機能をもった土坑と考えられる。溝状遺構については、屋敷跡の西側で077と078の2条、屋敷跡の東側で065A・B・C、066の4条が検出された。077と078、065Bと066のそれぞれの両溝間には土手が存在したと考えられる。なお、065の前後関係は065B→065A→065Cで、065Aの東側部分は現地境と一致している。道路状遺構については077の西側から067が、屋敷跡の東側から076の2条が検出された。共に屋敷跡の入口に相当すると考えられる。また、B6-72区の屋敷地の整地層から北宋銭が7枚重なった状態で出土した。なお、屋敷跡出土の40枚の古銭内訳は、中世銭8枚、古寛永通宝3枚、新寛永通宝19枚、鉄銭7枚、雁首銭1枚、不明2枚である。

屋敷跡と隣接する炭焼台所在塚の西側からは、土壙墓が4基検出された。043は一辺1.0mの方形で、検出面で寛永通宝が3枚出土した。044は1.2m×1.0mの方形で、検出面からの深さが20cmほどである。底面は披熱し、炭化物と8枚の寛永通宝が出土し、火葬跡と考えられる。045Aは2.1m×0.6mの方形の土壙で、寛永通宝が1枚出土した。045Bは1.5m以上×0.7mの方形で、南側が調査区域外へ伸びている。

第4章 炭焼台所在塚

第1節 発掘前の状況（第98図、図版21）

本塚は、現国道と松虫へ抜ける道との辻に位置し、塚の墳丘の南側と北東側に接して道が走っている。また、現国道の南側には印旛沼へ下りる小さな道が伸びている。発掘調査前には二十三夜塔と青面金剛像を刻んだ石塔の2体が塚の上に立てられていた。二十三夜塔の両側面には「右まつむし□□道」「左かまかりつのだみち」と刻まれており、道標を兼ねた石塔である。地元では「ななづか」と呼ばれており、現国道の舗装以前は、南側の谷に向かって塚が並んでおり、今回調査した塚は、唯一残った1基と言われている。しかし、並んでいた塚の基数については不明である。また、本塚周辺の井戸向遺跡の発掘調査でも発掘区内においては、塚の痕跡は認められていない。

第2節 遺構（第99図、図版21）

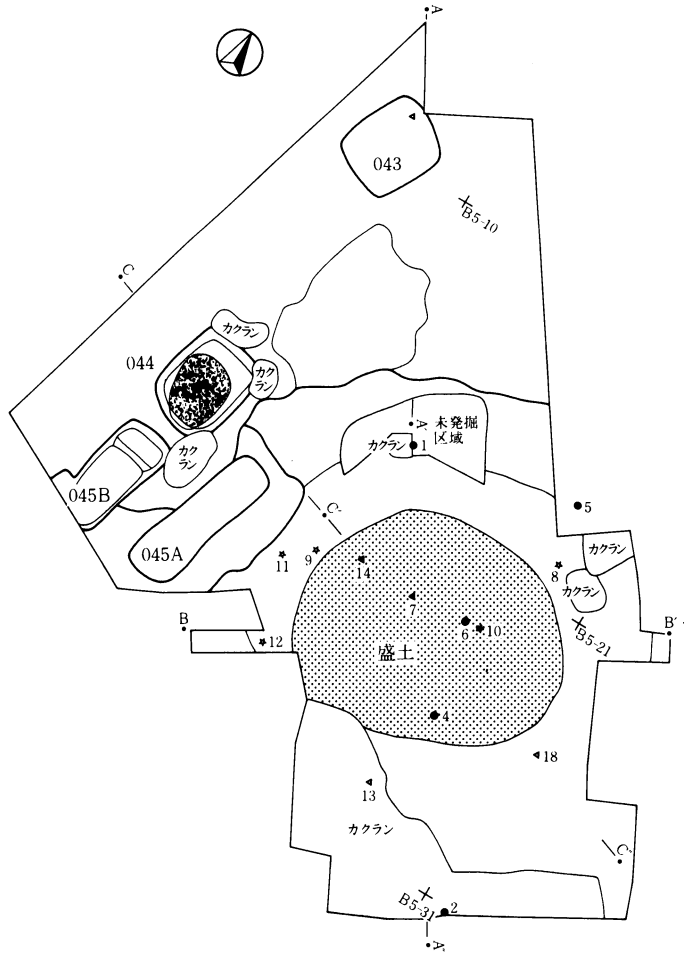
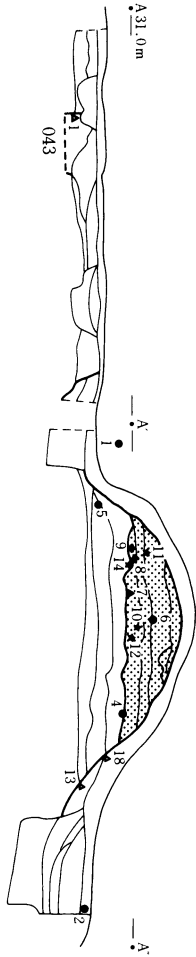
本塚は径5m～5.5mのほぼ円形を呈している。塚の北側が裾際まで耕作されていたため崩れた状態で、北側の等高線は南側と比べ間隔が極めて狭い。墳頂には、二つの石塔が置かれ、そこだけがやや平らな面であった。現地表面からの高さは約1.3mである。塚の東側は、ゴミ穴が掘られ若干高まっていたものの、全体としては谷に向かって低くなっている。塚から西側にかけては、離れるにつれてやや高くなる傾向である。本来の地形とも考えられるが、谷筋の方向と異なっており、塚造成のために、周辺の土をかき集めた結果によるものとも考えられた。

塚の盛土は暗褐色土の旧地表面上から積み上げている。旧表土層はほぼ水平に堆積しており、ローム粒を含んだ暗褐色土層が20cmほどの厚さで堆積していた。焼土や灰などの混入はなく、塚を造る際の特別な造作などは認められなかった。旧表土層の上面から、現在の塚の墳頂までは約0.8mである。現表土下の盛土は4層に分層されたが、基本的にはローム粒を含む暗褐色土であり、層間の差異は極めて小さい。盛土層の下で確認された旧表土層の上面は、現在の塚の裾の地表面より50cmほど高い位置になる。塚は旧表土層を幾分削り出して、盛土面を造っていたものと考えられる。塚の東側の裾は攪乱を受けていたものの、ソフトローム層の上部まで削り出している状況が検出された。井戸向遺跡の東側調査区で現国道下を調査した際にローム層まで掘り込まれた道路状遺構082を検出しており、炭焼台所在塚の南側と北東側に走る道路も以前は現在の道路面よりも低かったものと推測される。塚の北側と南側でもソフトローム層上部まで削り出されている状況が見つかることから、2本の道に接した塚の三方は、2本の道路に向かって削り出されていたと推測される。本塚の西側については、検出面で幅約1.2m、深さ約0.2mの周溝状の落込みが認められた。ソフトローム層の上部まで掘込まれているが、外



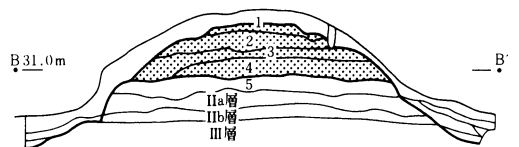
第98図 発掘前墳丘測量図

043
1. 暗褐色土 ローム粒若干含む



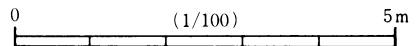
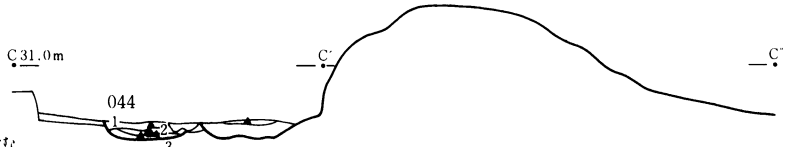
凡例

- 土器・陶器
- ★ 鉄製品
- ▲ 銅製品
- ▲ 銭貨



- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 暗褐色土 | 4. 暗褐色土 |
| 2. 暗褐色土 ロームブロック含む | 5. 暗褐色土 ローム粒若干含む |
| 3. 暗褐色土 ロームブロック若干含む | 田表土層 |

- 044
1. 暗褐色土 ロームブロック、炭化物含む
2. 暗褐色土 炭化物含む
3. 暗褐色土 炭化物多く含む



第99図 炭焼台所在塚と土壌墓群

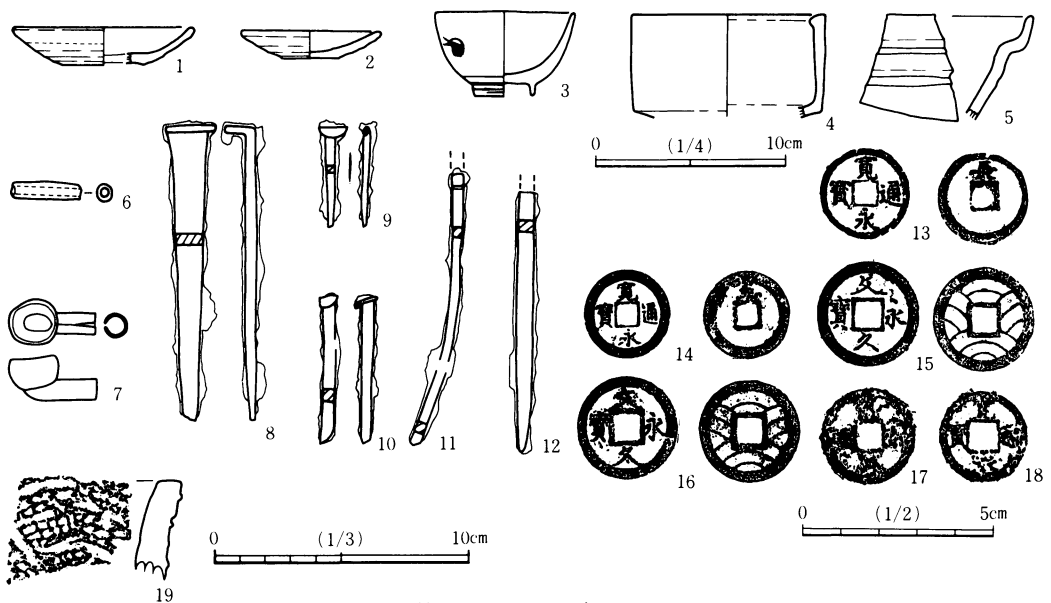
側への立上がりは極めて緩く、底も凹凸をもっていた。塚の盛土面を削り出した際の掘込みと捉えられた。塚造成の土は、塚の裾の削り出しで生じた土と、西側の表土を薄く削った土である。

なお、井戸向遺跡の調査の際に、本塚の北西側から土壙墓が4基検出された。本塚との前後関係は不明であるが、塚に接した場所からのみまとまって検出されていることから、両者の関連性が窺える。

第3節 遺物 (第100図、第8・9表、図版43)

土器・陶器類や鉄製品、古銭など近世の遺物と共に、縄文土器も若干出土している。

1と2は鉄釉の小皿で、1は口径9.6cm、底径4.2cm、器高1.9cmで、体部外面から底部にかけて、鉄釉を拭っている。2は口径7.2cm、底径3.1cm、器高1.4cmを測る。3は染付碗で、口径7.4cm、底径3.2cm、器高4.3cmを測る。4は灰釉の筒形の香炉で、口唇部は断面三角形を呈し、内側へ突出している。口径10.2cmを測る。5は瀬戸・美濃系の鉄釉の播鉢で、口縁部を屈折させている。6は土錘で、全長2.7cm、最大径0.7cmを測る。7はキセルの雁首である。8～12は鉄釘で、8は断面長方形の角釘で、9～12は断面正方形の角釘である。8は基部の上端をそのまま折り曲げて、頭部を作り出しているが、9と10は基部の上端を叩き延ばしてから、折り曲げて頭部を作り出している。8は全長11.5cmでやや大型なものである。9と10の全長はそれぞれ4.0cmと5.8cmで、小型なものである。13～18は古銭であるが、このほかにも鉄銭が3枚出土した。19は茅山下層式の縄文土器である。



第100図 出土遺物

No.	挿図番号	遺構	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	備考
1	第100図13	塚	寛永通宝	23.70	19.95	6.65	5.45	1.54	1.02	3.67	新寛永(長崎銭背長、明和4年(1767)初鑄)
2	第100図14	塚	寛永通宝	22.73	17.43	6.35	5.10	0.95	0.38	1.61	新寛永(高津銭背元、寛保元年(1741)初鑄)
3		塚	不明	—	—	—	—	—	—	2.95	
4	第100図15	塚	文久永宝	26.85	20.98	8.35	6.40	1.26	0.82	4.03	
5	第100図16	塚	文久永宝	26.63	21.10	9.08	6.58	1.06	0.74	3.33	
6	第100図17	塚	寛永通宝	24.80	—	8.10	6.20	—	—	3.57	鉄銭
7	第100図18	塚	寛永通宝	23.40	18.80	8.30	6.70	1.65	1.37	3.20	鉄銭
8		塚	寛永通宝	24.48	—	—	6.00	—	—	3.04	鉄銭
9		塚	寛永通宝	25.40	—	—	—	—	—	3.58	鉄銭

単位=径・厚：mm、重量：g

第8表 銭貨計測表

挿図番号	遺構	遺物番号	雁首							吸口						
			全長	火皿外径	火皿内径	小口外径	小口内径	肩の有無	接合部	補強帯	全長	小口外径	小口内径	吸口外径	吸口内径	肩の有無
第100図7	塚	110	3.32	1.89	1.61	0.88	0.76	無	上	無						

単位=cm

第9表 キセル計測表

土器・陶器類の大半は盛土中から出土した。1と2の小皿は墳丘の裾から出土している。2は完形品でもあり、塚又は石塔に供えられていた可能性がある。ほかの土器・陶器類は、いずれも細片であることから、塚築造の際に盛土中に紛れ込んだものである。古銭のうち、14の新寛永通宝と15の文久永宝と鉄銭2枚は盛土中から出土し、13と16～18と鉄銭1枚は塚の表面近くから出土した。少なくとも盛土中から出土した4枚の古銭については、盛土面近くにまとまって出土していることから、塚築造の際に故意に入れられた可能性がある。

第5章 和田谷津塚

第1節 発掘前の状況（第101図、図版22）

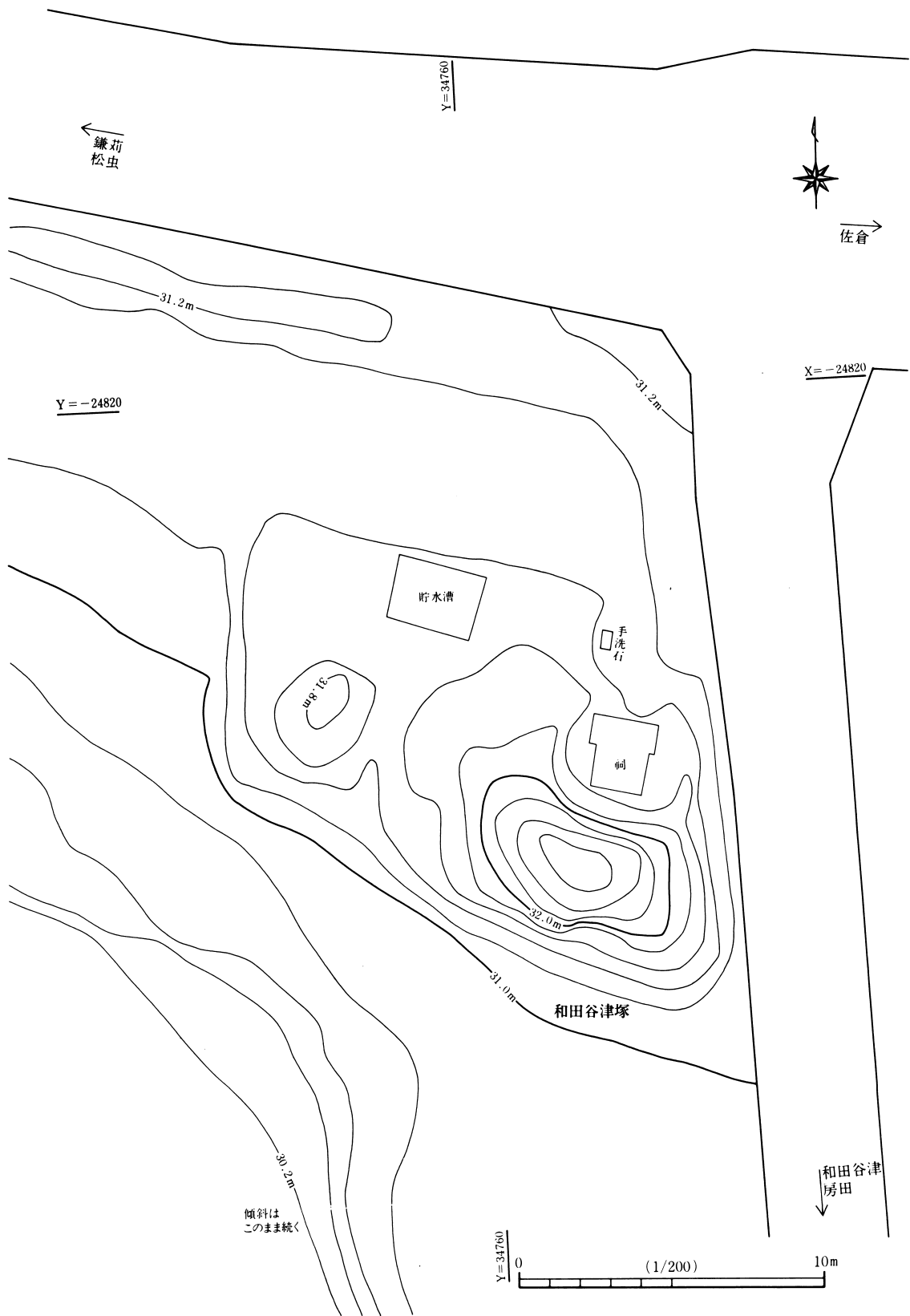
和田谷津塚は、現国道から和田谷津や房田などの台地下の集落へ下りる道の辻に位置している。発掘調査前には木造の祠が墳丘の北側に建てられ、墳丘全体に大きな木がたくさん生え、鬱蒼とした景観であった。祠の北側から現国道までは参道として手入れがなされており、その脇には手洗石が置かれていた。墳丘の東側に接して道路が走り、南側は畑として利用され、西側は貯水溝が造られていた。地形としては南からの谷頭に位置している。

墳丘の見かけの大きさは長辺約10m、短辺約7mで、東西方向に長い方形であり、長軸線を南へ25°ほど振っており、北側の現国道の振れとほぼ一致している。調査前の観察から、祠が建っていた墳丘の北側部分については盛り土が崩されていると推測された。見かけの高さは、約1.4mである。

測量の結果、方形塚と捉えられたが、古墳の再利用の可能性も考え併せて発掘調査に当たった。ただし、墳丘を断ちわった調査の結果盛土と墳丘裾の削り出しの状況から、当初から塚として造られていたことが判明した。昭和60年発行の『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－』は和田谷津古墳として記載されているが、訂正が必要である。なお、和田谷津塚から南へ200mほど離れた位置に、和田谷津古墳群という名称が与えられた約12基からなる3m～5mほどの円形小盛土が確認されている。

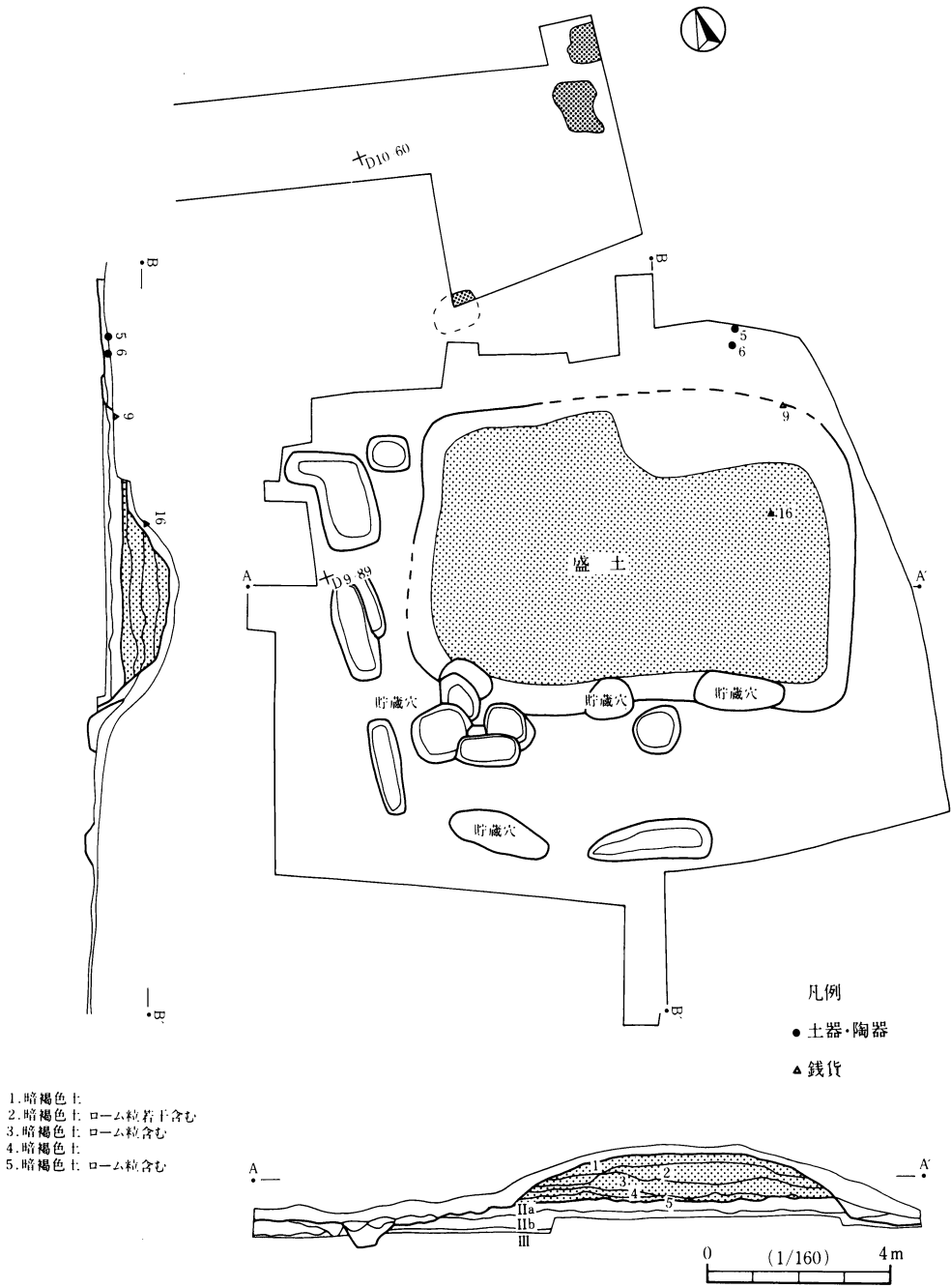
第2節 遺構（第102図、図版22）

盛土は暗褐色土の旧地表面から積み上げている。盛土の下面は旧表土層がほぼ水平に堆積していた。焼土や灰などの混入はなく、塚を造るための特別な造作は認められなかった。確認された盛土層の厚さは約1.2mあった。盛土層は、現表土層の下に5層に分層されたが、基本的にはローム土の混入が少ない暗褐色土であり、層間の差異は小さかった。特に造り替えの痕跡は認められなかった。塚の裾部は、東辺と南辺についてはソフトローム層上部まで削り出していた。北辺と西辺は、旧表土層の黒褐色土は削られていたが、ソフトローム層までは至っていない。旧表土層が削り残されていた規模は、長軸9.8m、短軸6.6mほどである。塚の盛土は、ローム土の混入が極めて少ないことから、塚の裾部の造作の際の削り出された土と共に、周辺の表土層の暗褐色土を薄く広く集めて行われたものと考えられる。なお、井戸向遺跡の調査の際に、塚の北側前面で、一辺0.8m～1.2m、厚さ0.2mほどの粘土ブロックを3か所検出した。現地表面から0.1mにも満たない高さで見つかった。その周辺を拡張して確認したが、何も発見できなかった。建物の柱の基礎部分と考えられる粘土ブロックが、塚の北側に接して、その前面



第101図 発掘前墳丘測量図

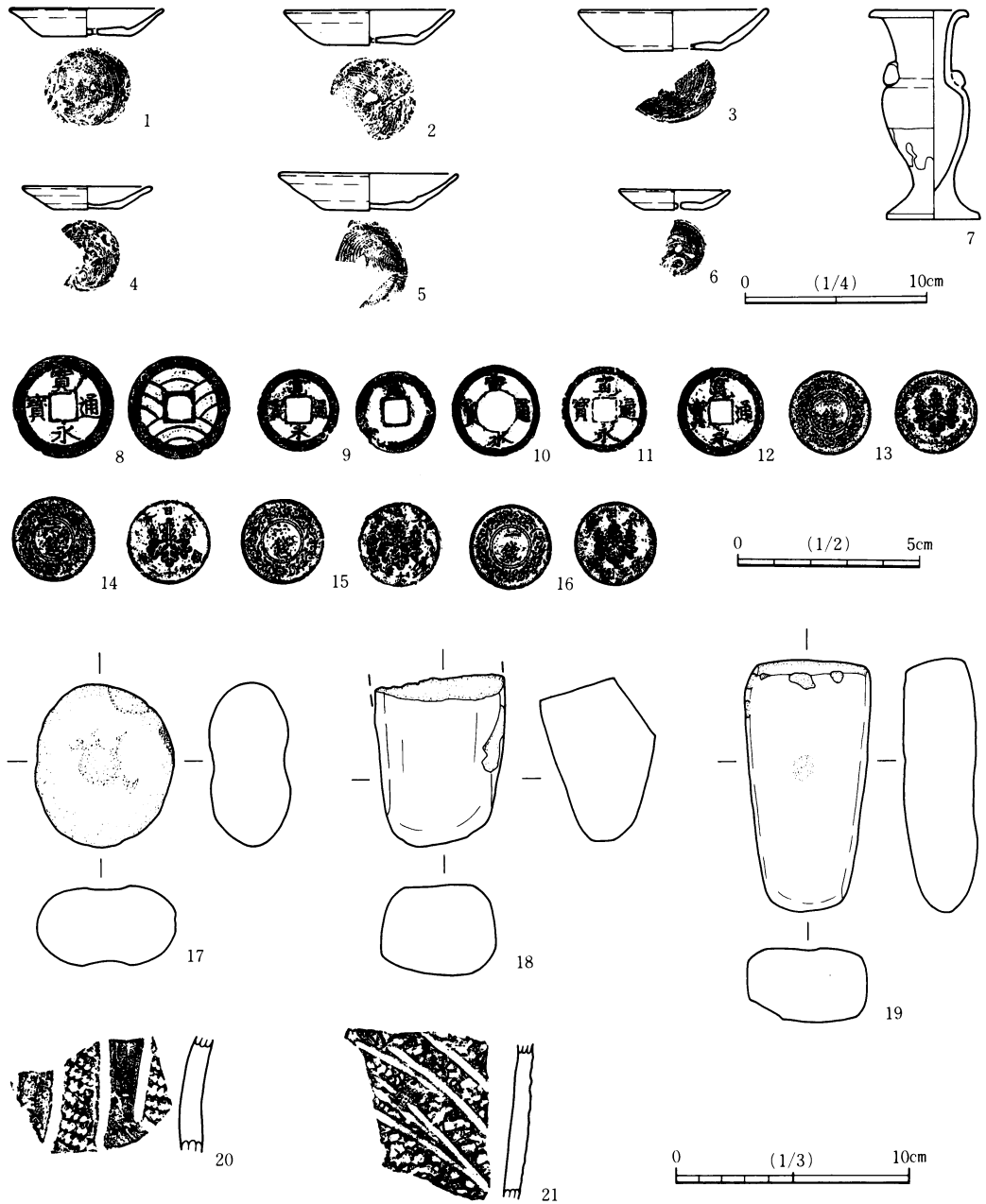
に分布していることから、塚に関連する建物が存在していた可能性がある。今回の発掘の前に存在した祠は、塚の北東側を一部削って建てられていたが、先行して、塚の前面に祠があった可能性がある。推測を重ねれば、現国道の車道としての整備に伴う道路拡幅の際などに、塚の前面にあった祠が、塚の一部を削って塚側へ移動したものと想像される。なお、調査前まで建っていた祠には「ドウロクジン」が祀られていた。



第102図 遺構全体図

第3節 遺物 (第103図、第10表、図版43)

遺物は祠があった塚の北東側の表土層を中心に出土した。その他の地点や、盛土中からはほとんど出土していない。カワラケや花瓶や古銭などが出土しており、祠に供えられたものが大半を占めている。図示したもの以外にもカワラケや灯明皿、碗、鉄銭が出土した。なお、大半の出土遺物は近世以降の遺物であるが、盛土中から縄文土器が少量出土した。また祠の跡付近



第103図 出土遺物

からは多くの丸石に混じって、縄文時代の石器も出土している。

1～6はカワラケで、いずれもロクロ成形、底部糸切り無調整で、底部に径2cm～3.5cmの孔がひとつつけられている。1は口径8.6cm、底径4.8cm、器高1.5cm、2は口径9.4cm、底径5.0cm、器高1.9cm、3は口径10.6cm、底径5.4cm、器高2.2cm、4は口径7.2cm、底径3.8cm、器高1.2cm、5は口径10.0cm、底径4.8cm、器高2.0cm、6は口径6.2cm、底径3.2cm、器高1.1cmを測る。7は塗分け花瓶で、肩部に粘土粒が相対して付けられている。底面を除く外面下半に暗褐色の鉄釉が、外面上半から頸部内面まで灰釉が掛けられている。口径5.5cm、底径5.2cm、器高11.4cmを測る。8～16は古銭で、新寛永通宝が5枚、近代銭が4枚出土した。このほかに鉄銭も1枚出土した。17～19は縄文時代の石器である。このほかにも径10cmほどの丸石が多く出土した。これらはドウロクジン様の信仰にまつわる石と考えられる。足を煩った際に、ドウロクジン様の石で足をこすると、足の病気が良くなるという信仰があり、足の病気が直ったら、石を2つにして返すという風習が現在まで言い伝えられている。縄文時代の石器も、付近の畑で採集されたものを、ドウロクジン様に祀ったものであろう。17は両面に窪みがあり、側縁の一部に敲打痕が認められる凹石である。凝灰岩製で長さ6.7cm、幅5.7cm、厚さ3.3cm、重量164.4gを測る。18と19は長方形に整形され、全面が研磨されている。19の端部には敲打痕が認められる。18は安山岩製で長さ7.1cm、幅5.4cm、厚さ3.6cm、重量261.4gを測る。19は安山岩製で長さ10.3cm、幅5.2cm、厚さ3.0cm、重量268.3gを測る。20と21は盛土中から出土した縄文土器で、20は沈線によって区画された磨消縄文が見られるもので、堀之内式に比定される。21は縄文施文後に条線が施されたもので、加曾利B式の粗製土器である。

No.	挿図番号	遺構	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	備考
1	第103図8	D10	寛永通宝	28.08	20.75	7.83	6.45	1.27	0.79	4.44	新寛永
2	第103図14	D10	一銭	23.68	—	—	—	—	—	3.79	桐一銭銅貨
3		D10	寛永通宝	—	—	—	6.35	—	—	5.35	鉄銭
4	第103図10	D10-71	寛永通宝	24.95	20.15	11.50	10.75	1.18	0.72	2.50	
5	第103図11	D10-71	寛永通宝	23.40	19.20	6.50	6.00	1.16	1.04	2.32	新寛永
6	第103図12	D10-71	寛永通宝	23.88	18.75	6.70	5.88	1.10	0.84	2.61	新寛永
7	第103図13	D10-71	一銭	22.90	—	—	—	—	—	3.59	桐一銭銅貨
8	第103図15	D10-81	一銭	23.00	—	—	—	—	—	3.72	桐一銭銅貨
9	第103図9	D10-81	寛永通宝	22.23	16.80	7.95	5.35	1.02	0.70	1.72	新寛永(高津銭背元、寛保元年(1741)初鑄)
10	第103図16	D10-81	一銭	23.00	—	—	—	—	—	3.60	桐一銭銅貨

単位=径・厚：mm、重量：g

第10表 銭貨計測表

第6章 まとめ

第1節 大木台古墳群

1 大木台2号墳の埴輪列について

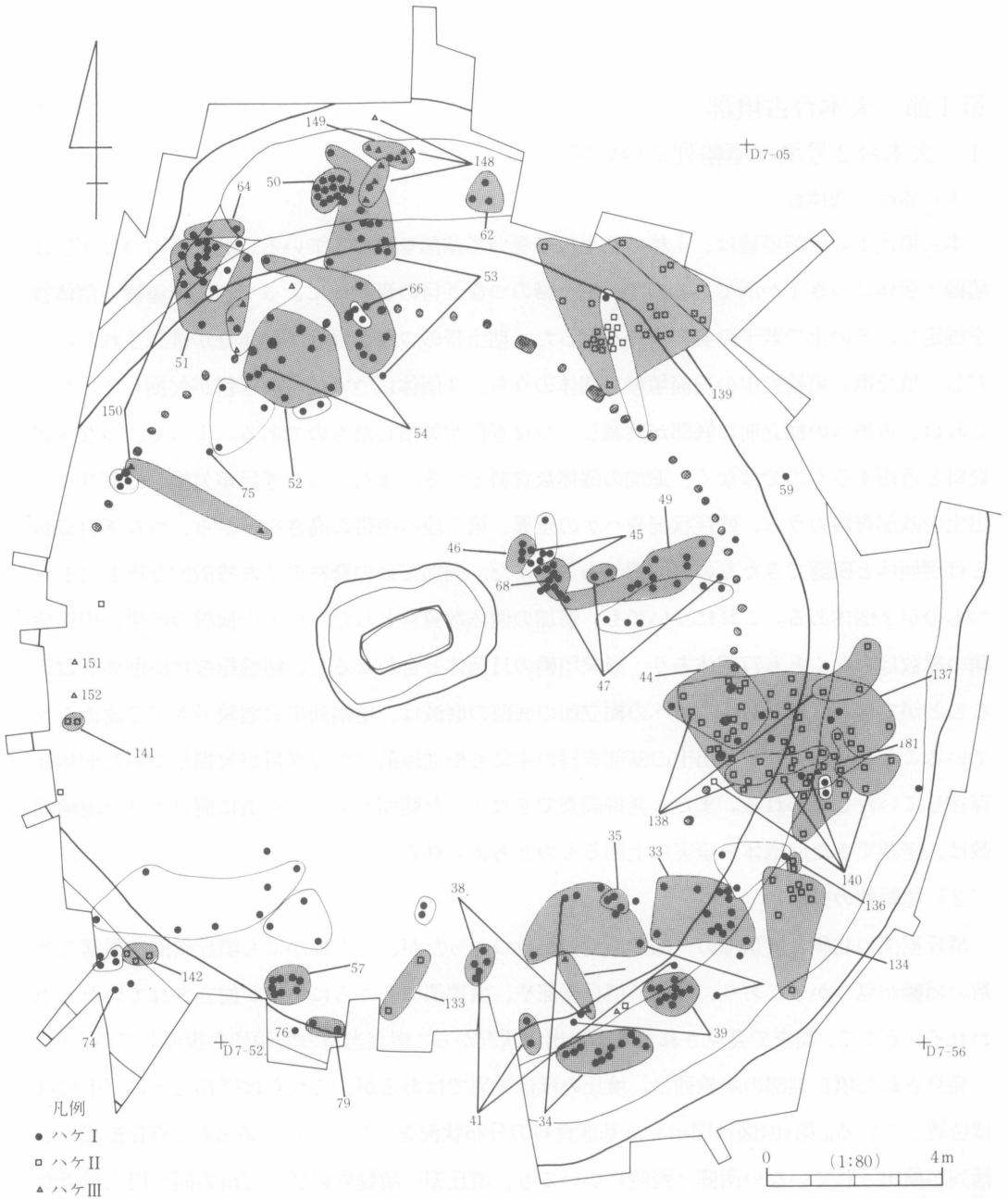
(1) 埴輪の個体数

本古墳出土の円筒埴輪は、1枚の粘土板を巻いて基部を成形している。粘土帯のつなぎ目は埴輪1個体につき1か所であるので、粘土帯のつなぎ目の資料数によって、円筒埴輪の個体数を推定し、その上で若干の資料操作を行った。粘土帯のつなぎ目は66個体分が確認された。ただし、墳丘裾の埴輪列中の円筒埴輪31個体のうち、3個体についてつなぎ目が欠損していた。これは、古墳への樹立前に底部が磨滅し、つなぎ目が欠損したものである。よって、つなぎ目資料と重複するものではなく、追加の個体数資料とする。また、つなぎ目が欠損したグリッド出土の基部資料のうち、残存状況やハケの差異、第1段の突帯の高さなどから、つなぎ目資料とは別個体と確認できたものが6個体ある。また、胴部だけの資料のうち特徴的な刷毛目をもつものが2個体ある。これについても、追加の個体数資料とした。以上の検討の結果、円筒埴輪の総数は少なくとも77個体あり、形象埴輪の11個体と合わせると、埴輪総数は88個体と数えることができる。ただし、古墳への樹立前の底部の磨滅は、埴輪列中の埴輪の大半で認められていることから、グリッド出土の基部資料の中にも樹立以前につなぎ目が欠損していた個体は存在していたと思われる。また、発掘調査できなかった範囲も広く、古墳に樹立された埴輪総数は、確認できた88個体を確実に上回るものと考えられる。

(2) 埴輪列の復原

墳丘裾部の北側と墳頂部の一部で埴輪列が見つかったが、このほかにも墳丘斜面や周溝で多数の埴輪が見つかっており、南側の墳丘裾部や、墳頂部にもさらに埴輪が樹立されていたと思われる。そこで、調査で発見された埴輪の出土状況から、樹立当時の埴輪列を復原してみたい。

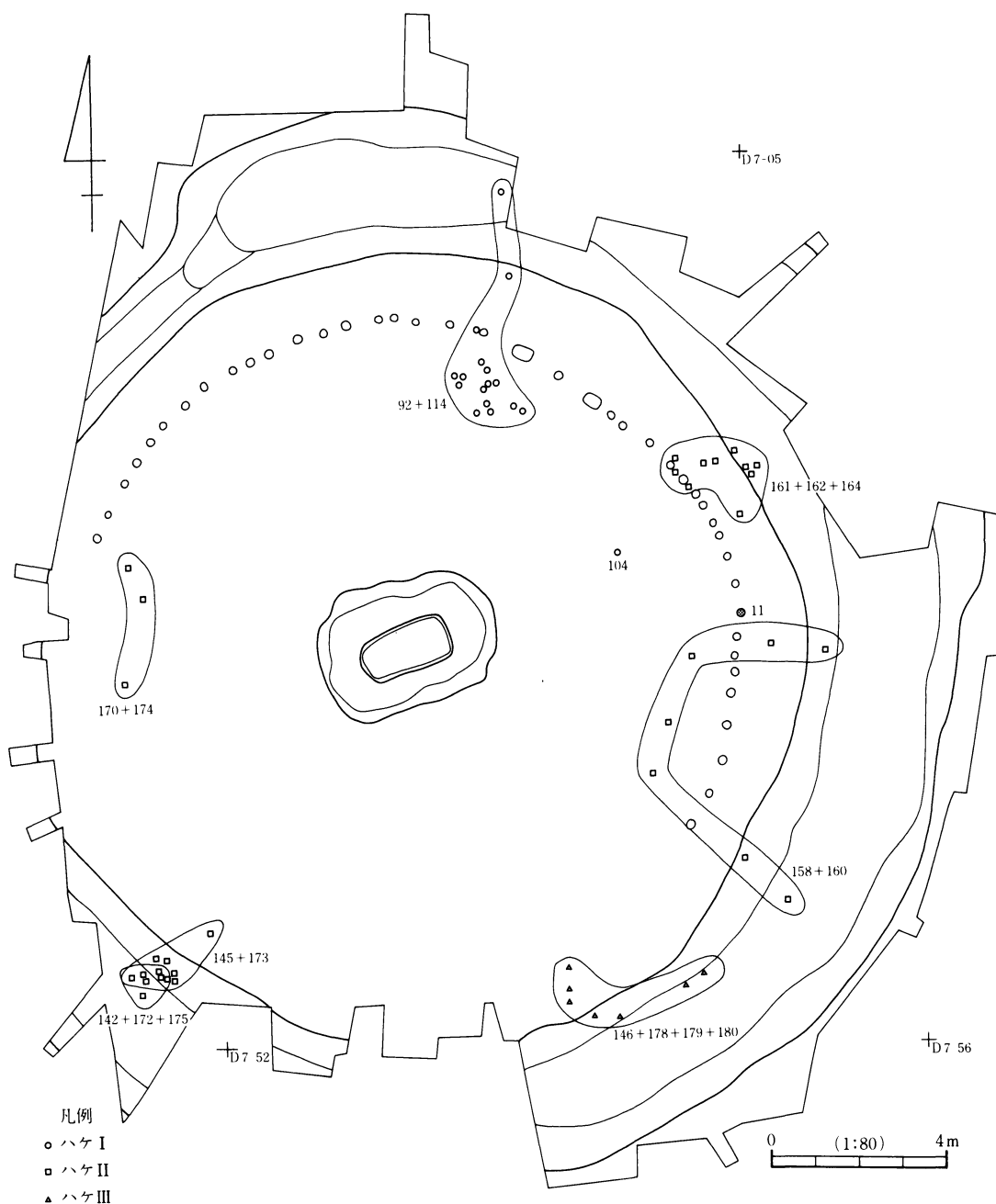
発見された墳丘裾部の埴輪列は、墳丘のほぼ半周ではあるが、これらは径15.2mの円上にほぼ位置している。第104図は図示した基部資料の分布状況を示したものであるが、墳丘裾部の埴輪列が検出されていない南側と西側についても、墳丘裾の埴輪列の径15.2mの同一円上付近から多くの基部資料が出土している。墳丘自体の遺存状況が悪く標高31.4mよりも若干低い標高から出土しているが、ほぼ南側の埴輪列の痕跡を表しているものと考えられ、北側同様に南側においても、墳丘裾部には同一円上に連続した埴輪列が巡っていた可能性が高い。また、北側の周溝内からも基部資料が出土している。これらは、墳頂部から転落したものと考えることができよう。また、墳頂部で検出された4個体の埴輪については、墳丘裾の埴輪列の径15.2mの半分である径7.6mの同心円上に位置している。墳丘裾部と墳頂部における規則的な埴輪配置が



第104図 大木台 2号墳埴輪(基部)出土位置全体図

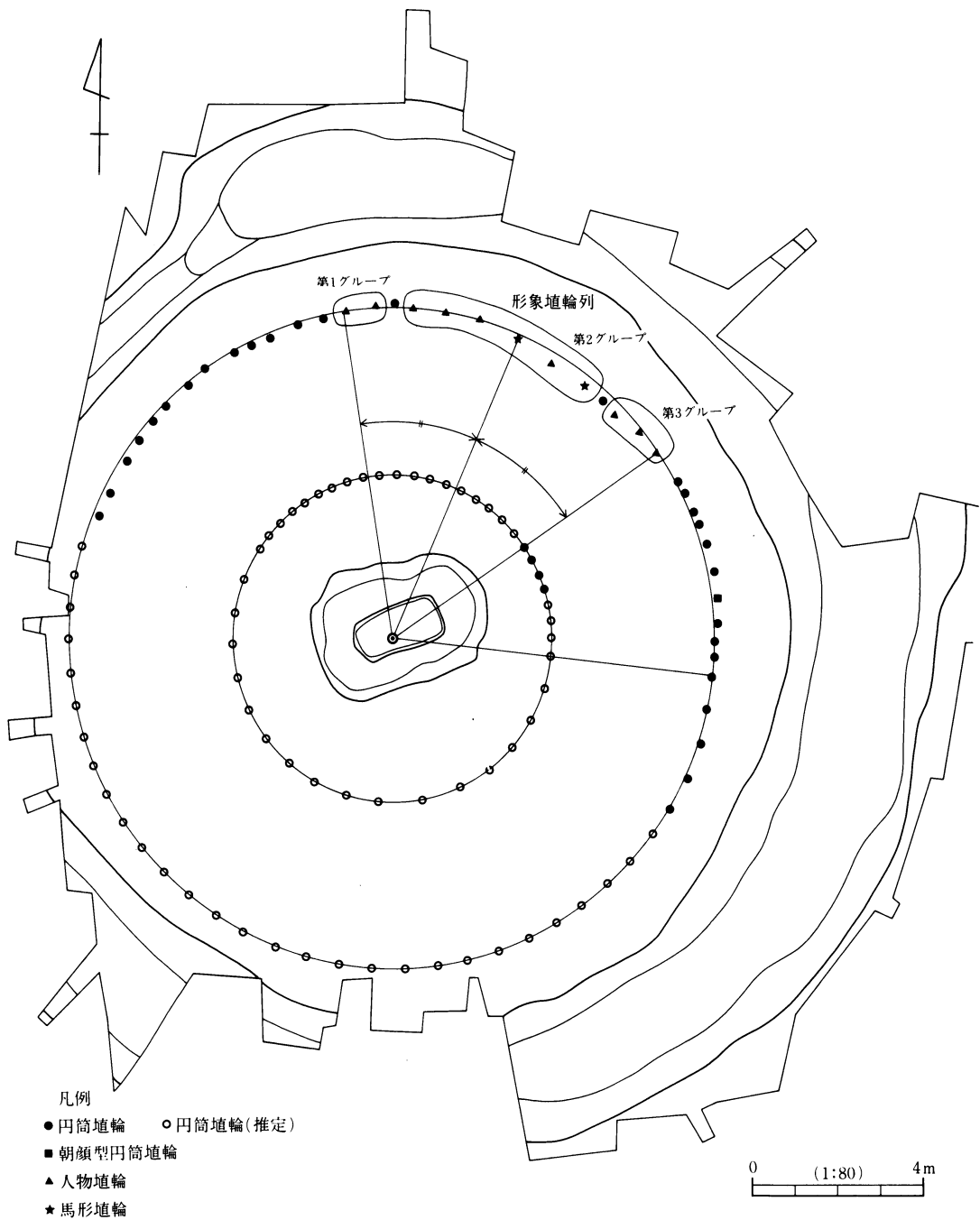
うかがわれる。

次に埴輪の樹立の間隔に触れたい。北側の埴丘裾の埴輪列の円筒埴輪間の心々間隔は40cm~60cm、ただしその東端では80cmほどであった。そこで、埴丘裾の埴輪列の間隔が40cm~60cmで検出された北側範囲と、埴輪列の間隔が80cmで検出された南側範囲で、仮に埴丘を半分に分けて



第105図 大木台 2号墳朝顔形円筒埴輪出土位置全体図

みると、北側で出土した個体数資料は57本、南側では31本を数えることができる。北側に位置している形象埴輪の間隔が幅広い点を考慮すると、南北の個体数資料の比率と南北の埴輪間隔の差の比率がほぼ符合する結果になる。南側の80cm間隔の埴輪列は、実際には4間隔でしか確認できていないが、形象埴輪が立てられなかった南側では、形象埴輪列が位置する北側に比べ



第106図 大木台2号墳埴輪列復原図

て、まばらに円筒埴輪が立てられていた可能性が高い。

次に墳頂部の埴輪は、北東側では墳頂部から墳丘斜面にかけて転落した状態で出土している。また、北西部と南東部の周溝内出土の資料は墳頂部から転落したと考えられる。南西側については未調査範囲が広く、様子を窺うことはできない。ただし、墳頂部は北東部のみに埴輪が配

置されていたのではなく、墳頂部を取り囲むように配置されていたと推測することは可能である。4個体ではあるが、墳丘裾部の埴輪列の想定円の半分の径の同心円上に出土している点は重視すべきであろう。

朝顔形円筒埴輪のうち配置が明らかな資料は墳丘裾部東側の11だけであるが、破片資料は墳丘を取り巻いて散在的に出土している(第105図)。同一個体と考えられる92+104+114、158+160、170+174はそれぞれ墳丘斜面から墳丘裾部へ広がるように出土しており、墳頂部に立てられていた可能性がある。朝顔形円筒埴輪はその分布状況から、墳丘裾部と墳頂部に散在的に配置されていたと推測される。

以上の検討をまとめた復原案が第106図である。墳丘裾部と墳頂部に同心円上に二重の埴輪列が巡り、形象埴輪列が位置する北側が、密に埴輪が立てられているのに対して、反対の南側ではまばらに埴輪が立てられていたと復原した。実際に確認できた埴輪数の88本であるが、復原埴輪数は約115本である。未調査部分などを考慮すれば、ほぼ妥当な数字と考えられる。

(3) 人物埴輪の復原

形象埴輪は、人物埴輪9個体と馬形埴輪2個体が出土した。最初に人物埴輪の基台部のみの資料について、周辺の破片資料の出土状況から形象部を復原したい。第23図の人物埴輪の出土分布図に見られるように、埴輪列中の埴輪の接合資料は、それぞれ墳丘斜面に直交する方向に長軸を持った長楕円形にそれぞれ分布範囲がまとまっている。各埴輪の長楕円形の分布範囲は一部重なりながらも、ほぼ独立した傾向が窺える。形象部と接合できなかった32、204、205についても、基台部と接合できなかった頭部資料との分布関係から、形象部を復原することが可能である。その結果、32は、210の頭部に鬘状の粘土紐を巻いた男子像に、204は216などの鬘状の粘土紐を巻いた天冠男子像に、205は208の冠帽男子像に復原できる。また204の分布範囲は266の刀の分布範囲と重なっており、同じ意匠の199の天冠像同様に腰に刀子付きの刀を下げていたと推測できる。また、各男子像の分布範囲には、美豆良ないし美豆良の付着していた痕跡を残す耳環が出土している。各男子像は下げ美豆良を垂らしていたようである。

次に頭部が欠損している200について触れたい。200は他の人物埴輪と異質な点が観察される。正面全面が丁寧なナデ調整されている点、腰のくびれ部分に突帯がない点、衣の裾の表現が2段になっている点である。これらは他の人物埴輪のように胴部を円筒化せずに、上衣と裳の裾を表現したものと考えられる。周辺からは鬘や冠などの頭部資料は出土していないが、238の櫛が出土している点が注目される。櫛は、下総型埴輪では佐原市片野23号墳¹⁾の出土例が知られている。これは双輪形の結髪像の頭部に表現されたものである。この像は上半身のみであり、胴部の表現については不明である。ただし、片野23号墳の他の人物埴輪が、胴部正面のハケを残しているのに対して、櫛をつけた双輪形の結髪像の胴部正面は丁寧にハケをナデ消している。現段階では、200の類似例としては、片野23号墳出土の双輪形の結髪像を挙げることができよう。

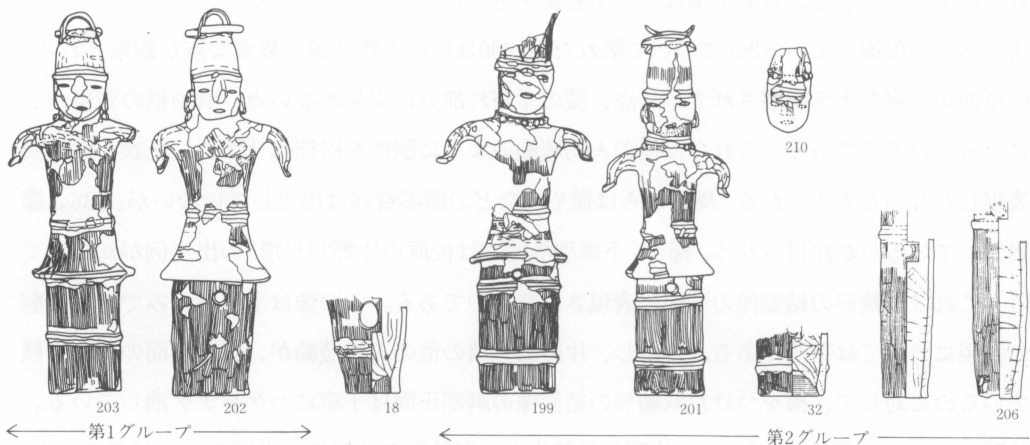
櫛の存在と、美豆良の痕跡がない点から、女子像と推測される。

人物埴輪9個体について意匠で分類すると、男子像5個体については、頭部と刀の形態などで3分類できる。1類は天冠を被り、腰に幅広で直線的な刀を下げた198である。美豆良も扁平な形態で、他の美豆良とは異なっている。2類はヘラ描きされた天冠状のものを被り、腰に刀子付きの刀を下げた199と204+216である。3類は帽子状のものを被る32+210と205+208である。2類と3類は断面丸形的美豆良を下げていたと推測され、1類的美豆良と形態が異なっている。また、2類と3類のうち、それぞれ1個体は頭部に同様の鬘状の粘土紐が巡っている共通性がある。2類と3類に意匠の共通性があるのに対して、1類の意匠は独立した存在である。1類の198は、人物埴輪のうちで最も器高が高く、顔の作りも大きく、首飾りの粘土粒も最も密に貼り付けられており、同一意匠が1個体しか存在しない点が注目される。男子像の中において、1類は2類と3類に対して、階層の上で上位の人物を表した可能性が高い。

女子像4個体についても、頭部と胴部の形態で3分類できる。1類は頭部が不明であるが、櫛を差し、上衣と裳の裾を二段に表現している200である。2類は島田髻を結び、髻の結いが左右上方へ開いている201である。3類は島田髻を結び、髪のかぎが輪を描いている202と203である。2類と3類は胴部が円筒化しており、髻の形も共通している。それに対して1類は櫛を差し、胴部の表現が特徴的であり、1類と2・3類の間には大きな違いが認められる。

(4) 形象埴輪列の復原

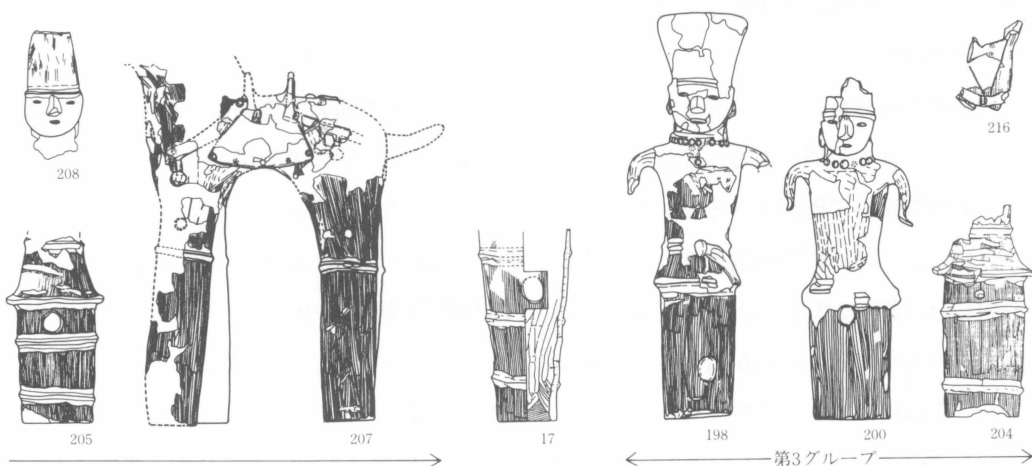
形象埴輪の向きについては、形象部と基部が接合できた198、199、200、201、202、203の人物埴輪について復原することができた。これらは墳丘を背にして、周溝側に正面を向けて立てられていたと復原された。また馬形埴輪については、207が左側面を墳丘側に向け、正面を205の人物埴輪に向けて立てられていたと思われる。他の人物埴輪3個体と206の馬形埴輪については、基部と形象部が接合できなかったため、向きを復原することはできなかった。



西側から東側へと、形象埴輪列の並び方を復原してみたい。一番西側には203、202の女子像が並ぶ。18の円筒埴輪を挟んで、199の天冠男子像、201の女子像、32+210の帽子男子像、206の馬形埴輪、205+208の帽子男子像、207の馬形埴輪と続く。そして、17の円筒埴輪を挟んで、198の天冠男子像、200の女子像、204+216の天冠男子像に至る（第107図）。形象埴輪列中の円筒埴輪の存在が注目される。円筒埴輪を境に埴輪列を3つのグループに分けることができる。西側から、第1グループは女子像3類の2個体、第2グループは男子像2類と女子像2類、男子像3類2個体と馬形埴輪2個体、第3グループは男子像1類と女子像3類と男子像2類それぞれ1個体である。

次に人物埴輪について、その分類ごとに配置の特徴を検討してみたい。特別な意匠の男子像1類と女子像1類は共に第3グループに位置している。男子像2類は第2グループと第3グループの端に位置する特徴がある。男子像3類は、第2グループにおいて馬形埴輪と交互に位置する特徴がある。女子像3類は2個体とも第1グループに位置している。これらの配置上の特徴と各埴輪の特徴から、各人物埴輪の性格を考えてみたい。まず、男子像3類については馬形埴輪との関連が考えられる。206の馬形埴輪についての向きは不明であるが、207の馬形埴輪は、男子像3類の205を向いている。男子像3類1個体と馬形埴輪1個体を1セットとし、2セットが並んでいると捉えることが可能であろう。このセットが、「馬曳き」と「飾り馬」としての役目を果たしていたと推測できる。なお、男子像1類と2類はそれぞれ刀を下げているのに対して、男子像3類には刀が発見されていない。男子像1類や2類と比べれば、男子像3類がより「馬曳き」としての役目にふさわしい意匠と思われる。

また、男子像2類は、第2グループ+第3グループの両端に位置している点が注目される。第2+3グループ中には、「飾り馬」と、特別な意匠の男子像1類と女子像1類が位置している。これらは、埴輪列の中で重要な部分と捉えられることから、これらの両端に位置している男子



第107図 大木台2号墳形象埴輪列樹立模式図

像2類は、重要な部分の警護ないし補佐する役目を果たしていたと推測される。女子像3類は、男子像2類に囲まれた第2グループ+第3グループから外れた第1グループに位置している点が注目される。比較的階層が低い人物と捉えられようか。女子像2類については、第2グループ中には位置しているものの、女子像3類と鬘の結び以外の意匠が同一であるので、女子像3類と同様な性格と捉えられる。そして、男子像1類と女子像1類については、同じ第3グループ内に並んでいる点が注目される。両者とも意匠の上で、階層の上で上位の性格ないし特別な性格が考えられものであり、支配者層の人物としてセットとして捉えられよう。以上、各人物埴輪の性格について推測してみた。この推測によるならば、第1グループは低い階層の女性のグループ、第2グループは「飾り馬」を中心としたグループ、第3グループは支配者層のグループと位置づけることができる。人物埴輪の分類ごとに配列上の位置に特徴がある点と、各グループに特色がある点が注目される。

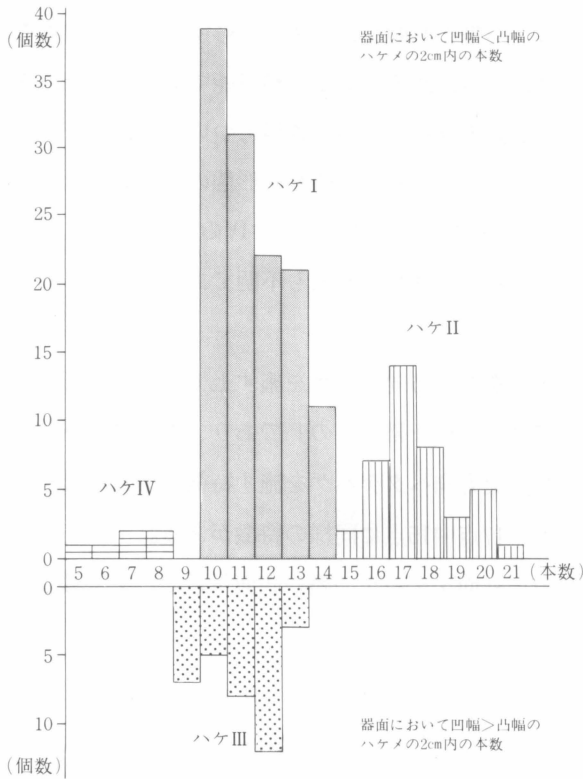
2 大木台2号墳出土埴輪の分類

本古墳出土の円筒埴輪は、製作技法と形態の上で基本的に同一の製品である。ただし、器面に施されたハケ、突帯や透孔の形態により分類することが可能である。これらの点は、円筒埴輪の製作上の基本的な諸工程であり、円筒埴輪を作った工人の違いにより生じたものと考えられる。これらの工程の上で生じる各特徴が同一の製品は、同じ工人によって作られた可能性が高いと考えられる。また、特徴の組合せが異なる製品は、違う工人によって作られた可能性が高いと考えられる。以下、同じ工人による製品の抽出を目的として、製作上の諸工程で生じた特徴の違いにより、本古墳出土の円筒埴輪の分類を行う。なお、これらの製作上の諸工程は、円筒埴輪だけでなく、人物埴輪や馬形埴輪においても行われたものである。人物埴輪や馬形埴輪については、複数の工人によって、共同して作られた可能性がある。そこで、一人の工人によって作られたと考えられる円筒埴輪について最初に検討を行い、人物埴輪と馬形埴輪については円筒埴輪の分類の成果をふまえて、検討してみたい。

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪の個体数資料は77個体であるが、すべての資料を普通の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪に分けることは不可能であるので、一括して円筒埴輪として77個体の分類を行う。分類は、すべての個体数資料で確認できるハケで大分類し、突帯の形態と透孔の形態により小分類する。

ハケについては、幅2cm当たりハケの条数に基づく粗密と、ハケの凹凸の幅の違いで大きく4分類した。器面に残されたハケの凹凸において、凸幅が凹幅よりやや広いのが大半であるが、凸幅が線のように細く凹幅が広いものも認められた。ハケの粗密の傾向を表したものが第108図である。これは図示した資料を対象としている。凸幅が広いハケについては、大きく3つのまとまりが認められる。7条・8条/2cmと、10条/2cm、17条/2cmの3つのピークが存在し、それぞれ5条～8条/2cm、10条～14条/2cm、15条～21条/2cmの幅を有している。これら



第108図 ハケメの本数

をハケIV、ハケI、ハケIIとする。さらに凸幅が狭い資料についても、12条/2cmにピークがあり、9条~13条/2cmの幅を有している。これをハケIIIとする。個体数資料の点数の内訳はハケIが46点、ハケIIが16点、ハケIIIが13点、ハケIVが2点である。

突帯の形態については、下側の稜線の状況により3分類した。下側の稜線が残っている断面台形を突帯A、下側の稜線が不明確な断面台形を突帯B、下側稜線が完全に消滅した断面三角形を突帯Cとした。図示した資料の中での内訳は、突帯Aが7点で、全体の6.1%である。突帯Bが52点で45.6%、突帯Cは55点で48.3%である。突帯Aは極めて少数で、突帯Bと突帯Cがそれぞれ半数を示している。

突帯が残っている個体数資料の中での、

ハケ分類との対応関係については、ハケIは33点中27点が突帯Bで、残りの6点が突帯Cである。ハケIIは15点のすべてが突帯Cである。ハケIIIは8点中3点が突帯A、1点が突帯B、4点が突帯Cである。ハケの大分類ごとに、突帯の形態に傾向性が存在している。

透孔の形態については、ひとつの埴輪にタテナガの楕円形とヨコナガの楕円形の両方を持つものが若干あるが、大半の埴輪の透孔はひとつの形態である。両方の形態を持つ資料を除くと、ハケIは8点がタテナガ、1点がヨコナガである。なお、前者は突帯B、後者は突帯Cである。ハケIIは6点すべてがヨコナガである。ハケIIIは4点すべてがタテナガである (第109図)。

3つの分類項目を調べることができた資料について、ハケと突帯の形態と透孔の形態には、以下の5つの組み合わせが認められた。それぞれ同一の特徴を有した資料であることから、1群、2群、3群、4群、5群とする。

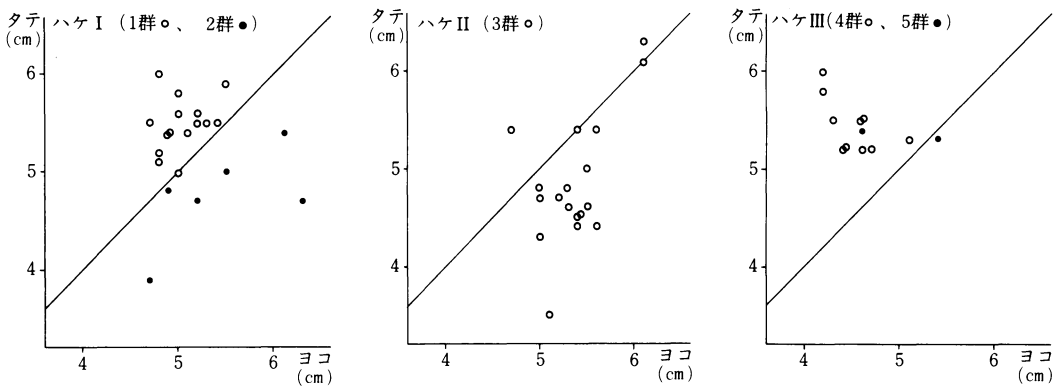
ハケ	突帯	透孔		
I	----	B	----	タテナガ、,,,,、1群
I	----	C	----	ヨコナガ、,,,,、2群
II	----	C	----	ヨコナガ、,,,,、3群
III	----	A	----	タテナガ、,,,,、4群

III ----- C ----- タテナガ、.....、5群

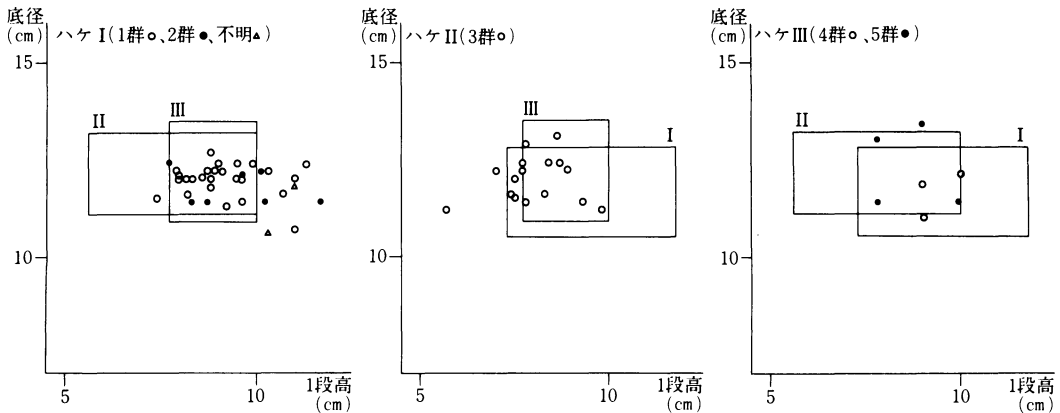
なお、これらを基本的な組合せとするならば、突帯の形態ないし透孔の形態のうち、どちらかが明らかな資料については、これらの組合せの一つに比定することが可能である。また、透孔の形態において、タテナガとヨコナガの透孔が両方存在している資料についても、突帯の形態が明らかな資料については同様である。ただし、突帯の形態と透孔の形態の両方が欠損している資料については、組合せを比定することは不可能である。また、ハケIVの2点については、個体数資料のうち、この2点のみが胴部のみで、透孔の形態も不明であるため、ひとつの組合せとして認めることはできなかった。

次に、これらの組合せについて、基部の粘土帯を巻く方向とハケを施す上での特徴などについて補足したい。1群の9点の資料は、すべて基部成形一帯逆「の」であり、外面タテハケの際、底面付近でハケ工具を止めて押しつけた後、上方向へタテハケを施す特徴がある。透孔の形態が不明の1群に比定される資料においても、17点中15点に同様の特徴がある。

2群の2点の資料は基部成形一帯逆「の」で、外面タテハケの際、底面付近でハケ工具を止



第109図 円筒埴輪の透孔の規模



第110図 円筒埴輪の底径と1段高

めずに、流れるようにタテハケを施す特徴がある。透孔の形態が不明の2群に比定される資料においては、5点中3点に同様の特徴がある。

3群の6点の資料は基部成形一帯逆「の」で、外面タテハケの際、底面付近から上方向に流れるようにタテハケを施す特徴がある。透孔の形態が不明のIII群に比定される8点も同様の特徴がある。ただし、1点は基部成形一帯「の」である。なお、基部内面の板目圧痕が斜め方向に付着するものが、2群と3群の中に認められる。

4群の3点については基部成形一帯逆「の」で、そのうち2点で、外面タテハケの際、底面付近でハケ工具を止めて押しつけた後、上方向へタテハケを施す特徴がある。

5群の2点については、外面タテハケにおいて、底面付近でハケ工具を止めて押しつけた後、

製品群	大分類 ハケ	小分類		補足事項		円筒埴輪	朝顔形 円筒埴輪	形象埴輪
		突帯	透孔	基部	ハケ押圧			
1群 (1) (1)	I	B	タテナガ	逆「の」	○	7、12、15、17、20、23、25、27、30 1、2、4、26、28、33、34、35、39、45、46、47、 49、51、53 31、50 41	92等	199、201、204、205 32
	I	B	---	逆「の」	○			
	I	B	---	---	○			
	I	B	---	---	×			
	I	B	---	---	---			
2群 (2)	I	C	ヨコナガ	逆「の」	×	8、10 54 44、57 38、52		(206、207)
	I	C	---	逆「の」	×			
	I	C	---	---	×			
	I	C	---	逆「の」	○			
不明	I	-	---	逆「の」	○	29、36、59、64、75、76、78、79 62、68、74 66		
	I	-	---	逆「の」	×			
	I	-	---	「の」	○			
3群 (3) (3)	II	C	ヨコナガ	逆「の」	×	3、13、14、16、24、138 9 19、137、139、140 133、134、136 142	162等	
	II	C	ヨコナガ	---	×			
	II	C	---	逆「の」	×			
	II	C	---	---	×			
	II	C	---	「の」	×			
	II	C	---	---	---			
不明	II	-	---	逆「の」	×	141		
4群 (4)	III	A	タテナガ	逆「の」	○	18 6 22		203
	III	A	タテナガ	---	○			
	III	A	タテナガ	逆「の」	×			
	III	A	---	「の」	×			
不明	III	B	---	逆「の」	×	149		
5群 (5) (5)	III	C	タテナガ	「の」	○	21 5、148	11 180等	198、202 200
	III	C	タテナガ	---	○			
	III	-	タテナガ	「の」	○			
	III	C	---	逆「の」	×			
	III	C	---	---	---			
不明	III	-	---	逆「の」	○	146、181 150、151、152		
	III	-	---	逆「の」	×			
不明	IV	B	---	---	---	154 192		
	IV	C	---	---	---			

第11表 埴輪分類表

上方向へタテハケを施す特徴があり、1点は基部成形一帯「の」である。もう1点は、粘土帯のつなぎ目部分が欠損しており、粘土帯の巻く方向については不明である。突帯の形態が不明な5群に比定される1点の資料は、基部成形一帯「の」で、外面タテハケにおいて5群と同じ特徴がある。ただし、透孔の形態が不明の5群に比定される2点の資料は、基部成形一帯逆「の」で、底面付近の成形が不十分で、外面に瘤状に余分な粘土が残す特徴的なものである。以上、大まかではあるが、円筒埴輪を主にハケ・突帯の形態・透孔の形態から分類し、それぞれに見られる特徴について若干補足してみた。これらをまとめたものが第11表である。ハケ・突帯の形態・透孔の形態の3つの項目について調べることができた資料の大半は、それぞれの組合せ内において基部成形の粘土帯を巻く方向と、外面タテハケの際の特徴が共通したものである。また、突帯と透孔のどちらかを欠損した資料についても、それぞれに比定される基本的な組合せの一群の資料と同様の特徴を持つものが多く存在している。それぞれの組合せの特徴から外れる資料も存在するが、本古墳の円筒埴輪の大半は5つの同一の特徴を有した製品群によって構成されていた可能性が高い。なお、第110図は各製品群の底径と1段高をグラフ化したものである。各製品群の数値にはやや傾向が認められる。1群と2群の底径は平均的な数値であるが、1段高は高い資料が多い傾向にある。3群は全体に平均的な数値であるが、一部底径が大きい資料や、1段高が低い資料がある。4群は底径がやや小さく、1段高がやや高い傾向がある。5群は数値のバラツキが大きい。

(2) 朝顔形円筒埴輪

円筒埴輪のうち、朝顔形円筒埴輪と判明している11については、ハケⅢ・突帯C・透孔タテナガであることから、5群に属する。なお、円筒埴輪が5つの製品群によって主に構成されていることから、朝顔形円筒埴輪の破片資料についても、ハケや突帯形の特徴からどの製品群に属するか推測することも可能である。92などは1群に、162などは3群に、180などは5群と推測される。なお、朝顔形円筒埴輪については、第4段の頸部の形態の違いで、2つの違う形態が存在することが推測された。そのうち、第4段の突帯間隔が長く、直線的にやや緩く外側に開く162は3群に、第4段の突帯間隔が短く、やや大きく外側に開く11と180は5群に属する。製品群の違いにより、朝顔形円筒埴輪の形態も違う可能性がある。

(3) 形象埴輪

人物埴輪については、ハケ分類と基台ないし形象部の突帯の形態、基台の透孔により円筒埴輪の各グループに比定することが可能である。199、201、204、205、32の5点はハケⅠ・突帯B・透孔タテナガで、基部成形は一帯逆「の」で、底部付近にハケ工具を止めて押しつけた後、上方向へ外面タテハケを施す特徴がある。1群と共通した特徴である。198、200、202の3点はハケⅢ・突帯C・透孔タテナガで、基部成形は一帯「の」で、底部付近にハケ工具を止めて押しつけた後、外面タテハケを施している。5群と共通した特徴である。203はハケⅢ・突帯Aで

4群に共通した特徴がある。ただし、基底部成形が一带「の」である。このように基台などの基本的な製作上の特徴は、円筒埴輪の製品群とほぼ共通しており、それぞれ同じ製品群と位置付けることが可能である。

また、各製品群と共通した特徴をもつ人物埴輪間においては、基台や形象部において共通した形態を示す点が多く存在している(第8表)。基台の突帯構成については、1群と共通した人物埴輪は2条3段、4群と共通した人物埴輪は1条2段、5群と共通した人物埴輪は無条である。耳環については、1群が粘土紐を丸く輪にしたままの形態であるのに対して、4群と5群は粘土紐を丸く輪にした後に、上面を平らにナデ成形している特徴がある。また、1群は形象部の意匠に違いがあるにもかかわらず、形象部の裳の裾が流れる形態である。5群の202も同様の表現であるが、198と200についてはそれぞれ特徴的な表現を裾部に施している。それに対して4群の203は裾部が大きく開く形態を有している。また、首の突帯については、1群は突帯が巡るのに対して、4群と5群は198を除き突帯が巡っていない。

このように、各人物埴輪は意匠に違いがあるにもかかわらず、基台の突帯構成や裳の裾の表現方法、首の突帯の有無、耳環の整形方法において、同一製品群内において、ほぼ共通した特徴を持っている。このことは、人物埴輪の製作においては、基部から形象部まで一人の工人によって製作されたことを窺わせるものではないだろうか。なお、人物埴輪には、円筒埴輪には見られなかった径2.5cm以下のような小さい透孔がある。これについてはすべてヨコナガである。これは人物埴輪の狭い突帯間隔の中に設けられているもので、円筒埴輪の透孔とは同列には扱えないため除外した。

馬形埴輪については、206と207ともハケI・突帯Cで、基部成形一带逆「の」で、底部付近でハケを止めずに下から上へ流れるように外面タテハケを施している。2群と共通した特徴を持つ。ただし、206も207についても部分的な資料であり、これ以上の検討はできなかった。

(4) 製品群について

製品群	番号	形態	ハケ	突帯	基台		形象部				
					突帯構成	基部	裾部形態	首の突帯	耳環上面	胸部透孔	頭部透孔
1群	199	天冠男子像	I	B	2条3段	逆「の」	流れる形態	○	----	--	-
	201	女子像	I	B	2条3段	---	流れる形態	○	粘土紐状	小	有
	204	天冠男子像	I	B	2条3段	逆「の」	流れる形態	○209	粘土紐状224	--	-
	205	冠帽男子像	I	B	2条3段	逆「の」	流れる形態	○208	粘土紐242、245	--	無208
	32	冠帽男子像	I	B	----	逆「の」	-	○247	----	--	有210
(4)	203	女子像	III	A	1条2段	「の」	大きく開く形態	×	平らに成形	--	無
5群	198	天冠男子像	III	C	無条	「の」	直線的な形態	○	不明	--	-
	202	女子像	III	C	無条	「の」	流れる形態	×	平らに成形	大	無
	200	女子像	III	-	無条	「の」	二段に重なる形態	×	平らに成形	小	-

第12表 人物埴輪分類表

円筒埴輪について、ハケ・突帯の形態・透孔の形態という項目で分類した結果、本古墳の円筒埴輪は主に5つの製品群に構成されている点を指摘した。そして、人物埴輪については、円筒埴輪の各製品群に対応し、同じ製品群の人物埴輪においては、基部の突帯構成や形象部の形態や整形においても共通する特徴がある点を指摘した。円筒埴輪と人物埴輪については、同一の基本的な製作上の特徴により、5つの製品群に分けることが可能であろう。

5つの製品群の内訳については以下のとおりである（第111図）。

- 1群——円筒埴輪26点、人物埴輪5点
- 2群——円筒埴輪5点
- 3群——円筒埴輪24点
- 4群——円筒埴輪3点、人物埴輪1点
- 5群——円筒埴輪2点（うち朝顔形円筒埴輪1点）、人物埴輪3点

また、朝顔形円筒埴輪の破片資料には1群と3群と5群に比定されるものがある。そして、製品群の違いによって朝顔形円筒埴輪の形態の違いも認められた。ただし、馬形埴輪については、基本的な製作上の特徴は円筒埴輪の2群と共通する可能性はあるものの、十分に検討することができなかった。

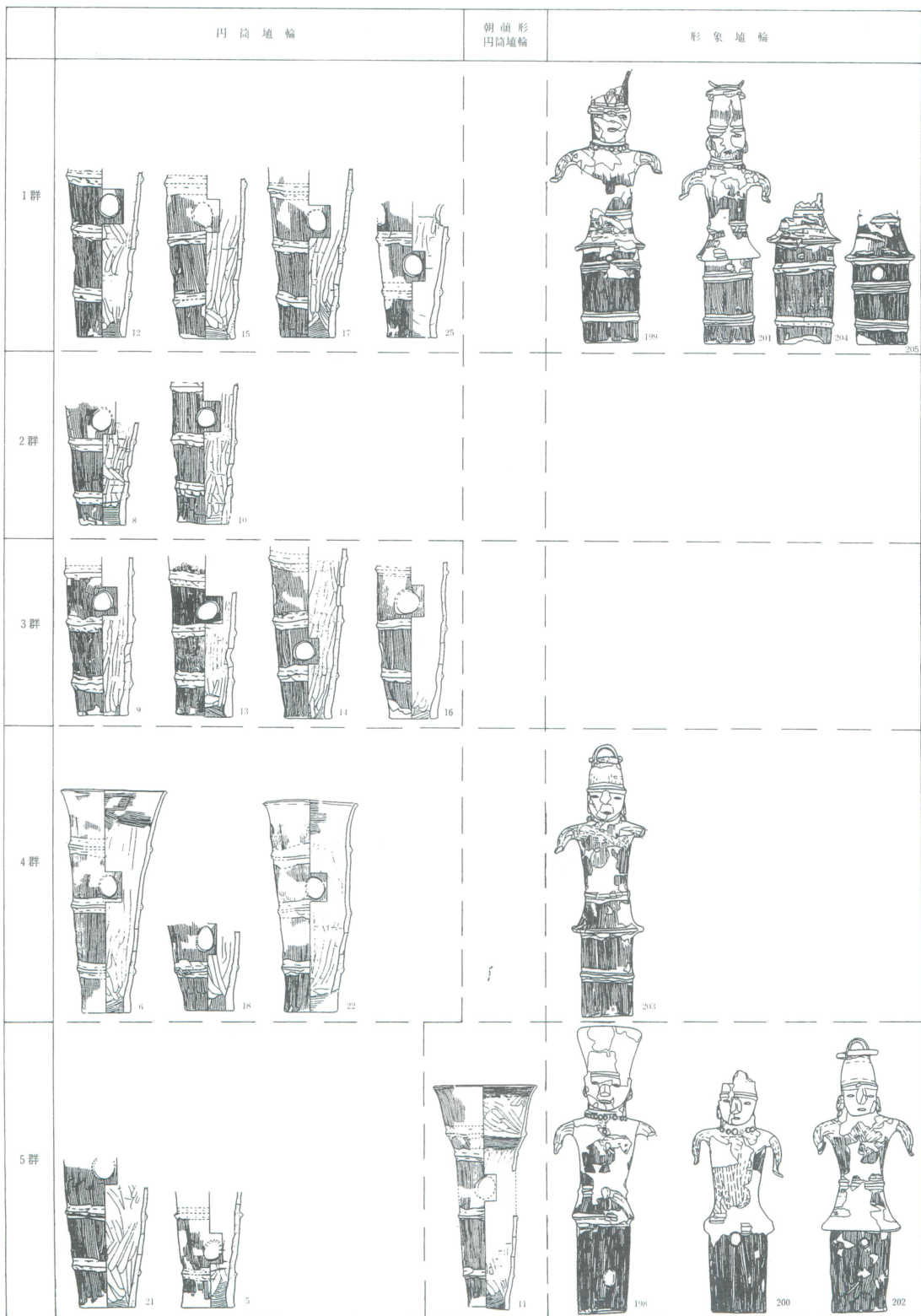
では、こうした製品群が、何に起因するかが問題となる。分類の項目とした、ハケという工具の違いや、突帯や透孔の形態の違い、基部の粘土帯の巻く方向やハケの施し方の特徴の違いを、製作した工人の違いを反映したものと考えたが、果たして妥当であろうか。完形資料が少なく、大半は破片資料から特徴を見いだしたものだけに、各資料の分類についても多くの問題点が残る。当然ながら、今後、ほかの下総型埴輪と比較し、再検討する必要がある。

3 大木台2号墳出土埴輪の位置付け（第112図）




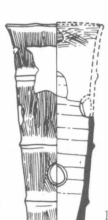
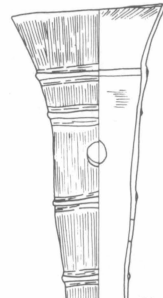

「下総型埴輪」を提唱された轟氏はその形態変化について以下の点を指摘している²⁾。

- (1) 「下総型埴輪」前段階から「下総型埴輪」への形態変化の基調は粗雑化及び簡略化である。
- (2) 「下総型埴輪」の朝顔形円筒埴輪や人物埴輪は、単純な円筒形へと変化する。
- (3) 朝顔形円筒埴輪は、第4段以下が普通形円筒埴輪と異なりクビレが明瞭な目沼7号墳例から、クビレが痕跡として残る高野山2号墳例、クビレが全く残らない城山1号墳例、そして第4段以下が普通形円筒埴輪と変わらない油作II号墳例へと変化する。
- (4) 人物埴輪は、腰のクビレのない百戸例や城山1号墳例が新しい様相をもつ。
- (5) 普通形円筒埴輪は、第4段と第3段の幅がほとんど差のない目沼7号墳例などが古い様相をもち、第4段が第3段よりずっと幅が狭い高野山古墳群例や油作II号墳例が新しい様相をもつ。新しくなると、第4段と第3段幅の違いが大きくなると同時に個体差も広がっていく。

では、轟氏が指摘された形態変化の中に、本古墳の埴輪を位置付けてみたい。朝顔形円筒埴輪には、第2段と第3段の突帯間隔が普通の円筒埴輪より長く、第4段でクビレで外側に開い



第111図 大木台2号埴輪分類図

	円筒埴輪	冠を被る男子像	帽子を被る男子像	島田髪的女子像	その他
古い様相を持つ「下総型埴輪」	 <p>1 2</p>	 <p>3 4</p>	 <p>5 6</p>	 <p>7 8</p>	
	 <p>9</p>	 <p>10</p>		<p>1~8 大木台2号墳 9,11~13 高野山2号墳 10 宝馬古墳</p>  <p>11</p>  <p>12</p>  <p>13</p>	
新しい様相を持つ「下総型埴輪」	 <p>14</p>	 <p>15</p>	 <p>16</p>	 <p>17</p>	 <p>19</p>
	 <p>20</p>	 <p>21</p>	 <p>22</p>	 <p>18</p> <p>14~16 高野山1号墳 17~19 片野23号墳 20~22 城山1号墳</p>	

第112図 「下総型埴輪」分類図

ており、古い様相と捉えられる。人物埴輪も腰のクビレが明瞭で、古い様相と捉えられる。円筒埴輪は資料数が少ないが、3例中2例は第4段の幅が第3段よりも広く、古い様相と捉えられる。以上、轟氏が示された「下総型埴輪」の時間的な変化において、本古墳の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪、人物埴輪はいずれも古い様相を持った一群と位置付けられる。

次に人物埴輪の形象部と基台部の境目の表現について若干補足する。轟氏はこの点について、衣の裾のように表現している高野山2号墳の資料と、突帯状に表現している高野山1号墳と高野山4号墳の資料については、製作集団の系列の違い、もしくは男子像と女子像の違いではないかと指摘されている。本古墳出土例においては、いずれも衣の裾を表現しており、男子像と女子像とで形象部と基台部の境目は区別されていない。製作集団の系列の違いという説とかかわる問題ではあるが、形象部と基台部の境目についても、轟氏が全体の基調として指摘した円筒化の中で捉えられる問題ではなかろうか。つまり、形象部の下部を当初は衣の裾として表現していたものが、腰のクビレがなくなり腰全体が円筒化する際に、衣の裾についても突帯化するという流れである。形象部の腰にも透孔が開く城山1号墳例(第112図21)などは、まさしく腰部分の円筒化が進んだ新しい様相と捉えることが可能ではなかろうか。ただし、この考え方では、衣の裾を表現した高野山2号墳(第112図12・13)→衣の裾が突帯化した高野山1号墳(第112図16)という前後関係と、主体部の構造上において提示されている高野山1号墳3・4号主体部→高野山2号墳主体部という前後関係と一見逆転するという問題が起こってしまう³⁾。しかし、高野山2号墳主体部については埴輪列の外側に位置する可能性も指摘されており、発見された主体部は埴輪配置後の追葬とも考えられるので、埴輪の前後関係とは問題にならないであろう。「下総型埴輪」の新旧の問題は、地域差や工人集団の系列の問題と同時に検討する必要がある、今後再検討する必要がある。

次に人物埴輪のセットの問題について若干触れたい。「下総型埴輪」の中で、城山1号墳の資料がこれまで唯一まとまった人物埴輪の作品群であったが、大木台2号墳の多くの人物埴輪の意匠がそれらの中に認められる点が注目される。ヘラ切りされた天冠状のものを被る男子像や、鬘状の粘土紐がめぐる帽子状のものを被る男子像など共通した意匠である。両古墳の資料には、新旧の様相の違いがあるにもかかわらず、共通した意匠の作品群が認められる点は、「下総型埴輪」において基本的な作品群の存在を窺わせるものであろう。ただし、「下総型埴輪」の人物埴輪は、本古墳出土例以外の意匠も多く存在しているので、当然ながらこれらを含めて検討する必要がある。

4 大木台古墳群について

小規模な円墳を2基調査した。1号墳は墳丘径約15m、2号墳は墳丘径約17mである。1号墳については埋葬施設は検出されなかったが、2号墳については墳頂部から木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。1号墳からは墳頂部付近から土師器が出土しており、2号墳からは大量

の埴輪が出土した。1号墳と2号墳の時期関係については、直接比較する資料がない。1号墳は土師器の年代観から6世紀中葉前後に比定できよう。2号墳については、「下総型埴輪」の年代観から6世紀後半に比定できよう。ただし「下総型埴輪」の年代観は城山1号墳と油作II号墳出土の須恵器の年代観によるものであり、両古墳の「下総型埴輪」よりも本古墳出土例は古い様相が認められるので、大木台1号墳と2号墳の年代はほぼ近い時期と考えられる。なお両古墳の周溝は、北西側周溝の外周が内側に屈曲し、周溝の深さも浅くなる同じ特徴がある。1号墳については2号墳を避けるためとも推測されるが、2号墳については北西側に別の古墳が存在する痕跡はなく、この特徴が両古墳の前後関係を示すものとは考えられなかった。

これまでに大木台古墳群周辺では、吉高地区の吉高山王古墳や平賀地区の古井戸原2号墳(油作II号墳)、吉田地区の西ノ原2号墳から「下総型埴輪」が出土している。今回の大木台2号墳例は、印旛村内で4例目である。これまでの出土が、比較的古墳分布が密な地区で前方後方墳や前方後円墳から出土しているのとは、相違する発見であった。

第2節 井戸向遺跡

1 先土器時代

東側調査区から3か所の石器集中地点を検出した。III層を主体とした第1ブロックからは50点の石器が出土し、珪質頁岩と安山岩をそれぞれ石材とした二つの石器群の広がり認められた。共に定形的な石器は出土していないが、両石材ともナイフ形石器の作出を意図して、剥片剥離を行って形成されたブロックと捉えられた。IX層を主体とした第2ブロックからは9点の石器が出土し、ナイフ形石器、剥片、石核が出土した。第3ブロックは、IXa層から剥片が1点出土した。

2 縄文時代

縄文時代の遺構としては西側調査区から炉穴16基と土坑1基を、東側調査区から陥穴16基と土坑4基、炉穴10基を検出した。西側調査区では、南側から入り込む谷に沿った台地の縁辺に、3か所に分かれて炉穴群が検出された。遺物は主に野島式～茅山上層式の早期条痕文系土器が出土しており、この時期の炉穴群と考えられる。東側調査区では南北から谷が入ってきて、台地平坦面が尾根状に狭まった地点で陥穴が集中して検出された。複数の形態の陥穴が混在していたが、谷筋に直交する方向に長軸を向けたものが多く認められた。炉穴については北側から入り込む谷頭の位置に集中して検出された。遺物は早期条痕文系土器を主体に捺糸文土器や沈線文土器も出土した。陥穴については、時期を特定することはできなかったが、炉穴と重複する陥穴が1例あった。その前後関係は炉穴→陥穴であった。また1基のみであるが、底面付近の覆土から中期の土器が出土した陥穴があった。炉穴については、いずれも条痕文系土器が覆土中から主体的に出土しており、ほぼこの時期に比定できるものと思われる。

3 歴史時代

(1) 平安時代

東側調査区から、9世紀前半の遺物が出土した溝状遺構を1条検出し、その付近からは瓦塔の破片が1点出土した。県内の瓦塔の出土は、8世紀末から9世紀前半の集落調査に伴い、多くの資料が見られる。なかには仏堂とみられる遺構に伴って検出されているものもある。本遺跡出土の瓦塔の破片や溝状遺構についても、調査区に隣接する南側台地上に推測される奈良・平安時代の集落との関係で捉える必要がある。

(2) 近世

東側調査区から、溝状遺構3条、地下式坑1基、道路状遺構1条を検出した。そのうち溝状遺構の2条については、南北から谷が入ってきて、台地平坦面が尾根状に狭まった地点で、台地を東西に区切る溝と推測された。地下式坑については、この2条の溝と重複して検出され、溝が機能していた時期に掘られたものと捉えられた。道路状遺構については、現国道に先行する近世の道路跡と推測された。

西側調査区では、現在の農家の下から、近代に成立した現在の建物に先行する江戸時代後半の屋敷跡が検出された。南側を現国道に面し、東西を溝と土手によって区画された屋敷跡内から、東側には掘立柱建物跡と竪穴状遺構の建物遺構群が、西側からは土坑が多数検出された。建物遺構はほぼ同位置で建て替えを繰り返しており、18世紀後半から19世紀前半の遺物が出土していることから、この期間内に継続して営まれたと考えられる。西側の土坑群はいずれも貯蔵穴と推測される。建物遺構群の東側と、屋敷外から西側区画溝へ伸びる道路状遺構の2条は、屋敷跡の入口に伴うものであろう。

なお、これら近世と結論された遺構群は確認調査段階において、中世まで遡る遺構と誤って判断したものである。

第3節 炭焼台所在塚

径5m～5.5m、高さ約1.3mの円形の塚である。盛土中から、文久永宝などの古銭が出土したことから、文久3（1863）年以降に造られた塚と推測される。地元では「ナナヅカ」と呼ばれ、複数の塚が並んでいたと言われているが、現在では1基しか確認できない。塚の上に立てられていた二十三夜塔には「文久三年癸亥二月吉日」の銘が、青面金剛像には「明治十年□月吉日」の銘が刻まれている。これらの造塔に伴って塚が造られた可能性が高い。炭焼台所在塚は、現国道と松虫へ抜ける道と印旛沼へ下りる道の辻に位置しており、二十三夜塔は道標を兼ねており、「辻の塚」としても機能したと推測される。なお、印旛村内では84基の月待塔が確認されており、うち二十三夜塔は40基である。庚申塔は94基が確認されている。庚申塔の最も古い造塔年代銘は元禄13（1700）年で、最も新しいものは昭和4（1871）年である⁴⁾。

第4節 和田谷津塚

約10m×約7m、高さ約1.4mの方形の塚である。「ドウロクジン」を祀る祠が位置した塚の北側では盛土が崩されていた。この祠の跡とは別に、塚の前面に建物の土台の痕跡も確認された。辻に位置する塚の前面である点から、先行する祠の跡の可能性が高いであろう。遺物の出土状況も塚の北側の祠の周辺に限定され、いずれも祠に祀られた陶器やカワラケで19世紀以降に比定されるものである。塚の裾の削り出しについても、辻に面した東辺がソフトローム層の上面まで達しているのに対して、もう一方の道路に面した北辺については表土層中で削り出しが止まっており、塚の造成当初から塚の北側に祠が存在していた可能性が高い。以上の点から、「ドウロクジン」を祀る祠とともに塚の造成がなされたと推測する。「ドウロクジン」については2体一石の立体像で、下は三猿が浮彫になったもので、神奈川県から運んできたという伝承がある⁵⁾。なお、印旛村内では34基の道祖神の石刻像や石祠が確認されており、大半は石祠である。年代が判るもののうち、最も古いものは享保17年(1732年)で、最も新しいものは昭和55年である⁶⁾。また、和田谷津塚は現国道と印旛沼方向へ下りる道との辻に位置しており、「辻の塚」としても機能したと推測される。

注1 小林敏夫ほか 1976『下総片野古墳群』 芝山はにわ博物館

2 轟俊二郎 1973『埴輪研究』

3 轟俊二郎ほか 1969『我孫子古墳群』 東京大学文学部考古学研究室

4 大木英行ほか 1990『印旛村史 通史II』 印旛村史編さん委員会

5 川端豊彦ほか 1970『印旛沼・手賀沼の民俗』 千葉県教育委員会

6 4と同じ

7 第112図は以下の報告書などの実測図を改図転載させていただいた。

9、11、14～16 轟俊二郎ほか 1969『我孫子古墳群』 東京大学文学部考古学研究室

10 神山崇ほか 1980『上総殿部田古墳・宝馬古墳』 芝山はにわ博物館

12、13 轟俊二郎 1973『埴輪研究』

17～19 小林敏夫ほか 1976『下総片野古墳群』 芝山はにわ博物館

20～22 丸子亘ほか 1978『城山第1号前方後円』 小見川市教育委員会

写 真 图 版

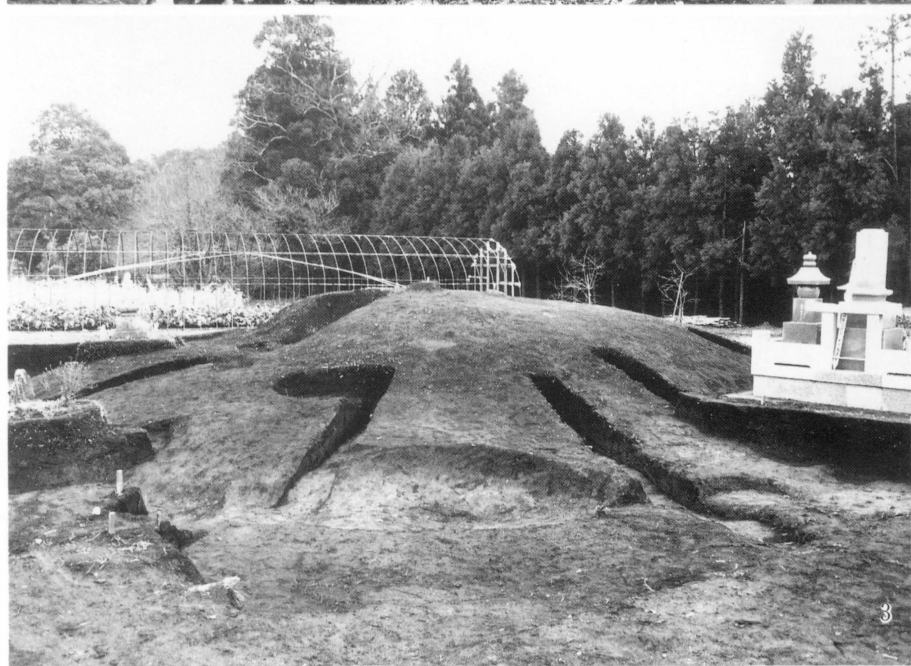
1. 調査前風景



2. 北東側周溝



3. 北西側周溝





1. 北側周溝

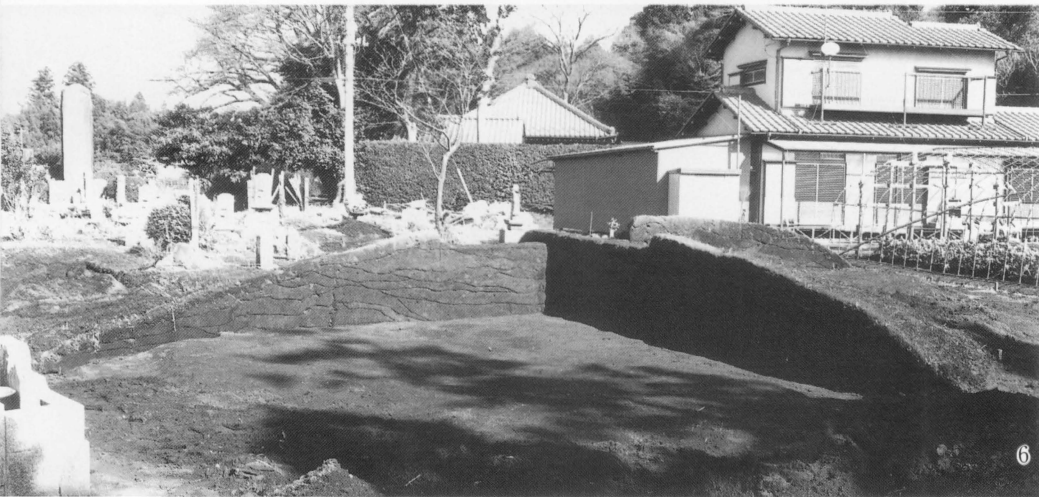
2. 西側周溝

3. 全景



4. 西側周溝

5. 土層断面
(南より)



6. 土層断面
(南西より)



1. 調査前風景



2. 調査風景

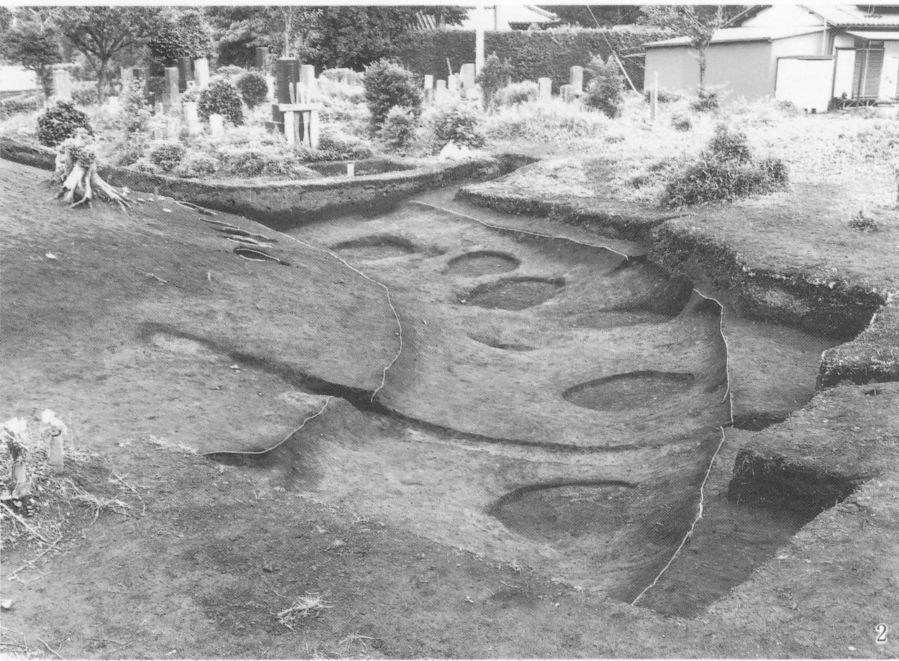


3. 東側墳丘裾部
(埴輪出土状況)



1

1. 墳丘裾部埴輪列（東より）



2

2. 東側周溝（南西より）

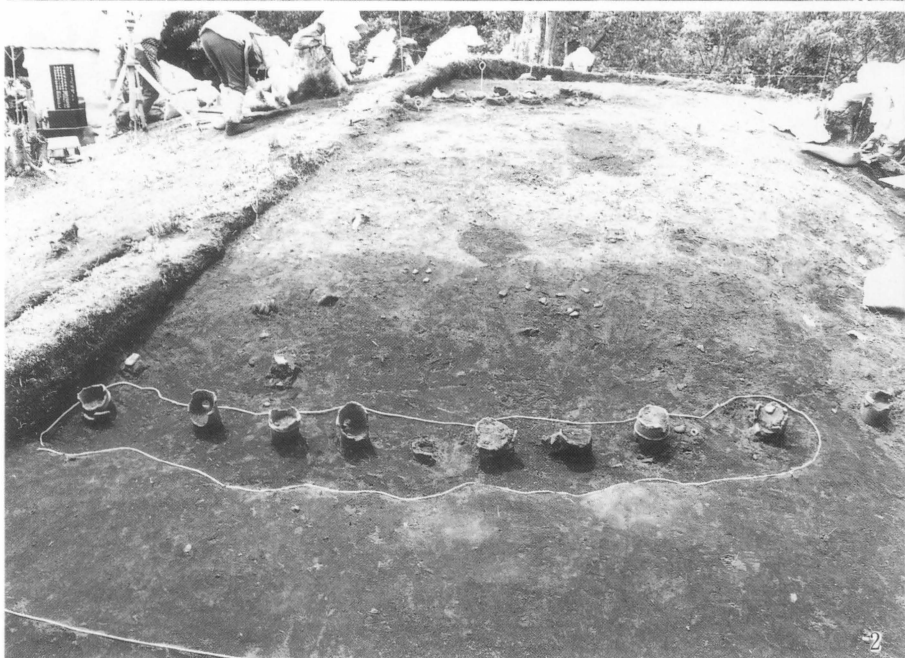


3

3. 全景（北より）



1. 東側墳丘裾部埴輪列
(P 1 ~ P 7)



2. 東側墳丘裾部埴輪列
(P 8 ~ P 17)

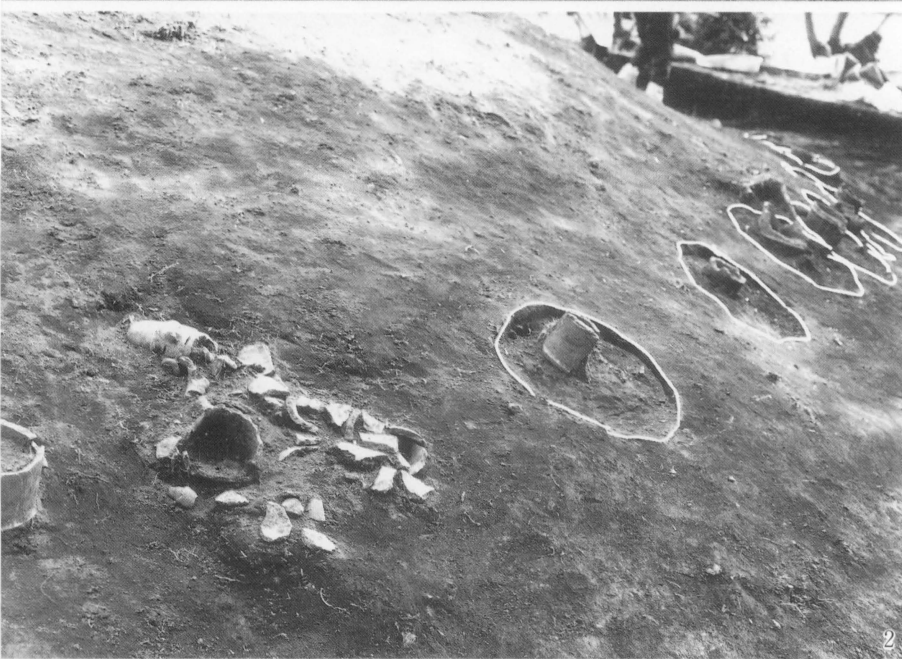


3. 東側墳丘裾部埴輪列
(P 9 ~ P 15)



1

1. 人物埴輪201出土状況



2

2. 人物埴輪202出土状況

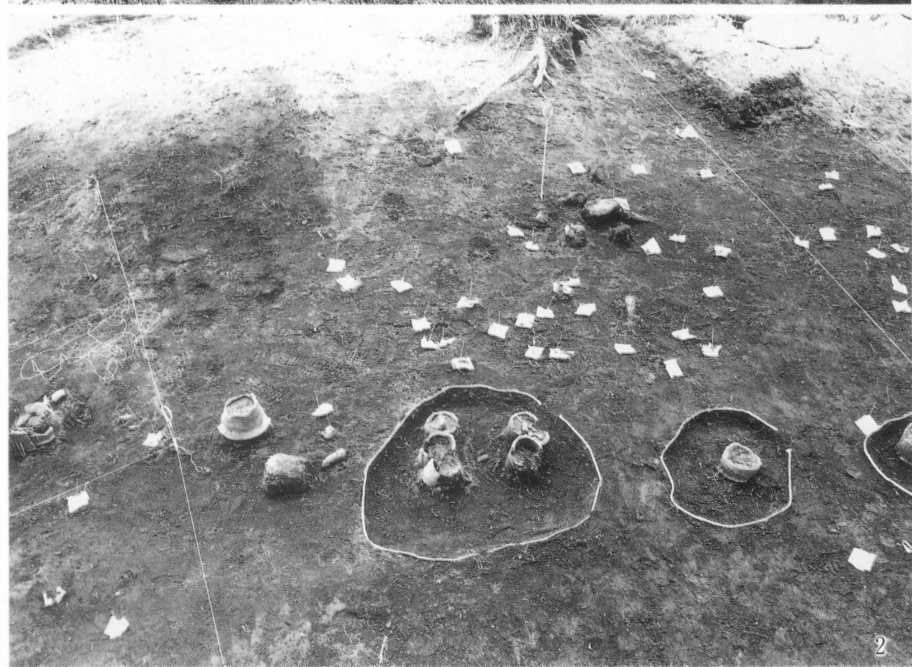


3

3. 人物埴輪203出土状況



1. 北側墳丘裾部埴輪列
(P18~P24)



2. 北側墳丘裾部埴輪列
(P19~P21)

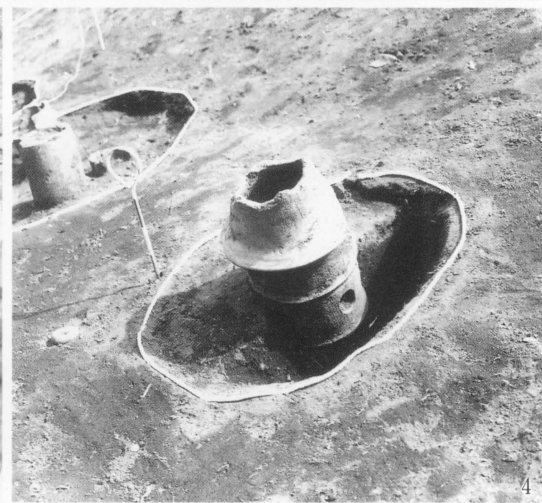
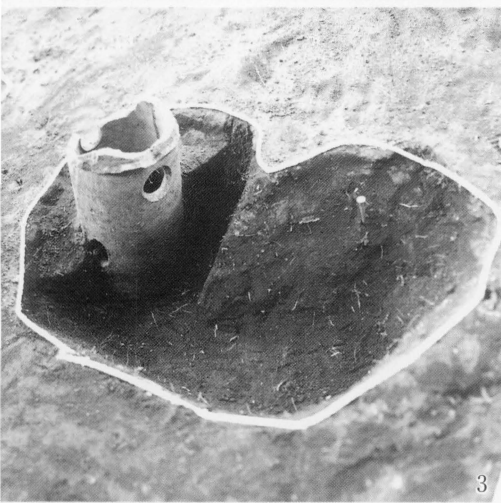


3. 北側墳丘裾部埴輪列
(P34~P24)



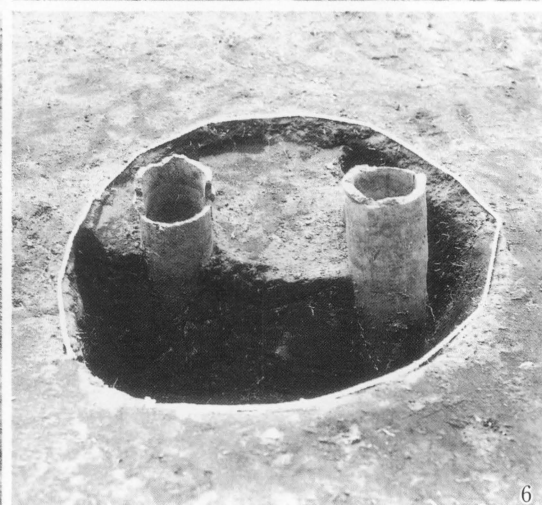
1. 円筒埴輪
8. 11出土狀況

2. 円筒埴輪列
出土狀況



3. 人物埴輪198
出土狀況

4. 人物埴輪205
出土狀況)



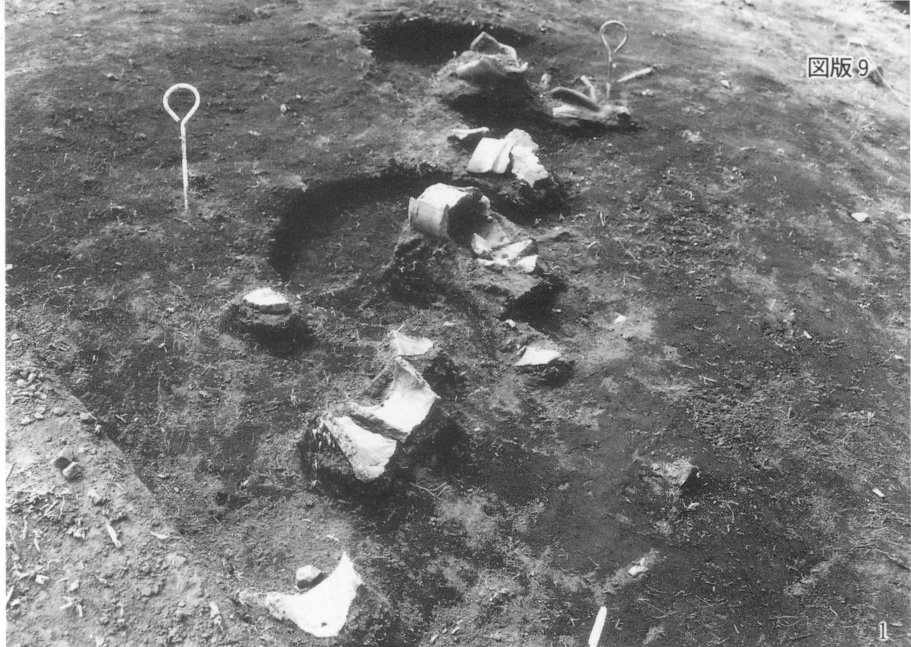
5. 馬形埴輪206
出土狀況

6. 馬形埴輪207
出土狀況



7. 西側墳丘裾部
埴輪列

8. 西側周溝



1. 墳頂部埴輪列

1



2. 埋葬施設遺物出土状況

2



3. 埋葬施設掘り方

3



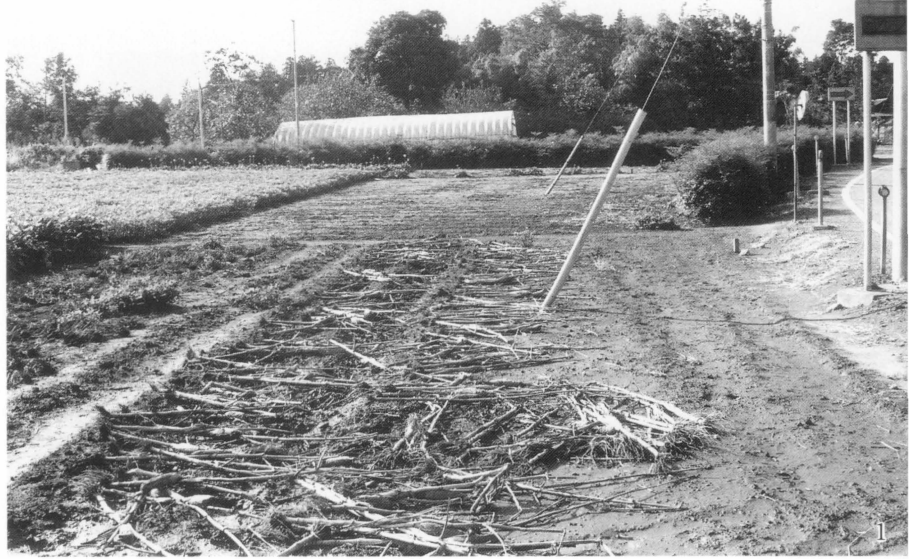
1. 全景



2. 土層断面（北東より）



3. 遠景（北より）



1. 調査前風景 (東側調査区)



2. 調査風景 (和田谷津塚付近)



3. 調査後風景 (西側調査区)



1. 第1ブロック



2. 第2ブロック

1. 003



1

2. 004



2

3. 005



3

4. 006



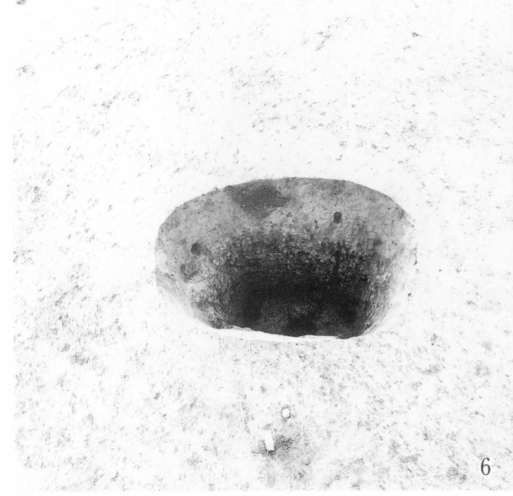
4

5. 007



5

6. 008



6

7. 009

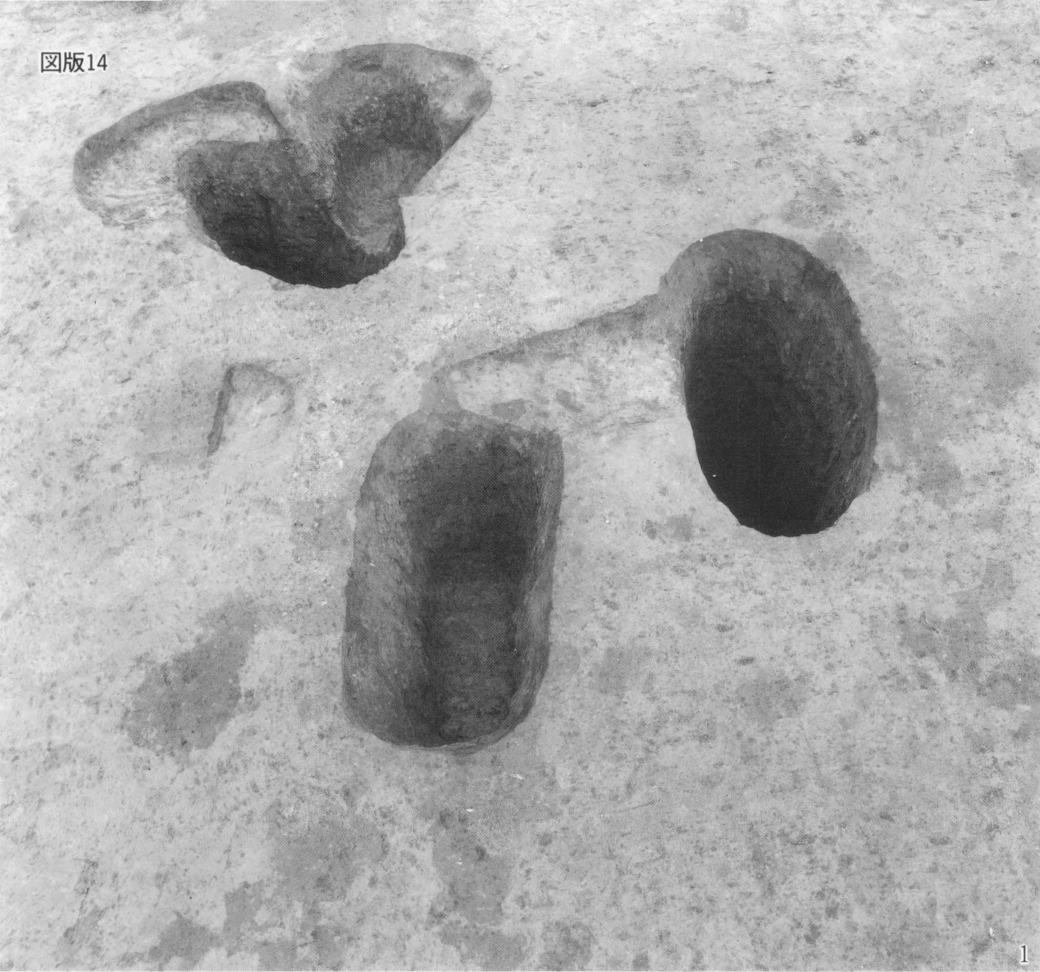


7

8. 011

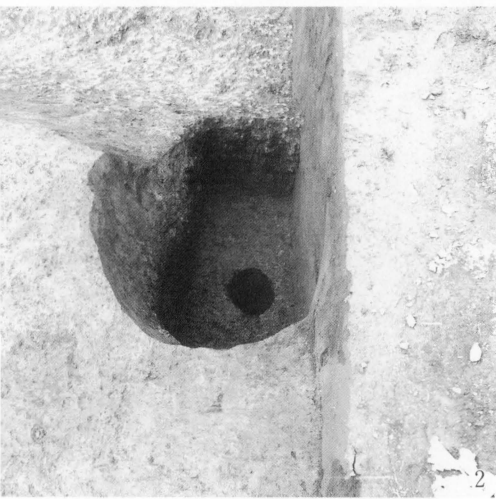


8



1

1. 013, 016



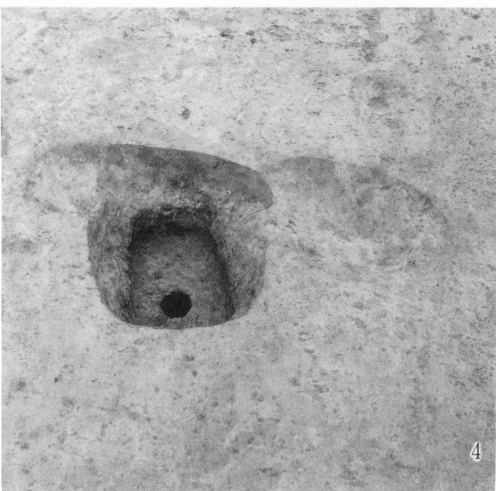
2

2. 012



3

3. 014



4

4. 015



5

5. 017, 018

1. 026



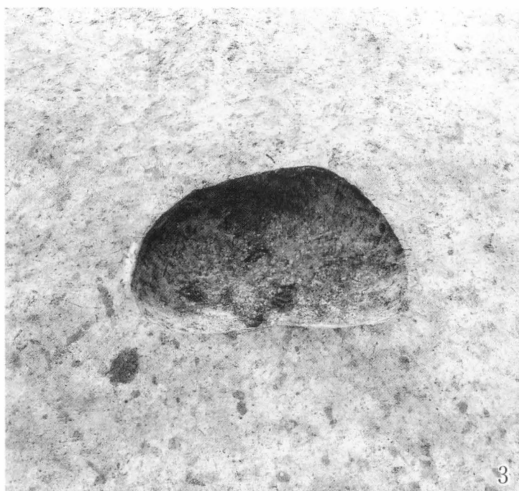
1

2. 028



2

3. 032



3

4. 033



4

5. 034



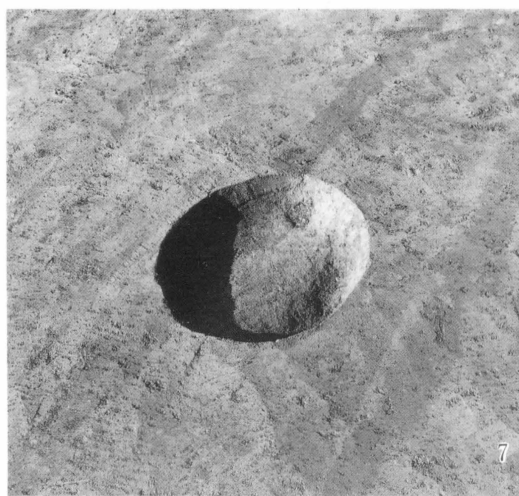
5

6. 019



6

7. 020



7

8. 021

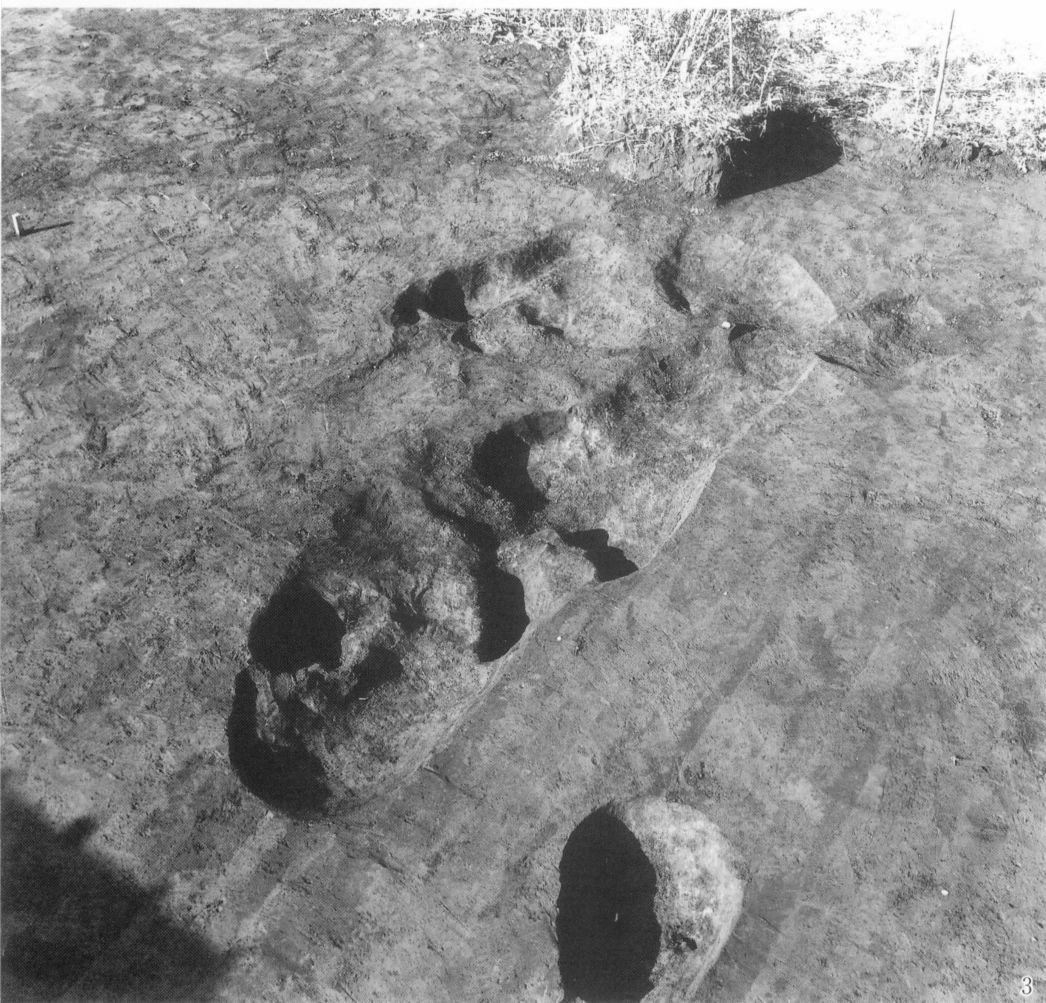


8



1. 022

2. 023



3. 024 025



4. 027



5. 029 030A,B

1. 029
2. 031

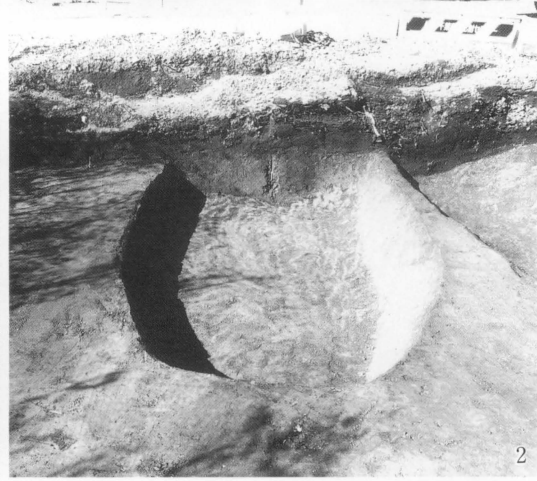


3. 046 048
049 050



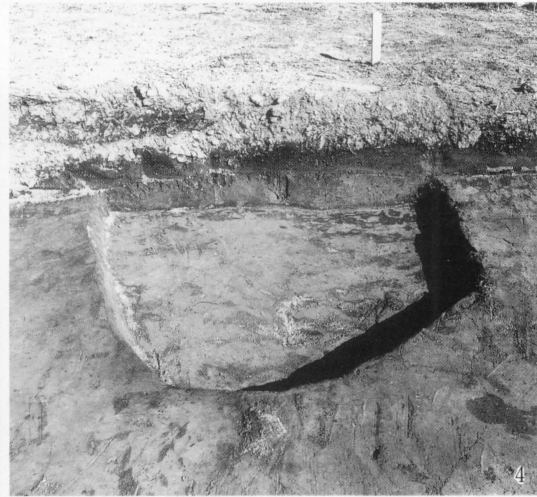
4. 047 048
051 052





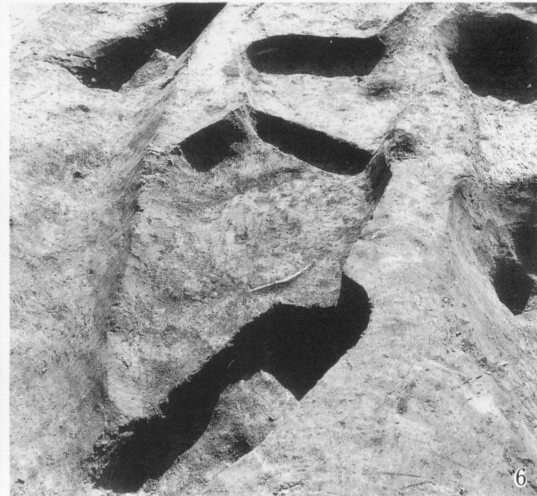
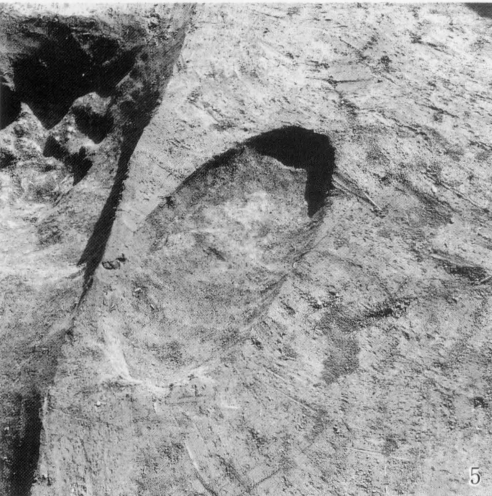
1. 053

2. 054



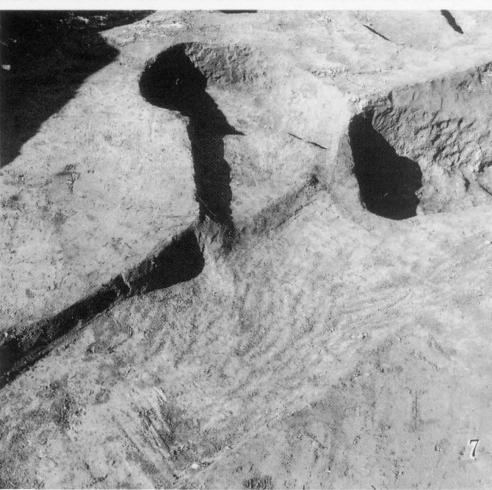
3. 055

4. 056



5. 068

6. 072A,B



7. 073A,B

8. 075



1

1. 001A



2

2. 屋敷跡



3

3. 057C



4

4. 057B
焙炉出土状況



5

5. 064



6

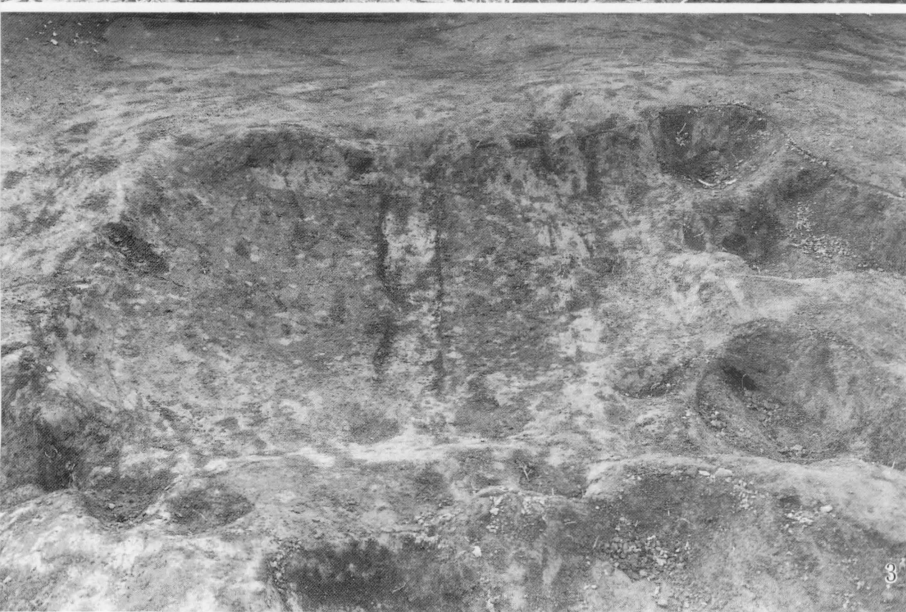
6. 064
囲炉裏状施設



1. 屋敷跡



2. 土壙墓群



3. 044



1. 全景（東より）



2. 土層断面（北東より）



3. 青面金剛像 二十三夜塔



1 1. 調査前風景 (南より)



2 2. 全景 (南より)



3 3. 土層断面 (西より)



3



4



7



8

土師器
大木台 2号墳

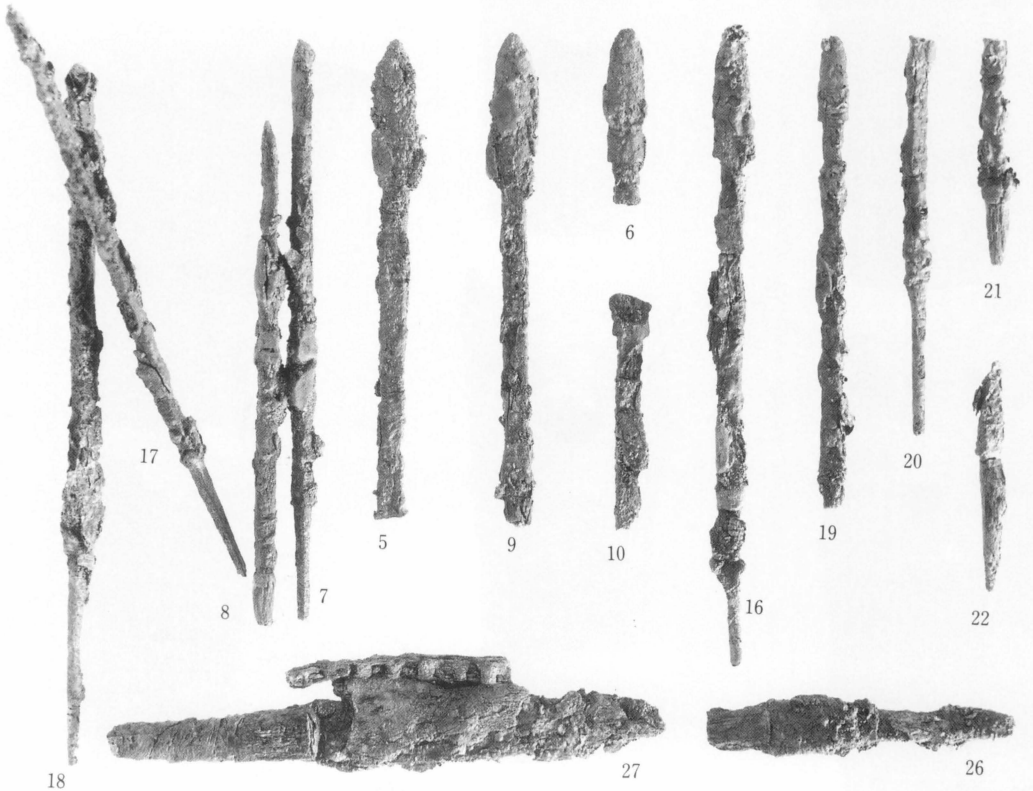


1



2

1



17

8

7

5

9

10

6

16

19

20

21

22

18

27

26

鉄製品



1



2



3



4



6



5



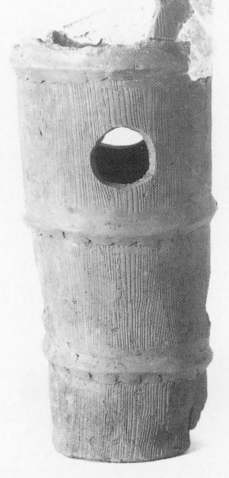
8



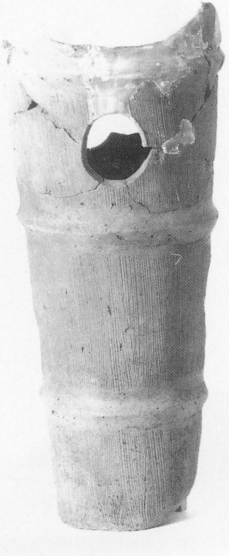
9



7



10



12



11 円筒埴輪



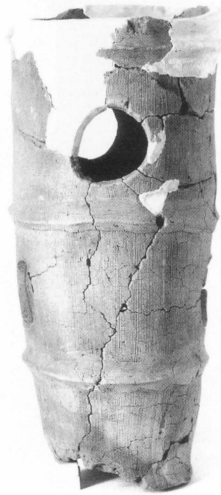
13



14



15



16



17



18



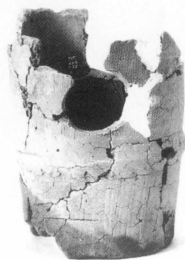
21



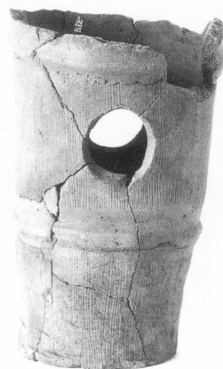
20



19



24



23



22



25



26



27



29



28



30



31



32



33



34



35



36



40



37



38



39



41



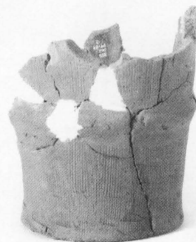
42



43



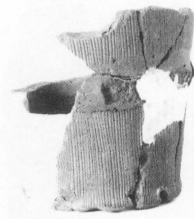
44



45



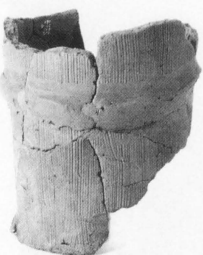
46



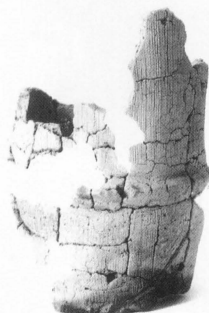
47



48



49



50



51



52



53



54



55



57



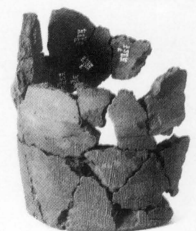
56



91



133



134

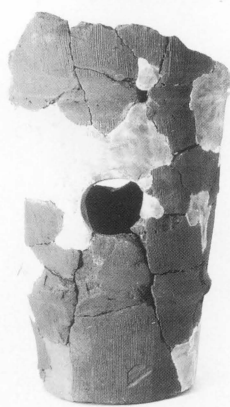
円筒埴輪



135



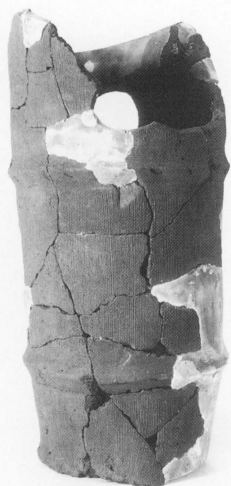
136



137



138



139



140



141



142



146



147



148



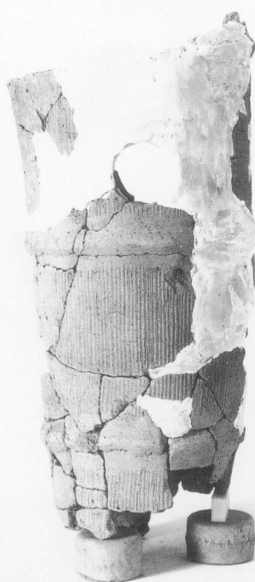
150



149



151



154



152

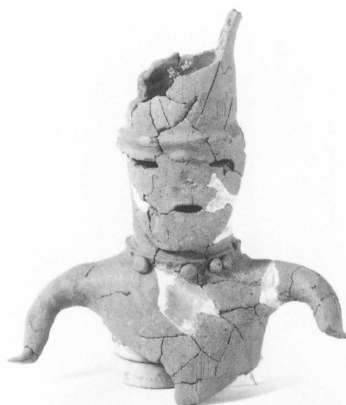


153

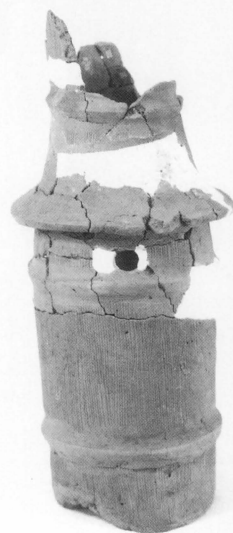
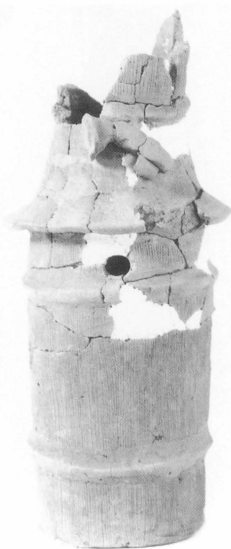
大木台 2 号墳



198



199



199

形象埴輪

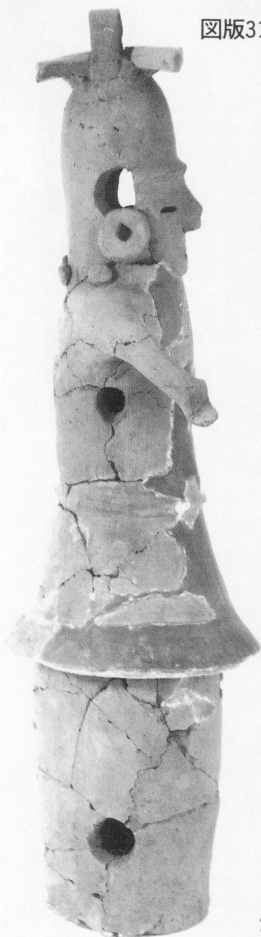


200

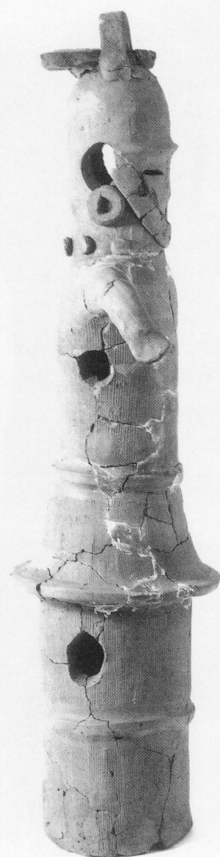


201

形象埴輪



202



203



206-1



206-2



206-3



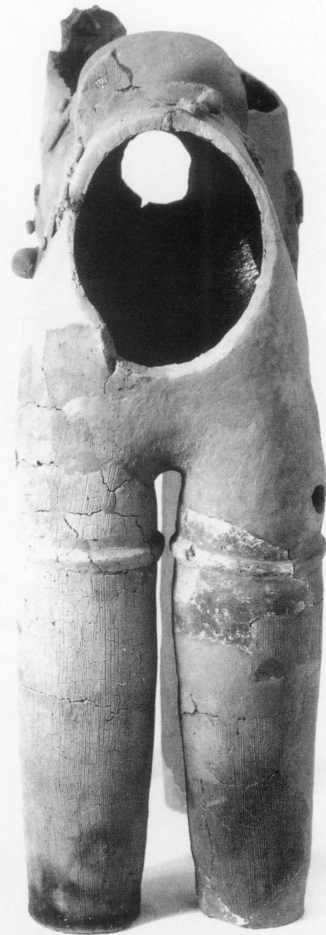
206-4



207



207



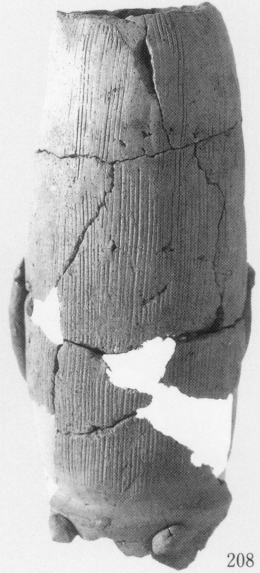
207



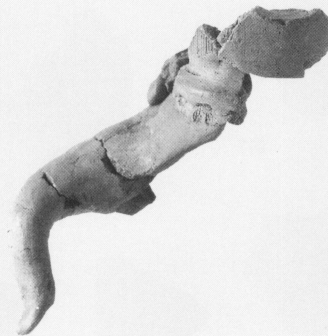
204



205



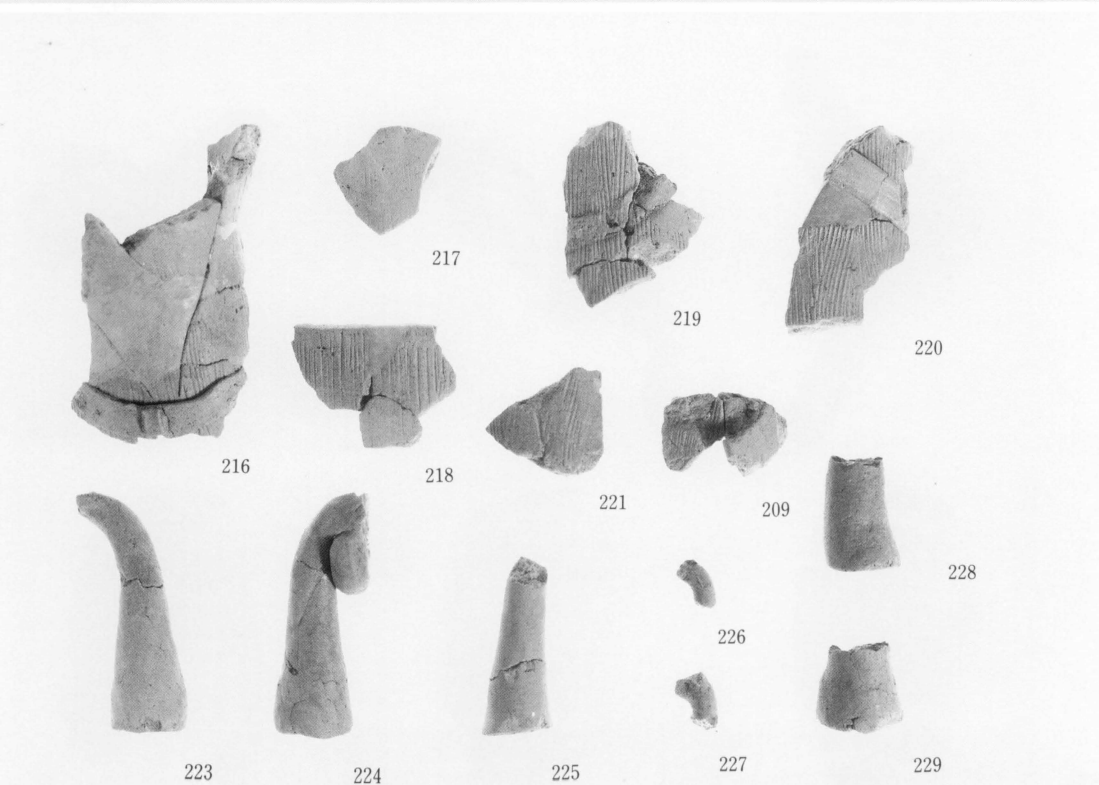
208

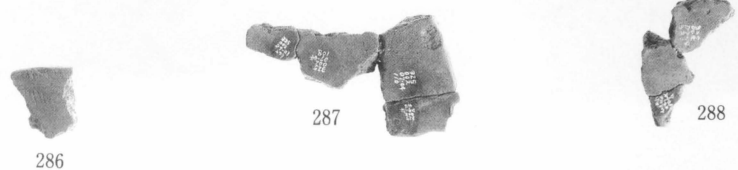
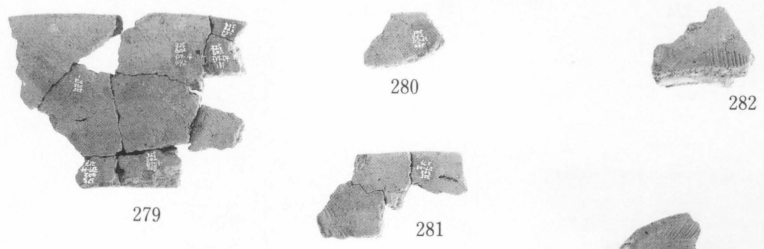
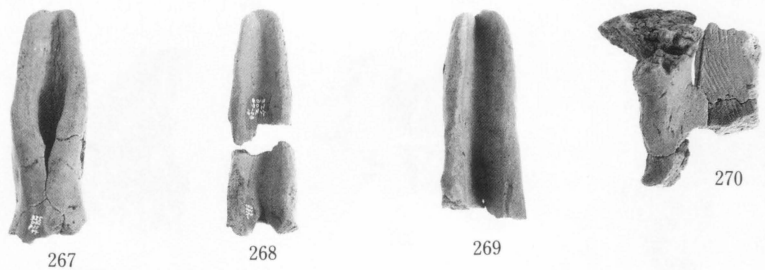
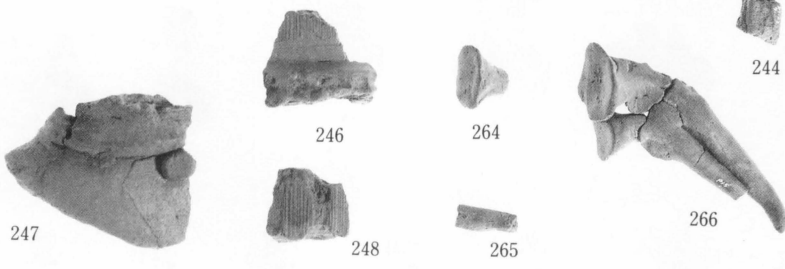


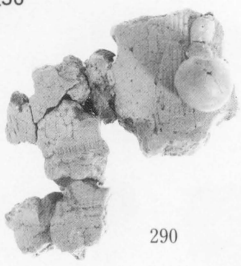
209



210







290



291



292



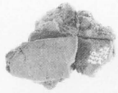
293



294



295



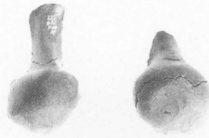
296



297



298



304



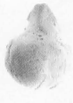
305



306



307



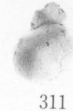
308



309



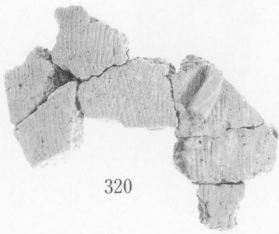
310



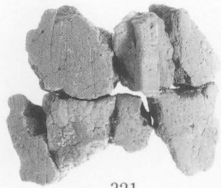
311



317



320



321



323



322



329



326



327



324



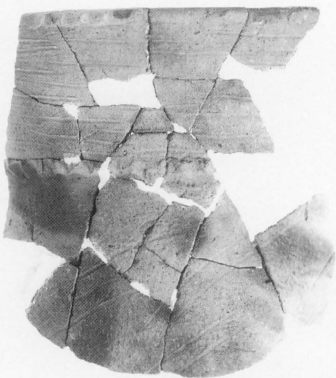
325



328

形象埴輪

大木台古墳群



1



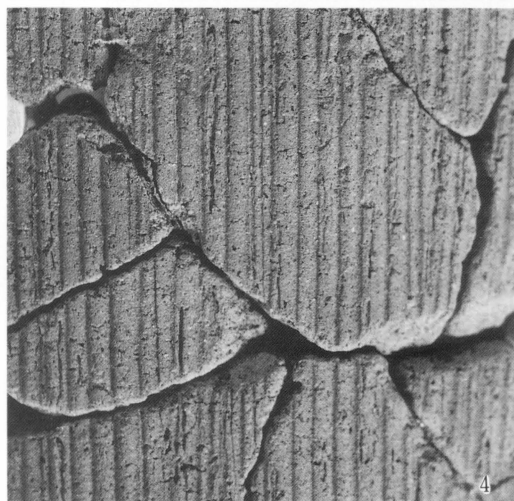
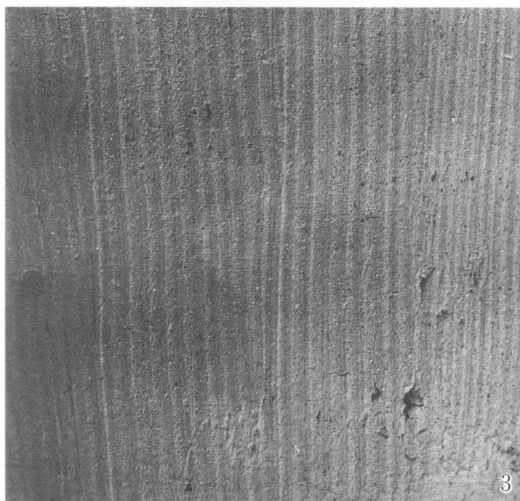
5

縄文土器

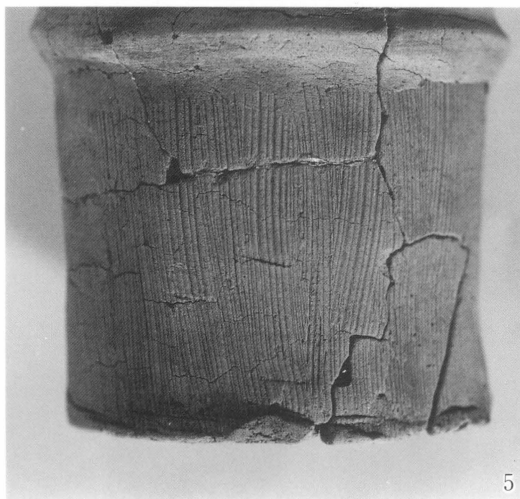
- 1. 円筒埴輪30
(ハケ I)
- 2. 円筒埴輪 3
(ハケ II)



- 3. 円筒埴輪21
(ハケ III)
- 4. 円筒埴輪15
(ハケ IV)

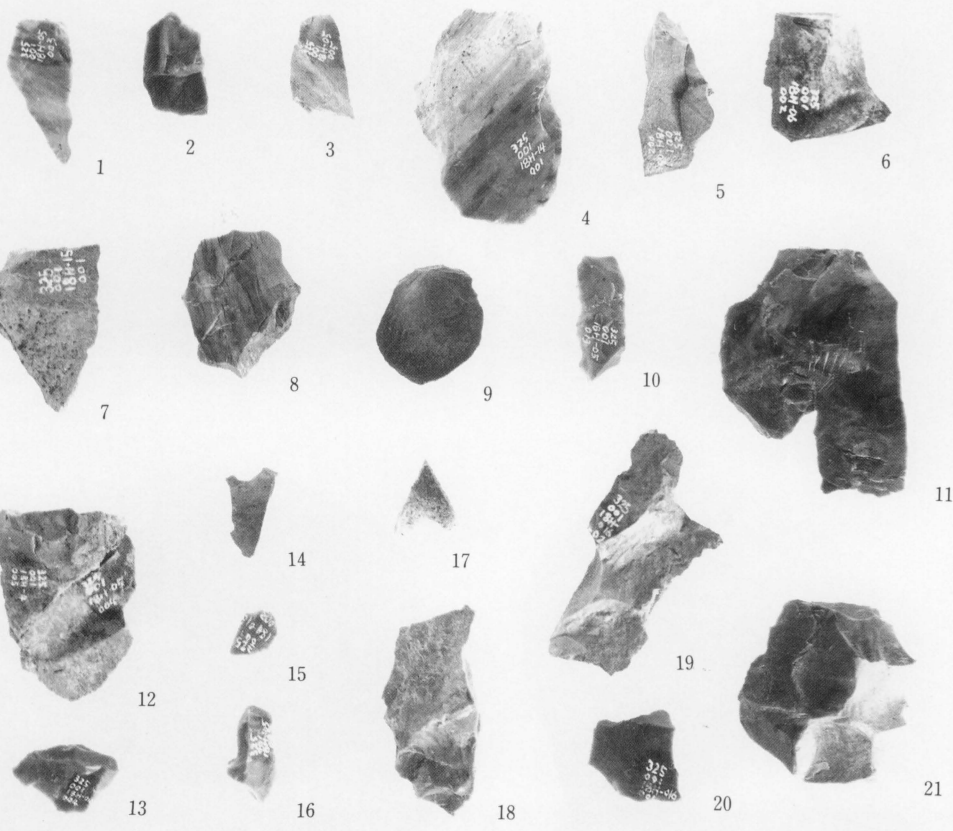
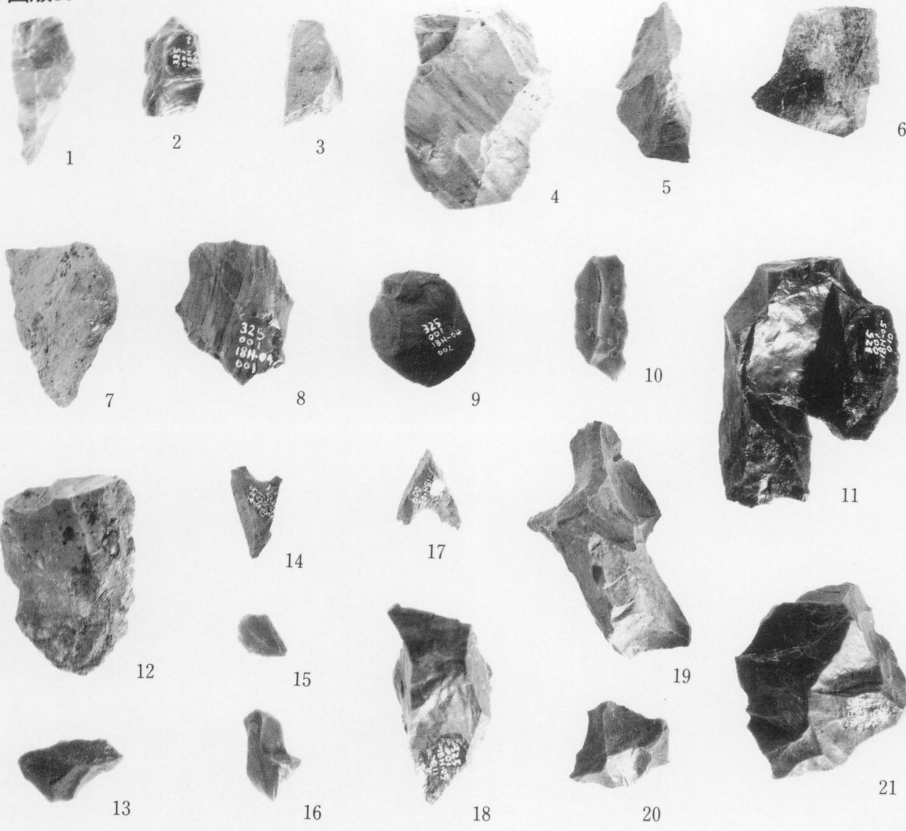


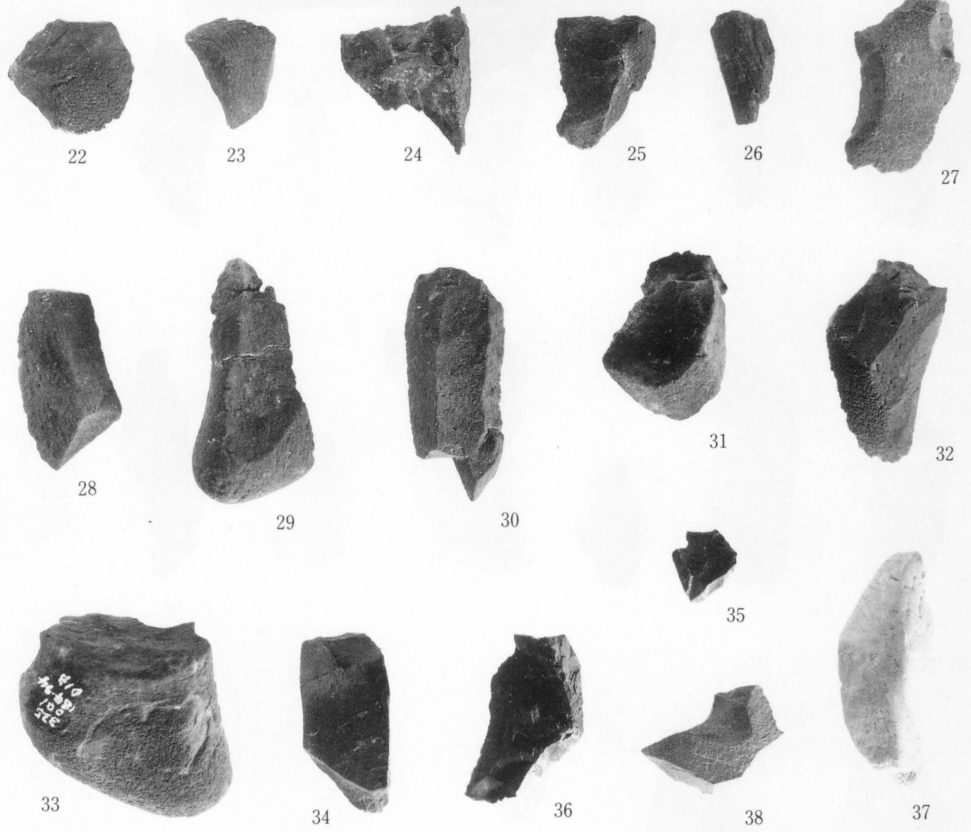
- 5. 円筒埴輪30
- 6. 円筒埴輪 3



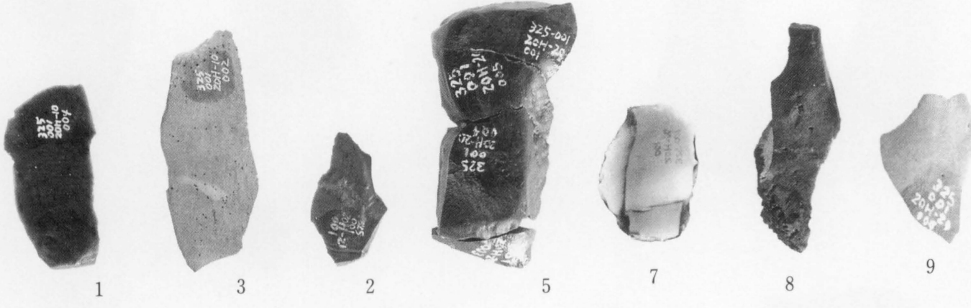
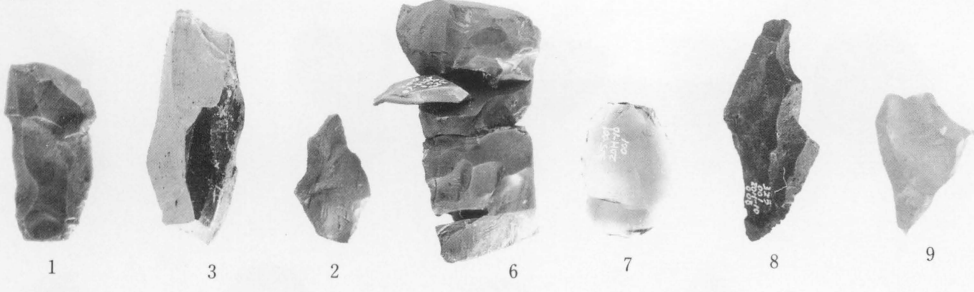
- 7. 円筒埴輪30
(一带逆「の」)
- 8. 円筒埴輪21
_ (一带「の」)





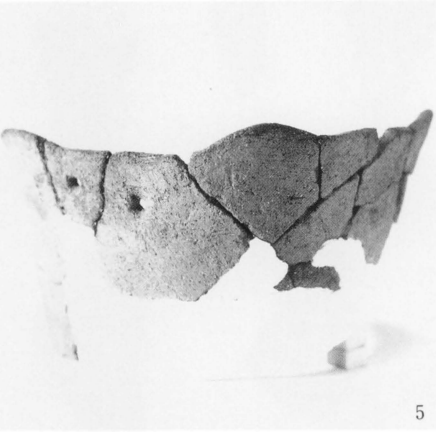
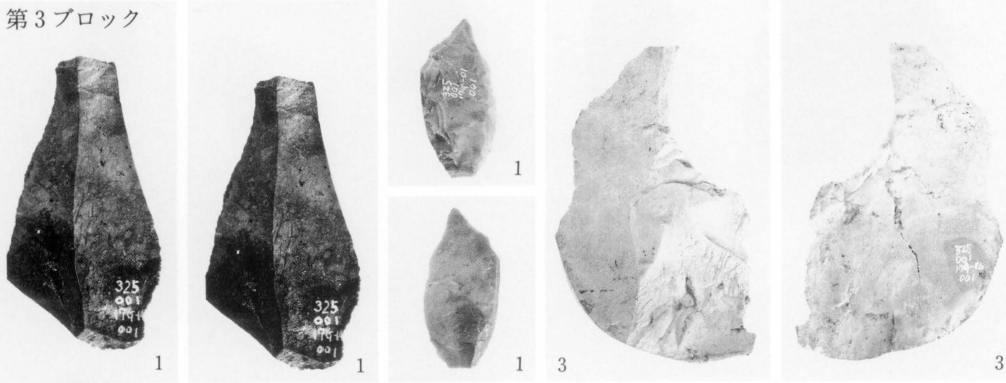


第1ブロック
石器



第2ブロック

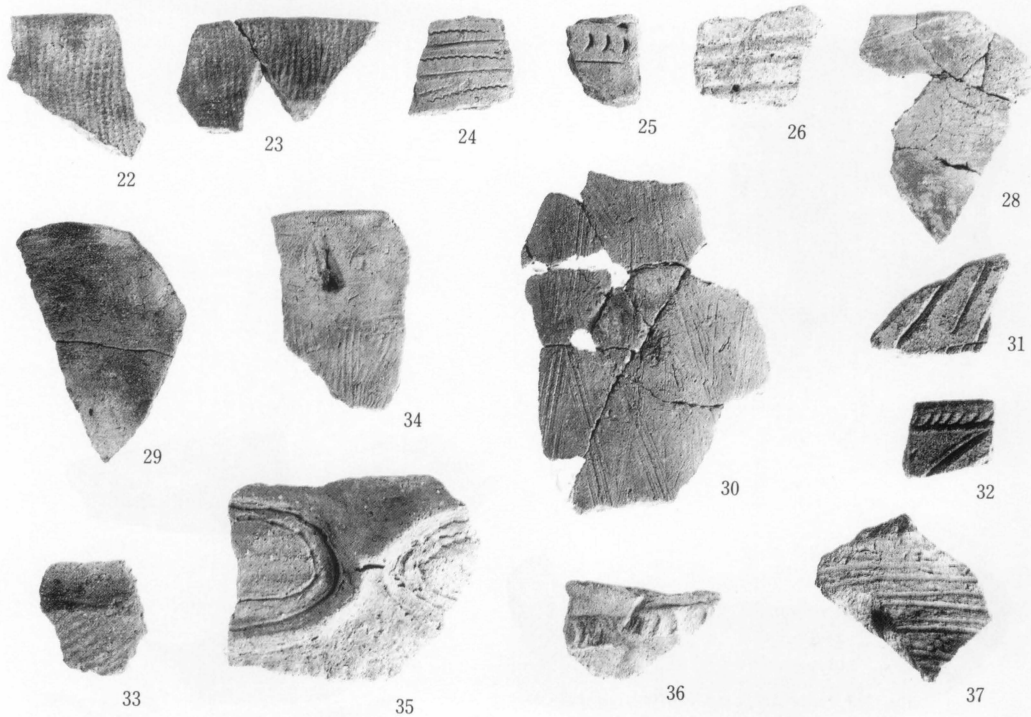
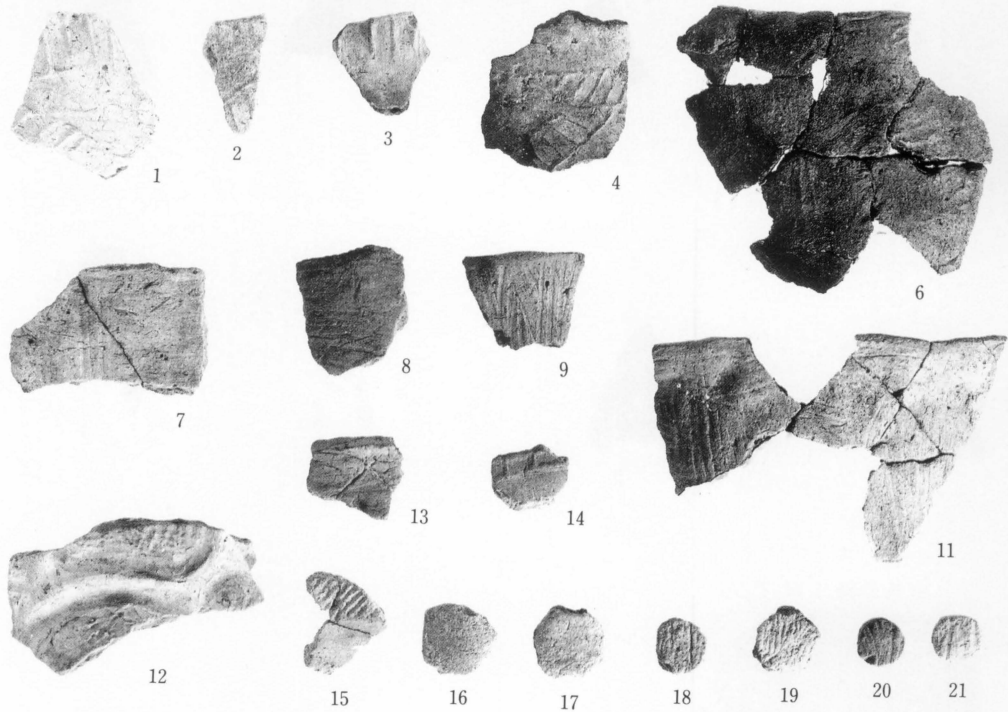
第3ブロック

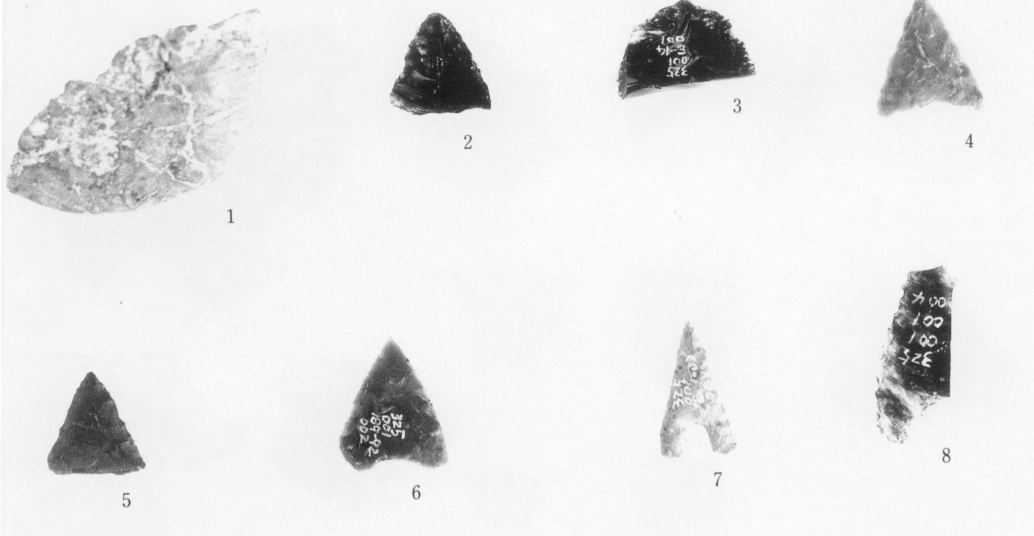


単独出土石器

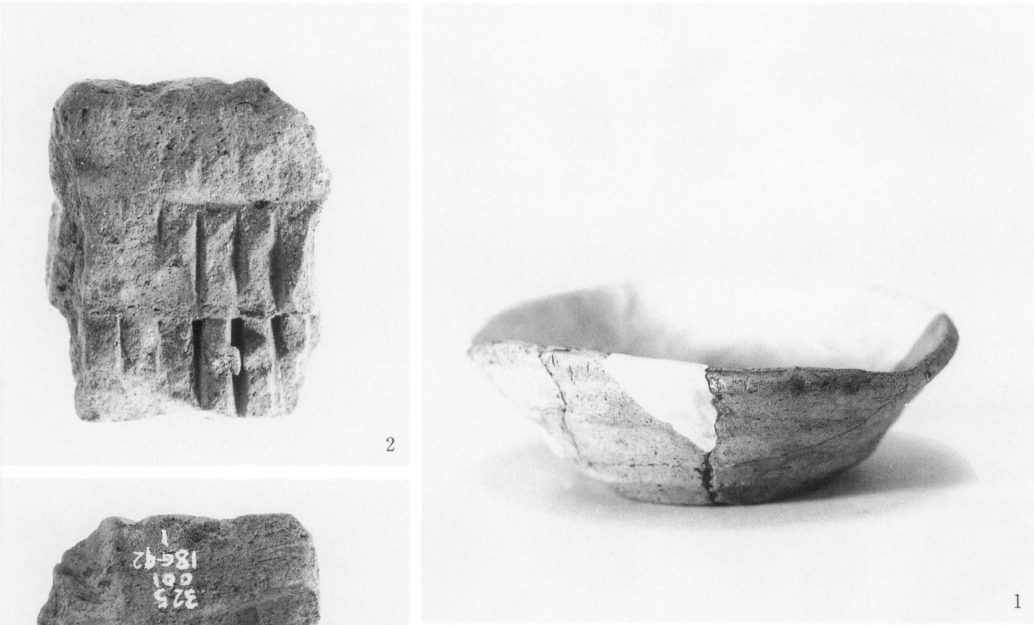


縄文土器





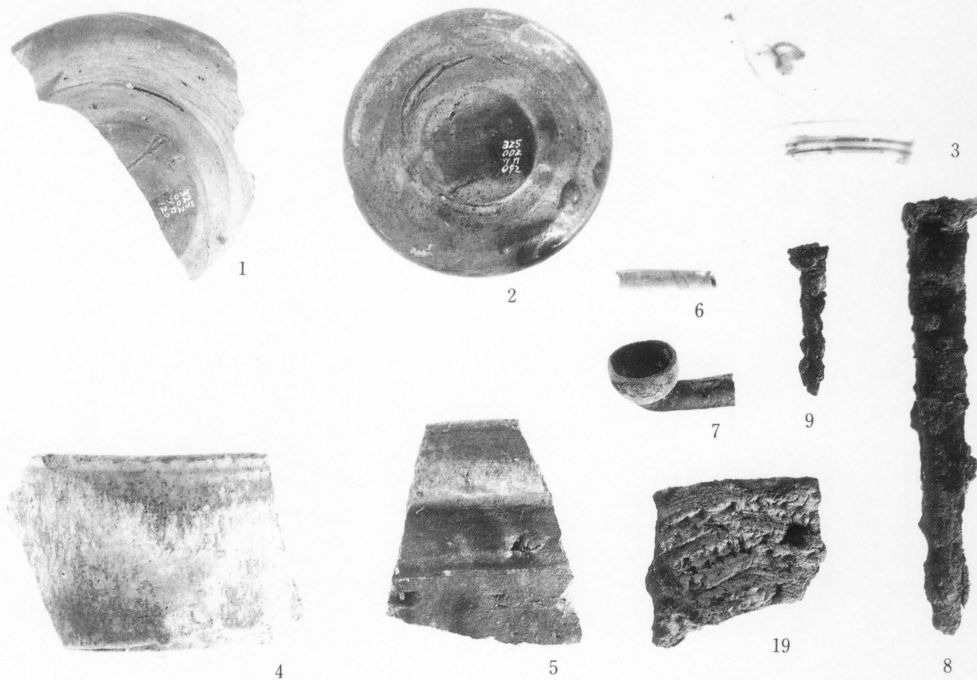
縄文時代 石器



1 歴史時代 出土遺物



057出土遺物



出土遺物

和田谷津塚



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどう464ごうけんたんどろろかいりょうじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ		
書名	一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書		
副書名	印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・炭焼台所在塚・和田谷津塚		
巻次			
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告		
シリーズ番号	第277集		
編著者名	糸原 清		
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター		
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2		Tel 043-422-8811
発行年月日	西暦 1996年3月29日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大木台1号墳	千葉県印旛郡印旛村瀬戸大木谷津	325	001	35度 46分 32秒	140度 13分 0秒	19921201～ 19930128	古墳1基	道路建設に伴う事前調査
大木台2号墳	同上	325	002	同上	同上	19920401～ 19920530	古墳1基	同上
大木台3号墳	同上	325	003	同上	同上	19931101～ 19931224	200	同上
井戸向遺跡	印旛村瀬戸井戸向	325	001	35度 46分 28秒	140度 13分 17秒	19911001～ 19920131 19920601～ 19920831 19921201～ 19930226 19931101～ 19931224	3,200 350 580	同上
炭焼台所在塚	印旛村瀬戸大木谷津	325	002	35度 46分 36秒	140度 12分 56秒	19920401～ 19920530	塚1基	同上
和田谷津塚	印旛村瀬戸和田谷津	325	001	35度 46分 31秒	140度 13分 4秒	19931101～ 19931224	塚1基	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大木台1号墳	古墳	古墳	古墳 1基	土師器	大木台2号墳の墳丘裾から「下総型埴輪」の埴輪列を発見。人物埴輪9個体と馬形埴輪2個体による形象埴輪群が埴輪列中に位置していた。大木台3号墳は、調査の結果、地膨れと判明。
大木台2号墳	古墳	古墳	古墳 1基	円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、直刀、刀子、鉄鏃	
大木台3号墳	包蔵地	古墳			
井戸向遺跡	包蔵地	先土器 縄文 平安 近世	遺物集中地点3 炉穴26、土坑5 陥穴16 溝状遺構1 掘立柱建物跡3 竪穴状遺構7 地下式坑2 土坑15 粘土敷土坑1 道路状遺構3 溝状遺構9 土墳墓4	ナイフ形石器 縄文土器早期～後期、石鏃 土師器、瓦塔 陶器、土器 古銭、キセル	先土器から近世までの複合遺跡。 平安の溝付近から瓦塔が出土。
炭焼台所在塚	塚	近世	塚	古銭、陶器	庚申信仰にまつわる塚。
和田谷津塚	塚	近世	塚	陶器、カワラケ 古銭、石器	道祖神信仰にまつわる塚。

千葉県文化財センター調査報告第277集

一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
—印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・炭焼台所在塚・和田谷津塚—

平成8年3月29日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター
発 行	千 葉 県	土 木 部
		千葉市中央区市場町1-1
	財団法人	千葉県文化財センター
		四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社	み つ わ
		千葉市美浜区新港213-5
